

---

# 天国の扉

藤井 紫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

天国の扉

### 【著者名】

藤井 紫

20205K

### 【あらすじ】

魔女狩りから逃れるため国を追われた羊飼いの少女ジョードが、聖地で出会ったのは、異国の第一皇子ハリーファだった。

200年前に聖地を滅ぼした【王】の生まれ変わりの証である聖痕を持つて生まれたハリーファ。

ハリーファを殺すという天命を知らされたジョード。

天使と悪魔に翻弄される一人の、過去からの因縁の恋愛物語。中世風異世界ファンタジー。

(月1更新目標)

( \* ページに挿絵を入れています。山田ジャム様による少女漫画風イラストです。挿絵なしがお好みの方は挿絵をOFFに設定してください。 )

## ヴァロニア王国 ジュード \*

> . i 3 3 6 2 9 — 4 0 3 9 <

東の大陸フロリスの大半を占めるヴァロニア王国。その中でも、最西に位置し暖かい田舎領、ヘーンブルグにも冬が訪れていた。

1425年1月6日、ヘーンブルグ領アレー村 。

新年になり本格的な冬を迎えた。

ヘーンブルグでは、羊が出産シーズンに入った。アレー村は小さな村で、村全体で羊や家畜を保有し世話をしている。年明け早々から村の羊飼い達は朝から晩まで仕事に明け暮れていた。

ヘーンブルグは、ヴァロニアでも暖かい地方に属する。そのため、今冬はまだ初雪は降つていなかった。それでも臨月の羊は産屋も兼ねた暖かい小屋の中に移動させられ、大人の羊飼いが交代で様子を見守っていた。

夕方近く、空が少しづつ黄昏てゆく頃。

ウィルダーは羊小屋近くの干草置き場で干草の積み下ろしをして

いた。幼馴染の少女ジョードが羊のための産屋から出て来たのが見えた。少女は三角に折りたたんだ布を頭にかぶつている。その背中にほのかるゆると波打つた長く黒い髪が揺れていた。

ジョードはまわりをきょろきょろと見まわし、ウィルダーの姿を干草置き場に見つけると手を振りながら駆けよってきた。

「ウイル！ 生まれたわ！ 双子だつたの！」

ジョードは興奮と外気の冷たさに頬を赤く染めながら、息を弾ませて白い息を吐いた。朝から産氣付いた羊がどうにも難産で、それがようやく生まれたらしい。

ウィルダーは一昨年義務教育を終えて羊飼いの職に就いたばかりだった。羊の出産期はまだ一度目の経験だ。同じ年頃の女の子達は少し早くから職に就いているので、同じ年の男達よりも経験では勝っていた。

「双子だつて！？」

ウィルダーは驚いて干草の山から滑り降りてきた。

「わたしも双子の出産は初めてなの！ すぐかわいいのよー 見にきて！」

そう言つてジョードはウィルダーの手を引いた。だが、ウィルダーは逆にジョードの手をしつかり握り、その場に引き止めた。

「今日はジョードとホープも誕生日だろ？ めでと！」

思いがけないウィルダーの言葉に、ジョードは一瞬戸惑いを見せた。

「……ありがとう、ウィル。でも、わたしとホーは今年は忌年だからお祝いも何もなしなのよ」

クリス信者達は13を忌数としていた。その数にまつわる日に祝い事をする事を避けている。今田13歳になつたジョードも、もちろんお祝いは禁忌だった。

「でもね、代わりにあの双子ちゃんのお祝いができるわ！」

ジョードは早く早くと急かす様に手を引いた。だが、ウィルダーはまだその場から動くことに抵抗した。

少しづつ日が落ち始め、空の色が赤から紺色に変化しつつあった。二人が呼吸するたびに、一緒に白い息がこぼれる。

なかなか動こうとしないウィルダーに、ジョードの顔が少し不機嫌にならうとした時。

「ジョード、これ」

ウィルダーが細かい干草がいっぱいまとわりついた手袋を外すと、ズボンのポケットから何かを取り出した。

ジョードに差し出されたのは銀の聖十字のペンダントだった。言葉少ないが、これはジョードへの誕生日の贈り物なのだろう。

「これをわたしに？…………ありがとう…………」

「 ウィルダーはかじかむ手で鎖の金具を外した。正面からジョードの首の後ろに手をまわし、金具を留めた。」

「 うちはホープに」

「 ウィルダーは再びポケットに手を突っ込むと、先にジョード渡したのと同じものを取り出した。」

「 ホープのやつ、ジョードと違つ物にしたら怒るだろ?」

「 苦笑するウィルダーに、ジョードは申し訳なさそうな顔になった。」

「 .....」「めんね、ホーはもう持つているの。あの子は教会から支給されてるのよ」

「 えつ、やうなのか」

贈り物をすることを秘密にしていた事が裏目に出てしまった。今年は誕生日祝いをされない双子の為に、なけなしの金をはたいたウィルダーの気持ちは半分だけ無駄になってしまった。

この村の人たちは皆それほど裕福ではないのを知っているだけに、一人の間に少し気まずい空気が流れた。

「 .....わたし、ウィルとおそろいで身に付けたいわ」

ジョードの提案にウィルダーは自尊心をくすぐられた。いつも同じものを好み、行動を一緒にしていた双子のジョードとホープだが、一昨年からジョードの傍に居るのはホープではなくウィルダ

ーだ。

ジョードは白い息を吐きながら微笑むと、渡されたもう一つのペンダントの金具を外した。ウィルダーがジョードにしたように、正面からウィルダーの首の後ろに両手をまわす。首の後ろで鎖の先端の金具をひつかけると、ジョードはそのままウィルダーに口付けた。

ほんの数秒、二人の周りの時間が止まった。

ウィルダーの唇は冷え切っていて、すぐにはジョードの唇の感触を感じることが出来なかつた。

キスを交わすのはこれが初めてではないのにウィルダーは相変わらず照れくさそうに笑つた。そして誰かに見られてないかと慌てて周りを見回した。そんなウィルダーを見てジョードも可笑しそうに微笑んだ。

「ねえ、寒いわ。早く行きましょ！」

今度こそジョードに手を引かれ、生まれたばかりの双子の子羊を見るために、一人は産屋へと走つた。

\* \* \* \*

星明りがちらつく時間。

ジョーダーはようやく父母と弟の待つ自宅に帰宅した。

石造りの小さな家の中は、暖炉の火と奥のかまどの残りの火のおかげでとても暖かかった。いつもは人数分しか点けない蝋燭も、今日はいつもより一本多く灯されている。部屋の中はいつもよりずっと明るく感じられた。

父は暖炉に新しく薪をくべ、母は食事の用意をしていた。双子の誕生日だと言うのに、今年は本当にお祝いムードはない。既に独立した二人の兄も、毎年末の双子の誕生日には実家に戻ってくるのだが、今年はその兄達の姿もない。

「おかえり、ジョーダー。遅かったね」

双子の弟ホープが話し掛けってきた。

「いつもの時間まで教会で待ってたんだけど、来ないから先に帰つてきちゃつたよ」

ジョーダーは毎日仕事帰りには教会に行き、家族のために祈りを捧げていた。その後、ホープと一緒に家路につくジョーダーだったが、今日は羊の出産が長引きそんな時間はなかつたのだ。

「ねえ、聞いて！ 今日生まれた子羊が双子だったの！」

ジョーダーはいまだ覚めない興奮と感動を、双子の弟に伝えようと声がはずんだ。

「へえ、ぼくらと一緒にだね」

「そうなの。それも雄と雌だったのよ」

どちらとも無く、暗に今日誕生日の男女の双子と重ね合わせる。  
ジョーダがホープの目を見ると、ホープは何か含んだように笑つた。言葉には出さないが、お互い祝福と感謝の気持ちを通じ合つているようだつた。

「でも雄と雌だから、乳断ちしたらすぐ別々の檻に入れられることになつちやうわ」

ジョーダは脱いだ上着を壁に掛けると、奥にいる母親のそばに行き支度を手伝つた。

お祝いはないが、いつもと同じように他愛ない会話を交わしながら双子はテーブルに着いた。母親が「今日は夕食が随分遅くなつちやつたわね」と、二人に話し掛けながらテーブルに食事を並べてくれた。

「ジョーダ、明日は教会に寄れる?」

ホープは目の前に置かれたパンに手を伸ばした。

「またこんな時間まで出産が無ければ行くわ

ジョーダにとつてはむしろ今日の方が例外だ。

「教会にはいつも行つてゐるごどりじて?」

「神父様が忌年の御祓いをしてくれるつて

「そうなの? わかつたわ」

ジョーダンは手を合わせ小さく祈った。パンをつかると母の作ってくれたスープに浸す。パンは作るのにも時間がかかり、小麦粉にすらにも無駄が多い。贅沢品で普通の家庭では毎日食べられるものではない。父や母は特別にお祝いなどは言わないが、今日にパンを焼いてくれたことに、ジョーダンは心の中でこっそり感謝した。

「それにしても誰が忌年なんて決めちゃったんだろうな。そんなこと天使の教えには載つてないのにさ」

向かいに座る弟は、まだ不満なよう今年の誕生日の事をぼやいていた。幼い頃から信仰心厚いジョーダンにとってはたいしたことではない。むしろそれを破ることの方が、ジョーダンの心には負担を与えてしまう。

「ホー！ そんなこと教会に勤めているあなたが言つ言葉じゃないわよ」

向かいに座っている、まるで鏡に映つたような双子の弟に、ジョーダンは呆れて言つた。

「それに、忌年の誕生日に贈り物を貰つと不吉なことが起こる、とか言つらじこーし」

まだぼやき続けるホールの言葉に、ジョーダンはぞくりとした。

ホールにばれないようにして、ウイルダーから貰つた贈り物のペンドントは服の中に隠してある。ジョーダンは服の上からそれに触れるよりこ、自分の胸をそつと押さえた。

\* \* \* \*

双子が寝静まつた頃、深夜に誰かがドアを叩く音が響いた。

父がドアを開け、誰かを部屋に招きいれていった。  
その音にジョーダは目を覚ました。隣のベッドで寝ていた双子の弟のホープは気づかず眠り続けている。

(……誰？ こんな時間に……)

ジョーダは階下の声に耳を澄ました。毎日仕事帰りに通っている村の教会の神父の声が聞こえてきた。

「……大変だ、ジャック、これを見てくれ……」

「俺は読めない。アンジュー、お前が読んでくれ

少しの沈黙後、母が泣き崩れた。

「そんな！ ビツヒツジョーダまで！」

神父が父に何か話しているが、母の泣き声にかき消され、はつきりと聞き取ることが出来なかつた。泣き声の奥で、神父と父は何か

を話し続けていた。

(わたし? 何かあったのかしら……)

自分の名が出て、ジョーダンは階下の声に聞き耳を立てた。しばらくすると、誰かが階段を登つてくる足音が聞こえたので、ジョーダンは慌てて毛布にもぐりこんだ。

「ジョーダン……起きてくれ」

父はホープを起こさないよう戸惑いつつドアを開け、眠ったふりをしていたジョーダンの体をゆすった。

「降りておいで」

ジョーダンは今起きたかのように田舎をじっくり長い黒髪を束ねると、寝間着の上にストールを羽織った。父の背中を追つて階下に向う。テーブルに神父と母が座っていた。

先ほどまで泣き喫いていた母だったが、それを思わせないくらい穏やかな顔つきだった。だが、ジョーダンには母の顔に涙の跡を見取れた。それには気づかない様に振舞った。

「神父様、じんばんは」

挨拶をするジョーダンに対し、三人とも何かを言いたそうなのだが言不出せないようだった。奇妙な沈黙が続いた。

「ジョーダン……聞いてくれ、お前が行きたがっていた巡礼に行けることになつたんだ」

「えつ？ 巡礼に？」

よつやく口を開いた父が言つたのは、ジョーダンにとって思いがけない言葉だった。

「聖地オス・ローだ。行きたがつていただろつ？」

その言い方に、訳あり氣な雰囲気がひしひしと伝わつてくる。どうして今そんなことを言つてくれるのだろう。確かにジョーダンは常々「聖地巡礼に行きたい」と言つていた。だが、なぜこんな時間に突然、父達がそんなことを言つのか全く想像がつかなかつた。

ジョーダンは喜びにじみか、何か異様な雰囲気を感じ取つた。

「こつから行けるの？」

熱心な天使信仰の者なら、誰もが死ぬまでに聖地に巡礼することを望んでいる。しかし、ジョーダンの家のような農民には夢物語なのだ。

ジョーダン自身、まさか本当に実現するとは思つてもいなかつた。少しばかり浮かれ気分になりかけたジョーダンだったが、ジャックの言葉に緊迫感を覚えた。

「今すぐ出発するんだ。一人でだよ。そして夜が明けるまでに必ずヘンブルグ領を抜けるんだ」

そういうて旅用の着替えを渡された。

「馬には乗れるね、ジョーダー」

神父が優しくジョーダーに話しかけた。

羊飼いの仕事をしているジョーダーにとつて乗馬などたやすいことだった。男顔負けで裸馬も乗りこなす自信があった。

「アレー村で一番強くて速い馬を準備したから、とにかく一刻も早く聖地に向かいなさい」

大人たちはジョーダーから質問をさせないほどの素早さで、旅の準備を整えた。そして、神父の連れてきた馬の所までジョーダーを送り出した。

「パパ、ママ? どうこう」と、じつしてわたし一人なの?」

ジョーダーの質問には誰も何も答えない。通常は一人で行く旅ではない。しかも、こんな急に……。

外に出ると辺りは真っ暗闇で、たすがにジョーダーも不安を隠せなくなつた。

風は吹いていないが湿った空気は硬く、ジョーダーは頬が痛くなつた。星明りの下、四人の白い息が小さな霧となつて地面に落ちていつた。

「巡礼の道は君が一番良く知っているだろ?、ジョーダー」

「夜が明けるまでにヘーンブルグから出るんだ」

「ジョーダー、急いでね!」

神父、父、母に急き立たられ、出発の挨拶もままならぬひびき馬は走り出してしまった。

「パパ！ ママ！」

ジョーダーは振り返つて叫んだが、明かりのない真夜中のこと。すぐには三人の姿は闇の中に消えいつてしまつた。

風で自分の長い髪が首にまとわりついたが、それを払いのける暇さえもなかつた。

異様な旅立ちと、ジョーダーの心は混乱していた。

ジョーダーは地理感のあるところは順調に馬を走らせた。しかし、辺りが暗いため段々道がわからなくななり、速度が落ちてきた。

騎手の心を悟つたのか、馬の歩みはますます遅くなり、やがて足踏みをして止まってしまった。

(本当にそのまま行つて良いのかしら~)

大人達が自分をヘーンブルグから追い出したいのだらう。だが、その理由が全く想像できない。こんな気持ちでは巡礼になんて行けない。

「やつぱつ戻れ!……」

一人やつづぶやいた時、

『戻つてはいけません』

ジエードに【声】が聞こえた。

「天使様!」

ジエードは思わず【声】の主の名を叫んだ。いつも聞いている声に心底安堵する。

『ジエード、夜明けまでこのまま道なりに馬を走らせなさい。休まないで。急いで』

「どうしてそんなに急ぐのですか?」

『聖地へ来れば、貴女の求めることを全てお話ししましょう』

「わかりました」

ジエードは【声】に従順に従つた。

『もうすぐ夜が明けます。急いで』

「はい!」

その【声】を聞くと、途端に不安が遠のいていった。

ジードは【声】に素直に従い馬の速度を速め、聖地オス・ローを田指した。

\* \* \* \*

「ホープ、起きろー」

そう呼ばれた主は、次兄のユーリにまだ寝ていた体を激しく揺さぶられた。

「早く起きて教会へ行くんだ！ 父さんと母さんはもう行ってるー」

兄がなぜ実家に居るのか不思議に思ったが、ホープは寝起きの頭が回らぬ身体を起こしながら既に田舎をこすった。

兄が何を急かしているのか全くわからなかつたが、その様子は尋常ではない。急いで着替えると兄ユーリを追いかけた。

階下に下りると、部屋は昨夜の慌しい旅支度の痕跡を残していた。

(……なんだか、これ？ 手紙？)

テーブルの上に無造作に置かれた筒状の書状が目に留まつた。普段見ることのない珍しい羊皮紙だつた。ホープはそれを手に取り広

げると、そこには驚くべきことが書かれていた。

それには双子の姉ジェードが魔女であると記されていた。そして、魔女引渡しの要求内容がものものしい筆跡で書かれている。封にはホープにも分かるヴァロニアの王族の紋章が烙印されていた。

「嘘だろ……」

ホープは目の前が真っ暗になった。

(も、もしかして……。ジェードの秘密がばれたのかな)

ジェードには【天使】の声が聞こえる。そして【天使】と会話できることを知っているのはホープだけのはずだ。自分は誰にも話したりはしていない。誰か他の人に【天使】と話している姿を見られでもしたのだろうか。

ホープは家を飛び出し、引渡し場所に指定されている教会まで走った。教会までの近道である牧場を、木で出来た柵を乗り越えて突つ切つて走った。

息を切らして教会に辿り着いた時には、ちょうど軍人らしき数人が父を連行していくところだった。

捕縛された父が馬に乗せられた姿がホープの目に入つた。教会の入り口付近には、アレー村の住人が集まっている。観衆の真ん中に、神父が倒れている。母の姿と長兄エージも、その傍らに見えた。

観衆を搔き分けて、ホープは母の元に駆け寄つた。

「母さん！ 兄さん！ 神父様っ！」

泣き崩れる母を、周りで見ていた女達が支えて連れて行つた。怪我を負つて倒れていた神父も数人の男達に支えられて、村の診療所の方へ連れて行かれた。軍人達から暴行を受けたようだが、命に別状はなさそうだった。

「父さんは？ どうなつちやうの？」

「わからない」

ホープの問いかけに、長兄エージは首を横にふつた。

村人達は「氣を落とすなよ、エージ」と兄に声をかけ、一人また一人と家に戻つていく。

その場には、ホープ、それに兄のエージとコーリだけになつた。

「……ねえ、兄さん、父さんとジエードはどうなるの？」

姿を見なかつたが、ジエードも軍人に連れて行かれてしまつたのだと、ホープは思つていた。

「親父がどうされるかはわからない。だけど、ジエードは連れて行かれてないんだ。昨夜聖地に向かつたらしい。無事に聖地に辿りつければ……」

つむりたえるホープにエージは小声で言つた。

その後、父ジャックは一週間後に解放され帰つてきた。

ヘーンブルグから聖地オス・ローへの巡礼となれば、通常二ヶ月もあれば戻つてこられるはずだつた。

しかし、聖地オス・ローを日指したジードは、三ヶ月、半年と過ぎても戻つてくることはなかつた。

ジードが向かつた聖地オス・ローは、現在はファールーク皇国の領土となつていた。

## 【天使】アルフェラツ

東の大陸フロリスのおよそ80パーセントはヴァロニア王国、残り20パーセントは対岸の島国シーランド王国の領土となっていた。

現在ヴァロニア王国の戦域は、西のオス・ロー方面ではなく、元はヴァロニアの領地であつた東部のガイアール領とシーランド王国に向けられていた。ヴァロニアとシーランドは供に伝承者クライスを信仰する国であり、時に血盟を組んで西の大陸モ里斯と争つた。だが、ヴァロニア王国とシーランド王国は王族・貴族間の因縁が深く、大陸内部で百年以上も抗争が続いている。

その影響もあって、現在、聖地に向かう巡礼者はいなかつた。

父母と神父によつて国を追われるよつて出たジョードは、何百年も前にフロリス人が使つた聖地に向かう街道を通りて、二つの大陸の中心、聖地オス・ローを目指した。

ジョードは父の言つたとおり、出発した日の夜明けまでに、理由もわからぬままヘーンブルグの領地を抜けた。

その後は、昔ながらの巡礼の道を進んでいた。

巡礼の道はほぼ一本道で一人旅のジョードでも迷うことはなかつ

た。

森の中や裾を通り、時折馬を引いて歩いた。道には馬車が通った轍わだちが行く先を示してくれ、途中所々に在つた宿泊所が体を休めさせてくれた。宿泊所は今では無人ですっかり荒れ果てていたが、夜の闇や寒さと風雨をしのぐには十分だった。

無人の宿泊所には、過去の巡礼者たちの記憶が残されていた。ある所では壁一面に聖書の言葉を飾り文字で壁一面に刻みこまれたり、ある所では鮮やかな塗料を使って壁や天井に天使の絵が描かれていた。

どこの宿泊所にも祭壇が作られており、その前に切り取られた長い髪が束ねられて収められていた。おそらく金品に余裕のない者達がお布施の代わりに収めていったものなのだろう。

金を持つていなかつたジョードもそれにならつて、先々で自分の髪を一束切り落としてはその束を収めた。ジョードの長かつた曲のある黒い髪が髄分短くなつてしまつていた。

\* \* \* \*

ヴァロニアを出発してから約三週間。

ジョードは朝日が昇り始めるとすぐに無人の宿泊所を出発した。荷物を馬の背に乗せると、自分も馬に跨り道を進んでいった。

木々のトンネルを抜け周りの景色がどんどん赤茶けた色に変わってきた頃になつて、ジョードは自分がフロリストを抜けていたことに気がついた。国境には誰も居らず、何もなかつた。そこが国境だと気づかないほどだ。

赤茶けた大地にはあちこちに人為的に作られた石垣があり、その石垣に鮮やかなピンク色の花を咲かす薦植物が群生していた。自然だけが作り出せる鮮やかな色合いにジョードは心を奪われた。ピンク色の花だけが、ジョードを歓迎してくれているようだつた。

そこを過ぎると、赤茶けた土は徐々に薄茶色の乾燥した砂地に変わつていつた。いつからか気温が急激に上がりついて、ジョードは袖をまくつ上げ胸元のボタンを一つ外した。

既にファーリーク皇国の領土のはずなのに、人の姿を一度も見かけなかつた。まるで見放された僻地のようだつた。

徐々に高くなる太陽の日差しは、ジョードの左頬を刺すように照り付けてくる。

「聖地はもう少しかしら……」

ジョードが首やこめかみに滲む汗をぬぐいながら一人馬上で咳くと、

『このまま海岸沿いを南へ』

と【声】が後押しした。

ジョーダンは秘密があった。

ジョーダンには誰にも聞こえない声が聞こえていた。その声の主は【天使】だった。ジョーダンは【天使】と会話することが出来、またジョーダンの問い合わせに声は答えた。

ジョーダン自身はこのことを誰にも知られないと思っていたが、ジョーダンとよく一緒に居た双子の弟ホープだけは、度々ジョーダンが自分には聞こえない声の主と会話をしているのを目撃していた。

聖地に近づくにつれて、ジョーダンはその【声】が明瞭さを増してこるようを感じられた。

ジョーダンはオス・ローと呼ばれる土地に足を踏み入れた。そこは荒れ果てた土地だった。土のレンガで出来た家は皆崩れ落ち、人の姿はなかった。おそらく大通りだったと思われる道の石畳もほとんど砂に埋もれてしまっていた。馬から降りると、ジョーダンは自らの足で砂の上を歩んだ。

ジョーダンは馬を引きながら崩れ落ちたオス・ローの街を見回した。百五十年前にシーランド王国とファールーク皇国が聖地を巡り争った結果、この街が滅んだのだと学校で習ったのを思い出した。

通りの真横にも人が生活していた民家が立ち並んでいたのか、壺やテーブルなど、まだ元の形が見て取れる物も沢山散らばっていた。

(ここで戦争があったのね……)

不安になつたジョーダーに【声】が囁いた。

『丘の上に門が見えますか?』

声の言つようによく丘へと続く元大通りを見上げたが、そこには門は見えなかつた。見上げて見えるのは眩いばかりの青い空だけだつた。

だが、天使の【声】を聞くと不思議と不安が遠のいていった。

「そこに行けば、天使様に会えるのですか?」

『ええ』

突然国を追い出されるように出発し、一人不安な旅だつたがそれももうすぐ終わる。

ジョーダーの胸が高鳴つた。

たつた一人で何日もかけてよここまで来たものだと思った。もうすぐジョーダーの旅の終着点に到達する。そうすれば、今度は来た道を逆に戻つてヘーンブルグに戻り、聖地やその途中に見たものなどを家族や神父に話そうと思つた。

途端に、晴れ渡つた空がまるで祝福してくれているよつて感じられた。

ジョーダは馬の手綱を瓦礫の柱に引っ掛けた。荷物も置いたままで丘の上の門まで足早に歩き出した。不思議と歩みは小走りになる。ひょいひ坂の上に太陽が位置し、眩しさに目を細めた。

この時、ジョーダの思い描いていた、光溢れる聖地のイメージと現実が重なった。

聖地は光で溢れ、金色の髪に樹々の翠や空の蒼の瞳をした天使が降臨してくる。そんな光景をジョーダはいつも心の中で思い描いていたのだ。

刺すように照りつける光を遮る物は何も無く、ジョーダは両頬に少し痛みを覚えた。

丘を登りきると、崩れた城壁にからうじて門の柱だけが姿をとどめていた。そこにあつただらう口の扉も、その向こう側の建物も崩れ去っていた。

ジョーダは残骸と化した門を超えて、奥へと足を踏み出した。

強い日差しが降り注ぐ中、砂の上を歩み進むジョーダの微かな足音意外には何も聞こえてこなかった。

天使の言っていた門を越えて奥に進むと、建物が形を残しているところもあった。それらは、ヴァロニアの建築様式とは全く違うため、その残骸を見ても一体元が何だったのか、ジョーダには想像も出来なかつた。

さりに奥に進んでいくと、天井と壁が崩れ、床と柱だけがむき出しへなつた土台のようなものが見えてきた。そこに誰かが立つてい

る。強い日差しの中に人影が浮かび上がり、距離が近づくに連れて、その人物の輪郭がはつきり浮かんできた。

( 天使様！？)

『 よくぞここまで来てくれましたね、ジョーダン 』

その声は間違いない、今まで聞いていた【天使】の声だった。胸の高まりを隠しきれず、ジョーダンは小走りになつて駆け寄った。

よつやく、その人物の姿がはつきり見えた。

崩れた代理石の床の上に立ちジョーダンを待っていたのは、黒い肌に長い白い髪をした女性だつた。その姿はジョーダンが描いていた【天使】のイメージとは全く違うものだつた。

その【声】の主の姿を見た時、ジョーダンは驚いて声を詰まらせた。

ジョーダンは生まれて初めて黒い肌を見た。フロリスで真白い肌の人間しか見たことの無いジョーダンは好奇と嫌悪の眼差しでその姿を思わず凝視してしまつた。黒い肌は、まるで聖書に版られた絵に出てくる魔魔のようで、ジョーダンにとつて同じ人ではないようを感じられた。

ジョーダンの心の内を知つてか、黒い肌の女性は母親のような笑みを浮かべた。その表情は求めていた慈愛に満ちているように思えジョーダンは混乱した。

「天使様……？ 本当に……？」

驚きと不安の混じつた動搖を隠せないまま、ジョードは崩れるよう跪いて両手を胸の前で組んだ。

『どう呼ばうとも構いません。私の名はアルフェラツです』

田の前に居るのに、その【声】は今までと同じように、ジョードの頭の中に直接語りかけてきた。

『……アルフェラツ様、なぜわたしをここへお呼びになつたのですか？』

『あなたがここに来たのは、あなたの持つ天命と、そしてあなたが真実を求めたから』

『……で、では教えてください！ どうしてあの時姉を救ってくれなかつたのですか？』

ジョードには七歳年上のルースという姉が居た。ルースは熱心な天使信仰者で、いつもジョードを連れて一緒に村の教会に行つて祈りを捧げていた。ジョードの信仰深さも姉の影響があつてのものだつた。

ルースは勉学を終えた13歳の時、領主の館の使用人として勤めだした。そして、17歳の時に恐ろしい事件に巻き込まれてその命を絶たれた。

誰も恨んではだめと母に言い聞かされていたが、その時10歳だったジョードは天使を恨んだ。あんなに熱心に祈りを捧げていた姉

をどうして救つてくれなかつたのかと。

幼い頃、天使を恨んだ気持ちがわずかに心に甦つてくる。あんなに祈りを捧げて助けを求めたのに天使は姉を助けてはくれなかつた。きっとルースは自分以上に救いを求めて祈り続けていたに違いないのに。

『私が人に救済を『与えることはありません。救済や罪科は人の心から生まれるもの。私がこの世のものに『与えられるのは「生」だけ。あなたの姉に「死」を『与えたのは私ではありません』

「じゃあ、誰が……」

【天使】の言つとおりなのだとしたら、本当に恨むべき相手は命を奪つた【悪魔】の方なのだろうか。でも、姉を殺したのは【悪魔】ではなく【人間】だつた。姉ルースを【悪魔】と交わつた魔女ワITCHとして処刑したのだ。

熱さの所為もあつて、ジョーダは田の前が微かに揺れるのを感じた。

「……姉は、本当に魔女だったのですか？　わたしには信じられない。どうして姉さんが魔女として殺されなくてはならなかつたの？」

ジョーダは組んでいた両掌を口に寄せると歯に押し当てる。

『その答えは、あなたが過去の天命に従えば、未来が教えてくれるはず』

「天命？ それは何ですか？ わたしは答えが知りたい！ わたしは何をすれば良いのですか？」

『 もうすぐここに少年が来ます。彼を「生」から解放を』

「……「生」から解放？」

『殺すのです』

アルフェラツの言葉にジョードは言葉を失った。天使が人殺しを望むなんて事があるのだろうか。

【天使】の外見はジョードが描いていたものとは全く違うものだつた。本当は天使のふりをした【悪魔】に騙されているのではないだろうかとさえ考えてしまう。だがアルフェラツの声は、今までジョードが信じてきた【天使】の声と同じだった。

結局信仰心厚いジョードが【天使】の言つことに逆らえるはずがなかつた。

それでも聞かずにはおれずアルフェラツに問いかけた。

「……人を殺めることは罪ではないのですか？」

『 あなたの心が罪を生み出したとしてもなさねばならない事。それがあなたの持つて生まれた天命なのです』

「でも……、殺すなんて……」

つらたえるジョードにアルフェラツは、

『その剣を』

とジョーダンの短剣を受け取り、不思議な力をその短剣に与えた。父が用意してくれた短剣で、ここに来るまでに何度も髪を切り落とすのに使つてきたものだ。

『これで彼の胸を一突きすればよい』

そう言つて、短剣をジョーダンに差し出した。

『私が『えでいない』「生命」は終わらせなければいけません』

「…………」

ジョーダンは短剣を受け取り、怯えながら頷いた。

しばらく押し黙つたままジョーダンは一人考えていた。

（人を殺すなんて、わたしに出来るのかしら……）

時々アルフレッサを見上げると、その表情は母親や姉を思い起させめるような慈しみの表情を浮かべジョーダンに微笑みかけている。

（ルース姉さん……）

ジョーダンは不安に駆られながらもやはり答えが知りたい気持ちが勝つた。その為に天使から教えられた自分の天命に従おう……と、ジョーダンは一心に誓つた。

\* \* \* \*

じつと跪いたままのジョードの背後で、自分が歩いてきた時のように、瓦礫の上を歩く音が聞こえてきた。

その音にジョードは短剣を胸の前できつて握り締めると、立ち上がりそのまま振り返った。

そこに居たのは、金色の髪に翠の目をした真っ白な肌の少年だった。白い半袖の服は薄汚れてはいたが、その外見はまさしくジョードの頭の中でイメージしていた【天使】の姿そのものだった。少年の髪に光が降り注ぎ、濃い金色の髪は眩しいほどに輝きを増していった。

(……天使？)

金の髪の少年はふらふらと覚束ない足取りでジョードの方に近づいてきていた。

(信じられない！ なんて綺麗なの……)

短剣をきつて握り締めた手が思わず緩みそうになつた。

黒い髪しかいないヘーンブルグで育つたジョードは、本物の金色の髪を見るのも初めてだった。少年の右頬には横一文字の傷痕があった。だが、それすら気にならないほど絵のよつて秀麗な容姿に心を奪われ、ジョードは少年の姿に釘付けになつた。

も「すぐ！」に少年が来ます。彼を「生」から解放を

ふと、ジョーダーは隣に立つ【天使】から言われたことを思い出した。

（まさか！）の子のこと？ こんな天使みたいに綺麗な子を？（…）

アルフレッドの時と同じく、少年のあまりに予想外の姿に、ジョーダーは驚きを隠せなかつた。天使が殺せと言つたのだから、恐ろしい人物が来るのだと思つていた。

「【エープラの民】……」

少年が咳くょくと言葉を漏らした。少年の視線はジョーダーを通り越し、その奥に凛と立つアルフレッドに向けられていた。

少年はジョーダーのことなどまるで見えていないかのようだ、少しずつアルフレッドに近づいてきた。

「貴方達はまだここで暮らしているのですか！？ まだ滅んではいるのですか！？」

アルフレッドに向かつて叫ぶ少年の目に、ジョーダーの姿は全く映つていなかった。

ジョーダーがアルフレッドを見上げると、アルフレッドはジョーダーを後押しするように目を伏せた。まさに少年を殺すチャンスだった。

(今しかない！)

こめかみに汗が滲むのを感じながら、ジョードは短剣の柄をきつ  
く握り締め、短剣を革の鞘から抜きそつと立ち上がった。

「居たぞ！ こつちだ！！ 急げ！」

遠くから近づいてくる別の声が響いた。アルフュラツに集中して  
いた少年の意識は、その声に邪魔された。

瓦礫の上を走る複数の足音が聞こえてきたかと思うと、異国の兵  
士が数人向かってくるが見えた。その瞬間、少年の顔に怒りが浮か  
んだ。

少年は自分が丸腰であったことに気が付くと初めてジョードの方  
に向いた。ジョードの手に短剣が握られているのを見てジョードに  
ぶつかる勢いで駆け寄ってきた。

「貸せつー！」

怒鳴りながら強引にジョードから剣を奪い取った。なかなか短剣  
から手を離さなかつたジョードは振り落とされるように地面に倒れ  
こんだ。ジョードに構わず少年は向かってくる兵士の方へ走って行  
こうとした。

「駄目よつー返してつー！」

ジョードが立ち上がるやいなや少年に体当たりすると、一人は砂の上にもつれ込んでしばし揉み合いになった。

「何するんだ！ 離せ！！」

奪われた剣を取り返そうとしたジョードは、いつも簡単に少年に組み伏されてしまった。馬乗りになつた少年に、右手で左手を、左手で右手を掴まれ取り押さえられたが、短剣を取り返そうとジョードは暴れて必死で抵抗した。

その時、剣先が少年の右頬をかすめた。

「……っ……」

少年の真っ白な右頬に一瞬にして赤い縦線が浮き上がった。赤い線はじわじわと膨れ上ると顎の方につたい、ジョードの胸の上にポタポタと落ちてきた。ジョードは思わず抵抗する力を緩めてしまつた。

少年は怯んだジョードから素早く離れると、切れた顔など気にも留めず、顔を真っ赤に染めたまま聞こえた声のほうに向直つた。

三人の兵士が足場の悪い瓦礫の中を一人に近づいてくるのが見えた。

「ハリーファ皇子ー！」

(……お、皇子！？)

地面にへたり込んだままジョードの心は混乱した。

そして全く汚れのない軍服を着た兵士が抜刀すらせずハリーファと呼ばれた少年に近づいてきた。

「ハリーファ皇子！ ご無事ですか？」

その若い兵士はハリーファの前に跪いた。ハリーファの顔の傷を見ると、その後ろにいるジョードを睨み付けてきた。遠目に、先程ハリーファとジョードが揉み合っていたのを見たようだつた。

「そのお怪我は、あの者の所ぎょ……」

兵士は言い終わらないうちに言葉が途切れた。何が起こったかすぐには分からなかつたが、ジョードからは、その兵士の末魔の形相が見えた。

「…………」

兵士のみぞおちにジョードの短剣が斜めに刺さつていた。一気に呼吸を断たれ、声も出ない。後から来た二人の兵士は、背後からその異変には気付いていなかつた。

若い兵士はそのまま前方に倒れこんだ。そこで初めて後から来た一人の兵士は仲間の異変に気が付いた。

「おいっ！ どうした！？」

ハリーファは若い兵士に突き刺した短剣を捨て置き、すかさずその兵士の腰から剣を抜き取つて二人の兵士達に向き合つた。剣身が鞘をすべる音、砂地をこすつた音を聞いて、ジョードは悪寒に襲われた。

「ハリーファ皇子！？」

「氣でも触れましたか！」

兵士の一人がすいと音を立てて抜刀し、その切先をハリーファに向けた。

「おい！ やめろ！ 必ず生かして連れ帰れとの命令だぞ！」

もう一人が制したが抜刀した兵士は止まらず、剣を振り上げるとハリーファに切りかかつた。

びゅうと風の吹くような音がジョードの耳にも届いた。

ハリーファは敏捷な身のこなしでその剣筋をかわすと、両手で兵士のわき腹あたりを刺した。刺された兵士は苦痛に喘ぎ、絶叫にも似た悲鳴をあげた。すかさず剣を兵士のわき腹から引き抜くと、間髪入れず喉を搔つ切つた。叫び声は止まり、代わりに兵士の首から血が噴き出し辺りは真っ赤に染まつていった。

その血しぶきは少し離れていたジョードの所にまで届いた。兵士が地面に倒れてもなお血は噴き出し続け、砂と石畳の隙間に吸われていった。

「ハリーファ様、何を！？ ……くそつ！」

仲間が二人とも殺され、最後の兵士もとうとう抜刀した。ハリーファの目から感じられるのは狂氣ではなく正氣の殺意だった。

「ここまで来て捕まる訳にはいかない……俺は……」

ハリーファは自分に言い聞かせるように独り語ちた。その目は少年のものとは思えない鋭い光を湛えていた。

田の前で起ころる戦慄の出来事にジョードは倒れこんだまま田を伏せた。暫くしてまた人が倒れる音が聞こえそっと目を開けた。

立っていたのは呼吸を乱しているハリーファだった。辺りは一面赤く染まり、返り血はハリーファの髪を茶色く染め滴り落ちていた。嗅いだことの無い血の匂いが広がり、遠くで馬が嘶いていた。

その光景は、ジョードが暮らしてきた田舎の牧歌的な生活とはかけ離れすぎていた。全身真っ赤に染まり地面に倒れている兵士達の顔が皆ジョードの方を見ているようだった。

(いや、いや……)

まだ地面に倒れたままだったジョードは、腰が抜け、足が震え立ち上がることもできなかつた。訳がわからず砂の上をもがいているだけだつた。

(天使様、やつぱりわたしには出来ない……)

ハリーファは全身返り血に塗れ、剣を握る手からも血が滴つていた。そんなハリーファが振り返つて今度は自分を睨んでいる。

(こんな風に人を殺めるなんて……)

ハリーファから殺意を感じ、ジョードは恐怖に襲われた。  
気が遠くなり、ジョードは熱くなつた地面に抱き寄せられるかの  
よに倒れこんだ。

聖地「オス・ロー」のある中央の地を中心に、二つの大陸が蝶々の羽のように広がっている。東が光明大陸フローリス、西が暗黒大陸モリスと呼ばれていた。

西側の大陸モリスの入り口には、建国以来、宰相ワジルが統治しているファールーク皇國があつた。この国では複数の伝承者の信仰が認められていたが、皇家がそうであつたように、国民の大半は大陸と同じ名のモリスを信仰していた。

1425年1月6日、皇都サンドラ。

西の大陸モリスの気温は東の大陸の夏よりも高い。

新年を迎えた日もいつもと変わりなく黄金の太陽がファールークの王宮の真上を越えていった。

日中の気温は年中40度を越す。特別な季節の変化を持たないファールーク皇国の宫廷内でも、新しい年を迎えると、最初の七日間は毎夜祝宴が執り行われる。

年初から六日目。

ファールーク皇国的第一皇子ハリーファは原因不明の高熱でふせつていた。

時はまだ宵の口。階下から新年を祝つ祝宴の喧騒や詠歌が、本宮三階の片隅の部屋にまで聞こえてきた。窓からは月明かりが差し込み、オイルランプよりも明るく狭い室内を照らす。

皓々とした月の光はベッドの上にも薄い掛け布のように覆いかぶさり、横たわるハリーファの姿を淡く照らした。月影に金色の髪は白く清らかに光り輝くが、その下の表情は苦渋を呈し、身体は小さく震えていた。

ベッドに臥すハリーファのそばには宰相の女奴隸ジャーリアであり、ハリーファの乳母役のリューシャがその介抱をしていた。もう五日もハリーファの熱がずっと下がっていない。

「…………ファ…………ティマ…………」

ベットの上で高熱に苦しむハリーファがうなされながらしぶやいた。

(ファティマ様……？　ハリーファ様の亡くなられたお母様のお名前ね……)

ハリーファは時々胸元を押さえ、苦悶の表情を浮かべた。

「ハリーファ様……、お苦しいのですか？」

リューシャは声をかけながら、額や首元ににじむ汗をそつとぬぐつてやつた。

（夢でも見ていろのかしら。ファティマ様はハリーファ様が生まれてすぐに亡くなられたというのに……。やはり本当の母親といつのは特別ですね……）

複雑な思いにリューシャは小さくため息をもらした。

日が落ちて涼しくなれば少しは楽になるだろ？と思つていたが、夜になつてもハリーファの症状は良くならず、熱冷ましの薬も効かなかつた。

（医者は感染症だと言つていたけれど。こんな苦しみ方……、普通の『病気ではないわ』）

宮廷内には、皇子の乳母役であるリューシャの失脚を謀るうとする者も居た。宮廷内の人間関係が原因で、以前にもハリーファは毒を盛られて死線を彷徨つたことがあつた。

きっと今回もやうなのであらうとリューシャは思つていた。今後はハリーファの口にする水や食料に対し、もっと気を配らねばと痛切に感じていた。

深夜にハリーファは目を覚ました。

傍らの椅子に座つたまま目を伏せている美しい乳母の姿が視界に

入った。滝のように真っ直ぐな金色の長い髪が、疲れを表すように珍しく少し乱れていた。

「……乳母上？」

ハリーファが弱々しくひぶやくと、リューシャは目を開けた。金色の睫毛が何回か上下し、その奥の美しい蒼い瞳がハリーファを見つめた。

「お気付きになられたのですか？」

そう言つて乳母はハリーファの額や喉もとの汗を拭いた。その後、金色の前髪に下にそつと掌を滑り込ませ、少し眉をしかめた。

「大丈夫ですか？　ずっととうなされていましたわ」

「……嫌な夢を見ていました……」

「嫌な夢なのですか？　ファティマ様のお名前を呼ばっていましたけど……」

「……母上の……お名前をですか？」

「ええ」

リューシャは頷きながら、乱れていた掛け布を優しく掛け直した。椅子を寄せて、ハリーファを見つめていた。

銀色の月明かりの差し込む中、ハリーファはぼんやりと宙を眺めたまま眠ろうとしなかった。眠ればきっとまたあの『夢』の続きに

苦じめられたのだ。

田を覗じよつとしないハリーファをリューシャは心配やつに覗き込んだ。

「……眠れないのですか？　お水をお持ひしまよつか？」

リューシャの気遣いにハリーファはふしたまま頭を横にふった。熱の所為で白い顔が赤みがかつていた。

「オス・ローの医者や薬師が居れば、こんな」病氣もあつとすぐ治せるのでじょうけだじね……」

「オス・ロー……」

ハリーファはリューシャの言葉を復唱するよつてつぶやいた。

「……乳母上。昔みたいに聖地の話を聞かせてくれませんか？」

幼い子供の時のよつてねだるハリーファにリューシャは優しく微笑んだ。

「よろしこですわ」

リューシャは椅子に座りなおすと、ハリーファが幼い頃から好きだつた聖地オス・ローに住む【エブラの民】の話を語りだした。

「昔むかし、聖地オス・ローには【エブラの民】が住んでいました

「

まるでおとぎ話を詠み聞かせるよひし、リューシャの口から聖なる地の天使の末裔の話が紡がれる。

ハリーファはまだ熱でぼんやりする頭で、乳母の話す崩壊する前の聖地オス・ローの話にじっと耳を傾けた。

リューシャの話を聞きながらいつの間にか目をつむり、ハリーファの意識は再び夢の中へと落ちていった。

## 聖地オス・ロー ガースフ

『昔むかし、聖地オス・ローには【エブラの民】が住んでいました』

石と砂の国、聖地オス・ローはトリアナ海沿岸にある都市である。海岸に面したその南端に通称「ドーム」と呼ばれる城砦がある。丘の上にある城砦を中心内陸側へ扇状に民家や市場や病院などが広がつて城下を形成しオス・ローと呼ばれていた。

城砦内部には神が降臨するといわれる大きな岩があるという。その岩に降臨する神を隠すため、外界とは隔絶するように高い城壁で囲まれており、外から中の様子を窺い知ることはできない。

そして、そのドームの中で天使の末裔、神に最も近いと言われる人種、【エブラの民】は暮らしていた。

ガースフが天使の末裔と呼ばれている【エブラの民】を初めて見たのは、7歳の時だった。

中心の地の南端にある聖地オス・ローには、東のフロリスや西の

モリスと呼ばれる大陸から沢山の巡礼者が訪れる。

その聖地を管理しているのは、オス・ロー北部にある小国シュケムであった。

ユースフは、シュケムの將軍であつた伯父に連れられ初めて聖地のドームを訪れたとき、偶然ドームの門の外に出てきた【エブラの民】を見ることが出来た。

【エブラの民】はほとんど門の外に出てくることはなく、その姿を見た者は死後天国へ行くことが出来るとの迷信が囁かれている。彼らのその異様ながらも美しい不思議なオーラに、幼かつたユースフは一瞬で魅了されてしまった。

神に最も近い存在と云われる彼らと、彼らの住む聖地オス・ローを維持するため、ユースフはシュケム王国の要人であつた父の後を継がず、伯父と同じ軍人の道を選んだのだった。

\* \* \* \*

ドームの入り口、通称【天国の扉】と呼ばれる石造りの門の前には、毎日のように巡礼者が訪れる。門の前の広場に集まるのは、白人、黒人、褐色の肌、髪の色、瞳の色も違う多種多様の巡礼者達だつた。あるものは両手を合わせ、あるものは跪き、あるものは地に口付けする。各宗派それぞれの形で、門の向こうに降臨するという神に祈りを捧げていた。

現在オス・ローは東西の大陸の均衡を保つため、北部にある小国シユケムの管轄にあつた。

この時、巡礼者のほとんどは東からやつてくるフロリス人達で、巡礼者以外のフロリス人の侵入を防ぐため、シユケムから軍人が派遣されフロリス国境の監視に当たつていた。

ユースフもその軍人の一人だつた。

伯父の権力や持ち前の才能で、ユースフは17歳の時にはすでに軍務長官の座に就いていた。

ユースフも天使<sup>エブラ</sup>信仰者なので、ドームに来たときは礼拝を欠かさなかつた。

そしてユースフはよく一人で城壁沿いをトリアナ海を見下ろせる岸壁まで行つて、その高波眺めるのが好きだつた。岸壁から海を臨むと、風景が薄茶色から一転してブルーに変わる。

壁の向こう側の【エブラの民】が見ている光景と同じかと思うと、それだけでも心が満たされた。人は全くやってこない場所であり、ユースフにとつては自分の内面を曝け出せる癒しの場所だつた。

中央の地は日中はきつゝが日が差し、気温も40度近くまで上がるが、夕方になると急激に気温が下がり深夜には吐く息が白くなる。一日の中に四季が存在した。

## コースフが25歳の頃。

夕暮れ近く、コースフはトリアナ海の見下ろせる岸壁へ向かった。ドームの正面から左手に回る。右手に高さ20メートルほどの石垣の城壁がそそり立つ、その下を一人歩いて行った。

手前の数十メートルまでは石畳で舗装されていた地面も、奥に行くとやがて砂地がむき出しになつてくる。すっかり傾いた太陽の光は城壁にぶつかって、コースフの歩む方角は既に薄暗い影が帳とぼりとなつて下りていた。

昼間は日光を避ける為の外套が、今時間は冷え始めた空気を遮る役目に変わりつつあった。外套の中で、長い剣が歩みに合わせて揺れると、それを留めるベルトの金具がカチヤカチヤと音を立てる。砂の地面の上をサッサッと鳴らし歩く靴音と重なつて規則的に音を奏でていた。

しばらく歩き続いていると、その砂地の上に何かが倒れていた。

(……人か？)

コースフは最初はそれが人であるのか目を疑つた。いまだかつて、この場所で人に出会つたことはなかった。

薄暗がりの中、生きているのか死んでいるのか、うつ伏せに倒れた身体は微動だにしない。

それは少女だった。

黒い肌に白い髪、それに砂に塗れて汚れてはいるが白い独特の衣服を身に着けている。

「おい！ 大丈夫か？」

傍らに跪き、軽く肩を叩きながら声をかけても少女の反応はなかった。

コースフがそっと身体を抱き上げると、息はしているようだが意識がなかつた。少女の顔や腕や足のあちこちに擦り傷があつて滲んだ血に砂が張り付いていた。落ちてから誰にも見つけられず、随分時間が過ぎたようだつた。

コースフが城壁を見上げると、壁の上部に滑落痕が見えた。

(まさか！ あそこから落ちたのか？！)

高さは一十メートルくらいだろうか？ あんな高さから落ちて生きていることのほうが奇跡的だ。過つて滑り落ちたのだとしたら、この城壁の上には人が通れる通路でもあるのだろう。

「誰か居ないのか！ 人が落ちたぞ！」

コースフが壁の向こうに向かつて叫んでみるが人の気配は全く無かつた。自分の声が壁に当たつて微かに木霊しただけだった。

仕方が無いので少女を抱き上げると、コースフはもと来た道を引き返した。

コースフが少女を連れてドームの門前まで戻った時には、門の前の広場もすっかり暗くなっていた。日没と供に巡礼者も姿を消し、門はいつものとおり固く閉ざされたままだった。

普段ならドーム前に数人残っている筈の自分の部下達も、今日に限って居なくなっている。茜色の西の空も、どんどん群青色から勝色へと変わつていこうとしていた。

コースフは迷いながらも、少女を自分の外套で包むと、抱きかかえて城下の程近い自分の住居へ連れて行つた。

住居の入り口に屯していたコースフの奴隸達は、少し遠くに主人の姿を見つけると慌しく働きだした。

黒人奴隸の一人が、入り口近くで待機していた。コースフが何かを抱きかかえて帰つて来たのに気がつくと、扉を開け放つたまにして厨房のほうへ引つ込んでいった。

コースフは少女を抱え開け放たれた扉をぐぐりぬけると、そのまま中一階にある部屋へと階段を上がりつて行つた。

下で奴隸達が話しているのが聞こえてくる。彼らが少女の姿を見ないように引き払ってくれたことは、コースフには都合が良かつた。

コースフは少女を狭い自室へ連れて行くと、外套を外しながらそつとベッドの上に降ろした。

「うう……」

少女が痛みを感じたのか、少しうめき眉を顰めた。

その声に、日頃大抵のことでは感じなくなっていた緊張が走る。コースフは固唾を呑んで少女を見守った。

「Jの白い独特的の服、それに黒い肌に白い髪……。間違いない、この少女は【エブラの民】だ。

オス・ローの城下には優秀な医者は沢山いるが、【エブラの民】をドームの外に連れ出した件でコースフも、またそれを診た医者も大罪に問われる事は間違いない。

だからといって、気温が下がる夜に意識のない少女をドームの門前にほっておくこともコースフには出来なかつた。

思わず少女を連れ帰つてしまつたが、結局手当てらしことは何も出来ぬまま一晩が過ぎてしまった。

翌朝になつてようやく少女は目を覚ました。見知らぬ狭い部屋を見回す。干し煉瓦の壁には四角くくりぬかれた窓に木で出来た戸がつけられ、その隙間から漏れる光が室内をぼんやりと明るくしていった。部屋の中には他には物書き用の台しかない。入り口に扉はなく、布が掛けられ区切られているだけだった。

ふと枕元に置いてある水の入ったグラスに気が付き、少女は手に取るとむさぼるようにそれを一気に飲み干した。

少女がベッドから下りようとすると身体がぐらつとふらついた。咄嗟に掴んだ毛布と一緒にベッドの足元の床に、うずくまるように倒れ込んでしまった。

扉代わりの布がぱさっと捲られコースフが戻ってきたのを見て、少女はあッと驚いて毛布で口元を覆つた。

「大丈夫ですか？」

毛布を掴んでしゃがみこむ少女に、コースフは手を貸すとベッドの上に座るのを手伝つた。グラスの中の水が無くなっているのに気づき、ちょうど持つてきたピッチャーの水を注ぐとグラスとピッチャーを並べて置いた。

コースフが木の窓を開け放つと光で室内が明るく照らし出された。少女の黒い肌と白い髪がはつきりと見て取れる。瞳の色は董色をしていた。

少女の瞳にも、漆黒の髪と瞳、そして小麦色の肌をした青年コースフの姿が映つた。

コースフは少女よりも田線が下になるように、床に片膝を付いて【Hグラの民】の少女を見上げた。

「貴女はドームの城壁の下に倒れていたんですね」

少女に恭しく話しかけた。本当は話しかける」とさえ許されないのかもしない。【エブラの民】は外界では言葉を発しないのだ。

少女は毛布で口元を隠したまま動かず何も話さず、ただじつとコースフの様子を眺めていた。その表情からも何を考えているのか全くわからなかつた。

目を開いた少女を間近で見れば見るほどその美しさに気付かされる。少女の董色の瞳を見て、コースフの脳裏には幼い時初めて見た【エブラの民】の姿が鮮明に蘇つた。

コースフは改めて、少女の怪我の具合を確かめた。顔や手足に複数の擦過傷が出来ていた。どうやら足は両足とも捻挫しているようだ。だが、あの高さから落下して、この程度で済んだのは奇跡とか言いようが無かつた。

沸かしたお湯を汲んではきたが、コースフには【エブラの民】である彼女の素肌に触れて良いのかがわからず、どうにも治療らしいことはしてやれなかつた。絞つた布を少女に渡すことしか出来ないでいた。

少女の命に別状は無いと分かれば、せつねどドームに帰してしまつたほうが良さそつだつた。【エブラの民】をドームから連れ出すなど駄當たりな事は早く止めなければ。

「ドームへ行けば門は開けて貰えるのですか?」

コースフの質問に少女は黙つて首を横に振つた。

「では門はいつ開くのでしょうか？」

また横に振る。言葉は通じているようすで、『わからない』とでも  
言いたげに少女は唇をきつく結んだ。

「わからないのですか？　あの儀式がいつ行われるのかも？」

その問いかけには少女は首を縦に振った。

【エブラの民】が門を開けて外界へ出ることは極めて稀なのだ。  
不謹慎だと思いつつも、物凄くやつかない拾い物をしてしまったと  
コースフは後悔した。

「参ったな……」

コースフは少女には聞こえないように独り言を呟いた。コースフ  
の困った顔を見て、少女も落ち込んだのかうつむいてしまった。

だが、天使信仰のコースフが【エブラの民】である少女を見捨て  
られるはずがなかった。門が開くまでの間、少女はコースフと暮ら  
すことになってしまったのだった。

## 【Hフクの民】サライ

少女の名前はサライトといった。

年の頃は十代の前半くらいに見える。黒い肌に真白な髪、董色の瞳した、天使の末裔と言われている【Hフクの民】だ。

【Hフクの民】は外界では言葉を発しないはずだったが、ユースフと一緒に過ごすと、信用したのか、諦めたのか、普通に言葉を話すようになってしまった。ユースフとしては拍子抜けだったが、会話できない不便さを思えば、話し出したサライの覚悟には感謝した。

職務の合間を見てユースフは連日ドームに通つたが、門が開く様子は全く無かつた。サライが居なくなつた事で、中で騒ぎが起つてこるような様子も見受けられなかつた。

一体【Hフクの民】とはどういつ生活をしているのか、全く想像が出来ない。

サライトは人目に付かないように、オス・ローの女達と同じ服を着させた。たとえ家中でも髪は一本も出ないように染布で頭を巻き、家からは出ないよう言い聞かせていた筈なのだが、サライは奴隸達と一緒につてよく働いていた。

「ユースフ！ おかえりなさい！」

夕暮れ時にコースフが帰宅すると、毎日満面の笑みでサラリイは迎えてくれた。日が暮れ始め薄暗いはずの家の中が不思議と明るく感じられる。思わずつられて笑顔になってしまい「ただいま」などと答えてしまった。その様子を奴隸達が覗き見て、可笑しそうに笑っているのが聞こえてきた。

サラリイの今までの生活環境ではどうやら「おかえり」という言葉は無かつたようだ。ドームの中の生活では必要なものが、外界には沢山溢れている。外界の言葉、食事、習慣など【<sup>ハイス</sup>ヒブラの民】の知らない概念を、サラリイは楽しそうにコースフに訊ねてきた。

そんな様子を見るたび、コースフは焦りを感じずにはいられなかつた。外界の空気によつて神聖な【<sup>ハイス</sup>ヒブラの民】が汚されていくような感覚を覚えた。

早くサラリイをドームに返さないと……。あれからもう一ヶ月も経つているのだ。

そんなコースフの氣など知らないサラリイは、外套を壁に掛け馬具を片付けるコースフのわきにやつてきて、その日得た外界の知識を嬉しそうにしゃべりだした。

「コースフ、聞いて！ 今日アブド達と馬ハイスを見たのよ！ 本当にびっくりしたの！ あんな大きな動物が居るなんて知らなかつたわ！」

田を輝かせて話すサラリイだったが、

「そうか……」

と、コースフの返事はそつけなかつた。

サライが普通の女だつたら、こんなに喜ぶ顔が見られるのなら次の休みに馬に乗せてやひつと思つことだらつ。だが、サライは【エブラの民】なのだ。

ドームに戻れるまで、御高く尊大に構え【天使】らしく大人しくしてくれていれば良いのに、コースフの通りにはならなかつた。サライが何かをしたり、話をするたびに、外界の少女達となんら変わらない事を嫌と言つほどコースフは実感させられた。

サライが言葉を話し初めてすぐに、敬語使つことすらばかしくなつてしまつたほどだ。サライがコースフの話し方は変だと言うので、聞けば【エブラの民】には敬語という概念が無いようだつた。

【エブラの民】が何か特殊な能力を持つてゐるかといえばそうでない。サライから神秘的なオーラも全くと言つて良いほど感じない。むしろ世間知らずなサライは、外界の同年代の少女達よりも幼さを感じさせた。

コースフの記憶に残る【エブラの民】とサライは、まるで違う者のようにさえ感じることがあつた。サライが来てからとくつもの、コースフは自分の信仰心は本当に確かなもののかと、心の奥で形にならない不安がもやもやとし始めていた。

「コースフ？ 疲れてるの？」

背の低いサライは素つ氣無い態度のコースフを見上げながら、少

し寂しそうな顔をした。

疲れているかと言われば疲れていた。この二ヶ月、いくら信用できる自分の奴隸達とは言え、サライを家に残し心配が絶えなかつた。夜は夜で、オス・ローで付き合つている女の元にも全く通つていない。そのうちの方がコースフを尋ねてくるのではないかと、それも気が気でなかつた。

コースフはようやく頭に巻いていたターバンを外し、こぼれできた黒い髪を手櫛で整えると衣服の首もとの紐を緩めた。

そんな時。

「コースフ、いるかい？」

入り口の扉を叩き、初老の男がオイルランプを手にして入つてきた。

コースフは素早くサライに厨房の方へ行くように指で指示した。

「ちょっと通りかかったんでな、水をもらえないか？」

「どうぞ」

と、入り口のすぐ脇に置いていた水瓶から、コースフはグラスで水をすくつて男に渡した。乾いた土地故の慣習で、水を求める者は何時でも誰でも水を与えるのだ。

「なんだい、新しい女奴隸かい？」  
ジャーリア

サライの後ろ姿が目に入った男は、ランプをくいつと上下させた。

向かいの壁でサライの影が揺れる。サライはそのまま厨房へ駆け込んだ。

しかし、口が裂けても【エブラの民】の事を【奴隸】だなどとは言えない……。

「ハザン先生、お久しぶりです。アリシャはお元気ですか？」

コースフがオス・ロードに会つてこられる女の父で、医者のハザンだった。

「最近君が来てくれないと嘆いていたよ」

ハザン医師がそんな事をわざわざここに来る男ではないのは知っていた。おそらく本当に通りかかっただけなのだろう。

「それは申し訳ありません。少し思つところがあつて巡礼を続けていますので」

コースフの言葉にハザンの眉が興味深げに上がった。

「コースフよ、何か罪を犯したのか？」

「まあ、そんなところです」

医者が罪とかけてきたところを見ると、おそらくコースフは他の女の所に通つていると思ったのだらう。都合が良いのでコースフは敢えて否定しなかった。

「お前さん程の男なら、昼夜も忙しいんだろうね。エブラの教えも人によつては過酷なものだな」

エブラ信者は伝承者エブラが多妻だったことから、一夫多妻制度を認めている。奴隸の保有数以上に、妻の数というのは単純に権力と財力を表す指数とされていた。特にユースフのような王侯貴族の関係者となると、体裁だけの為に妻を養うことも少なくなかった。

ハザンはグラスの水を飲み干すとテーブルの上に空になったグラスを置いた。

「生き返ったよ」

「先生に死なれるとオス・ローの価値が下がってしまいます」

ハザンの言葉にユースフは苦笑した。

「儂みたいな鞍替えモンにも扉は開くんだろつかね。お前さんには【天国の扉】が開くことを祈ってるよ」

お決まりの文句を言いつと、ハザンはぎいっと扉を軋ませて帰つていった。

(【天国の扉】が開くことを祈つてゐるか)

全くだ…とユースフは思つた。

ハザンが帰つた後、ユースフはようやく食事にありつけた。サライは向かいに座つて、ユースフの食事風景をまじまじと眺めている。テーブルの上でランプの灯りが揺れ、サライのどこなく落ち着か

ない表情を照らした。

目の上には今まで味わったことの無い味のするスープが並んでいた。

「……もしかして、お前が作ったのか？」

サラライがあまりに見つめてくることを不審に思い、なんとなく聞いてみた。

「どうしてわかったの！？ わたしの心の声が聞こえた？」

相変わらず、サラライが奴隸と一緒に働いている事を知り、コースフは肩を落とし軽く溜息をついた。

「サラライ、お前はちやんと食つてゐるのか？」

「うそ、食べてるよ」

そうは言つが、コースフの居ないうちに奴隸達と一緒に食事を済ませてこようやく、サラライが物を食べている姿をコースフは一度も見たことが無かつた。

ゲームの中の【ハイラの民】は何を食べて、どのよつて生活しているのかは全く分からぬが、そこは追求してはいけないと思つた。奴隸達に聞けば分かる事だが、そこまで詮索する気はない、詮索してはいけない事なのだと思つていた。

サラライと話していると、時々とんでもない内容が飛び出してくることがあった。大抵は【ハイラの民】に直接関わることで、コース

フは外界の人間が知つてはいけない事なのだと、サライの発言を制止することが度々あつた。

「ゴースフ……、あのね」

また止められると思つてゐるのか、サライは言ひづらやうな顔をしていた。

ゴースフは食べる手を止めてサライの話に耳を傾けた。

「あのね、もうすぐ門が開くと思ひの……」

「本当か？」

「うん」

根拠は分からぬいが、サライが言ひのだからきっと本当なのだろう。

「あの儀式が行われるのか？」

ゴースフの瞳が子供のように輝きだした。七歳の時、魅せられたあの美しく不思議な儀式をまた日にすることが出来るかもしない。そう思つと足が地につかなくなるような感覚を覚えた。

サライを無事にドームの中に返すこともだが、あの儀式をまた見られるかもしれないと思つとゴースフの心が高鳴つた。

「多分、器が焼かれて、その後かな……」

意味が分からぬいが、これも多分聞いてはいけない事だとゴース

フは判断した。明日からしばらく、サライトを連れてドームへ行こうと決めた。

一人自室に戻ったコースフはどつと疲れて、寝るには早い時間からベッドに倒れ込んだ。低い天井にランプの灯りがちらつくのをぼんやりと眺めた。

もしかしたら、サライトは明日にはドームに帰れるかも知れないと思つと、随分肩の荷が下りた気がした。

きつときの二ヶ月に【エブラの民】であるサライトに對して、随分不埒な振る舞いをしてしまったに違いない。【エブラの民】に対して、自責の念と恭順の意がコースフの心中に甦つてきた。

「コースフ、寝ちゃつた？」

声のする方を見ると、部屋の入り口に掛けられた薄いカーテンに、サライトの影が灯りに照らされて映つている。

「いや、起きてるよ」

そう答えると、サライトが灯りを持ってコースフの部屋に入ってきた。台の上に持っていたオイルカッパの灯りを置くと、ベッドの傍に来てしゃがみこんだ。

灯りが一つになり、狭い部屋の中は十分に明るくなつた。

「明日でさよならだよ。ありがと」

サライはそう言ってベッドで仰向けに寝転んだままのコースフの顔をじっと覗き込んだ。

どうして明日門が開くとわかったのだろうか？ この確信は一体どこから来るのだろうか？ 聞いてはいけないと思いつつ、これで最後だと思うとコースフの気がつい緩んでしまつた。

コースフは身体を転がすと片肘を立てて頭を支え、横たわつたまま、傍らのサライに話しかけた。

「なぜ明日、門が開くと分かったんだ？ 最初はわからないつて言つてただろう？」

「中の誰かが死んだから……」

「死んだ？」

怪訝そうな顔をするコースフにサライは少し声を落とした。

「死者の弔いの為に扉を開けるのよ」

サライの言葉に、コースフは思わず絶句した。

あの美しく幽玄な儀式は【ヒグラの民】の葬儀だったのだ。外界の概念とは違ひすぎる。

知つてはいけない事だった、とコースフは聞いたことを後悔

した。

幽玄なる儀式では、長と思われる人物を先頭に、何人かの【エブラの民】が灰を撒く。全員が驚くほど無表情で、その神秘的な光景に外界の人間はなぜか皆魅せられてしまう。

「……あれは葬儀だつたのか……」

「うん、魂だけが旅立てるように、身体を焼いて灰にしてしまうの」

死人を火葬するなど、ユースフにとつては信じられなかつた。魂が復活した時に戻る身体が無くても良いのだろうか？

それに、なぜサライは誰かが死んだというのが分かつたのだろうか？ 気になつたが、やはり突き詰めないでおいた。

「ユースフは弔いを見たことあるの？」

「子供の頃にな」

それこそがユースフがオス・ローで軍人になつた所以だった。

「弔いに参加できるのは大人だけなの。わたしはまだ見たことないんだ」

「そうなのか。あれは本当に美しい儀式だ。ああいう風に【エブラの民】に送られるのなら、死ぬのも悪くないな」

「ユースフが死んじゃ嫌だよ」

サライが悲しそうな顔をしてコースフをじっと見つめた。

「人が死ぬと、どうして涙が出てしまうのかな？ 天国に迎えられるのにね」

「別れは辛いものだろ？」

まあ、俺は親父が死んでも涙は出ないだろ？……とサライには聞かせたくない言葉をコースフは心のうちだけで考えた。

「大人になると涙出なくなるのかな。我慢してるとか」

舌足らずだが、サライはあの儀式での時のことを言つているのだらう。

「嬉しくても笑わない。悲しくても泣かない。大人ってやつは、子供以上にややこしいのかもな」

成人して10年経つた今でも、コースフは自分が大人に成れた気がしない。

「自分の感情に従つて、素直に涙を流せるほうが良いんじゃないかな？」

そう言つて顔の真横に居るサライを見た。

まだ儀式を見たこと無いといつサライにコースフは問いかけた。

「お前は何歳なんだ？」

「もうすぐ14よ」

この時初めてサライの年齢を知った。コースフより12も年下だつた。

「成人は何歳なんだ?」

「15歳」

「エブラ信鷹と同じだな」

ああ、そりゃそうか、とコースフは笑つてみせた。

ところが、サライは傍らでベッドに伏せて鼻を啜りながら泣いていた。

「どうしたんだ? 別れが辛いのか?」

コースフが大きな手で優しく頭を撫でてやると、サライは顔を上げた。その瞳は涙で潤みコースフを恋うように見つめていた。

「.....戻りたくない.....、コースフと一緒に居たい」

サライは聞こえないほど小さく呟いたが、コースフはそれに気付き

「大人になつてから出直してくれ」

と言つて、サライの気持ちには応えなかつた。

\* \* \* \*

サライがドームに戻つてからも、コースフは以前のように時々トリアナ海を眺めに岸壁に足を運んだ。

時々城壁の上からサライの視線を感じたが、もちろんサライは声はかけてこなかつた。

コースフはなるべく上を見ないようにし気づかぬ振りを繰り返していだが、そのうち頭上から小枝や麦の穂のような物を投げられるようになつた。これはさすがに無視できず、見上げると泣きそうな顔をしたサライが城壁からコースフを見下ろしている。コースフは声は掛けず、空に向かつて敬礼するとその場を立ち去つた。

そんな事を繰り返していると、今度はサライは怒つているようだつた。怒っていたかと思うと、次に見た時には目に涙を溜めていた。

さすがに堪りかねたコースフは頭上のサライに向かつて

「どうした？ 何故泣いてるんだ？」

と声を掛けると、サライは涙をこぼしながら小さく頭を横に振つて、そのまま向こう側に姿を消した。

\* \* \* \*

それから約一年。

ある夜、コースフのもとに思いがけない来客があった。来客ながら、先に家に入り込んでコースフの帰りを待っていたという方が正しい。

「コースフ！ おかえり！」

と、扉を開けると満面の笑みが眼中に飛び込んできた。

サライだった。

髪は隠していて見えないが、顔立ちは幼さが抜け更に美しく成長していた。身体つきも小柄ながら、服の上から見てもわかる程度に大人っぽくなっていた。だが、笑顔は以前と全く変わっていない。

コースフは一瞬眩暈を感じた。まさか本当にやつてくるとは思つていなかつた。

コースフの言つたとおり、サライは15歳になつて出直してきたのだろう。

もうどうやつてドームを出てきたのか敢えて聞かなかつた。

コースフがランプを持たずに部屋に行くと、後からサライが着いて來た。

暗い部屋で着替えをするコースフの背中に向かって、入り口で仕切り布をぎゅっと握り締めてサライは呟いた。

「わたし、コースフが好き……」

現実にサライトの口からその言葉を聞いて、コースフは心臓が止まる思いだった。

あの城壁の中ですっと思いを募らせていたのだろう。

サライトが自分のことをこんなにも慕ってくれていた事が驚きであった。いや、本当は気がついていたのだが目を背け続けていた。

コースフは今までサライトを一人の女として見た事がなかつた。コースフにとってサライトは【エブラの民】で、信仰の対象だつた。だが、コースフに対するサライトの想いは違つたようだつた。

コースフが動揺を隠せず振り返るとサライトが抱きついてきた。サライトが何を望んでいるのか分かりコースフは狼狽した。  
今までサライトを天使だと思い、コースフなりに大切にしてきたつもりだつた。

「サライト、やめてくれ。俺は聖人じゃないんだ……」

そこらへんにいる女とサライトは違うのだ。神聖なサライトを、【エブラの民】を汚したくはない。

「わたしだって聖人なんかじゃないよ……」

サライトの声が震えている。コースフの胸元に顔をうずめ、ぴったりと抱きついてきた。

「わたしずっと前から見てた。コースフが海を眺めてたのをずっと

見てたの

その言葉にコースフは再び言葉を失った。

まさかサラライが城壁から過つて落ちたのは、自分の姿を見ていた所為だったのだろうか？ それとももつと以前から、コースフの岸壁での拳動を見られていたのだろうか？

「……あそこで泣いてたでしょ？」

その言葉を聞いて、あの事故のずっと前からサラライが自分を見つめ続けていたことをコースフは知った。己の不甲斐なさに心が押し潰されてしまいそうだった。

あの場所だけが、誰にも甘えることの無いコースフが心の内を曝け出す事が出来る場所だった。微かに嗚咽を漏らしたとしても荒ぶる波の音が声を搔き消してくれた。いくら成人しようと、軍務長官の座に就こうと、自分の心を殺しきれず未だに子供のようにもがいでいる。そんなコースフの姿をサラライは知っていたのだ。

「……コースフが好き」

薄暗い部屋の中では、コースフを見上げるサラライの肌も髪も瞳の色も見えなかつた。きっとサラライからもコースフの情けない顔は見えていないのだろう。

こつしかコースフは両の腕でサラライを抱きしめていた。

一度一線を超えてしまつと、深みにはまるのはあつといつ間だつた。

一度目は無いと思つていたが、その後もサライは度々コースフのもとを訪れ夜を過ごした。

【エブラの民】が望んだ事だと、コースフは自分に言い聞かせていたが、逢瀬を重ねる度にコースフの中でサライの神格は薄れていくようだつた。

\* \* \* \*

夜にコースフの家の扉が五回叩かれた。サライが来た時の合図だつた。

コースフに家の中に招き入れられると、サライは冷えた身体を震わせながら、オス・ローの女が着ている上着を脱いだ。その下に着ているのは【エブラの民】の着ている白い一枚布の服だつた。

灯りを全て消すと、コースフの部屋で一人は身体が熱くなるまで抱き合つた。

今やサライとも付き合つてゐるコースフだつたが、彼女が【エブラの民】であるという事実は常に頭から離れなかつた。サライ自身はただの少女にしか思えないといつた。

「【Hブリの民】にこんなことをして、俺はきっと地獄に落ちるな……」

狭いベッドの上でサラライと向き合いながら、ユースフは自虐的な笑みを浮かべた。

ユースフはサラライと関係を持つてから、ドームへ巡礼にも行かなくなっていた。人に相談することも、神に救いを求めることも出来なかつた。

「大丈夫だよ。もしユースフが地獄に落ちても、わたしが絶対助けるよ！」

まだ暗がりの中、顔は見えないがサラライが少ししむきになつて言った。サラライはいつも少し子供っぽい事を言うのだ。

ユースフはそんなサラライを愛しく思つていたし、そんな言葉に癒されもしていた。

「ねえ知つてる？ 本当は天国は地にあるんだよ」

「地に？」

「そう。死ぬ時、人間も動物も鳥も、皆大地に抱かれて死んでいくでしょ？」

確かに生物は死ぬと横たわる。それを大地に抱かれていると言うのが可笑しくてユースフは頬が緩んだ。

「地が天国なんて初めて聞いたな。なら地獄はどこにあるんだ？ 空なのか？」

「地獄はね、この世界」

コースフの冗談にも、サライはいつも真剣に答えてきた。

「でも神様は平等に死を与えてくれる。だからコースフが地獄に落ちることはないよ」

「死を下すのは神じゃない、悪魔だろ」

「悪魔って何?」

閉鎖的な社会で暮らしているサライは、時々自分たち、外の人間とは全く違う概念を持つていて、コースフ驚かせたり呆れさせたりした。

二人はそんな話をしながら、明け方まで身体を重ねじやれ合っていた。

はじめこそ【エブラの民】のサライが望んだ事だと、コースフは自分の行為を正当化しようとしていたが、会つたびにサライが普通の少女にしか思えなくなつてきていた。

だが、【エブラの民】は天使の末裔なのだ。王族の娘に手を出して、命を代償に許しを請うのとは話が違う。この罪は許されるのだろうか……。いつも心の中で葛藤していた。

そうして会つたびに距離を縮めていった一人だったが、コースフ

の罪の意識はだんだん深まつてこた。

## コースフの弟

聖地オス・ローは一町の中に四季が在る代わりに、一年に四季は無く、一年中変わることなく同じ気候が続く。

夏の時間。

ドーム城下の軒と軒の間には大きな布が張られていて、石畳で整備された通りには強い日差しを遮り快適な影に覆われていた。

ドームを頂上に石畳の道を下つていいくと、中腹辺りでは軒先の日陰に椅子や机を出して路上診療する医者達や、日干、凍干や生の薬草などを売る薬売りの姿が見られた。

麓まで下ると城下街入り口に大きな石畳の広場があつた。広場の中央には小さな水場が作られており、オス・ローに住む者と、オス・ローに来た者達で溢れている。東と西の言葉と人種が交じり合つ場所だった。

広場の壁際には屋台やテントが並んで小さな市場となつてあり、巡礼者の為の宿泊所や酒場などもこの広場を中心に立ち並ぶ。他所から来た巡礼者の生活の拠点となり、昼も夜も盛り場となつていた。

正午を少し過ぎた頃。オス・ローのコースフの元にシュケムから実弟のアーディンが尋ねてきた。

アーディンはオス・ロー城下の雜踏まぎれ、居住区の入り口で馬に水を飲ませた。出迎えに来ていたユースフの奴隸にその手綱を預けると、案内されユースフの住居まで丘を上っていく。

兄ユースフが父の後を継がず軍人に志願して強引にオス・ローに来てしまったため、弟のアーディンは父の後を継ぐべくしてシュケムの要職に就いていた。三年前に父と同じ法官の職に就いてから、アーディンはユースフよりも位が上になっていた。

旅装束の下に華やかな色味の上質な衣服を纏う姿は、オス・ローの人ごみの中では明らかに浮いていたが、そんなことを気にする者はオス・ローには誰も居なかつた。混み合う通路で時折人と肩をぶつけたりしたが、年齢身分に関わらず互いに頭を下げあつた。

兄の奴隸に案内され、アーディンは人々の行き交う石畳の通りをドームのある丘の方に向かつて上つていった。

オス・ローの北東に在る軍の居留地に居たユースフは、奴隸から連絡を受け自宅へと戻ってきた。

ユースフが自宅の扉を開けると同時に、アーディンは座つていた椅子から立ち上がり入り口に立つ兄にシユケムの敬礼をした。ユースフもそれに応え敬礼で返した。

「お久しぶりです、シフナ軍務長官殿」

そう言いながら、澁みない漆黒の瞳がユースフを見据え、ユース

の方に歩み寄ってきた。

この時、コースフは28歳、弟のアーディンは21歳だった。

弟に最後に会ったのは実に五年前で、コースフより七つ年下のアーディンも、もうすっかり青年に成長していた。いつの間にか目線も同じ高さになっていた。

今回アーディンがオス・ローの兄を訪れた目的は、オス・ローの薬師を尋ねること、巡礼、そして、一通の令状をコースフに直接届けるためだつた。

コースフは令状を手渡たされ、アーディンの口からも直接その内容を聞かされた。

「ウバイド皇国への同行を貴殿に命じます。出立は七日後の早朝に

「御意」

法官から直々伝えられる内容を断れるはずもなく、コースフは即答した。

「貴殿が一緒なら心強い」

コースフに応え返すアーディンは、引き締まつた顔にもどこか優しさが滲み出ている。いつもどこか憂愁を帯びた表情のコースフと違い、似ているようであまり似ていない兄弟だった。

コースフは広げていた令状をくるくると丸めると、テーブルの上に置いた。

「堅苦しい事は止めてくれ。アーディン

コースフの言葉を合図に、二人とも表情が柔らかくなつた。

「兄さん、お元気そうでなによりです」

年は離れているが兄弟仲は良かつた。

コースフが家を飛び出した後、アーディンは父親からの過剰な期待を一身に背負つてきたはずなのだが、そんな苦労は微塵も感じさせなかつた。

弟に家督と責任を押し付けたコースフのことを恨んでいるかと思つていたが、その逆で定期的にコースフに手紙をよこすほど兄に傾倒していた。幼い頃、コースフが【エブラの民】に憧れたように、アーディンは兄に憧れを抱いていたようだ。

実際、頭も人柄も良く、誰が見ても兄より良く出来た弟だつた。

「お前、少し見ない間に親父にそつくりになつてきたな」

「兄さんみたいに母上似なら、もう少しもてたんでしょうけどね」

「仕事に戻られるのなら、私も一緒に行つても良いですか?」

「ああ、そうしてくれ。伯父上にも顔を見せておいて欲しい」

「そうですね。私が挨拶にも来なかつたと、父上ともめられては困るので」

アーディンが苦笑した。

二人の父と伯父は、実の兄弟でありながら非常に仲が悪かつた。

弟である父親は『シュケムの英雄』と呼ばれる人物で、シュケムの王位継承権第一位を持っている。一方、その兄である伯父はとうと、地位や名誉より戦いを好む性格だったので、自分の地位には全く興味が無くシュケムの将軍であることに満足していた。

だがそんな伯父でも、甥のユースフの話となるとまた別だつたようだ。ユースフとその父である自分の弟との関係が険惡になる一方、三年前にとうとうアーディンが父と同じ職に就いた。この時、伯父は自分の弟に食つて掛かり『お前の次はアーディンではなく、ユースフに王位継承権がある!』と、流血騒ぎを起こしてまで主張したことがあった。

伯父のユースフへの入れ込みようは半端無く、そういうた伯父の行き過ぎた行動は、父親と深い確執のあるユースフに『自分の本当の父親は伯父ではないか』と疑いを持たせるほどだった。

だからといって、伯父がアーディンの事を嫌っているということは全く無いので、父と伯父の二人の間を取り持つことが出来るのはアーディンだけだった。

とにかく、ユースフとアーディンにとつては、伯父と父の二人は良い反面教師となっていたようだ。

アーディンはウバイド皇國へ出発までの一週間をユースフの家に

滞在する事になった。

弟の滞在中、一人は毎晩酒を酌み交わし、幼い頃の話や、シュケムの話、君主の話、家族の話、軍事、政治、女の話まで語り明かした。

15歳で家を出たコースフとアーディンの二人が、こんなに話しこんだのは初めてのことだった。

\* \* \* \*

アーディンが来て三日目の夜のこと、二人はいつものように晩酌をしていた。

宴も酣を過ぎ二人とも随分と酔いが回っていたこともあって、男同士の話も随分下世話になっていた。そんな時、サライがコースフに会いにやってきた。

冬の時間。

扉の隙間から漏れている灯りで、サライはコースフが帰っていることを確認した。そしていつものように扉を五回叩いた。

その音に、コースフとアーディンの二人は深夜の訪問者に気が付いた。

「誰か来たんじゃないですか？ 私が出ますよ

そう言つて、扉に近い方に座つていてアーディンがコースフよりも先に席を立つた。

サラはいつもより灯りの数が多く、部屋の中からは酒の匂いが漂ってきて、来客だと気が付いた。きっとコースフが出て来て、いつものようにドームに戻るようにならうだらうと思つていた。

アーディンは入り口の扉を押し開け出て來たが、訪問者は灯りを持つていなかつたので、小柄な身体がアーディンの影に隠れてしまい、すぐには顔が分からなかつたようだつた。

サラは夜の暗がりと部屋からの柔らかな逆光で、背の高さも髪の色もコースフと同じアーディンを、コースフと見間違えてしまつた。サラが小さな声で「コースフ？」と問いかけると、「あれ？」とコースフと似たような声が返つてきた。

「兄さん、女性が来られますよ」

アーディンは振り返つてコースフを呼んだ。軒先では声と一緒に吐いた息が白くなつた。

来客だと分かるといつも顔を見られないように帰つっていたのだが、今日は運悪くアーディンと鉢合わせしてしまつた。サラは慌ててそのまま帰ろうとしたが、出てきたコースフに腕を掴まれて引き止められた。

「サラ！ 待て。俺の弟だ」

そう言つて、コースフはサライトの中に招き入れた。いつもなら決してサライトを人目に晒したりしないコースフだったが、弟なら大丈夫という期待もあつたのかもしれない。今日は深酒をしそぎていたようで、大分分別がつかなくなっていたようだつた。

サライトはオス・ローの女性がよくするように、日よけも兼ねた薄手の布で髪をすっぽりと隠し、服装も外界のものを身に着けていた。アーディンにはサライトが【エブラの民】とは分からなかつたようだが、美しさの中に幼さを残す少女の表情に思わず見とれてしまつていた。

「彼女も一緒にどうですか？」

アーディンから提案があつたがサライトは何も答えず、助けを求めるようにじっとコースフを見上げた。

ドーム近くの居住区はいわゆる高級住宅だつたが、それでもオス・ローの住居は狭かつた。入り口を入つてすぐのリビングで、手の届きそうな位置に居るサライトをアーディンはずつと見つめていた。だが、サライトは最初にアーディンとコースフと見間違えた時以外、一度もアーディンの方に視線を向けなかつた。

「いや、サライトは飲めないんだ」

「それは残念だな。兄さんがどうやつてこんな可愛い人を射止めたのか、武勇伝でも聞けるかと思つたのに」

アーディンの言葉にサライトは顔を真つ赤にしてコースフの後ろに隠れてしまった。

「あんまりからかわないでくれ」

兄に制され、アーディンは「」めんなさい、さすがに今日はちよ  
つと飲みすぎたかな」と謝った。

ユースフとサライの関係を知る者は誰も居なかつたので、こうじ  
てアーディンにからかわれたりする事がサライにはこそばゆく感じ  
られ、アーディンの人柄もあつてか嫌な気はしなかつた。

「俺の部屋で待つていてくれないか」

アーディンの見ている前だと叫うのにユースフに耳元で小声で甘  
く囁かれ、またサライの顔が紅く染まつた。そして、ユースフはサ  
ライにオイルランプを一つ手渡すと、奥の自分の部屋へと困惑する  
背中を押した。

中一階への階段もリビングの横にあり、サライは戸惑いながら階  
段に足をかけた。

「私は明日は朝から薬師の所に行かないといけないので、今晩はも  
うお開きにしましよう」

二人の事情を察したアーディンが氣を遣つてくれた。そして、兄  
に向かつて

「それにしても、兄さんが滅多にシュケムに帰つてこない理由がわ  
かりました。オス・ローにあんな可愛い人が居るんじゃ仕方ないで  
すね。彼女、兄さんにぞつこんみたいだ」

と笑いながら意地悪そうに言つた。

「帰つたらエイダ義姉さんに伝えておこいつ。そうしたら、ますます  
帰れなくなっちゃうかな」

「お前には会つてないだけで、時々帰つてるよ」

「コースフの言い訳を聞いても、アーディンは悪戯っぽく笑つてい  
た。

「エイダはプライドが高いんだ、勘弁してくれ」

アーディンが本当にそんなことを言つはずがないのを分かつてい  
ながら、コースフは肩をすくめてみせた。

サライは部屋の中で一人突つ立つていた。部屋に扉も無いような  
狭い住居の中で、コースフとアーディンの話し声は全て筒抜けだつ  
た。

(コースフの弟……)

コースフに弟がいることを、サライは聞いたことが無かつた。

そして二人の話から、コースフにはシュケムに妻がいたことを、  
サライはこの時初めて知つた。コースフに既に妻が居ることではな  
く、その事を知らなかつたことに胸が痛んだ。

サライは今更コースフのことをほとんど何も知らなかつた事に気が付かされた。他人と楽しそうに話したり、酒に酔つてゐるコースフを見るのも今日が初めてだつた。

逆にコースフからサライの私生活やドームの中のことを聞かれたことも無かつた。その理由は、コースフが神の領域に踏み込んではいけないと歯止めをかけてゐるのだとわかつてはいた。

頭ではわかつてはいたが、やるせなさに気持ちが乱れた。

どんなに体の距離が縮まつても、心の中に一人の間を遮る何かがあるのだ。そんなことを考え出すと、サライは孤独さに胸が締め付けられるように苦しくなつた。

(寂しいよ……)

目頭が熱くなつたが、こぼれそうな涙を必死で堪えた。素直に涙を流せばいいのに、何故か必死で堪えていた。以前コースフが言つていたように、サライは自分も「ややこしい大人」になつていていた事に気が付くと、余計に救われない気持ちになつてしまつた。

宴会はお開きになり、一人の男の足音が階段を登つてきた。一人の足音はそのまま奥の部屋へと消えていった。入り口の布を捲つてコースフが心もとない足取りで自分の寝室に入つてきた。

コースフは部屋の中で一人立ち廻っていたサライを後から抱きしめると、もたれかかるようにサライの肩に頭をのせた。コースフがこんな風にサライに甘えてくることは今まで一度も無かつた。今日は完全に酔いがまわっているようだ。

「会いたかった」

いつものコースフなら、サライに対してそんな仮初めなことも決して言わない。酒の勢いで出た口説き文句だと分かっているのに、コースフの甘い言葉にさつきまでの悲しみが誤魔化されてしまう。

「……コースフ……」

振り返ると名前も言ひ終わらないうちにきつくなづく抱き寄せられ、唇を塞がれてしまった。

それは深く、長いキス。台の上に置いていたランプが絡まる二人の影を壁に映し出した。甘美で濃密なキスで、息が詰まりそうになり顔が紅潮する。頭の芯をぎゅっとつかまれているよくな……。こんなキスは初めてだった。

流れるような手つきで頭に被ついていた布をするとと外され、サライの白く長い髪がさらさらと背中に滑り落ちた。そのまま床に押し倒されると、衣服を剥ぎ取るように脱がされ乱暴に身体をまさぐられる。床の上に広がった髪を踏まれサライの目に涙が滲んでも、コースフは気が付かなかつた。

いつもとは違う執拗な愛撫から逃れようとしたが、手首を捕えられて押さえつけられた。抵抗してみるが、身体は惱ましいほど反応してしまう。消し忘れたランプの灯りが、いつもは見えない二人の

表情を照らした。恥ずかしさに顔が熱つたが、やがてそんな事も考えていられなくなつた。

今夜のコースフはまるで別人のようだ。少し恐怖を感じたが、サライは抵抗せずコースフを受け入れた。

抱き寄せる力はいつもよりずっと強く、圧し掛かる重みや痛みでサライの口からもいつもと違う声が漏れる。快樂に喘ぎ、息を弾ませながら嬌声を漏らすと、それが更にコースフの欲情に火をつけたようだった。

コースフは何度も情熱的にサライを求めてきた。いつもならサライの身体に決して痕跡を残さないコースフだったが、そんな配慮は今夜はまるでなかつた。

\* \* \*

冬の終わり。

夜明け前にサライが目を覚ました。いつもは必ずサライより先に起きていたコースフが、まだ隣で眠つていた。

サライはコースフの顔にかかっている髪を指先でそつとすくいあげ耳のほうへと梳いた。12も年上のはずなのに、随分子供っぽい寝顔にサライは母性をくすぐられるようだった。

額にそつとキスをしたが、それでもコースフは目を覚まさなかつ

た。

薄明かりの部屋の中で、サラは初めて見るコースフの寝顔を、夜明けまで見つめていた。

### 早春の時間。

コースフが目を覚ました時には窓の外は随分明るく、部屋の中にも淡い光が差し込んでいた。

隣にサラが居ないことに気付き飛び起きると、既に服を着たサラが部屋を出ようとしているところだった。

サラはコースフを起こさないように黙つて帰ろうとしていたが、裸のままベッドから降りてきたコースフに後ろから抱きしめられ捕まつた。

「待ってくれ！」

コースフに捕まり、その腕の中で振り返ったサラはコースフを見上げた。コースフは一晩ですっかり酔いが醒めたようで、昨夜の事を思い出したようだった。

「サラ、昨夜の事を怒ってるなら謝る……」

「違うの……」

昨夜のように、あれほど激しく情熱的に愛されたのは初めてだつた。乱暴ではあったが、素のコースフを感じた気がした。一人の間

に立ちはだかる【何か】がなくなつたよつて感じられた。

その事で、コースフにとつてサライは、未だに神聖な存在【エブリの民】であることに気が付いたのだ。昨夜のコースフは、今までサライが知つている理性的で紳士的なコースフとはまるで違つていた。

シュケムにいるコースフの妻やオス・ローの他の女達は、コースフにいつも昨晩のように抱かれているのだろう。普通の女を愛すのと同じように、自分を愛してくれていた訳ではなかつたのだと。そう思つと、サライの心に初めて「嫉妬」という感情が生まれた。

「」の感情をどうしたらいいのかサライは分からなかつた。胸の内がざわついて気分が悪かつた。

二人の間にどうしても超えられない【壁】を感じずにはいられない。自分が【エブラの民】であることがもどかしくてならなかつた。

「どうしてわたしは……」

サライは叶わない我慢を盡つのをやめ、違つ言葉に換えた。

「キスして……」

コースフを見上げているサライの唇にコースフの唇が軽く触れた。いつもと変わらないキスだ。いつもコースフはサライの嫌がるようなことはしなかつたが、そのことが返つてサライを傷つけていた。

「昨夜みたいにキスして欲しい……」

サライがダダをこねるよつて言つと、コースフはばつが悪そうな

顔つきでサライを抱き寄せた。互いの顔を寄せ合ひ、サライの腕がコースフを包み込むと再び唇を重ねた。

\* \* \* \*

アーディンが来て五田田の」と。

その日はコースフは軍の仕事で国境近くの居留地まで行く予定だった。

奴隸達が慌しく朝食の支度をする中、コースフとアーディンは身支度を整え階下のリビングへと下りてきた。

アーディンは朝から薬師の所へ行き、その後ドームへ五回田の巡礼に行くらしい。

「今日、兄さんも一緒にドームへ巡礼に行きませんか？ ウバайд皇國までの安全祈願も兼ねて」

アーディンから誘われたが、サライとの事があつてからドームへは一年以上足を向けていない。昨夜のサライとの事を考えてもとても行ける気分ではなかった。

折角の弟の誘いだが、丁重に断るとコースフは自分の職務へと向かった。

初夏の時間。

日が一番高く上る夏の時間が巡礼のピークとなる。アーディンは薬師の元で用事を済ませ、他の巡礼者に混じってドームまでの石畳の坂道を登つていった。

城下では日陰が作られそれほど気にならなかつた気温も、城下街の日陰を抜けると眩みそつたほど急激に熱さを増した。

田の前にはドームの城壁が見えている。同じように坂を上る人々は、皆ドームの門【天国の扉】を田指していた。

アーディンが【天国の扉】の近くまで辿り着くと、門前には既に沢山の巡礼者が来ていて様々な形で神に祈りを捧げていた。

彼らの後ろにつき、アーディンも祈りを捧げようとした時。

突然、ずずずと石が擦れ合う音が響き、ドームの門が開き始めた。石の車輪が砂と地面を擦る重い音が当たりに響いた。

その瞬間、まるで時が止まつたかのように、辺りは静まり返つた。田を伏せていた者は田を開き、跪いていた者はゆっくりと立ち上がりつた。

【天国の扉】は人が通れるくらいだけ開くとぴたりと動きを止め

た。隙間からドームの中の様子が垣間見えて、巡礼者達は微かにどよめいた。中から白い服を身に纏つた【エブラの民】が十数人出てきたのだ。

門前に居た巡礼者達は皆押し黙つたまま、誰の指示も無く、自然と通りを空けるように後ろに下がつてきた。先に祈つていた者達が皆立ち上がり、アーディンの前に入垣となつて壁を作つた。

ユースフから嫌というほど【エブラの民】の話を聞かされていたアーディンは、【エブラの民】を是非自分の目で見てみないと常々思つていた。首を伸ばして【エブラの民】を見ている入垣をかき分け、巡礼者で出来た壁の一番前までなんとかたどり着くことが出来た。

【天国の扉】をぐぐつて出てきた【エブラの民】は不思議な神秘的なオーラを放つていた。その場に居た巡礼者全員が、滅多に無い機会に息を呑んで【エブラの民】を崇め、じつとその不思議な儀式を眺めた。

一番先頭は【エブラの民】の長らしい男だった。長にしては随分若かつたが、後に続く【エブラの民】は、無言で彼の後に従う。彼らは黒い肌と白い髪をあらわにして、独特の白い衣装を身に纏つていた。白い衣装は太陽の光を受けて眩く輝いていた。

【エブラの民】は誰も表情を変えず順に地面に灰を撒いた。彼らの手からさりさらと零れ落ちる灰は、時々風に晒されるように辺りに舞い散る。天から注ぐ太陽の光がその灰に反射して、地面までもがきらきらと光つてゐるような錯覚を覚えた。

それは不思議な光景だつた。炎天の下にいることを忘れてしまうほどだつた。光る地の上に立つ【エブラの民】から誰も視線を逸らす事が出来ないでいた。

アーディンも【エブラの民】のその美しい神秘的な儀式から目が離せなくなつていた。

まるで感情など持つていなかのよう無表情な様子で不思議な儀式を続ける【エブラの民】だつたが、アーディンはふとその中の一人に違和感を覚えた。その【エブラの民】の女性はとつさに手で拭い取つたが目に涙が浮かんでいた。それをアーディンは見逃さなかつた。

「あれは……」

その【エブラの民】が、一昨日の晩兄を訪ねてきたサライトに似ている。あの時は布を頭からかぶついて彼女の髪の色までは分からなかつたが、思わず見惚れるほどの美しい女だつた、その顔を忘れる訳が無かつた。

「……サライト？」

アーディンは夢を見ていたような気分から、一瞬で現実に引き戻された。

サライトに似ている女性は気づかなかつたようだが、【エブラの民】の一人がアーディンの声に気がついたようで、微かにアーディンの方を見たような気がした。

\* \* \* \*

先に家に戻っていたアーディンは昨夜の出来事を思い出し葛藤していた。リビングのテーブルの上に置かれたランプを睨みつけ考えを巡らせた。

聞きたいことがあるのにコースフがなかなか帰宅しないことに、余計にいらだちが募ってきた。

(兄さんとサライ……)

もしサライが【エブラの民】なのだとしたら、兄は神を冒涜しているとしか思えない。アーディンはコースフほど信仰心が厚いわけでもなかつたが、【エブラの民】に手を出すなど神の領域を侵犯しているとしか考えられなかつた。今まで傾倒してきた兄だからこそ、それだけは許せなかつた。

一人でテーブルに向かい、険しい形相のアーディンに、コースフの奴隸達も声をかけることも出来なかつた。

深夜になりようやくユースフは帰宅した。

ユースフが家の扉を開けると、アーディンがリビングで灯を灯してそのまま一人ユースフの帰りを待っていた。オイルランプの灯りがリビングでテーブルに向かつて座る弟の姿をぼんやりと照らしていた。

「まだ起きていたのか」

そう言いながら、ユースフは馬具を入り口の床に置いた。

「今日巡礼の時、【天国の扉】が開き、【エブラの民】に会つ」と  
が出来ました」

「お前は運がいいな」

ユースフは外套を壁の鉤にかけながら、振り向かないで返事をした。そしてそれ以上何も会話が続かなかつた。

「……兄さん、もしかして、サライは……」

アーディンに单刀直入に聞かれ、ユースフは答えた。

「……そうだ、【エブラの民】だ」

その答えを聞いてアーディンは怒りを露にした。アーディンは勢いよく立ち上がり、その勢いで椅子は後ろに倒れた。

「【エブラの民】は不可侵な存在！ 兄さんは神を冒涜してゐる！」

声を大にし、

「聖裁を！」

と叫びやこなや、コースフの喉元に切りかかつた。

部屋の中を橙色の閃光と風が走り、壁と床に鮮血が飛び散った。アーディンの剣は、コースフの顔面、右目の人下を横にかすめ、コースフの顔と衣服も一瞬で真紅に染めた。

「なぜ避けないのですか……？」

アーディンが剣を逸らさなければ、コースフの首は飛んでいただろ。コースフを睨むアーディンの顔にやり切れなさが浮かんでいた。

コースフは弟の問いにすぐに答えられなかつた。

「……俺は、多分、裁きを受けたいんだ……」

じつにか答えたコースフの言葉にアーディンは身をふるわせた。

「兄さん、ひどいな……。もう私も同罪だ」

コースフを殺すことを躊躇い、聖裁を下せなかつたアーディンもまた神に背いた事になる。

「……すまん」

アーディンを自分の罪に巻き込んでしまつたことをコースフは後

悔した。

やはりどこかで救いを求めていたのだ。でなければ、いくら酒が入っていたとはいえ、アーディンにサライを会わせたりはしなかつた。弟なら、自分に裁きを下せると思っていた。

「お前が許されるのなら、俺を殺してくれればいい」

コースフは皿を伏せて、床に胡坐をくむと両手首を畳ませて床に着けた。

「兄さん……」

アーディンは、床に座り込んだ兄を上から見下ろした。

「兄さんが父上によつて、君主の従兄妹である義姉上と意に沿わぬ結婚を強いられたことも知っています。代官職を放棄した兄さんでも、君主の為に主情を無視しそれを拒まなかつた。『シユケムの英雄』の子として生まれた以上、私も兄さんも自我尊重の心は捨て置いてきたはず。それなのに……、何故ですか……？　何故……？」

アーディンの兄に対する怒りと落胆と疑問が交じり合つた声に、コースフは何も答えることが出来なかつた。弟にこんなにも憧憬を抱かせるほど、自分は一体何をしたというのだろうか。

「彼女を、……サライのことを本氣で愛しているのですか？」

コースフは下を向いて黙つたまま、微かに頭を動かし頷いた。だが、半分は嘘だ。本氣でサライを愛していたかどうか自信がなかつた。

そんな兄の挙動を見てアーディンは言った。

「もしかして……、彼女の方が……？」

信仰心の厚いコースフが【エブラの民】を拒絶することなど出来  
るはずがない。

サライが望まなければこんなことにはならなかつた。【エブラの  
民】に対してコースフは禁忌を犯すこともなかつただけ。

「俺に、【エブラの民】を……サライを愛する資格はあるのか……  
？」

コースフは独り言のように呟いた。

自分でも、言つてゐることとやつてゐることが矛盾しているのは  
判つてゐる。だが、これこそがコースフがずっと抱えてきた罪の意  
識だつた。

アーディンは、剣についたコースフの血をぬぐうと鞘に収めた。  
カチンと金属の鐔音が部屋に響いた。

「わかりました、私も同じ罪を背負いましょ。私も兄さんも神に  
悖る行いをしてしまつたのですから」

「俺の所為だ、お前はまだ戻れる」

「兄さんとなら、共犯者となつましょ」

アーディンは、兄の為に神をも捨てる覚悟なのだろう。その濶み  
無い漆黒の瞳は真つ直ぐにコースフを見つめていた。

「一緒に地獄行きだぞ……」

「覚悟の上です。でも、もしこの罪が償えるなら一生かけても償いましょう。一生かけても償えないなら、何度も生まれ変わって償いましょう、兄さん」

アーディンの言葉がコースフの罪悪を自由へと導いてくれるようだった。

## ウバイド皇国

シュケムとオス・ローの在る中央の地と、西の大陸モリスの間に  
ある砂漠の砂は小麦粉のように細かく、そこを通るもののが息を詰ま  
らせる。

砂漠を越える旅人達は口差しを遮るターバンを頭に巻き、鼻から  
下は砂避けの布で顔を覆つて馬に跨る。馬の口にも防砂のマスクが  
付けられた。

オス・ローを出発したユースフとアーディンの一一行は、シュケム  
を経由し、三日かけてウバイド皇国の皇都サンンドラに到着した。

その道すがら、ユースフはウバイド皇国の実情をアーディンから  
聞かされた。

モリス信仰のウバイド皇国とエブラ信仰のシュケムとは、現在と  
りあえず親交状態を保っている。ウバイド皇国の宮廷内部では、こ  
こ数年宰相の座を巡つて混乱が続いており、ウバイド皇国の若き皇  
帝サーリムが助けを求めてきたようだ。

「ウバイド皇国の皇帝は現在15歳のサーリムです。その姉のシャ  
ーミール姫は皇国の四番目の姫君なのですが、皇帝以外に帝位を繼  
承できる者は、皇国にはもう皇帝の子か彼女が産む子しか居ないの  
です」

だが、そのシャーミールは結婚もしていないのだといふ。子など  
いるはずもなかつた。

一日で最も太陽の高い時間を過ぎた頃、ユースフヒアーティンの一行はウバيد皇宮に着いた。

二人は年老いた文官に案内され本宮へと入ると、まず大きな丸い天井のホールに圧巻された。長い歴史のあるウバيد皇宮の宮廷内はいたるところに幾何学模様を組み合わせた装飾が施され、床には色の違う大理石が紋様を描きながら敷き詰められていた。土煉瓦建ての質素なシュケムの宮殿と比べると全てが壯麗で、その美しさに二人は思わず溜息を漏らしそうだった。

その日、体調を崩し床に伏していたウバيد皇宮の若き皇帝サーリムヒアーティンの会談は、本宮の上階にあるサーリムの私室で行われた。

ウバيد皇國の皇帝サーリムは、ユースフ達と変わらぬ小麦色の肌に黒髪の少年であった。謀略や事故で相次いで親族を亡くし、昨年に14歳で帝位に就き、年老いた代官達に助けられどうにかやっているといった感じだった。

ユースフはサーリムに御目通りした後退室し、そこに同席したのは先程の年老いた文官一人だけだった。

サーリムは部屋を出て行つたユースフと目の前にいるシュケムの

要人のアーディンを見比べた。

「カーディー 法官殿、先程の方は……？」

「我が國の軍務長官シフナの副長で、私の兄です」

「ああ、やはりそうでしたか。お一人は随分似ておられると思った！」

「シャキック 同胞の兄ですから」

そう言つてアーディンが穏やかに微笑むと、サーリムの緊張も少し和らいだようだつた。

元氣の無かつたサーリムの顔にも白い歯がこぼれた。

「法官殿は、私の同胞シャキーカの姉のシャーリールとは面識があると、姉から聞きました」

「ええ、年に一回聖地巡礼に来られる時、いつもシュケムに立ち寄つてくれています。ですが、ここ一年程はお会いしていませんが……？ どうかされましたか？」

「ここ一二三年の間に、皇家の者が次々と亡くなつたのは知っていたが、若いサーリムが切り出しやすいようにと話を投げてやつた。

「実は今回折り入つてお願いしたいのは、その姉の身上のことなのです」

年老いた文官だけが見守る中、一人の話は進んでいった。

ユースフはサーリムの部屋の前の廊下で仁王立ちになり、時間が過ぎるのを待っていた。

遠くから廊下を走つてくる足音と服の裾が床を擦る音が聞こえた。音の方に視線を向けると、長い黒髪に小麦色の肌の若い女がユースフの姿を見つけ小走りにやつてきた。

女の頭に飾られている装飾の宝石が煌きながら揺れた。黒い髪がその装飾の美しさを際立たせ、またその装飾が黒い髪の美しさも際立たせていた。

女はユースフに後数メートルという所まで近づいてくると、人違ひだつた事に気が付きその歩みが止まつた。そしてその後を、体格の良い黒人の宦官が追つてきた。

「姫、行つてはならん！ お戻りなさい！」

黒人の宦官が女の腕を捕まえ引き戻そうとしていた。ユースフは黙つて視線だけを動かしその様子を見ていた。

「離しなさい、離してっ！ 客人の前なのよー！」

女が声を荒げると、黒人の宦官はユースフの視線に気が付き、女の腕を離した。

同時に女がユースフに駆け寄ってきた。

「お久しぶりでござります、コースフ様！」

猫のよう<sup>に</sup>大きな黒い瞳がコースフを見上げた。コースフはその女に全く見覚えが無かつたが、アーディンから聞かされた4番目の姫で間違いないだろう。

「ご無沙汰しておりました、シャーミール殿下。怠慢<sup>そだん</sup>そうぞなによりです」

そう言つて少し笑みを見せ、話を合させた。黒人の宦官は悠然と歩み寄つてくると、コースフを見て言った。

「『シユケムの英雄』の『子息が来られるとは聞いているが、御主は軍兵である』。このような処まで入つてくるとは関心せぬな」

「なんてことを言つのー、アーディン様の兄御様よー」

おそらくコースフと変わらぬ年齢と思われる宦官は、コースフの服装を上から下まで見定め、顔にある新しい傷痕を見て眉根を寄せた。

「兄……？ ただの軍人ではないか。なんとも血の氣が多そうだ」

「口を謹んで！ ムータミン！ コースフ様、どうかお許し下さい」

シャーミールは強い口調で黒人宦官を諫めると、コースフを見上げ許しを哀願した。

「構いません」

コースフはシャーミールにそう言つと、宦官の方を見た。

「確かに私は軍人だ。貴殿の言つとおりにさせで貰つ。だが、我が主君に何かあつた場合は――」

そう言つて鋭い眼光で自分より背の高い宦官を睨みつけた。

「弟君を主君と申すか。面白い御方だな」

宦官はコースフの身分を分かつていて、コースフを揶揄したようだつた。コースフはその言葉がまるで耳に入つていなかのように、宦官の横を通りその場を立ち去つた。

コースフは本宮から外に出ると、入り口近くの回廊に待機していた二人の部下と合流した。

少し傾きかけた太陽が、西側の回廊に出来た日陰を小さくしていた。まだ眩むような熱さの中、そこにシャーミールがコースフを追つて出てきた。

「コースフ様、お待ちになつて―」

服の裾を乱し、膝下の素足を露にして走ってきた。

「……先程は、……どうかご無礼をお許し下さい」

軽く肩で息をしながらシャーミールはコースフに謝罪を述べた。先程言葉を交わしたときから、シャーミールの表情はどこか悲壮さを湛えていた。そんな様子を見ても、コースフにはやはりシャーミールに見覚えがなかつた。

「シャーミール殿下？」

「はい？」

「以前に私と何処かでお会いしたことがありますか？」

そう言つと、シャーミールはコースフが自分の事を覚えていないのだと気が付いたようだつた。さつきは黒人宦官から助けるためにコースフが一芝居したのに気が付いたようだ。

「はい、六年ほど前に一度だけオス・ローでお会いしたんですけど。覚えて居られなかつたのですね」

そんなことは全く覚えていなかつた。六年前といつと、コースフは22歳の頃だ。まだ年若いシャーミールは成人するかしないか程度の年端だつただろう。

「随分昔のことですね」

「あの時、コースフ様に怒られたことを、わたくしは今も忘れないません」

そう言われコースフは面食らつた。この姫が自分に怒られたということは、一方的に見ただけではなく、直接会つて言葉を交わしていたわけだ。それなのに、何時何の話をしたのか皆目検討が付かない

かつた。

そんなコースフの表情から察したのか、シャーリールは付け足した。

「上の兄姉に甘えて、皇族の娘が遊びまわつていてはダメだと怒られてしましました。それが……今、こんなことになつてしまつて……本当にコースフ様のおっしゃる通りでした」

父・母・兄・姉という皇族が相次いで亡くなり、今年15になつたばかりの弟と自分しか皇家の血を引く者が居なくなつた。それまでは末の姫だつた自分に皇位継承のお鉢が回つてくるとは思つてもいなかつたのだろう。

涙を滲ませてうつむきがちにそう言われ、コースフはようやく思い出した。

アーディンが15歳になり成人を迎えた時の事だ。父の後継の件も含め、コースフの身分やその扱いについて父親と激しく衝突していた時期だつた。父の言つことを聞くつもりは毛頭ないが、弟には少なからず罪悪感を感じていたのだ。シャーリールは運悪くそんな時期のコースフと会い、そのとばつちりを受けていたようだ。

御気楽な皇族の少女に向けた厭味でありながら、コースフが自身を叱責した言葉だ。少女と同じ歳のアーディンは自分の割を食つているのに、この少女はなんと暢気なのかと。……言わばハつ当たりだつた。

「……ああ、それは申し訳ありません」

その言葉を言った相手ではなくその言葉の真意を思い出し、コースフは苦笑するしかなかつた。

その時のことを気に病んでいるのか、ずっと申し訳無さそうな顔をしているシャーミールにコースフは優しく語りかけた。

「お許し頂けますか？あの時は我もまだ若かつたので」

「はい。でも、コースフ様は今もお若いわ。あの時とお変わりありませんよ」

そう言うシャーミールの顔に、ようやく笑みが浮かんだ。確かにコースフは22歳の頃から背も体格もほとんど変わっていなかつた。もしかしたら、精神も成長していないのかもしれないと思えた。

「そのお顔……、どうされたのですか？」

ずっと気になっていたのか、数日前に傷を縫合した右頬の傷痕をシャーミールは心配そうに見上げた。

「砂漠に盗賊が出ると聞きましたが、まさか……」

「いいえ。これは出立前に、弟と兄弟喧嘩をした時に

「喧嘩？　アーディン様ですか？」

シャーミールは猫のような魅惑的な瞳を大きく見開いた。

「あのアーディン様が、お兄様とは喧嘩をなさるのですか？」

「意外ですか？」

「ええ。こつもともお優しいお方なので、喧嘩なさるよつた御姿は想像も出来ません」

アーディンの性格の善さは隣国にまで響いているよつだ。だが、本当はただの優等生なだけの弟では無いことが、この十日間一緒に過ごした事でよく分かり、コースフのアーディンへの信頼度は格段に上がつていた。

二人がそんな話をしている所に、アーディンが本宮から外に出てくるのが見えた。

「アーディン様！」

アーディンの姿を見つけた、シャーミールに安堵の表情が浮かんだ。

「シャーミール殿下、『ご無沙汰しております。挨拶もせず失礼しました』

「いいえ。コースフ様共々、『足労お掛けいたしました』

シャーミールはそう言つて腰を落とすとアーディンに深々と頭を下げた。コースフはアーディンを見つめるシャーミールに人並み以上的好意を感じ取つたが、アーディンはそんなことは気にも留めず、真顔でコースフに話しかけてきた。

「兄上、どうぞいらっしゃへ。陛下がお呼びです

そう言われ、コースフはシャーミールに敬礼すると踵を返し、アーディンと連れ添つて回廊を去つていった。

ユースフとアーディンの二人は階段を上り、先程立ち去ったサリムの部屋に戻ってきた。

さっきまで椅子に腰掛けっていたサーリムは寝台へと移動し、そこで起き上がって一人を待っていた。そして、一人に対してもう自らの体たらくを詫び、呼び戻したユースフに話を始めた。

「ユースフ殿、先程はアーディン殿の兄御殿とは気付かず。失礼しました」

アーディンの人柄のお陰か、年若いサーリムは随分緊張がほぐれ寬いでいる様子だった。だが、アーディンとは違い、公の場で殺伐とした表情を崩さないユースフに、まだ年若い皇帝は話し辛そうな様子を見せた。

「もう姉シャーミールとはお会いになられましたか？ 外で声が聞こえましたが」

「はい。時を味方につけられ、随分美しくおなりでした」

姉を褒められ弟として悪い気はしなかつたようだった。  
そこにアーディンが口出しをしてきた。

「陛下、兄は軍人です。回りくどく詮つ必要はありませんよ」

そう言わると、サーリムは途端に幼い表情を見せ、申し訳なさそうにユースフに言った。

「……この事は本来はアーディン殿にお願いしようかと思つていたのですが、アーディン殿よりもコースフ殿の方が適任かと判断します……」

アーディンはサーリムの言葉には口出しせず、横から黙つてコースフの様子を眺めていた。

「我がウバيد皇國の宰相ワジルになつて頂けないでしょつか。その為に、姉を妻として迎え入れて欲しいのです」

「……私が？　宰相に？」

寝耳に水の話だつた。コースフがアーディンの方をひりつと見やると、その一瞬アーディンと目が合つた。

「私がこのような状態なので、宮廷内で内乱が起るハル気がしてならないのです。奴隸兵軍が無法の振る舞いをしていると聞きますが、今、軍をまとめられる者が居らず手を拱いている状態なのです」

すでに軍務長官シフナの副長であり、父の後を継ぐ氣もないコースフにはつづつつけの話だつた。サーリムの提案を後押しするようにアーディンが付け加えた。

「ウバيد皇国シヨケムの軍を取り仕切れる者が居ないと、遠からず我が國にも危害が及ぶでしょう」

年若く病弱なサーリムの身にも危険が及び、ウバيد皇国最後の皇族であるシャーミールの地位が利用されてしまうというのだろう。君主が皇家以外のものに替われば、おそらくウバيد皇国とシュケ

ムの関係も崩れてしまつに違ひなかつた。

「それでもしシュケムが倒れれば、左右の大陸の均衡が崩れ、聖地にも危険が及ぶことになる」

「なるほど……」

アーディンの表向きな言葉ももちろんだが、その裏に別の思惑があることをコースフは感じ取つた。そして、若き皇帝のサーリムは自分の命と姉の身の安全を願つてゐるだけだつた。

「どうか私と姉を助けてください」

言いながらサーリムは頭を低くした。傍に居た老文官も、皇帝の行為に何も言わなかつた。

「不肖ながら私で宜しければ、謹んでお受けいたします」

コースフは一分も迷つことなく強い口調で答えた。

\* \* \* \*

砂漠の中を、四頭の馬が粉砂を巻き上げながら東へと向かつてい  
た。頭上の空は茜色から勝色へと変化しつつあり、東の空には星が

ちらつき始めていた。一つだけ赤く煌く星が、進行方向を指し示してくれていた。

ウバイド皇国からの帰途、馬上で兄弟の会話が交わされる。アーディンはターバンの砂避けを指で顎まで引き下げる、コースフに話しかけた。

「兄上。お気付きでしょうが、サーリム帝は現在ほどんど実權を持つていません。宰相ワジルとなれば実質あの国を動かすことになります」

「ああ……。皇帝はまだ若いのに、身体が芳しくないようだな」

コースフの声は砂避けを介して少し聞き取りにくかった。

「それにしても、あの似非宦官、厭わしいな……」

コースフはわずかの滞在の間に、いざれ自分の敵となる人物の目星をつけっていたようだった。

「さすが、勘が良いですね。彼が黒幕の一人です。黒人奴隸軍を操つているのも彼です。それに……」

アーディンは言葉を止め、隣のコースフを見やった。数日前自分がつけた顔の傷の所為か、右目の中の表情が少し辛そうに見えた。

「……ですが、兄上があの話を素直にお受けになるとは思いませんでした。いつも面倒くさいことは私に全部押し付けていたのに」

アーディンは権威や地位に縛られるこことを嫌うコースフが、まさかサーリムの申し出をこつも簡単に受諾するとは思っておらず、今

更驚きを顔に表した。

「そのために俺を同行させたんじゃないのか？」

コースフに見抜かれ、アーディンは淡々と答えた。

「……そうです。皇族の若年化と代官の老齢化があの国の問題を引き起こしているのです。中堅の宦官の暴挙を抑えられないでいる。その点、じき三十路になる兄上なら若すぎず、老いすぎず、宰相として身分も実力も申し分ない。私ではまだ年端が足りないでしょうから」

コースフを護衛として同行させるといつ時点で、コースフはアーディンに何か目的がある事に気が付いていたに違いない。そしてコースフが自分の頼みを断れるはずがないということも、アーディンは計算の上だった。

「シャーミール姫はお前の事を良く見知っていたみたいじゃないか」

シャーミールのアーディンに対する淡い恋心を、コースフが見抜くことも分かつていたことだつた。

「彼女が巡礼に来られる度にお会いしてました。ただそれだけですよ」

アーディンはシャーミールとの関係にそれ以上触れず、コースフもそれ以上何も聞いてこなかつた。

女の為に取つた行動が、結果としてその女と結ばれなくなる事など、主情を捨てて生きてきた一人には大したことではなかつた。

「まったく。兄さんは本当に勘が良いですね。やはり、先に話しておかなくて正解でした。昔から、私の事となると急に甘くなるのだから、あやつて断られるところだった」

「いや、そんな事はない。今回の件、お膳立てしてくれたお前に感謝してる。……俺は、お前のためじゃなく、結局何に対しても自分のためにしか行動できないんだ。お前にはいつも申し訳ないと思つてゐる」

コースフの言葉に、自分の思惑通り事を運んだはずのアーディンは不思議そうに兄を見た。

「俺がウバайдの宰相ワジルになれば、シュケムの王位繼承権は剥奪されるはずだ。それなら伯父上も納得するだらうし、親父が死んだらお前がシュケムの王になる」

「やはりそんなことを考えていたんですね」

アーディンは呆れたようにため息を漏らした。今までアーディンがどんなに尽力しても、父親と兄の間を取り持つことは出来なかつた。

「これでようやく親父の呪縛から逃れられる

コースフはさう言つたが、この時アーディンはコースフがサライの為に行動を起こし始めたのではないかと感づいた。

「兄さん、もう一人お忘れです。きっと義姉さんの呪縛からは逃れませんよ」

アーディンが厭味っぽく嗤つて、コースフもようやく肩の緊張をほぐして溜息をついた。

「エイダはお前が寝取つてやつてくれ。気はきついがいい女だぞ」「……冗談はほどほどにしてください。皇国の宰相の妻なら義姉さんもきっと満足するでしょう」

二人で冗談を言いながらも、アーディンは、田的のために兄はいざれ父にも手をかけるのではないかとうすすめを感じ始めていた。そして、コースフは聖地オス・ローを手中に納めようとしているということを、この時予感した。

オス・ローを落とすのは簡単だ。

だが、そうなればフロリスの大國ヴァロニアやシーランドが侵攻して来ることは間違いない。シュケムの軍事力だけではフロリスの軍隊に太刀打ちできないことをコースフは理解していた。それを迎え撃つだけの兵力が必要だった。

コースフは決して手に入れることが出来ない【ハグラの民】を手

に入る為、聖地の概念を覆すような何かを引き起こそうとしているのではないかと思ったが、アーディンはその言葉を飲み込んだ。

一行の馬が通った後には砂埃が舞い上がり、その姿も話し声もかき消していく。

## 【悪魔】ラース

一年の中に四季の無いオス・ローは時間の流れが緩やかなのに比べ、ウバيد皇国では微かな変化を見せる自然がまるで生き急ぐように時間を追い立てる。

コースフとアーディンがウバيد皇国から帰つてから、早くも七ヶ月が過ぎようとしていた。

その頃、29歳になつていたコースフは皇女シャーミールを妻に迎え、正式にウバيد皇国<sup>ワジル</sup>の宰相となりアル・ワジル・コースフ・アル・ウバيدを名乗るようになった。皇国の宰相兼軍司令官として住処をウバيد皇国の宮廷内に移していた。

そしてこの時、コースフはエブラ信仰からモ里斯信仰へと改宗していた。

所用でシュケムに戻ることになったコースフは、そのままオス・ローまで足を伸ばし、久しぶりに一人で自分の家を訪れた。

初夏の時間、変わることなく麓の広場は多くの人が行き交い活気に溢れていた。コースフは石畳の大通りを、巡礼に向かう人の波に乗つて坂道を上つていった。

ドーム城下は、軒と軒の間に布が張り廻らされ太陽の熱を遮る。日の高く上る時間でも、その影に入々は屯し、立ち話や、時に座り込んで話していた。その様子を見ると不思議と懐かしい感じがして心が安らいだ。

途中で一人脇道に入り、自宅のある方へと流れを抜け出した。

扉を開けて家に入つても今はもう誰も居ない。当然ながら、扉のすぐ横にある水瓶も干上がつたままで、この家には長い間主がいないうことを物語つていた。奴隸達はコースフがウバيد皇国に行く際に、十分な金品を与え全員解放してやつた。

ふと、懐かしい家の匂いと共に、「おかえり!」と無邪気に微笑むサライの幼い顔がコースフの頭をよぎった。

部屋は元奴隸のアブドがたまに訪れて、いつでも使える様に整えてくれていた。皇国へ行つてからというもの、常に誰かと行動を供にしていたので、久しぶりに煩わしさから解放された気分だった。

数ヶ月しか経っていないのに、自分の部屋もベッドも随分粗末に見えた。この狭いベッドでよく一人も寝れたものだと思った。

まだ日も高かつたが、コースフは久しぶりに自分のベッドに身体を横たえた。低い天井を仰ぎながら、サライのことを思い出した。

あの後、多忙のまま時が過ぎサライとは一度も会えていない。サライに何も告げないまま、このオス・ローの家を出る事になってしまったのだ。

最後に見たサライの表情を思い出し、あの時サライが何を思つて

いたのか考え出すと、サラの事が頭から離れなかつた。

会いたい……

あの【壁】の向こう側から、サラを連れ去つてしまおつか……

そんな風に思つたのは初めてだつた。

どうやらコースフはうたた寝をしてしまつたようだつた。随分長い時間寝ていたのか、気が付くともう口が傾き始めていた。

ちょうど巡礼者達が宿に戻る時間帯なのだろうか、少し表の通りが騒がしかつた。大通りから少し逸れた家の中にまで外の喧騒が届いた。

コースフが表へ出でみると、丘の方から騒ぎながら帰つてくる者と、騒ぎを聞きつけて丘を登つていく者達で大通りはひつた返し、いつもと何か様子が違つた。

人々は口々に「悪魔が現れた」というよつな事を言つて騒いでいた。

(悪魔……?)

秋色の空の下、コースフは数年ぶりに丘の上のドームを手指した。

怯えるように丘を下つて帰る者逆行しながら石畳の丘を登つていくと、徐々にドームの門【天国の扉】が見えてくる。

【天国の扉】の前には、まるで弔いの儀式が行われる時のような人垣が出来ていた。

だが、弔いの儀式は真夏の時間に行われるはずだ。そしてその美しい儀式を眺める観衆たちは声が出せず静まり返っているはず。ザワザワとせわめぐ声と異様な雰囲気が不安を駆り立てるようだった。

人垣を搔き分け前に進み出たコースフの目に信じられない光景が飛び込んできた。

そこには背の低い磔柱が立てられ、【エブラの民】の女が磔になつている。白い服の裾の方が紅く染まり、鮮やかな濃淡を成していた。

それを見た瞬間、コースフの心臓が早鐘を撞くように鳴った。

女の首は力なく頸垂れ、長い髪が顔を遮っていたが、その髪も、腕も、身体も、足も、全てがコースフの記憶にあるものだった。

「サライー！」

コースフは人を押し退けて磔柱の真正面まで駆け寄った。

そしてサラライの両手首と胴体を縛っている綱を切ろうとした。すると周りにいた男達がコースフにすがり付いてそれを止めた。

「やめろー。これは【エブリの民】の所業なんだ！ 何か意味があるはずだー！」

「さつき悪魔が現れてその【エブリの民】と話していたんだぞー！」

口々に投げかけられたが、コースフは男達を振り払い構わず綱を切りサラライの身体を抱きとめた。

「呪われちまえー！」

制止を聞かなかつたコースフに汚い言葉を吐くと、男達は逃げるよつにその場を去つていった。

空が茜色に染まり秋氣に包まる中、まだ野次馬でコースフを遠くから眺めている者もいれば、丘を下つて逃げていつた者もいた。

コースフによつて捕縛から解放されたサラライはまだ息があつた。地にサラライをそつと下ろす。

「サラライー！」

コースフが呼びかけると、サラライは目を虚ろに開いた。

「コースフ……、『めんね……』

サラライの董色の瞳がコースフを見つめていた。

「……もう、会えないって……思ったの……」

サライの瞳から涙が耳に向かつて流れ落ちた。

「……お願い、助けて」

「必ず助けてやるから喋るな」

「……わたし……、【Hブリ】を助けて……」

最期の力を振り絞つてサライはコースフに向か伝えようとしていた。

「……、【Hブリ】……、ラースと……」

サライの声はますます小さく、聞き取りにくくなつていった。

その時。

サライがその名を口にした時だった。

辺りが一瞬にして真っ暗になった。

すぐ前にあるはずの【天国の扉】さえ見えなくなつた。

壁など存在しないはずなのに、歩けば踵が反響しそうな、そんな閉塞感が辺りを取り巻いている。

コースフは一瞬、自分が盲してしまつたかと思った。

ユースフがサライを抱いたまま顔を上げると、一人の男が静かに傍らに立っていた。

真っ白な肌に金色の髪、翠色の目をした、この世のものとは思えない美しい男だった。暗闇の中でも男の金色の髪は明るく輝いていた。力強く萌える樹木のような色の翠の目に、吸い込まれそうな錯覚を覚えた。

だが、その男の瞳にユースフは全く映らず、サライの姿だけが映つていた。

『アルフュラツの娘よ』

男の声は直接頭の中に聞こえてきた。

『二つ目の魂を預かりにきた』

「ラース・アル・グフル……」

ユースフの腕の中に居たサライが先ほどよりもはつきりと答えた。

『さあ、望みを申せ』

ユースフは男に圧倒されて声が出なかつた。

『……わたしの望みはユースフにしか叶えられないよ……』

ラースと呼ばれた男は黙つてユースフにすがりつくサライを見つめていた。

サライはラースを無視し、瞳を潤ませながらユースフに語りかけた。

「コースフ……、キスして……」

サライの腕がコースフの頭を包み込んだが、コースフは軽く脣を重ねただけだった。

「違つよ、あの時みたいに……」

コースフは照れくさうに微笑んで言つサライを抱き寄せると、サライの望むとおりのキスをしてやった。

いつの間にかラースと呼ばれた男は居なくなっていた。  
ちゃんと周りの風景も見えていた。

そして、コースフの腕の中ではサライが息絶えていた。

\* \* \* \*

コースフのベッドの上でサライは眠っていた。

【Hグラフ】の白い衣服を脱ぎ、オス・ローの女達と同じ服を

着て眠っている。

ユースフはその傍らに椅子に座つて伏せていた。 昨夜から夜が明けても、何時間もずっとそのまま動けないでいた。

ユースフはサラの言葉を思い出した。

【エブラの民】は死を迎えると、灰になり、地に帰る。天国は地にあり、地獄はこの世界だと教えてくれた。

そしてサラは天国の地に帰ることは許されず、磔柱に括られ、地獄に晒された。

地獄に晒されるほどどの罪をサラに負わせたのは、ユースフだった。

\* \* \* \*

夕方、ハザンがユースフのもとを訪れた。

心配して来ていたアブドにユースフの部屋へと案内されたハザンは、ベッドの傍らに伏せているユースフの背中を見て溜息を漏らした。 そしてベッドに横たえられたサラの姿を見て頭を横に振った。

「なんと……。 大罪を背負つたものだな……、ユースフ。 彼女のた

めに祈りつ

ハザンがそう言つと、今まで動かなかつたコースフが突然立ち上がり怒鳴つた。

「やめろ！ 一体何に祈るつて言うんだ！ 神か？ 悪魔か？」

感情を剥き出しにするコースフにハザンは黙り、コースフはハザンに背を向けた。

「コースフ……、実は私も昨日【天国の扉】の前に居たんだ」

そう言つて、振り向かないコースフの背に向かつて話し続けた。

「悪魔は一度現れたんだよ。お前さんがドームに来るより前にも悪魔は現れて、その場に居た全員がそれを目撃したんだ……」

「悪魔……？」

コースフが振り返つた。

「……ラース・アル・グフル……？ あの男は【悪魔】……なのか？」

「おそらく皆そう思つているさ。その悪魔が、彼女に向かつて言つたんだ。『大切なものと引き換えに望みを叶える』と……」

コースフが居た時にもラースはサライに『望みを申せ』と言つていた。

「彼女は何も言わなかつたよ。だが、悪魔は一人話し続けて、【エブラの民】に呪いをかけると言つと消えていった……」

「【エブラの民】を呪う……？」

昨日のサライの今際の言葉が蘇る。助けて欲しいのは【エブラの民】にかかった呪いの事なのだろうか。

「私に手伝えることがあつたらいつでも言つてくれ。力にならう」

「帰つてくれ……」

そう言つだけで今は精一杯だつた。考へが上手くまとまらない。

「ユースフ、アリシャから聞いたよ。こんな時に何だが、皇國のワジルになったそうだな。素晴らしい昇進だ、おめでとう」

そう言つて、ハザンは帰つていつた。

部屋に一人残つたユースフは、眠り続けるサライの頬にそつと触れた。サライの身体は冷え切つて、温かさは伝わつてこない。

重ねて置いたサライの手の下の膨らんだ腹が目に留まつた。通常とは全く違う、大きく膨らんだ腹は、失われた命は一つだけではなかったことを物語つっていた。

この七ヶ月の間、子を宿したサライは一体どんな想いで過ぎて  
いたのだろうか……。

この小さい命を喜んだのだろうか？

一人悩み苦しんだのだろうか？

助けを求めてユースフの所に来たのではないか？

その時この無人の家を見てショックを受けたのではないか？

サライのことを知りうとしなかつたユースフには、サライがあの  
ドームの【壁】の中で、何を思いどんな生活をしていたのかさえ到底  
思い及ばなかつた。

「……呪うなら、俺を呪えればいい……」

ユースフは唇を噛み一人呟いた。

サライが死んだと言つのに、涙は一滴も出なかつた。



## ファーリークの【H】

ファーリーク皇国のお都サンドラの皇宮で、リューシャが献身的に看病を続ける中、ハリーファは高熱を伴つて深い記憶の夢の中を彷徨い続けていた。何度も熱が下がり一時快方に向かつたが、落ち着いたと思った頃に再び熱を出しては床に伏せついていた。

リューシャが水を含ませた布をハリーファの額に乗せると、ハリーファは苦しそうにうわ言を呟いた。

「…………ライ、…………サライ…………」

ハリーファのうわ言を聞いてリューシャは一人苦笑した。

『お母様のお名前の次は、伝承者エブラの妻の御名なのね。わたくしの名前は呼んでもらえないのかしら……』

「…………！」

頭の中に直接声が聞こえ、ハリーファは突如飛び上がるよう上体を起こした。息をするたび苦しそうに肩が上下し、翡翠色の目を見開き部屋の中を見回した。

「」がファーリーク皇国のお宮である事は理解できた。比較的小く、質素な部屋ではあるが見覚えはある部屋だった。

「大丈夫ですか？ ハリーファ様？」

覗き込んで声を掛けてくるココーシャを、ハリーファはじつと見つめた。

「…………

名前が出てこなかつた。夢で見た沢山の男の記憶と現実が混乱して、ハリーファは目の前に居る金色の髪の女奴隸の名前が思い出せなかつた。

「ハリーファ様、お薬をお持ちしますわ」

リューシャはさういふと部屋を出て行つた。

ハリーファは自分の手のひらをじっと見つめ、その後顔に手をあて自分の姿を確認した。

「ハリーファ…………？」

独り、小さな声で呟いた。

「これは現実なのか…………？」

今度は夢ではなく現実の名前だと実感するのに、少し時間がかかつた。

（俺は生まれ変わったのか？　一体何回目なんだ……これは……）

どこか見覚えのある壁や天井を眺めながら、またサンンドラにある富庭に連れて来られたのだと思い込んでいた。

「ハリーファ様、お召し替えもなさいますか？ 隨分汗を……、あ  
ら

リューシャが熱冷ましの薬を準備し、水を注いだピッチャーとグラスを盆に乗せハリーファの部屋に戻る頃には、ハリーファは再び眠りに落ちていた。

ハリーファが見ていた夢は、ある男の記憶だった。

。 。 \* : . 。 \* . 。 \* . 。 \* . 。 \* .

ハリーファは馬上から聖地オス・ローの空を見上げていた。

日が傾き始め青空は東から少しづつ茜色に染まり、頬に触れる空気は少し冷たくなってきていた。

オス・ロー麓の石置の広場は、宿に戻る前の巡礼者で溢れかえっていた。

その雑踏の中を人を避けながらゆっくりと馬に跨つたまま坂道を上ると、途中の共同の厩舎に馬を預けた。

通りに戻ると乱れた外套をばさつと大きく翻してかけなおした。坂を下る巡礼者とは逆に徒步で坂を上つていった。

ドームに程近い高所得層の住む地区にある家の扉を開ける。中から暖かい空気が表に流れ出した。

「おかえり！」

扉を開けると、黒い肌の少女が満面の笑みを見せてハリーファを迎え入れてくれる。

「おかれりなさい！」  
「コースフ

•  
◦  
• \*  
• :  
◦  
•  
◦  
• : \*  
◦  
◦  
• \* :  
◦  
•  
◦  
• : \*  
◦

夢の中の少女に過去の名を呼ばれ、ハリーファの意識はユースフへと変わつていつた。

## ユースフの死

サライの死後、ユースフはウバイド皇国に戻り、宮廷内で勢力を振るつていた黒人宦官ムータミンを殺害、その奴隸軍兵を撃破し、シュケムの国制を導入や体制の切り替えを行った。そして確実に政権を固めていった。

四年後、ウバイド皇帝サーリムが20歳で病死した。

この時、ユースフにはエイダとの間に第一子アフタルが生まれたが、シャーミールとの間にウバイド皇家の血を引く子供は生まれていなかつた。

結果ウバイド皇国は跡継ぎのないまま終焉を迎えた。

この年、ウバイド皇国に代わつて、ファールーク皇国がアル・マリク・ユースフの名の下に成立する。

ユースフはシュケムの君主とその従兄妹である妻エイダの為に、シュケム王国に臣従するという形式でファールーク皇國の王マリクを称した。

ユースフ・アル・ファールークは、アル・マリク・アル・ファールークと名乗るよつになつた。

翌年、シュケムでは王が崩御し、ユースフの父ファールークがシュケムの王となつたが、後を追つよつにファールークが急逝した。

それを機に、モ里斯の大國ファーリーク皇国が中央の小国シュケムを取り込んだ。ユースフがファーリーク皇国の実権を握り、弟アーディンを宰相に迎えた。

この年にユースフとシャーミールの間に長女メイサが誕生した。

ウバイド皇国と、中央の地にあつたシユケムという小国は、相次いで地図と歴史上から姿を消した。

\* \* \* \*

さらに歳月が過ぎユースフが五十路になる頃、聖地オス・ローにヴァロニア・シーランドの連合軍が侵攻して來た。

ユースフ率いるファーリーク軍はこれを擊破し、今まで独立していた聖地オス・ローは事実上ファーリーク皇国の中となつた。

晩年のユースフは、皇都サンドラの事はアーディンに任せ、戦線だつたオス・ロー近くのシユケムに居を構えていた。

シュケムの住民たちは大陸方面に移動し、シュケムは今ではファーリーク皇国の対フロリスの軍事拠点となっていた。

中央の地の北方にあるシュケムの宮殿は、ウバайд皇国の遺産であるファーリークの宮廷に比べると非常に質素な造りだった。切り出した石と干しレンガで出来た清貧な城には無駄な装飾などは何一つ無かつた。

ほとんどの部屋の中には、ただ寝るためのベッドとものを書くための小さな机と椅子が一組あるだけで、他には何もなかつた。

そのシュケムの元宮殿で、55歳になつたコースフは病床に伏していた。

オス・ローがファーリーク皇国の人となつた頃から、コースフの身体は病魔に冒されていた。

自分の呼気が喉を通る嫌な音が、やたらと耳についた。

コースフはベッドに身体を横たえ目を閉じてはいたが、その音が頭の奥に響き眠っているのか起きているのか自分でもわからなくなつていた。

医師以外の者がコースフの病に気づかぬよつこと、一〇〇六年間コースフは気丈に振舞つていた。だがそれも限界で、とうとう最期の時が近づいたようだつた。

おそらく医者が気遣つたのか、数日前に皇都からアーディンとコ

ースフの一人娘のメイサが呼び寄せられていた。

今まで薬草で紛らわしてきた身体の痛みが、不思議と今晩は感じられなかつた。だがもう身体を自分の意思で動かすことが出来なくなつていた。

空はすっかり勝色に染まり星がちらついていた。

土色の質素な宮殿の、君主の私室に取り付けられた大きな硝子の窓からもその様子が見えた。

ベッドの横に置いてあるオイルランプの灯りが微かに揺れ、ベッドの傍らから窓辺へと歩く女の影が壁に映つた。

「お父様、窓は閉めておきますね。新月の夜は神魔(ジン)が現れると言いますから」

モリスにある皇都と違い、中央の地は夜になると冷えて昼夜の寒暖差が激しく、病床のコースフの身体には堪える。コースフの長女であるメイサは開け放たれたまま忘れられていた窓を閉め、中央の小さな門をかけた。

娘のメイサはちょうど結婚した頃のシャーミールと同じ年頃になり、母親に良く似ていた。モリス信仰の成人年齢である12歳を迎えたアーディンの息子ナーシルと数ヶ月前に結婚したところだつた。

メイサはベッドの傍に戻つてみると、猫のような魅惑的な漆黒の瞳でコースフを見つめた。

「メイサ、新妻が夫をおいてこんなところに来ていいのか？」

コースフが言つと、メイサは明るく微笑んで言つた。

「叔父様まで皇都を離れてこちらに来ているんですもの。わたくしの可愛い君主様は、アフダル兄様と一緒に皇都でお留守番です」

「そうか」

コースフは自分の経験からか、長男アフダルを始め他の息子たちと上手く父子関係を結ぶことが出来なかつた。メイサは気を遣つて誤魔化したのだろうが、だからこそ今自分の傍に息子たちの姿は無いのだと悟つた。マリクの継承権をアーディンの次席は、嫡子のアフダルではなくアーディンの息子ナーシルにしたことにも腹を立てたのだろう。

「お父様、ゆつくりお休みになつて」

メイサはそう言ってベッドに横たわつたコースフにキスすると、部屋を出て行つた。

コースフが目を閉じると、瞼の裏に光る大地が映つた。

そこに白い衣装を纏つた無表情なサライト居て、両手から零れ落とすように灰を撒いている。サライトの足元に落ちた灰はそこだけは光らず、くすんだ影がサライトの足元に広がつていた。まるで何かを暗示するかのように。

「Jの幻覚は自分の弔いなのかとコースフは思った。

扉をノックする音に、幻想的な映像はコースフの脳裏から消えた。扉を開けてアーディンが入ってきた。ベッドの横まで来てコースフに話しかけた。

「兄さん、 具合はどうですか？」

「ああ、 最悪だ」

「昨日よりは元気なようですね」

どこか寂しげに微笑むアーディンの顔が、先程のメイサの顔とダブつた。

「俺は【エブラの民】に送られたいのに、お前たちが次々見送りに来る」

「六年前のフロリスの侵攻以来、【エブラの民】は一度も【天国の扉】を開けていませんからね……」

【エブラの民】は外界との扉を閉ざしてしまったのだろう。

アーディンはベッドの横にあった椅子に腰掛け、横にあるランプの灯を調節し少し大きくした。

「アーディン、 俺は償えただろうか」

「…………わかりません。ですが償い切れなかつたなら、アービツ 来世で償えれば  
善いのです」

コースフは自分の死期を悟っていたつもりだつたが、アーディンの答えからそれがもう間近なのだと確信した。

「お前の信仰はエブラなのかモリスなのかわからな……」

「私の信仰は兄さん、貴方ですよ」

「……俺はお前を救済するどころか劫罰を課した」

「謝罪は兄さんの信じる神にすればいい。扉の向こうで……サライが迎えくれますよ」

アーディンは26年間、一度も出してこなかつたサライの名前を初めて口に出した。コースフは何も答えず、二人の間にしばらく沈黙が続いた。

「俺はサライには会えない…………」

しばらくしてコースフがそう呟いた。

「【エブラの民】を助けるとサライと約束をした

「フロリスの侵攻からオス・ローを守つたではないですか」

だがコースフには、サライがそんなことをコースフに頼んだようには思えなかつた。

六年前のフロリスとの戦いでは、戦場となつたオス・ローの街は大

きな被害を受け半分以上が崩れ落ちてしまった。城下は少しづつ復興しつつあったが、フロリスから国境を越えることは禁じられ、巡礼者も訪れなくなつた。

そして、【エブラの民】が【天国の扉】を開けて外に出てくることはなくなつてしまつた。

【エブラの民】を呪う……伝え聞いた【悪魔】の言葉が常にユースフの頭から離れなかつた。死を目前にして、ユースフの心に残ることは【エブラの民】とサライの言葉だつた。

「もう下がってくれ」

アーディンは素直に従い、静かに部屋を後にした。

深夜、誰も居なくなつたユースフの居る部屋を微かに流れていた風が止まつた。

それは窓が閉められたからだけではなく、つるやくほどどの静寂が辺りを包み込んでいる。

部屋の中にいつの間にか男が現れ、ユースフの枕元へと近づいてきた。

その男は不気味なほど真っ黒な服を身に纏ついていた。だが、透き通るような真白な肌、明るい金色の髪、吸い込まれそうな翡翠色の瞳を持つその姿は、まるで美しい天使を思わせた。

男はベッドの傍らに腰を掛け、不思議な笑みを浮かべてユースフを眺めていた。

ユースフの心に過去の出来事が次々と浮かび上がった。

聖地、サライ、【エブラの民】、呪い、皇國。王となり、オス・ローを手に入れても、サライとの約束は果たせていない。

### 【エブラの民】を助けて

そう言つたサライの本当の気持ちが分からぬままだった。

『ふふつ、欲望だらけだね。人間らしくていいな』

「……ラース……来たのか……」

かすれた声でユースフが男の名を呼んだ。

『しゃべらなくともいいよ、僕は心の中が読めるから』

ユースフは目を開けて枕元に居る男の姿を見た。【悪魔】に年齢など関係ないのだろうが、サライが死んだ時に見た姿より若干若く見える。だが、その容姿は変わらず美しかつた。暗闇の中でも金色の髪は光のような明るい輝きを放ち、翠色の瞳は力強く萌える樹木を思わせた。

『ああ！　あの娘、覚えてるよ。命を一つ持っていたね』

コースフの中にサラライの今際の姿を見たようで、ラースは饒舌になった。時折一人でくつくつと笑う。

『【アルフェラツの子】に呪詛させるなんて。人の想いは本当に恐ろしいね』

『アル・フェラツ……？』

『ああ、人間は【エブラの民】って言ってるんだっけ』

コースフの心の声にラースは答えた。

『教えてくれ、サラライの、【エブラの民】の呪いとは何なんだ……』

『あの場に居たのに、あの娘の心はあんたに伝わらなかつたんだね。人間は本当に不便だな』

ラースの表情は心なしか冷ややかになり、コースフを睨みつけていた。

『あの娘はエブラの血に苦痛を与えた。【エブラの民】はやがて滅びる』

『なぜそんなことを……？』

『【エブラの民】が混血を認めなかつたからだよ。そりゃあ、あの娘もただの人だから怨みもあるだろう。僕はそういう自我は大好きなんだ。それこそ人間の美しさだ』

と、ラースはつづきとした表情を見せた。

ただの人 、といつ葉がコースフに压し掛かる。【エブラの民】は自分とは違う神聖な存在だと信じ、サライと自分の間にあつた心の【壁】を壊せないままだった。

サライは腹の子を殺され、【エブラの民】を怨んで呪いをかけたというのだろうか……。過ちを犯したのは、律を破ったコースフとサライだといつ葉に。

『そんなどから、あの娘の心が分からぬんだよ』

コースフの心の葛藤を聞いて、ラースは楽しそうに笑みを浮かべていた。

『まあ、女を理解しようなんて男には絶対無理だろしけどね』

ラースは楽しそうに足を揺らした。

『ああ、そうだー』

コースフはどこからか細かい装飾の施された腕輪を出すと、コースフの右腕にはめた。

『これはあなたに返しておこうかな。その方が楽しくなりそうだ』

それはコースフにとつて見覚えのある腕輪だった。【エブラの民】が門を出て弔いの儀式を行つ際、先頭に立つ男の右腕にはめられていたものだった。

『これは、あの娘の望みを叶える代わりに貰つた物だよ』

『この腕輪は【エブラの民】の長の物……！ なんてことを…』

ラースは挑発的な笑みでユースフを見つめた。

ユースフはショックで咽て、激しく咳き込み、胸元が真っ黒に染

まつた。

『もうあなたの身体が限界みたいだね』

ラースがベッドから立ち上がった時、ユースフの部屋の扉を激しく叩く音がした。部屋の主の返事を待たずに扉が開けられた。

「兄さん？ 大丈夫ですか？」

瞬間、部屋の中は不気味な閉塞感と、盲しいかと思わせる闇が辺りを取り巻いた。

ラースの瞳にアーディンは全く映らず、ユースフの姿だけが映っていた。頭に聞こえてくる口調が先程までとうつて変わり、表情は微かに冷たい微笑を湛えていた。

それは、初めてラースを見たあの時と同じだった。サライが死んだ、あの時と。

『ユースフ・アル・ファールークよ、お前の望みを叶えよう』

「ラース・アル・グフル……」

『さあ、望みを申せ』

「私は……すぐに、生まれ直したい」

自分の死期を悟った頃からコースフはずっと考えていたのだ。今生では果たせなかつた事を成す為にどうしたら良いのか。

その時浮かんだのは、若い頃に自分の罪悪を許してくれたアーディンの言葉だつた。

一生かけても償えないなら、何度でも生まれ変わつて

『サライとの約束を果さなくては……』

ラースはにやつとした。自我に溢れた人間を見るのが実に愉快そうだった。

『いいだろ？ 但し、私はアルフュラツのよつに命を『えん』ことはできない。だから、新しく生まれた命の中にお前の記憶を埋めてやるよ』

その代わり、生まれ変わつても女に子供を生ませてはならない。決して生に関わるな』

その言葉を最期に、【悪魔】とコースフの魂は姿を消した。

コースフの急変を感じて扉を開けたアーディンは、目前の光景に言葉を失った。

アーディンが見たものは真っ暗な空間と、そこに浮かび上がる美しい【悪魔】と兄コースフの今際の姿だった。

\* \* \* \*

コースフの死後、ファールーク皇国の王はアーディンが、宰相はその長男ナーシルが勤めていた。

最高司令官を失ったファールークの軍事力は落ち、一度ファールークのものとなつた聖地オス・ローは、シーランド軍によつて制圧され奪われた。

シーランド王国に奪われたオス・ローを取り戻す為に、コースフの時と同様、アーディンは皇都を息子に任せ自ら戦艦の下に身を置いた。

そしてコースフの死から18年後。

コースフを失つて以来、弱体化の一途を辿つていたファールーク軍だが、とうとう聖地オス・ローをシーランド軍から奪還する

悲願を成し遂げた。

アーディンは老齢とは思えぬ健脚さでオス・ローの瓦礫の中を歩いていた。

かつての活気に溢れていたオス・ローの街は見る影も無い。建物はほとんど崩れ落ち、日を遮る物は何もなくなっていた。真夏の時間、太陽が容赦なく頭上に降りそそいだ。

数日前にシーランド軍が撤退し明け渡されたオス・ローには、まだ生々しく戦いの痕があり、あちこちで小さな煙が立ち上っていた。

「アル・マリク、いらっしゃず」

少し先を歩く案内人が、アーディンをファーリークの奴隸軍がいる場所へと案内してくれた。むせ返りそうな匂いがたちこめ時折咳払いをしながら、ドームのある方へと足場の悪い道を上つていった。

アーディンは今回の戦いも敗退を余儀なくされると計算していた。今回の勝利は奇跡的な誤算であったが、不思議な噂を耳にしたのだ。

奴隸の一兵が戦いを勝利に導いたのだと。  
その奴隸兵の右頬に傷痕があつた。

（まさかとは思うが……。だが、もしそうなのだとしても『あの人』が自ら名乗り出でてくる訳がないだろうな）

途中、地べたに座り込んで何かの作業をしている黒人奴隸兵達は、通り過ぎるアーディンを自國の王の顔は知らなくとも、その出で立ちから明らかに高貴な人物だと判つたようだつた。アーディンが通り過ぎると、皆の視線はその老王の背中を追つていた。

そのまま瓦礫の転がる坂道をずっと上つていくと、ドームを囲う城壁と【天国の扉】が見えた。さすがに象徴であるドームはシーランド軍の攻撃も免れたようだつた。その門前の広場にたくさん奴隸兵が屯していた。

「アシュラフ！」

案内人が叫ぶと、地べたに座つて話し込んでいた集団から一人の黒人奴隸兵が立ち上がつた。ターバンを撒いたその黒人奴隸兵は、案内人に手招きされ一人の近くに歩み寄つてきた。

青年と言うにはまだ少し歳若い黒人の奴隸兵だつた。白いターバンを頭に巻き、砂除けで顔を覆つっていた。漆黒の瞳がその隙間からアーディンを見据えていた。

騒がしくしていた奴隸兵たちは国王の姿に気が付くと口を閉じ、作業を止めて仲間の背中を見守つた。

「彼がアシュラフです、アル・マリク」

アシュラフは無言で敬礼した。それはシュケム式の敬礼であつた。

アーディンははたと思いついたかのよひ、同じよひにシユケムのやり方で敬礼して返した。

田の前に来た若い奴隸兵を、アーディンは思慮深げに眺めた。ターバンの隙間に見える黒い瞳に、見覚えのある憂愁を湛えていた。

「この度のオス・ローの解放、『貴殿』の活躍あつてのものだつたと聞いている」

案内人がアシュラフの耳の横で「アル・マリクだ、布を外せ」と言つと、兵士は首の後ろに手を回し鼻と口を覆つっていた砂避けを外した。

「……なんでも褒美を取らせよう

何も言わず真っ直ぐにアーディンを見据える兵士の顔を見て、アーディンの声が微かに震えた。

「申すがいい

「では、自由を」

そう答える黒人兵士の右頬に、かつて自分が聖裁と言ってユースフに切りつけた太刀筋と全く同じ傷痕があつた。



## ファーリーク皇国 皇子ハリーファ

ファーリーク皇国では新年を向かえてから、一月近く日が過ぎようとしていた。

井戸水の水位が最も高くなり、モ里斯の短い冬もこれから終わりに向かうことを知らせていた。

日が暮れかけた頃だった。

ハリーファが日を覚ましたのは皇都サンドラにある宮廷内で、ハリーファに囲まれていた部屋のベッドの上だった。

汗ばんだ身体を半分起こしてみると、高熱も治まつたようで身体が随分軽く感じられた。

ハリーファは長くうなされ続けた夢の中で、本宮ではない部屋で監禁され続けていたのを思い出した。

(リリは【日の間】じゃない……)

そして夢の中で、足に長い鎖の付いた枷を付けられていたことも思い出した。

恐る恐る、右足を引き摺るようにそっと動かしてみた。だが、夢の中の記憶のような重さも感じず、ジャラジャラと金属同士が擦れる嫌な音も聞こえなかつた。

(足枷も付いてない……)

ハリーファは砂色の壁に囲まれた部屋の中を見回した。

皇子の部屋としては随分質素な部屋だったが、ウバイド皇国時代から受け継いだ壮麗な本宮の中だとわかりハリーファは心底安堵した。

夢の合間には何度もリューシャの顔を見たが、珍しくリューシャが傍に居なかつた。

ハリーファはベッドから静かに下りると、ドアを開けて廊下を見渡した。今はおそらくモリス信仰者の夕方の祈りの時間なのだろう。窓の外から歌うような祈りの言葉が聞こえてくるが、廊下に人気は感じられなかつた。

ハリーファは上着を羽織り、女のように布を頭に被るとそつと部屋を抜け出した。

長い廊下を足音を立てないようにひた走る。

その途中、ある部屋の前でハリーファはふと足を停めた。この宮殿の中で最も良い位置にある部屋だったが、ハリーファが生まれる前からその扉は固く閉ざされ、一度も開けられたことはなかつた。その事を疑問に思つことも、理由を問うものも居なかつたが、ユースフの記憶が甦つた今その理由がわかつた。

ハリーファは、レリーフが彫られた重厚な扉にそつと手を触れ、そこに描かれた絵文字をなぞつた。

(ここはウバイド皇国最後の皇帝の部屋だ……)

この部屋の前でシャーミールと再会した記憶も鮮明に甦る。ウバイド皇國の最後の一人となつたシャーミールの為に、この部屋の扉はユースフ自身が閉ざしたのだった。

ハリーファは感傷に浸る想いを振り払い、その扉の前から走り去つた。部屋を出て一度遠くなつた祈りの歌声が、また階下から響いて聞こえてきた。

ハリーファは人目に付かないよう本宮から抜け出ると、今まで行つた事もなかつた厩舎へと向かつた。

夕刻の祈りの時間であったことが幸いしたようだ。厩舎から馬を連れ出すと、祈りに勤しむ門番の目を盗み王宮から抜け出した。

城門を出ても市井の人々も祈りのために家に入っているようで、城下の通りにも人の姿は無かつた。この間に城下を抜けてしまおうとハリーファは急いで馬を走らせた。

城下街を抜けたところで一旦馬の速度を落とした。

目の前に広がるのはただ砂漠だが、オス・ローへ行く道のりは過去に何度も通つた道だ。目を閉じていても馬を操れそうな感覺に包まれた。粉砂の上を馬を駆る感覺が甦ってきた。

ハリーファは馬から下りると、帯を外して広げ馬の鼻革と頬革にくくりつけ、簡易に砂除けを作つてやつた。

そして自分も頭に被っていた布を使って鼻と口を塞ぐと、再び鎧に足をかけた。

後方に砂塵が巻き上がり、空気を砂色に混濁させていく。

奴隸兵アシュラフは、オス・ロー奪還の戦功を認められアーディンから異例とも言える『解放』の恩情を受けた。そしてその後は聖地の為にその身を捧げる事を誓い聖地復興に尽力していた。

だが解放された六年後、自由を約束してくれたアーディンが死ぬと、アシュラフはアーディンの子らによって捕らえられ、宮廷内の建物に監禁され自由を奪われてしまった。

聖地や【エブラの民】がその後どうなったのか全く分からぬ。サライとの約束さえ果たせていない。

自分の田で聖地や【エブラの民】がどうなっているのか確かめずにはいられなかつた。

ハリーファを乗せた馬は速足で聖地オス・ローを目指した。

\* \* \* \*

ハリーファは休むことなく馬を走らせ、一晩かけて砂漠を駆け抜けると中央の地に辿り着いた。

聖地オス・ローと呼ばれた廃墟に到着した時には、太陽は頭上を少し通り過ぎ、真夏の時間に差し掛かっていた。

一百年前、ユースフの死後一度シーランド王国に奪われたこの聖地オス・ローを、ファールーク皇國はアシュラフの活躍によつて奪還した。その時の戦いでオス・ロー城下の町は崩れ去つたのだ。

オス・ロー奪還後の六年間、アシュラフは町の復興に加わつてきただが、その時から街の崩壊具合はまったくと言つていよいほど変わっていなかつた。むしろ、何もせぬまま時が過ぎ、争いによる人的な破壊だけでなく、自然に風化倒壊した町並みはアシュラフが最後に見たオス・ローの町の風景よりさらに荒廃を進めていた。

その光景を見てハリーファは馬上で言葉を失つた。

軽い頭痛と嫌悪感に襲われ、下馬してこの土地に足を着きたくないとも思つた。ここは聖地だというのに……、そんな風に思う自分の心にも焦燥感が押し寄せた。

(ドームはどうなつたんだ。【Hブラの民】はまだここに居るのか  
……?)

【Hブラの民】の事を思うとハリーファの気持ちは急いた。古い記憶の町の風景を重ね合わせるように、瓦礫の中を手綱を握つてゆ

つくりと丘を登つていぐ。

熱さにこめかみに汗が幾筋も流れるのを感じたが、汗は頭に巻いている布に吸われていった。

真夏の時間は巡礼者がドームの【天国の扉】を訪れるピークであった。過去に一度だけ見た【エブラの民】の幻想的な弔いの儀式が行われる時間だった。

ドームの前まで辿り着くと、ハリーファはまたその光景に愕然とした。

城壁は崩れ落ち、【天国の扉】は柱しかその姿を留めていない。外界からの進入を阻むものは、そこにはもう何も無く、門の向こうに崩れた建物の姿が見えた。

今まで想像する事すら出来なかつたドームの内部が丸見えになつてゐる。もう【エブラの民】がここで生活していなことは明白だつた。

ハリーファは門前でよつやく馬から下りると、門のぎりぎりまで歩み寄つた。

弔いの儀式のとき以外に開けられることの無かつた石の扉が今は崩れて無い。記憶の中の石の扉に手を触れようと、掌を伸ばしたが、現実に扉は無く、差し出した掌は虚しく空を押しただけだった。

ハリーファは長い時間そこで立ち渴んでいた。

門柱を超えた向こう側に、ユースフが踏み入ることの出来なかつた領域が見えている。【天国の扉】がこんな状態の今でさえ、この門の跡を跨いで向こう側に入つて書いものか迷わずにはいられなかつた。

自分が何度も唾を飲み込む音が直接耳に響いた。頭に巻いていた布も随分汗が滲んで不快だつた。

どの位の時間が経つただろうか。

ハリーファは頭に被つていた布を外し足元に投げ捨てるど、内と外の境界であつた門の跡を超えてドームに足を踏み入れた。

## 【Hの闇】

一年中熱いファーリーク皇国にも四季がある。

皇都サンドラでは気温は年中同じ位で真夏には40度を越す暑気となる。

数キロ西に流れる川の支流が春の初めから夏の終わりまで干上がるため、下流の川の流れが無くなる。川がなくなる代わりに、所々に小さな水場が出来る。秋になると一気に水量が増した川は氾濫しそれが落ち着いた頃に冬が来る。

そんな変化に、砂漠の大陸モリスの人々は四季を感じて生活をしていた。

ファーリーク皇国の王宮は、周りをぐるりと城壁で囲まれた城砦になっていた。

その中に、本宮、後宮、礼拝堂、警備兵舎、倉庫、記録局、旅館と言った独立した建物が点在する。

土地柄、海岸沿いが高台になっているので、見晴らしの良い東の海側に本宮が建てられていた。その屋根を見上げると、東の大陸フローリスとは全く様式の違う丸い大きな屋根があり、槍のような尖つた塔が四方に建っている。その周りにはアーチ状の柱が規則的に並ぶ、開放的な回廊が巡らされていた。

そして、富廷の中には【王の間】と呼ばれる建物があった。

【王の間】とは皮肉で付けられた名称で、本宮の外に建てられた小さな館だった。

その小さな建物は周りをさうに鉄柵で囲まれ、窓にも鋳物の面格子がはめられている。

中から外が見えないようにしているのか、その周りには背の高い刃物のような葉の植物や、窓の格子を這うような薦植物が植えられていた。出入りの扉から間を置かず、同じ鋳物の門扉までつけられていた。

入り口を入れるとすぐの廊下に飲料水を汲んでおくための大きな水瓶が置いてあった。

少し奥に進むと扉のない部屋があり、そこは応接室になっていた。中央に長椅子が一台向かい合いつるように置かれ、椅子の大きさには合つていらない丸いテーブルも置かれていた。

応接室の奥に一枚戸の扉があり主寝室になっている。ベッドの横の壁には、まるでそこに何かを繋ぎとめておけるような大きな金具が打ち付けられていた。

廊下をさらに奥に進むと、奴隸が使うための小さな部屋まで作られていた。

砂色が基本の本宮とは違い、この館を作った土煉瓦の色は朱鷺色をしていた。全体に幾何学模様のタイルが装飾として施されており、長椅子やベッドなどの調度品も決して質素なものではない。

【王の間】だけは他の建造物とは建てられた時代が違うようで、人目を避けるように造られた館は、そこだけ明らかに異質だった。

\* \* \* \*

正午を過ぎた頃だった。

二ヶ月ほど、ハリーファが目覚めた時の光景はほとんど同じだ。ハリーファが田を開くと、リューシャが心配そうに覗き込んでいる。

そしてリューシャは優しく声を掛けながら、ハリーファの額に手を当てるのだが、今日のリューシャはハリーファの顔を見ても、眉根を寄せたまま手を差し伸べてこなかつた。

「ああ、良かった……。お気づきになられて」

ハリーファはそう言つて涙を流すリューシャの顔を見た。

リューシャの頭上に、茶色の焼煉瓦を埋め込まれた天井が見えた。少しゆるやかな円形を描く天井に、茶色の焼煉瓦で幾何学的な模様が描かれていた。

それを見た瞬間、ハリーファの顔が引きつった。後ずさるよつてベッドの上でもがき半身を起こした。

「…………」

「ハリーファ様？ もう大丈夫ですよ。」ヒは宫廷なのです

青褪めたハリーファを見てリューシャは安心させるように言葉を掛けてきたが、リューシャの後に見える朱鷺色の壁を見て、ハリーファはますます身を硬くした。

本宮の片隅にあつたハリーファの部屋より広く、壁にもタイルを使つて美しい幾何学模様の装飾が施されている。ここは夢の中で閉じ込められていた、嫌な記憶のある【王の間】と呼ばれる部屋だつた。

「聖地で……何か恐ろしい目に合われたのですか？」

横でリューシャが心配して声を掛けってきた。

「血まみれになつて、お戻りになられて……。わたくしの所為でこんなことに……。死んでしまったのかと思い生きた心地がしませんでしたわ……」

リューシャは、自分が目を放した隙にハリーファが居なくなつた事に深く責任を感じてゐるようだつた。

「ハリーファ様の為に、宰相様がすぐにお使いを出してくださつたのですよ」

オス・ローまで追つてきた兵士達の事なのだつた。

リューシャの美しい声を聞くつち、「ハリーファは少しずつ落ち着きを取り戻した。

【王の間】に連れ込まれてはいるが、足枷は付けられていない。それにリューシャがここに居ると言つことはまだ鍵も開いているはずだ。

「でも、どうして聖地なんかに向かわれたのですか？　わたくしが聖地の御話などお聞かせしたから……？」

よく見るとリューシャの頬が赤く腫れ、目の横は青茶色く変色している事にハリーファは気が付いた。父である宰相ジャファルの仕業だとすぐに察しがついた。あの男は、たとえ相手が自分の気に入りの女だろうと容赦ない。今までハリーファに何かあるとジャファルの怒りは乳母のリューシャに向けられていた。

だが、そんな事よりも、ハリーファは崩壊したドームや居なくなつた【エブラの民】の事が気になつて、傍で優しく語りかけるリューシャの言葉もハリーファの耳を素通りしてしまつていた。

何を問いかけてもハリーファが答えないでの、暫らくしてリューシャも何も言わなくなつた。

ハリーファが目を閉じてベッドに横たわつていると、眠つたと思つたのか、リューシャは考え方をしていくようだつた。

『本当にハリーファ様が御無事で良かつた……。ハリーファ様の身にもし万一千ことがあつたら、もうわたくしは宰相様の御傍には居られなくなる。そんなことは絶対あつてはならないわ……』

リューシャの心の中で呟く声が、ハリーファの頭に聞こえてきた。

人の心の声が、まるで普通の声のように聞こえてくる。それはハリーファが生まれ持つた、人智及ばぬ能力だった。

大小の格子を組み合わせた木枠の付いた窓から橙色の光が斜めに差し込み、もう時間が夕刻になつたことを知らせていた。

【王の間】の入り口でガチャリと大きな鍵を外す音が聞こえてハリーファは目を開けた。

漆黒の髪と目をした小麦色の肌の長身の男が、慄然たる態度でハリーファが寝かされている寝室まで入ってきた。ハリーファの父親で宰相のジャファルだった。

ジャファルはリューシャとハリーファを見て二人を睨み付けた。

『まだここに居たのか、リューシャ……』

足音と共にハリーファにはジャファルの心の声が聞こえてきた。

リューシャはジャファルに気がつくと、自分の主人に対して腰を落として深く頭を下げ、ハリーファには何も言わず部屋を出て行つた。ジャファルと二人になり部屋の雰囲気が一気に陰鬱になつた。

『ハリーファめ、兵士の話だとフロリストへ逃げようとしていただと

ジャファルは眉間にしわを寄せたまま、ベッドに近づくと横たわるハリーファを見下ろしじりと睨み付けてきた。

今まで父親の怒りの形相から視線を逸らしていたハリーファだが、射るような視線をジャファルに向け返した。一人の視線がぶつかり、間に見えない火花が散った。

ハリーファの様子にジャファルは忌々しげに声のトーンを一段落とした。

「命に別状は無いようだな……、ハリーファ」

『お前に死なれては困る。お前には精々長生きしてもらわないといかんのだからな』

ジャファルの声は耳に、心の声は頭の中に聞こえてきた。

「ハリーファよ、なぜ勝手に王宮を出たりした？ 世間知らずなお前が一人では無理だろう。誰の手引きがあった？」

言つやいなやジャファルは答えなど待たず、ハリーファの手首を掴んで無理に身体を起こさせると、顔をきつくはいた。その勢いで、ハリーファはベットから落ちてしまい、顔の傷からまた血が滲み出た。

「…………」

まだ体力が戻らないまま、立ち上がることも出来ずハリーファは

無様に床に這いつぶばつた。血の滲む顔だけを持ち上げて、無言で父親をキッと睨んだ。

ジャファルは冷たい表情のまま、床につづ伏せのハリーファの左足を容赦なく踏みつけた。何かが折れる嫌な音が室内に響き、ハリーファの身体に激痛が走った。苦悶のあまり顔を顰めるが、外に居るリューシャに聞こえるのではないかと叫び声は出さなかつた。その事が余計にジャファルの癪に障つたようであつた。

『ファティマとリューシャの為と思い、女どもに任せてきたが……。やはりハリーファを皇子として育てるべきではなかつたのか』

「今後王宮を出るような真似は絶対に許せん!」

そう言つと、ジャファルはハリーファの右手首を踏みつけた。ハリーファが苦痛に顔を歪めても理不尽な行為をやめようとしない。ハリーファの全身から汗が滲み出た。

「本宮への立ち入りも禁止する。今後はここがお前の部屋だ」

ジャファルが踏みつけていた足を退けると、ハリーファの右手首はあらぬ方向へ曲がつていた。

『何故私の代でこんな厄介事ばかり起つるのだ……』

ハリーファは右手首と左足の激痛に身動き出来ず、ジャファルの激高する心の声もほとんど耳に入つてこなかつた。

『ハリーファ、お前は生きていればそれでいい』

「後で医者を呼んでやる。治るまではここから出さずに大人しくしていろ」

ジャファルは自分の服の乱れを整え、【王の間】から立ち去つていった。

床に突っ伏したまま動けないハリーファの耳に【王の間】を外側から施錠する音が届いた。

ジャファルとリューシャの話す声も聞こえたが、一人の声は小さくなりやがて聞こえなくなった。

その日リューシャはハリーファのところに戻つて来ず、医者が来たのは翌朝になつてからだつた。

\* \* \* \*

「ハリーファのことを考えているのか？」

宰相の寝所で、隣に居るジャファルにそう言われ、リューシャは主人に目を向けた。さつきまで小さくしていたランプの灯りを、お互いの顔が見えるように大きくした。

ジャファルはいつものように居丈高な態度でリューシャを鋭く見つめる。その視線にリューシャは抱えていた思いを口にした。

「……最初はあなた様の為にと思つてハリーファ様をお育てしてしましたのに。いつの間にかハリーファ様が、本当に自分の子のような気になってしまつて……」

「11年も育てれば、お前でも情が湧くものなのだな」

「……初めてでしたわ。ハリーファ様がわたくしが問い合わせても何も答えてくれないなんて……」

リューシャはハリーファの態度にショックを隠しきれないようだつた。そんなリューシャを見て、母親の顔をする自分の女奴隸にジヤファルは軽い苛立ちを覚えた。

「アレの乳母にしたのは、お前の為になると思つていた。だが間違いだつたな」

「この国で宰相の妻はファールーク皇家の血を引いていなければならぬ。その為、宰相の女奴隸だけは例外的に奴隸から解放されても妻となることは出来なかつた」

「いいえ、この11年間女としての幸せを味わわせて頂きました」

「私よりハリーファの方が良かつたか」

ジヤファルはリューシャを鼻で笑つた。

「そういう意味では……」

主人にわざと嫌味を言われ、リューシャは悲しそうな顔をしてジヤファルから目を逸らした。

「乳母の地位を頂けたからこそ、あなた様のお傍にこうして居られるのです。わたくしにはあなた様の妻になることも、子を産むことも出来ないのですから」

リューシャはそう言い返すと、悲哀がジャファルの妻達に対する怒りにすり替わったようで、きつい口調でジャファルに進言してきました。

「ジャファル様、ハリーファ様は一人で馬には乗れません。剣で身を守る術も持っていない」

「ああ、何も教えなかつたからな」

「それに今年に入つてから病でずっと伏せつておられたのです。今回件も、……いいえ、その病の件も後宮の誰かの嫌がらせなのかもしぬれない。一度良くお調べくださいませ」

ジャファルもリューシャと妻達の折り合いが悪いことは十分に知っていた。そしてハリーファの事をこの宮廷内で最も理解しているのはリューシャだ。

ジャファルは今回のハリーファの逃亡もリューシャの言つ通り、妻の謀略なのかもしないと思えた。だが、ハリーファが既に宮廷に帰還している事実で正直追及する気がなくなってしまった。

「お前の気の済むようにすればいい」

そう言って、ジャファルは寝台に身体を横たえ目を閉じた。

\* \* \* \*

ハリーファは右手首と左足の腓骨を骨折していく、右頬の傷も縫合しなければならなかつた。

ハリーファの右頬には聖痕と呼ばれる横一文字の太刀筋の傷痕がうつすらとある。聖地で負つた怪我はその聖痕を打ち消すかのような縦一文字の切り傷で、古傷と重なり合つてまるで十字架のようになつていた。

医者に痛み止めの薬草を勧められたがハリーファは頑なに拒み続け、痛みを堪えて治療を受けた。

翌日もリューシャはハリーファの傍に来たが、ハリーファは昨日から一度もリューシャと言葉を交わしていなかつた。

ハリーファが黙つている所為なのか、リューシャの心の声がいつもよりよく聞こえてきた。リューシャは食事の介助をしてくれていたが、食事も進まないハリーファに、その手も止まつたままになつていた。

『聞いてはいけないと我慢していたのですけれど……』

「ハリーファ様？……王宮から出るなんて、一体何があつたのですか？」

『何處かへ向かおうとされていたのですか？　宰相様の言つよつて、元氣よつて』

フローリスへ向かうなどとんだ見当違いだと思つたが、ハリーファは相変わらず黙つていた。

そんなハリーファの様子にリューシャは俯き軽く溜息をついた。

右頬の傷が脈打つよつて疼いた。

ハリーファの中で、現実の痛みと過去の記憶の痛みが交錯する。

『【エブリの民】は不可侵な存在！　兄さんは神を冒涜してゐる！』

アーディンの言葉が脳裏に響いた。

あの時は聖裁を下しきれなかつたアーディンも、今ハリーファがドームに足を踏み入れ、あげくそこで血を流したなどと知つたら、今度こそ間違ひなく断罪するだろつ。

ハリーファはドームで見た【エブリの民】の事を思い出していた。

黒い肌、白い髪、董色の瞳の一族。彼らはまだ滅びてはいなかつ

た。

そして異国の服を着た黒髪の少女が【エブラの民】の前に跪いて、何か話していたように見えた。あの少女は一体何者なのだろう……。

あの後、ハリーファも体力の限界で意識を失った。薄れゆく視界に映ったのは瓦礫と青い空だけで、【エブラの民】の姿は映らなかつた。一体何処へ行つてしまつたのだろうか。

連れ戻される途中気が付いた時には、ハリーファは捕縛され馬車の荷台に乗せられていた。そこには男達の遺体と一緒に、あの黒髪の少女も居た。

あの少女はその後どうなつたのだろうか 。

ハリーファは黙つたまま傍に座つているリューシャの方を見やつた。

「……乳母上、私と一緒に居た短い黒髪の女を知りませんか？」

突然声を掛けられ、リューシャは驚いてハリーファを見た。

「……あのフロリストの少女は、奴隸として売られるようですよ」

ハリーファが話しかけてきたので、リューシャの顔に安堵の色が表れた。

「あの女はフロリス人なのですか？」

「ええ。フロリスのヴァロニア人だそうです」

「ヴァロニア王国……」

ヴァロニア王家とその臣下の12貴族が治めるクリスチヤン教信仰の大國  
ヴァロニア。

一百年前にファーリーク皇国がシーランド王国を打ち破り聖地オス・ローを手に入れてから、現在はフロリスからの国境越えは禁止されていて巡礼者はいないはずなのだが……。

あの少女が生きて捕らえられているならば、【エブラの民】の話を聞かせることを心配する。さう思ふと想いがけない言葉がハリーファの口をついて出た。

「乳母上。その女を私の奴隸にすることは出来ないでしょうか？」

ハリーファは今まで奴隸を持つことを嫌っていた。奴隸の所有数で権力が測られることにも反感を持っていたが、何より奴隸達の心の声が聞こえてくることが嫌だったからだった。そのため今まで、奴隸に任せることを全てリューシャに委ねていた。

「……こんな状態では食事も困りますものね。わたくしから宰相様に頼んでみましょウ」

リューシャの顔が少し寂しそうに見えたが、ハリーファは気付かない振りをした。

リューシャが【王の間】を出ると、扉の外に立っていた見張りは扉に素早く施錠をした。

（どうして突然奴隸を持つなどと言つのかしら。あの異国の娘は何なのかしら……）

リューシャは溜め息をついた。

ハリーファの異能を知っているリューシャは、心の中の不審の念を読まれそうで、早々にその場を立ち去った。

ジョードが捕らえられていたのは、ファールークの王宮の地下に作られた牢だつた。

低い天井は丸く削られており、窓などは一切無かつた。所々に作られた空氣孔から微かに光が入つてくるが昼間でも薄暗い。

聖地を離れてからは【天使】の声も聞こえなくなつてしまい、暗闇の中でジョードはすっかり気力を失つていた。

夜になると真っ暗な闇に包まれる牢の中を、微かに風が通り抜けた。

人の気配は全く無いにも関わらず、その音はまるで誰かが悪魔の名を呼んでいるようで、恐怖に夜は眠れなかつた。

「……に連れられて一体どのくらいの時間が経つたのだろうか……。

空腹感も脱水感も疲労と睡魔に誤魔化され、ジョードの時間の感覚を狂わせた。仄暗い牢の中でジョードはただ眠り続けていた。

牢への入り口の扉が開いて、地下に続く階段に光が刺した。階段を下りてくるのは女性とその召使のような男性だつた。昼間でも涼しい地下牢の中で、女性は震えをした。

男の方が鍵を取り出し、ジョードが入れられていた入り口に最も近い牢の鍵が開けられた。

「じたなところに長く居てはいけないわ。早くこの娘を運んで」  
女性の声が牢に反響して響いたが、ジョードは目覚めることなく、男性に抱きかかえられて運ばれていった。

\* \* \* \*

ビニからか微かに気持ちよい風が流れてきた。

ヴァローナの朝とは違い妙に暖かかったが、朝の空気の匂いを感じジョードは目を見ました。

ジョードが寝ているベッドには鮮やかな色の清潔な寝具が敷かれ、頭の下にも柔かい少し小さな枕があつた。身体を起こして見ると、掛け布は薦植物を模した美しい刺繡の縁取りで飾られている。むき出しの木で出来た寝台で倒れるように眠っていた昨日までが、まるで悪夢を見ていたかのように感じられた。

(「これは天国……？　わたし……死んだのかしら……？」)

部屋一面の異国の装飾はジョードが今まで見たことも無い模様で、その不思議な美しさに目を奪われた。自分が寝かされているベッドだけではなく、壁や天井、窓枠までも、鮮やかな色合いの細かい幾何学模様の見事な装飾が施されている。

(……ijiは何処なのかしら……？)

ジョーダはベッドからそろそと降り、窓の方へ歩いていった。

窓から外を見ると、少し遠くに城壁がありその先の視界が遮られた。眼下を見やると、高層に居るのか下に丸い屋根が見える。視界を遮る城壁の内側は砂地の庭園になつていて、石畳の遊歩道が作られていた。その道を目で追っていくと別の建物もいくつか見えた。庭園には所々にナツメヤシの木と背の低い木が植えられている。きつい朝日が遊歩道の石を焼き始め、人影もなく閑散としていた。

部屋の中も外も、今までジョーダが住んでいた世界とはまるで別世界だった。

窓から外を眺めていると、部屋の主と思われる女性が扉を開けて入ってきた。

「お気づきのようね」

ジョーダはびっくりしてここのか分からず、その場に立つて呟いていた。

女性は静かに扉を閉める。歩くと透けるような金色の長い髪が揺れる様に田を奪われた。同じ金色の長い睫毛の向こうには、朝日を浴びた海のような蒼い瞳がジョーダを見つめていた。

田の前にいるこの女性はなんて美しいんだろう。同じ女なのに、ジョーダは思わず見惚れて女性を見つめた。もしこの女性に羽根が生えていたら、それこそまるで聖書に描かれた天使のようではない

か。

フローリスにも金色の髪の人間は沢山いるはずだが、ヘーンブルグには金色の髪の人は居なかつたので、ジヒードは聖地に来るまでは見たことが無かつたのだ。

女性の真つ直ぐな金色の髪はとても美しく、短くなつてしまつた癖のある自分の黒髪がみずぼらしく思え、ジヒードの劣等感を煽つた。

「あなた、お名前は？」

「……ジヒードです。……ジヒード・ダーク……」

「『ジヒード厭世』？」

女性はジヒードとは少し違つた韻律でジヒードの名を繰り返した。

「わたくしのことはリューシャと呼ぶといいわ」

リューシャは見た目の美しさに違わず、紡ぎ出される語彙も美しかつた。

「あの……、リリは何処？」

「リリはフアールーク皇国の首都、サンダリ亞サンダリヤです」

「フアールーク……？　じゃあ、リリは暗黒大陸なの？」

「そうです」

ジョーダは驚いて言葉を失つた。

中心の地を越えて、暗黒大陸モリスまで来てしまつていたのだ。

ジョーダが学校で見たことのある地図には左側の大陸モリスは途切れで載つていなかつた。ジョーダには左の大陸がどのような形をしているのかさえ分からなかつた。

「あなたは一体何者なの？ ヴァロニア人だとは聞いているけれど

「わ、わたしは……巡礼者です」

ジョーダは羊飼いと書つたほうが良いのかと迷いながら答えた。

「オス・ローは一百年も前にシーランドとの戦いで崩壊しています。それを知つていての巡礼？」

「……物見にきたわけじゃないわ。わたしは天使様に会いに来たんだもの！」

ジョーダはついむきになつて言い返してしまつた。

リューシャはジョーダを見て眉を顰めた。心なしか口調もきつくなりジョーダを問い詰める。

「今は調停でヴァロニアからの国境超えは禁じられているはずです」

「そんなこと……聞いてないわ……」

「では同行者は？ 誰かと一緒に来たのでしょうか？ 何処へ行つたの？」

「同行者は居ないわ。わたし一人で来たから」

その答えに到底納得できなかつたのか、リューシャは溜息を漏らし、あからさまに疑いの眼差しをジョードに向けた。

嘘をついていると思われているようで、ジョードは少し胸が苦しくなつた。嘘をついている訳ではないのだが、どうしてヴァロニアから追い出されたのかわからなかつた。そして、追い出されたと思いたくなかった。

「では聖地で一体何があつたのですか？」

その問いかけにジョードは聖地であつたことを思い出した。

聖地で天使に会い、金色の髪の少年を殺すという自分の天命を教えられたのだ。そして生まれて初めて見た金色の髪の少年に、薄茶色の世界が真っ赤に染められていつた。

聖地で最後に見た光景が脳裏に甦る。

ジョードは恐ろしい光景を思い出すと、黙りこんで口を開かなかつた。

そんなジョードの様子に、リューシャは少し辛そつた表情を見せた。

「……もう少しお休みなさい」

そう言つて、女性は窓際に立っていたジョードの手を引いてベッ

ドに座らせた。

「わたくしには本当のこと話を聞いて頂戴」

先程までのきつい口調とは変わって、リューシャはジョードの手を取つたまま、今度は穏やかに微笑んだ。まるで天使のような微笑だ。ジョードには聖地で少年を殺すように言つてきた天使よりも【天使】のように見えた。

ジョードはその微笑を見て、今日の前にいるリューシャに全て話してしまいたい衝動に駆られた。  
話してしまえば恐怖が薄れて楽になるかもしれない。それに他に頼れる人は居ないのだ。

「……次はわたしが殺される……」

聖地で最後に見た光景が甦つた。金色の髪の少年が敵意を剥き出しにジョードを睨みつけていたことを。

「え……？」

「……三人ともあの子に殺されたのよ」

「あなた、何を言つているの？」

「……に連れてこられた時に、大人の死体があつたでしょ！　あれは全部あの子が殺ったのよ！」

「あの子って……。ハリーファ様……ですか？」

「こやつー。」

リューシャの口からハリーファの名を聞いて、ジョードは両手で耳を塞き皿を悶じてうずくまつた。

リューシャは、信じられないと言ひよつて頭を振り、眉を顰めてジョードを見つめた。

\* \* \* \*

ジョードが居た部屋は、本宮にあるリューシャの部屋だった。

皇子の乳母であるリューシャは、宰相ジャファルの女奴隸ジャーリアの中でも最も高い身分であり、皇族並みの立派な部屋を貰えていた。

リューシャは自分のベッドをジョードに明け渡し、夜は何処かへ行ってしまって朝まで戻らなかつた。

翌朝、リューシャは部屋に湯船を用意するヒジョードに沐浴をさせた。

リューシャが連れてきたリューシャと同じ歳格好の胡桃色の髪の女がジョードの服を脱がせ、湯船へと導いてくれた。

「わたし……これからどうなるの？」

女ばかりとはいえ、裸にわせられジョードの不安は強くなつた。

「あなたはハリーファ様の奴隸となるのです」

「……」

聞きたくない名前にジョードは思わず目を閉じ顔を背けた。

「聖地であなたが出会つた御方はこの国の皇子です。どこかへ売られるはずだつたあなたの身柄を買い取つてくれたのですよ」

そう言つて、リューシャはジョードを湯船に立たせると、リューシャに指示された胡桃色の髪の女奴隸がジョードの髪や身体の汚れを洗い流した。

「あの子は嫌よ！ わたし、殺されてしまわ！」

ジョードの記憶の中で、オス・ローでのあの恐ろしい出来事が蘇つてきた。しかも自分が殺さなくてはいけない相手なのだ。そんな相手の奴隸となるなんて信じられなかつた。

「ハリーファ様を恐れてい您的ですか？ わたくしにはあなたの話の方が信じられません」

「わたしは天使に誓つて嘘なんか言わないわ！」

「あなたの国ではどうか分かりませんが、皇族の奴隸になれるのは

「これ以上ない名誉なのですよ」

「……わたしは」「の国の名誉なんかいらないわ！　それに……奴隸なんて絶対嫌！」

裸であることがジョードの不安を余計に煽った。

ジョードは湯船から飛び出ると、近くにあつた布で身体を覆った。

「勘違いしないで。我が国では<sup>モリス</sup>天使の教義に従つて、主人は女奴隸に夜伽わせることはありません。」「はあなたの国ではないのよ」

ジョードの前でずっと穏やかだったリューシャが少しそっとしたようだった。

モリスで奴隸<sup>ラギーク</sup>といふのは、簡単に言えばお抱えの使用人の様なものだ。いわゆる報酬の代わりに、自分の主人から衣食住の全てを死ぬまで与えられる。奴隸から解放される場合、以降の生活に十分なほどの金品を与えられ自由を得る事が出来た。解放された者は、自由人となり奴隸を持つことを許されるようになる。

「……わたしを逃してくれないの？」

ジョードは顔を覆つて泣き出してしまった。その様子にリューシャは溜め息をもらした。

「そんなこと宰相様がお許しにはなりません。奴隸として売られる

はずだったのです。ヴァローニアが身代金を出すと言つならば、身柄は引き渡されますけど」

それを聞いてジョーダーは顔を覆つたまま頭を横に振つた。

「わたしみたいなただの羊飼いに、国がお金を出すわけが無いわ……」

「では、主人に潔く奉仕することね。奴隸から解放されれば、国に帰ることも出来るかもしませんよ」

「奉仕つて……何をすればいいの？」

「そうね、最初は主人が直接指示します。そしていざれば主人の意思を汲み取つて働くように。今ハリーファ様はお怪我をされているので、食事や着替えのお世話になるでしょう」

ハリーファの怪我……。それはジョーダーの短剣を奪つた時の顔の怪我のことだろうか。

あの時、ハリーファの姿に見惚れていないでハリーファを殺せていれば、こんなことにはならなかつただろう。天命を果たし、答えを得て、ヴァローニアへ帰つっていたのかもしれない。

ジョーダーが求めた答えを得るために、天命を全うしなければならない。たとえ逃げてヴァローニアに帰れたとしても、それでは答えは得られないのだ。

（奴隸としてあの子に近づけば、あの子を殺すチャンスがくるかしら……）

結局、そうする以外に道のないジエードは、ハリーファの奴隸となることを受け入れるしかなかつた。

沐浴後、リューシャはジエードに飾り氣の無い簡素な服を着せた。

麻色の生地で出来た半袖の服だつた。初めて着た半袖の服がとても心もとなく、ジエードは寒くも無いのに腕を組むよつてして肘をさすつた。

「これは着けておいてもいいわ

リューシャはジエードが身に着けていたものの中から聖十字の銀のペンダントを取り出した。

「モリスには多くの人種と多くの信仰が混在しています。ジエード、あなたが自分の信仰を曲げることはないわ

そう言つとリューシャはクライスの聖十字のペンダントを手に取り、ジエードの首に掛けてくれた。

「ファールークはモリス信仰なんでしょう？ 改宗させないので？」

「改宗？ 同じ天使信仰なのに？」

「同じ……？」

異教徒なのに……？

ジエードにはリューシャの言っている意味が、この時は理解出来なかつた。

\* \* \* \*

その日の夕刻、ハリーファの耳に【王の間】の鍵が外される音がガチャリと聞こえてきた。

「ハリーファ様、ジエードをお連れしました」

リューシャがヴァロニア人の少女を連れて【王の間】にやつて來た。

部屋の真ん中にあるテーブルに山積みになった、糸で綴じられた書物を眺めているところに一人が入ってきた。ハリーファは自分で杖をついて歩けるようになつていたが、まだ【王の間】から出ることは許されていなかつた。

「さ、ジエード、あなたの御主人になられる御方です」

『……怖い……』

リューシャの後ろに隠れるように立つてゐる黒髪の異国の少女の

心の眩きが聞こえてきた。

前に出るようにリューシャに背を押されても、少女はハリーファの顔を見ようとはしなかった。

「ハリーファ様、これからは何でもこのジエードにおっしゃって下さい」

「乳母上様、ありがとうございます。ちょうど話し相手が欲しいと思っていました」

ハリーファはいつもと変わらない笑顔を見せてそう言つた。その様子を見てリューシャは少し寂しそうに微笑んで部屋を出て行つた。

再び見張りが扉を施錠する音が聞こえ、【王の間】にはハリーファとジエードだけが残された。

正直なところ、ハリーファは奴隸を必要としているわけではない。リューシャが姿を消した途端ハリーファの表情から笑みが消えた。

ハリーファは翡翠色の瞳で冷ややかな視線をジエードに向けると、一人突っ立つたまま動かないジエードに短く言い放つた。

「座れ」

椅子に座つたままのハリーファは、自分の向かいの長椅子を指差

した。ジョードはそれに従つて、下を向いたまままわりながら椅子に腰掛けた。

「俺は奴隸なんか必要ない」

真っ先にそう言われ、ジョードは顔を上げてハリーファの方を見た。

ハリーファは聖地で会つたときと同じ、飾り気のない白い服を着ていた。右手首は三角の布で釣られ、左足には添え木が当てられていて、テーブルには杖が立て掛けられている。聖地でジョードと揉み合いになつた時についた右頬の傷の縫合痕が、赤く腫れていて不気味で痛々しかつた。

それを見たジョードはまた視線を顔より下に落として俯いた。

「お前に聞きたいことがあつてこいつあるしかなかつた。答えによつてはすぐに解放してやる」

ハリーファの言葉にジョードは驚いてまた顔を上げた。

「オス・ローで【Hブラ】【民】と会つていただがつ」

「H…… Hブラの民?」

『Hブラ信仰のHブラの』とかしら?』

ハリーファの能力を知らないジョードの心からは、嘘偽りない言葉が聞こえてきた。

「【エブラの民】を知らないのか？　お前がドームで話していた白い髪の黒人だ」

『白い髪つて……、アルフュラツ様のことを言つてるんだわ……』  
上手く隠すことの出来ないジョードは、顔色にも心の動搖が表れていた。

（アルフュラツだと！？）

ハリーファはジョードが心中で言つた名前に聞き覚えがあつた。  
悪魔ラースがサライのことをアルフュラツの娘と呼び、【エブラの民】を【アルフュラツの子】と呼んでいた。ラースが【悪魔】なら、アルフュラツは【天使】なのだろうか。

ハリーファはいきなり核心を突いた気がした。  
驚きを顔に出さないように、ハリーファは質問を続けた。

「彼女と何を話していた？」

「…………」

『もしかして……聞かれてたのかしら？』

ジョードの顔が青褪めた。ジョードの鼓動は早くなり、こめかみに汗が滲むのがハリーファにも見て取れた。ハリーファがジョードを見つめるほど、隠せない動搖が伝わってくるようだつた。

「あの女性は何処から来ただんだ？」

「わ……わたしがあそこに着いた時、先に居たわ……」

「あの後何処へ行つたか知つているか?」

「分からぬ……」

ジヨードはそう言つて俯いた。

「お前は何をしにオス・ローに行つたんだ?」

「何つて……」

『わたしは國を追い出されたの……? 違うわ……、天使様の御導きなのよ……』

「……巡礼よ

「一人でか?」

「……

『本当のことなのに、一人で来たつて言つたらまた疑われてしまつ』

ジヨードは口をつぐんだ。

「お前は何か罪を犯したのか? それとも病でも抱えているのか?」

「……いいえ

「じゃあ、救いを求めているのか」

その言葉にジョーダは微かに頷いた。

「……わたしじゃないの。姉の魂を救いたかったの」

ジョーダは顔を上げハリーファを見つめた。

ハリーファはその視線にまるで祈りのようなひたむき感を感じた。

「……お前はオス・ローで神に会えたのか？」

『……ええ、そうよ。わたしは天使様に会うことが出来たのよ。だから姉さんの為に、天使様の言つとおり天命を果たさないといけないんだわ』

心の声と一緒にジョーダはこくりと頷いた。

ジョーダの搖ぎ無い心の答えを聞いて、ハリーファは確信した。

(あれは【エブラの民】ではなく、【天使】アルフュラシの姿 )

過去にハリーファは一度【悪魔】ラースの姿を見たが、【天使】の姿を見たのは初めてだった。【天使】の外見は【エブラの民】そのものだったが、どことなくサライに似ているようにも見えた。きっと【エブラの民】が天使の末裔と呼ばれる所以はそこにあつたのだろう。

ドームが崩壊する以前、人々は【エブラの民】を天使として崇めていたが、【天使】は本当に存在したのだ。

神様はちゃんといるんだよ

そうサライは言っていた。

天使の存在を疑っている訳ではないが、今までコースフの罪悪感を知つてそう言つたのだとずつと思っていた。

。 。 \* : . 。 \* . . \* . . \* . . \* . . \* .

「コースフ、【エーブラの民】は天使じゃないよ」

コースフの隣でサライは囁いた。

コースフの部屋の狭いベッドの上で頭の下敷きになつた髪をかき上げて除けると、こましゃくれた表情でコースフを見つめた。

「神様はちゃんといるんだよ、なか……ンンーーー！」

突然コースフの大きな手が「それ以上は言つな」とサライの口を塞いだ。また肝心なところで言葉を制された。

サライは少しそむつとしながらコースフの手を除けると、

「あの【壁】がなくなっちゃえればいいのにな」

と少し戻れて笑った。

。 。 \* : . 。 . . \* . . \* : . . . \* . . . \* .

あれから一百年経つた今、ドームの城壁は崩れ落ちていた。それはサライの望んでいたことなのだろう。

そして、サライはコースフの心の中にある【壁】も崩したかったのではないか。境界を越えて、ドームに足を踏み入れてくれるのをサライは望んでいたのだと思えた。

「神はお前に何と言つたんだ」

「…………」

ハリーファの質問にジョーは黙つたまま少し唇を噛んだ。

『あなたを殺せつて言われた　なんて……。言える訳ないじゃない』

ジョーは答えず黙つたままだつたが、ハリーファはジョーの心の声を聞いて納得した。

(なるほど……、今度こそ、とうとう【天使】から直々に聖裁を下

されるのか）

ラースは『転生後に子供を作ると【アルフエラジ】にばれる』と言っていた。曖昧な夢の記憶だが、おそらく過去の自分が間違いを犯したに違いない。

（だから【天使】にばれて、俺を殺しに遣わしたといいうのか）

だが、なぜジョーダは【天使】に会つことが出来たのだろうか。

もう一度【天使】に会いたい。その為にはジョーダを手放さず、手元に置いておく必要があると思った。

「答えられないなら解放の話は無しだ

ハリーファはジョーダが答えられない事が分かっていながら、冷たく言い放った。

ジョードには早朝の水汲み、配膳、洗濯、掃除、そしてハリーファが右手が使えない間は食事の世話などの仕事が与えられた。ハリーファが必要としていることと、ジョードが出来ることと言えばその程度しかなかった。

初めは仕事をこなしながらも、主人であるハリーファに対して反抗的な態度を取っていたジョードだったが、今まで自分の暮らしていたアレー村での貧しく牧歌的な生活とはまるで違う、異国の壮麗な王宮での生活に日に日に感化されていっている様子でもあった。

ジョードは他の皇族付きの奴隸達から、ハリーファの奴隸だと言う理由で不要な嫌がらせにもあった。相手にされない事は当たり前で、嘘を教えられたり、中傷されたりもした。国文化の違いで分からないうことも多くあり、早々から苦労が絶えなかつた。

そんな生活の中で、ジョードが気が付いた事があった。実は奴隸には「人付の奴隸」と「家付の奴隸」が居るということだ。

「人付の奴隸」はジョードのように「主人」が居て、その主人に仕える奴隸のことだ。人付の奴隸の場合、主人から解放され自由人になることもあるが、主人の死後、その主人に跡取りの無い場合、仕えていた奴隸から後継者を選ぶこともあり、後を継いだ奴隸は家財産、妻までも引き継ぐことがあるとのことだつた。

一方、「家付の奴隸」には「主人」は居らず、その「家」に仕えることになる。こちらは生涯奴隸から解放されることはなく、死ぬまで奴隸としてその家に仕えなければならなかつた。

家付の奴隸というのは、基本的に奴隸と奴隸の間に生まれた子がそれに定められた。したがつて王族や貴族など、抱える奴隸の数が多いところに「家付の奴隸」と言つのは多く存在していた。

そして「人付の奴隸」と「家付の奴隸」の間には微妙な格差があるようだつた。

\* \* \* \*

ジエードがハリーファの奴隸として生活を始めて三週間程過ぎると、ようやく異国の王宮での生活にも慣れてきた。それでも城壁内はとても広く色々な建物が点在している為、ジエードが行つたことのない場所はまだ沢山あつた。

【王の間】の入り口には、まだ朝から夕方まで見張りが居て、ジエードが出入りする時だけは門扉の施錠を外してくれる。

ハリーファは左足は随分回復し杖がなくても歩けるようになったが、右手首の具合は悪く、未だ【王の間】から出られず、日々苛立ちが募つてゐるようだつた。

ハリーファは早朝に扉の外で瓶に水を注ぐ音が聞こえて目を覚ました。昨夜は遅くまで文献を読み漁っていたのでまだ瞼が重い。朝の空気の気持ちよさにそのまま一度寝したい衝動にかられた。

水音が止むと、ジョードが再び水を汲みに【王の間】の扉を開けて出て行くのが聞こえた。腹立たしいことに、その後直ぐに、扉前に居る兵士が施錠をする音も聞こえる。一日分の水を確保するためには、王宮内に在る貯水井戸と【王の間】を毎朝三往復しなければならなかつたが、それが終われば、ジョードは厨房に回って食事を持つて戻つてくるはずだ。

いつもとほぼ同じ時間をかけてジョードが戻ってきた。

「ハリ、起きて。食事を持ってきたわ」

ジョードはトレーを持つて、【王の間】の応接の奥にある寝室の扉をノックもせずに身体で押し開けた。扉が開くと微かに風が流れ窓際にかけられた白い透かしの布が心地よく揺れる。たいして広くない寝室の角に置かれたベッドにハリーファはまだ横たわっていた。ハリーファは目を覚ましてはいたが、うつ伏せのまま振り返りもしない。

## 『良い御身分ね』

一いちいちジョードの心の声が聞こえてくる事に、ハリーファはさすがにうんざりしていた。今までハリーファの特殊な能力を知っていた乳母が、どれほど心でものを考えないようになっていたのかが、今になつてよくわかつた。

「早く体を起こしてよ」

「こりない、お前が食べればいいだろ」

「ずっとまともに食べてないじゃない！」

ジョードの口ぶりは、文句を言いながらもまるで弟の健康を気遣うようだ。だが、ジョード自身もそれに気づくと、そんな自分にも腹を立てたようで、

「庶民がどれほどの飢えを味わっているか一度知るといいわ！」

『勝手に餓死すればいいんだわ！』

と言つて寝室を出て行つた。

ハリーファが身体を起こすと、体重がかかつた右手首にまだ鋭い痛みが走つた。右手首を押え顔を顰めた。

ジョードは応接で脇のテーブルに無造作に積まれた写本を立つた

ままパラパラとめくつっていた。ハリーファーが奥の寝室から出て来る  
と、はつと気付いて本を閉じた。

「別に見ても構わないぞ」

歴史家が書き記したここ何十年かの宮廷内部のことや、財務長官の手記やらがほとんどで、数冊だけ三百年以上前から巻で流行つて  
いる物語の書かれた本が混ざつていた。

「いいの、どうせ読めないから」

「読めないのに何を見てたんだ。写本が珍しいのか？」

「ええ。こんなに沢山色のついている本は見たこと無いわ。とても  
綺麗ね」

ジョードが見ていたのは、沢山の色を使って手描きされた挿絵の  
入った物語の本だった。

一冊一冊手書きされる写本は挿絵だけでなく、文字やそれを囲う  
飾りも様々な色を使って書かれている。

「わたしが見たことのある本は墨一色だけだもの」

ヴァロニーアでは一百年前程から簡単な印刷技術が確立され、聖書や教科書が印刷されるようになつっていた。手書きの写本と違い、印刷された本は黒一色で印刷されている。大量に出版される宗教書や教科書以外の本は未だ手書きされているが、そういった本は庶民の手に渡つてくる事はまず無い。印刷技術のおかげで、クライスの教えを説いた聖書はフローリス全土の庶民階級にも普及し、教科書おかげでフローリスにはモ里斯はない教育制度まで出来上がつていた。

「ファールークは一百年前から時間が止まっているからな……」

ハリーファがポツリと呟いた。発展することも衰退することも無く、他国からの干渉も受けずにただ時だけが流れているとハリーファは感じていた。だからオス・ローも復興しないのだ。

そういえば、ヴァロニアでは12か13歳までの義務教育制度によつて、国民全てが最低限の読み書き計算が出来るはずだ。そのことに気が付いたハリーファにふと疑問が沸いた。

「ジエード、お前は何歳なんだ？」

「もうすぐ14よ

その答え方にハリーファは一瞬氣持ちが波立つた。似ても似つかないのに、サライトジエードの姿が一瞬重なった。

サライト同じ言い方をされ妙な既視感を覚える。

あの時は、なぜサライトそんな言い方をしたのか考えようともしなかつたのに。きっと年上のユースフに追いつこうと、子供扱いされないようにと、サライト必死で背伸びをしていたのかもしね。今になつてそんなことに気付く。

「13だろう?」

ジエードがサライト同じ言い方をする事が気に障り、ハリーファはわざわざ言い直した。

「呑みし数字よ。口に出して言わないで」

( ああ、やつこひとか )

クライスの忌数だ。ジマーの答えの理由を聞いてハリーファは変にほつとした。

「じゃあ何故お前は文字が読めないんだ? グアロニアには教育制度があるんじゃないのか?」

ヴァロニア王国では12歳になるまで義務教育がなされていたが、ヘンブルグのような田舎では女の教養は全く重視されず、女生徒たちは結局教養を身に着けないまま教育を終えることが多かつた。ジマーもまたその例に漏れなかつた。

「村で羊を飼つてゐだけなら必要なかつたんだもの。数ならわかるわ」

「じゃあ必要なら覚えるのか?」

「必要なら覚えるわよ」

《覚えないわよー。わたしはあなたを殺して國に帰るんだからー。必要になんかならないわ》

「こちこち口答えをするな」

呆れた声で溜息混じりにハリーファが呟つと、ジマーは怒った声で言い返してきた。

「口答えなんてしてないじゃない！」

今まで、乳母以外の人とまともに会話をしたことがなかつたので、どうにもペースを乱されてしまつ。ハリーファはそんな自分を情けなく感じながら、深い溜息をついた。

「ジョード、地位や名譽はお前を裏切つても、身に着けた教養だけはお前を裏切る事はないんだぞ」

『なによ、偉ぶつて！』

「心を許さなければ裏切られることもないわー！」

そう言つてふうと横を向いてしまつ。

ハリーファは本当に手に負えないなといつゝ、ジョードのこういった可愛げのない反応を段々予想できるようになつていて。思つた通りの反応を返されると何故か気分が良く、一人笑いを堪えるがつい不敵な笑みが漏れてしまう。そんなハリーファの様子をジョードはいつも訝しげに眺めていた。

「知識は時に剣より強い武器になるぞ」

「じゃあ、その知識でわたしを殺してみてよ」

「簡単すぎて馬鹿馬鹿しいね」

ジョードと話している間にいつの間にか、自分の口から歳相応とも言える子供じみた言葉まで出るよつになり、これにはハリーファ自身も驚いていた。

今にして思えばコースフといつ男は、死ぬまでジーンか子供じみた所があつたのかもしれないなと、他人事のように考える事も多くなつた。

ジョーデの方は、言葉で言い返せなくなるといつもハリーファの瞳をじつと睨みつけてくる。その濁みない漆黒の瞳の色は、ハリーファには何処と無く見覚えがあるものだつた。

『……なんて不公平なの。ハリは身分も高いし、見た目もこんなに綺麗だし、教養もあつて……』

強くて……とでも言おうとしたのだろうが、そこで一旦ジョーデの思考が飛んだ。まだ聖地での事を受け止められていないようだつた。

『ハリはわたしなんかとは違つのよ。どうしてわたしじゃ……』

ジョーデはそう言つたきり俯いてしまい、心の声も聞こえなくなつた。

そんなジョーデを見て、何故こんなに劣等感を持っているのか理解し難かつた。そしてこうこう時、ジョーデはいつも自分の黒髪を弄つているのだった。

\* \* \*

朝の水汲みが終わる頃には、搔き回された井戸水は底の砂が舞い上がり徐々に透明度を失っていた。井戸に集まるのは、その脇で洗濯をする家付の女奴隸達だつた。毎日五、六人が身を寄せ合つて、話に花を咲かせながら洗濯をする。彼女達は年齢は様々だが、全員白人で黒や栗色の髪だつた。

粗末な井戸端小屋やそこで働く家奴隸達の姿は、金色の髪の人や華美な生活に馴染んでいないじょードに郷里の生活を思い起しさせた。

ジョードはハリーファの奴隸だからと、家奴隸達も初めはジョードに対して肩に力が入つていたが、一週間も過ぎた頃にはすっかり親しくなつていた。

朝と夕方、一日に二度顔を合わせることもあるて、ジョードも若い家奴隸達とは特に気心が知れ、彼女達の仕事の傍らでよく立ち話に加わつていた。

他の皇族付きの奴隸達は井戸まで直接足を運ぶことははないので、ジョードはここなら嫌がらせにあう事も無かつた。

ジョードが洗濯女に衣服や寝具を渡すと、その中の一人、ジョードより少し年下位の黒髪の少女、ルカがいつものように話しかけてきた。

「ねえ、ジエード。奴隸皇子様はまだお怪我が治らないの？」

「……そうみたいね」

奴隸達の間でハリーファは『奴隸皇子』と呼ばれているようだった。

ハリーファはもう杖なしで歩いているが、本当のところは良く分からないのでジエードは適当に答えた。そんなジエードの答えた、ルカは心配そうな表情を浮かべる。

ルカの髪と瞳の色は、黒髪黒目の人しか居ないジエードの故郷ヘンブルグでは見慣れた色だつた。だが、同じ黒髪に黒い瞳の白人でも、きめの細かい肌質のジエードに対し、モ里斯で強い日差しを浴びて生活している白人の奴隸達の顔にはうつすらとそばかすが浮かび、睫毛も心なしか長いようだ。

一見似たような風貌の二人だが、ルカはヴァロニア人にはない異国的な雰囲気を帯びていた。本当はジエードの方が、彼女達から『異国的』と思われているのだろうが。

井戸の横に木枠で作られた長方形の水桶が運ばれ、年長の二人に向かい合って洗濯物を始めた。

「ほら！ あんたち早く水を汲んどくれよー」

ルカと、ジエードより年上の家奴隸は井戸水を汲み上げ、手馴れた様子で桶に水を移していく。ジエードも話しに加わりながら、時々手を貸す。洗濯女達は色々話しながらも手は忙しく仕事を続けていた。

「それにしても、ルカは奴隸皇子様にえりぐる執心だね。毎日ジョードに聞いちやつて」

熟年の洗濯女がしゃがんで洗濯をしながら、水を注ぐルカに向かってからかうように言った。ジョードの母親くらいの年齢の家奴隸だ。からかつてはいるが、言葉尻はどこか優しげだ。

「だつてまだ一度もお姿を見たことないんだもん。気になるじゃない」

「奴隸皇子様は皇家の血筋とは全然違つ毛色だよ。リューシャ様みたいな金色の髪なんだよ」

「えつ！？ 本当なの？」

ルカは、井戸で水を汲み上げていたジョードの方に首を向けて確認した。

「本当よ」

「じゃあ、宰相様やシナーン様とは全然似てないのね」

ルカが驚いていると、後ろから年配の家奴隸が口を出してきた。

「奴隸皇子様のお祖父様が白人だつたからね」

ファールーク皇国の王宮では、皇族は浅黒い肌に黒髪で、奴隸は白い肌をしていた。家奴隸は奴隸同志の子供を指し全員白人だつた。

ファーリーク皇建国後、宰相を継承しない皇族の男子は全て養子として出されており、ハリーファは初めての例外となつた。ハリーファの姿は今まであまり人目に晒されてこなかつた為、どうやらハリーファの事をよく知らない奴隸は多いようだつた。ジョードが来る以前はどうだったのかは知らないが、他の皇族が濃い色に美しく染め上げられた服を着ているのに比べると、ハリーファは奴隸達と同じような素地のままの白色の服を着ているのしか見たことが無い。肌の色の所為もあつて、ハリーファの姿を見たとしても、家奴隸達は皇子だとは気付かなかつたのかもしれない。

「ねえ、奴隸皇子様はどんなお方なの？」

ルカにそう聞かれて、ジョードは何と答えて良いのかわからなかつた。

(わたしの方が教えて欲しいぐらじよ)

初めこそ聖地での件で、ハリーファに対して怯えていたジョードだつたが、最近ではそんなことはすっかり忘れてしまつていた。丸一日ハリーファと口をきかない日だつてある。家奴隸たちの質問に答えられるほどジョードはハリーファの事を良く知らなかつた。

「……まだよくわからないわ。いつも本ばかり読んでいて……。あんまり話すこともないし……」

「ふーん。シナーン様はたまに王宮内で馬を乗り回したり、剣術の稽古とかしてるので見るのを見るのは。奴隸皇子様は乗馬とかしないのかな？」

「怪我が治つたら乗馬もするかもしねないわ！」

「？」

乗馬と聞いて、ジョードの心がときめいた。

ジョードは汲み上げた水を、足元にルカが置いた木桶に流し込んだ。

「ねえ、今まで第一皇子様は生まれてすぐに養子に出されてたんでしょう？ どうして奴隸皇子様だけは残っているの？」

水の注がれた木桶を持ち上げながら、ルカは一番年配の家奴隸に話を振った。

「そんなことリューシャ様の為にきまつてるだろ」

年配の家奴隸の投げ槍で簡潔な答えを聞いて、その場に居た中でも一番年若いルカは「やっぱりそうなのね！」と顔を赤くした。抱えていた木桶をすぐ近くの洗濯桶に向かって少々乱暴にひっくり返した。

主人の妻として娶られる事は、奴隸の女達の共通する夢だ。

女奴隸に教養を施して妻に迎えると天国で一倍の報いがあるという口承から、女奴隸を妻として迎える主人は少なくない。女奴隸が自由人になるのには、奴隸からの解放だけを受けるよりも、その後妻として娶られる方が圧倒的に多かつた。

「ルカでもそんな事いう歳になつたんだ」

若い家奴隸がルカをひやかす様に言つた。

「リューシャ様位綺麗じゃないと有り得ないからね。それにあんた

たち！ あたしらは家付なんだから、そんな夢みたいな話したってダメだよ」

母親くらいの家奴隸が若い一人をたしなめるよつて言つた。

「でも、ジョードは奴隸皇子様付きなのよ！」

ルカが口を尖らせて言い返した。

ジョードは黙つて話を聞きながら井戸際で水を汲むのを手伝つた。

「奴隸皇子様も宰相様やシナーン様と同じなの？ ジョードは解放されても結婚できないの？」

思いがけないルカの言葉にジョードはぎょっとした。

「いいや、奴隸皇子様はできるさ。アーラン様が嫁いだ相手は、あんたらは知らないだろうけど先々代の第一皇子ハリード様の息子だしわ」

年配の家奴隸の言葉にルカの顔が明るくなつた。

ジョードはわざわざのルカの言葉を否定しようと、焦る頭の中で苦情を考えていると、背後から抱き付かれわしづと両胸を掴まれた。

「さやーーっ……」

乾いた空氣の中をジョードの悲鳴が響いた。少し年上の家奴隸が後ろから抱きつづいてジョードの両方の乳房を掴んでいたのだ。

ジョードの手から掴んでいたはずの井戸水の汲み上げロープが離

れた。井戸の上の木枠に付けられた滑車がガラガラと激しい音を立てて回った。驚いたジェードは慌てて家奴隸を振り払うと、胸を庇うように腕で隠した。服越しとはいえ、寒いヴァロニアでは考えられないような薄着の上から胸を触られひどく動搖してしまった。

「な・何するの？…？」

頬が熱くなり顔が真っ赤になっているのが自分でも分かった。謝るよに、家奴隸がジェードに片手を閉じてみせた。

「ルカもジェードも、あんたらの胸じゃ皇子様の妻になるなんてムリムリ！ アタシくらいはおつきないとねー！」

楽しそうに笑いながらルカに向かって言つのを聞いて、ジェードはますます顔が熱つた。

「だいたい！ まず人付の奴隸として雇つてもらわなきゃダメでしょ！」

年上の家奴隸の言葉にルカはふうっと頬を膨らませた。ジードを含めた若い娘達のかしましい様子を見て、年配の女奴隸はやれやれと肩をすくめた。

「あたしらは、富廷と書つ『家』に生まれてこれた事を感謝して働いてりやいいの」

「そうだよ。市井じゃ人付の奴隸でも、『主人次第で相当ひどいって話も聞くからねえ』

年長の二人は口を動かしていても、決して手は止まらない。目線

だけで「早く水！」と言われ、若い家奴隸の一人は慌てて井戸の口一握を引つ張つた。

「そついやあ、奴隸皇子様は十歳で奴隸として高値で売るために宮廷に残してゐる、なんて噂もあつたけどぞ」

母親くらいの家奴隸が話を蒸し返した。若い一人が水を汲む間に、向かいでせつせと洗濯桶の壁に布を押し付けて擦つている年配の家奴隸に話しかけた。

「ああ、金の髪だからかね」

「あんまり言いたくないけど、アーラン様は宰相様から酷い扱いされてたでしょ。でも、奴隸皇子様にはそんな事なかつたからさ。傷付けず、綺麗なまま、奴隸として売られちゃうんだつて、あたしも思つてたわ」

「ねえねえ、でも、今回の奴隸皇子様の怪我は宰相様がやつたって話なんでしょ？」

年上の家奴隸は水を足しながら、また噂話に加わつた。年配の家奴隸は「滅多なこと言つんじやないよ」と若い家奴隸をたしなめた。

「でも、ま、要するに奴隸の話は間違いだつたつてことさね

「奴隸皇子様は今までリューシャ様に守られてたんだよ。母親役を辞められた途端に、誘拐されたり大怪我したりだもんね。可哀想にねえ」

年長の一人も噂話に火が点いたようで話を続けた。

「何があつたか知らないけど、今回はリューシャ様まで殴られてた  
じゃない。ああ、恐ろしい」

「リューシャ様が奴隸皇子様を手放したくなくて、宰相様に我慢で  
も言ったのかな？」

今度はルカが水を注ぎながら話に割り込んだ。

「ああ、そうかもしれないね」

「そういえば奴隸皇子様の誘拐は、リューシャ様は奥様方が犯人だ  
って、またひどくやり合つたって言うじゃない」

「宰相様の方が『綺麗で賢いリューシャ様』を離さないからだろ?  
宰相様が後宮に行かないから奥様が気分を悪くされるのも仕方な  
いさね」

「ファティマ第二夫人様と第二夫人様は亡くなられたし、アイシャ第四夫人様はずつと  
ご病気だし。リューシャ様の敵は、後は第一夫人様シェーラか」

ハリーファだけでなくリューシャの事も良く知らないジエードは、  
話に入らず横で一人突っ立つて聞いていた。洗濯女たちは気にせず  
手と口を動かしていた。若い二人も交互に水を運び続けていた。

「だけど、リューシャ様は母親役を頑張ったと思うよ」

「そうしないと宰相様のお傍に居れなかつたんでしょう？ そりやあ、  
がんばりもするよ」

家奴隸達による皇族の噂話は、まだまだネタが尽きそうになかった。

ハリーファとは違つて、リューシャの事は井戸端で頻繁に話題にあがつた。そして奴隸達は、同じ奴隸身分のリューシャにだけは尊称をつけて話すのだった。

作業を手伝う隙を失つてしまい、ジョードは邪魔にならぬよう井戸端から立ち去つた。

ファールーク皇国のある西の大陸では日が最も高い時間になると気温が40度を超す炎天となる。

宮廷に暮らす人々は朝や夕方に生業をこなし、日中は部屋の中に籠つて暑さをしのいで過ごしていた。皇族達は昼間に睡眠をとつて夜中は起きている事が多いたと聞いてジョードは驚いた。ハリーファは、夜はもちろん昼間もまだ一人寝室に籠つている事が多く、起きているのか寝ているのかジョードには分からなかつた。

家奴隸達は一日中働き続いているが、皇族付の奴隸にとつて昼間は自由な時間だ。

ジョードも自由な時間を『えられていたので【王の間】の中にじつと籠つているはずもなく、この時間に宮廷の中を散策する事だけが一日の楽しみとなつていた。

城壁の中は広く、迂闊に歩くと道に迷って【王の間】に戻れなくなりそうだった。ジョードは毎日少しずつ行動範囲を広め、頭の中には徐々に【王の間】を中心とした宮廷内部の地図が出来上がつていった。

入らせて貰えない場所や、ジョードには何か良く分からぬ場所も沢山あつた。厩舎や厨房裏の家畜小屋、小さな畠のようになつてゐる場所を見つけると、退屈しのぎによく覗きに行つた。自分の馬がどうなつたのか気になつて厩舎を覗いてはその姿が無いことに落ち込み、家畜や小さな農園を見て郷里のアレー村での生活を思い出していた。

ジョードが自由になる昼の時間には、炎天の下作業をしているのは家奴隸ばかりで、皇族や皇族付きの奴隸達も建物の外には出てこなかつた。

\* \* \* \*

家奴隸達の賄いは日に一回、朝食の残り物で昼にだけ用意された。ジョードは家奴隸と同じ扱いだったので、昼間に家奴隸達と同じ様に、一日一回の食事を自分で厨房に取りに行く。それを夜と朝の二回に自分で分けて食べていた。

自分で持参した椀にその日の賄いをよそってくれるがスプーンなどは添えられない。謀反を起こさないように配慮されているようであ

つた。

ファールーク皇国にも春が訪れ、夏に向けて井戸の水位が少しづつ下がり始めた頃。

この日は厨房がいつもより少し騒がしかった。

いつもなら料理人たちが既に調理を終えて、夕食の支度を始めるまでは休憩しているはずだ。ジェードが自分の食事を取りに行く時間は、厨房は大抵もぬけの殻で、大きな鍋の傍に一人だけ瘦せた家奴隸の男が座って居るだけだった。

だが、今日は厨房に料理人が三人調理に勤しみ、いつも鍋の傍に居る家奴隸の男も料理人の手伝いをしていた。ジェードがお椀を持ってきたことに気付いた瘦せ男は「今日は自分でよそつておくれ」と騒がしい中声を張つた。

ジョードは鍋から硬めに炊かれたお粥を木の尺ですくつた。ふと、近くの調理台の上に皿をやると、そこには綺麗にカービングされた果物とそれ彫つたと思われる細身のナイフが横たえられていた。

いつもの時間は鍋番以外無人の厨房からは調理道具は全て片付けられている。賄い食をよそうための木尺にさえジェードは触れられない。

だが、今日は料理人も慌しく働いていて、誰もナイフを放置したままだということに気が付いていなかつた。ジェードがさつと視線をめぐらしたが、四人ともジェードに背を向けたままだつた。

ジヨードはさつと調理台に近づき、ナイフに手を伸ばした。

その時。

「ジヨード……」

突然名前を呼ばれ胸が早鐘を突いた。

厨房の入り口に現れたルカが、ジヨードに氣付き小走りに寄ってきた。

ナイフを盗むとしていた手を、ジヨードはさつと引っ込めた。

ルカは大きな盆を抱えていて、そこには不揃いの椀が六つほど重ねて乗せてあつた。仲間の分も食事を取りに来たようだ。

ナイフを盗むとしたところを見られたのではないかと、ジヨードは一瞬血の気が引いた。だが、ルカの笑顔から杞憂であると知つて胸をなでおろした。

ルカはジヨードの心の内など何も知らず、ナイフが置かれたままの台の上に持つてきた盆を無造作に置くと、重ねていたお椀を一つずつ並べながら話しかけてきた。

「ジヨード、今日は南方からの行商が来てるんだって！」

ルカはお椀の一つ一つに食事をよそいながら話した。

年に数回、南方の国アルザグエからの行商隊がやって来ているらしい。厨房が騒がしいのもその所為だった。

ジョードが学校で習つた世界地図には現在ファーリーク皇国領土の中央の地までしか載つていない。左の大陸のその更に奥にある土地の名前など聞いたことも無かつた。

「見に行きましょ！ ジョード！ もしかしたら、誰かがわたしを人付きの奴隸として買い取つてくれるかも知れないし！」

ルカは目を輝かせてジョードを誘つた。両手で抱えるように持ち上げた盆を睨みつけると「わたし、これを置いたら、なんとか仕事を抜け出して行くわ！」と付け加えた。

ジョードは一度【王の間】に戻つてから、ルカの言つよつに門前の広場へと向かつた。

この時間はいつも閑散としている城門の前の広場から、離れた所まで人や動物の喧騒が響いていた。いつもの砂や草木とは違つ、甘つたるい匂いと獸の匂いが広場を漂つていた。

広場を囲うように鮮やかな朱色の絨毯が敷かれ、その上に様々な細工品などが所狭しと並べられていた。白い肌や少し浅黒い肌の行人と、皇族付きの奴隸達や家畜の仕入れに来た家奴隸達が門前の広場に沢山集まっている。そこに異国人のジョードが混じつても誰も気に止めないほど活気に満ちていた。

人にぶつからない様に、広場に敷かれた朱色の絨毯の前を歩くと、行人達はジョードにも声を掛けてきた。時折知らない言葉が混じ

る話し声は、ジョードにはまるで不思議な呪文の様に聞こえる。絨毯の上には、色んな大きさの皿、椀、杯など様々な形や大きさを取り揃えた銀器が並べられていた。

隣には、透明、緑、青、赤色の硝子で作られた零のような形の瓶が沢山並べられていた。太陽の日差しが硝子の曲面に反射して、周囲に薄い色付きの影がきらめいていた。

「綺麗……」

硝子瓶を一つとり眺めながらジョードはその前に腰を屈めると、掌で色とりどりの影を受け止めて遊んだ。

乾燥させた葉っぱや、白い石が山のように盛られた前を通ると、ジョードは最初に漂ってきた甘ったるい香りに包まれた。

別の場所ではいくつも並べられた小さな皿の上に、透明、黄、茶色の液体が入れられていた。花の甘く優しい香り、柑橘類の甘酸っぱい香り、不思議なスパイシーな香り、蜜のような奥深い香り。複数の香りが入り混じって心地よい香りを織り成していた。

行商人達が唱える不思議な呪文が飛び交う中を、ジョードは魔法にかけられたかのようにふわふわした足取りで歩きまわった。

赤絨毯で囲われた円の内側には、木箱が順序良く積まれていた。木箱の側面は格子になっていて、ジョードから一番近い箱の中では茶色い鶏がバサバサと羽根を散らかしている。その隣の同じ形の箱の中では、耳の無い兎のような小動物が鼻をひくひくさせて緑の葉っぱをかじっていた。ジョードが指でその耳無し兎の鼻を突いてみると、兎似の動物は食事の邪魔をされ迷惑そうに短いひげを少し搖

らした。

他にも様々な小動物達が、同じように格子の箱に入れられていて、小さな声をあげていた。

まるで建物のように積まれた箱の間を、ジョードは一つ一つ眺めながら恐る恐る歩いた。しかし足取りとは裏腹に心は小躍りするようくわくわくしていた。故郷の村の年に一度の祭りでもこんなに胸が躍つたことはなかつた。

城門近くには、二羽の大きな鳥が首に縄が掛けられ馬を繋ぐ木にくくらっていて、ジョードの視線を釘付けにした。

(何!? あれば鳥なのかしら?)

遠めに見ても背はジョードよりずっと高そうだ。二羽の大鳥のギヨロギヨロしたきつい視線は何処を見ているのかさっぱり分からない。一羽は向かい合つて体のわりに小さな翼をバサバサと音を立て羽ばたかせ、まるで喧嘩をしているかのようであつた。ジョードは少し離れた場所から、子供のように胸を高鳴らせながら二羽の様子を眺めた。

城門の方に視線を廻らすと、乾いた砂色の毛の不思議な動物が目に入った。立っているものと、座っているもの、全部で合わせて十二頭は居る。馬と同じように轡を付けられ、その先を地面に置いた大きな石にくくりつけられていた。半分くらいは、頭とほぼ同じ高さの背に朱色を基調としたマットが背に掛けられていて、それには極彩色の糸で何重にも菱形の刺繡されてたり、綺麗な房が縫い付けられていた。色とりどりの服を着せてもらつた彼らは可愛くてジエードは思わず笑みがこぼれた。その姿はまるで『おめかし』をし

てこるようだ。

先程の大きな鳥とは違つて、『彼』らは暴れることもなくのんびりしている。大人しそうな様子にジョードはそつと『彼』らに近づいてみた。すると、『彼』らを驚かせてしまったようで、突然立ち上がると鼻をブルルと鳴らした。

立ち上がると馬よりも背の高い『彼』にジョードも少々怯んで後ずさった。だが、優しそうな瞳がジョードを見ているのに気が付くと、そつと傍に近づいていき横から『彼』の足に触れた。

(なんてふかふかなの……！ 気持ちいい)

ふかふかの毛並みがあまりに気持ち良くて、随分長いこと触っていたようで、『彼』が尻尾を振つてジョードを叩き、まるで苦情を言つて『彼』だった。

(触りやすかった？ 「めんなさいね）

ジョードが心で呟くと、『彼』はジョードの方にゆっくりと顔を向け、瞬きして長い睫毛を上下させた。

結局ルカは門前広場には姿を現さなかつた。

(きっと仕事を抜け出せなかつたのね。こんなに楽しいのに残念だわ……）

商隊の見学に夢中で、ジョードは時間が経つのをすっかり忘れていた。

自分の影が靴の長さよつ長くなつたら、昼の休憩も終わりだつた。昼からは【王の間】の掃除、オイルの補充、乾いた洗濯物を取りに行かないといけない。

いつもより少し時間が遅れてしまい、ジードが慌てて【王の間】に戻ると、珍しくハリーファが応接室に出てきて本を読んでいた。右手首の怪我が思わしくないのか左手で胸に本を押し当てる支え、指先で器用にページをめくつていた。

「……起きてたの？」

ジードが驚いて声を掛けるとハリーファは急に不機嫌そうになつた。

「俺は毎日いつも起きてるし、今何時だと呟つてんのだ」

「「」みんなセー……」

《楽しそうで時間のこと忘れちゃつたわ……》

ジードが素直に謝ると、ハリーファは呆れたように息を吐いた。

「獣臭いな。何処へ行つてたんだ」

「さっき広場で大きな動物を見たの！　あんな大きなのは初めてだわ！　何か知ってる？」

さつきまでの興奮した気持ちを隠し切れず、それを表すように舌足らずで答えたジョードだったが、

「……馬のことか？」

と、ハリーファの返事はそつけなかつた。

「もう、馬鹿にしないでよ！　馬なら知ってるわ！」

ハリーファに冷ややかな視線を向けられ、ジョードは高揚した気持ちが冷めてくるのを感じた。ジョードがハリーファの釣れなさにがっかりしていると、珍しくハリーファから声を掛けてきた。

「アルザグエから行商隊が来てたんだろう？」

ハリーファが商隊のことを知っていたので、色々と話したい気持ちがジョードに湧き上がってきた。だが、浮かれて話していくのかわからず、話しづらくてジョードは戸惑つた。

「ジャムル駱駝を見たんだろ？」

「ジャムルって言うの？　聖地の土の色の毛をした馬よりも大きな子よー、背中の大つきなー！」

「お前が大きな鳥を見たなら駝鳥ナーマだ」

「そうよー、大きな鳥も居たわ！　あんなの見たの初めてよー！」

ハリーファが答えてくれてジョードの目が輝いた。再び胸に興奮と感動が甦ってきた。

心なしかハリーファの口調が優しくなった気がした。

ジョードが故郷の村で毎日戯れていたのは羊の群れと馬だった。山羊や家畜としての鶏等も居たが、野性でも鹿や兔、鳥位しか動物を見たことはなかった。

ジョードにとつてこんなに心が躍つたことは初めてだった。

「アサドは居たか？」

「アサドって？」

「『獅子』だ」

「獅子！？」

ジョードはハリーファの言葉に驚きの声を上げた。ジョードはさつきから驚きの連續で、自分が子供のようになってしまいでいる事に気付いた。ハリーファは足を組み替えて、ジョードが驚く様子を面白そうに眺めていた。

「獅子は見なかつたわ。獅子も居ることがあるの？」

さつきまで嬉々としていたジョードの顔が少し不安そくなつた。

フローリスに獅子は存在しない。だけどジョードもその話を聞話や民話で聞いたことがあった。

金色の鬢に闇の中で緑に光る田の凶暴な獣の王は、金色の髪と緑

色の瞳のシーランド人の容姿に例えられる。シーランド王の異名でもあり、ヴァロニアの大人達は時折子供達に『』してると獅子が来て喰われてしまうよ』と言つて戒めていた。

「祝事がある年なんかは居るんだけどな。今回は居なかつたのか」

ヴァロニア人は同じ金色の髪でも、目は青い。ジョンードに語りかけるハリーファはシーランド人と同じ容姿だ。

「あの動物達はここで飼われるの？」

シーランドでも、ヴァロニアでも、王族達が自分達の権威を示すためやその家系の象徴に、異国珍しい動物を愛育するような話は聞いたことがあった。

「食用だろ?」

さらりと返すハリーファの言葉に、ジョンードは驚かずにはいられなかつた。

「食べちゃうの？ もしかして獅子も？」

「いや、獅子は食わない。モ里斯では獅子は神の象徴だとする教えも多いからな」

「神の象徴……」

そう言われてジョンードはふと【天使】の事を心に思い浮かべていた。金色の髪、緑の目とは程遠い容姿の天使の姿を思い出した。

そして【天使】に教えられた天命を思い出して、浮かれていた心が徐々に沈んでいくのを感じた。

\* \* \* \*

数週間後、ジーハードはある事が気になつて、ハリーファの食事風景をまじまじと眺めていた。

『この料理にあの駝鳥が入つているのかしら?』

昨日家畜舎からあの駝鳥が居なくなつっていたのだ。

『あんな大きな鳥をどうやって絞めるのかしら? 鶏と同じやり方でいいのかしら?』

およそ穏やかでない事を考え巡らせていた。想像すれど答へは分かるはずもなく、疑問は膨らむばかりだった。

すると突然ハリーファが噴き出すようにむせぬたので、ジーハードの思考は中断した。ハリーファの顔は緩み、傍に立っていたジーハードを見上げて問い合わせてきた。

「お前はちやんと食つてるのか?」

「食べてるわよー。」

『いやだ！ そんなに物欲しげにでも見えたのかしらー？』

「もうこえば、お前、最近厩舎に行つてこりしーな

ハリーファはこの部屋からまだ出られないはずなのに、何故知つてこるのかとドキリとした。

「毎に何処に行こうがお前の自由だが、あんまりひびきするな。王宮の中でも粗暴や奴らも居るんだ」

「…………」

急に自分の行動を注意され、まるで父親と対峙している様な錯覚を覚えた。が。

「それに逃げようなんて考えるなよ

父親らしからぬ言葉で脅迫される。

『まだ逃げようなんて想つてないわよ…………』

ジードの顔が少し曇った。今はまだ逃げようとは思っていない。まだ、ハリーファを殺せていないのだか。

ジードが厩舎に通つていたのは事実だが、聖地に置いてきた村の馬が気になつての行動だった。あの時一緒にここに連れてこられていなか知りたくて、頻繁に厩舎に足を運んでいたのだ。

「何度厩舎に行っても、お前の馬は居ないぞ。ヴァロニアの馬では

オス・ローとモリスの間の砂漠は越えられない。オス・ローからヴァロニアの国境までは半日も走れば十分辿り着ける。だからきっと自力でヴァロニアに帰つただろ」

そう言われてジョードは少しほつとした。こればかりはハリーファの言葉を信じたかつた。

ジョードは朝の食事を片付けた後、洗濯物を抱えて井戸に足を運んだ。いつものように井戸端にはルカ達が居て、今朝もジョードがやつてきたのに気付くと話しかけてきた。

「奴隸皇子様つて乗馬も、剣術指南も受けてないんだってね。乗馬も剣の稽古もしないんじや、わたしが奴隸皇子様に会える機会がないじゃないのよ、ねえ？」

残念そうに話すルカの言葉に、ふとジョードは心に引つかるものがあった。

馬に乗れないというのなら、あの時ハリーファはこの王宮から聖地までどうやって来たのだろうか。

それにどうしてあの兵士達を躊躇いなく簡単に殺せたのだろうか。

ジョードの心中にもやもやとした疑問が浮かんだが、しばらくすると洗濯女達の明るい笑い声と水音に、不穏な考えは洗い流された。

「ねえ、ジョーダ、ちょっとは奴隸皇子様がどんなお方かわかつた  
？」

ハリーファに対して淡い憧憬を抱くルカに悪い言い方は出来ない。  
せめて何か良い表現は無いかと必死で考えた答えが、

「……なんだか『パパ』みたいな感じよ」

だつた。

肩を竦めながら言うと、ルカは不思議そうな顔をしてジョーダを見つめた。

## 第一皇子シナーン

井戸の水位はますます下がり、年中暑く季節感の無いファーリーク王国にも、夏が来たことを知らせていた。

この国では季節に係わらず、日が最も高くなる時間帯は気温が40度以上にもなる。宮廷では昼間は家奴隸達以外は室内に閉じこもり、外は人気がほとんど無かつた。

太陽が頭上からギラギラと照りつける中、ジェードは閑散とした中庭を一人歩きながら、どうやってハリーファを殺したら良いのか考えていた。

（こんな調子じゃ、いつまで経ってもハリを殺せないわ……）

ハリーファを殺さねばならないのに、日々の生活にすっかり流れてしまっていた。

何か武器でもあれば寝こみを襲うことも出来そうだが、あの部屋には全くそういうものが無かつた。もちろん手に入れることなど出来ない。ヴァロニアを出る時父から渡された短剣は、聖地でハリーファに奪われて失くしてしまった。力ではハリーファにはかなわないのも、聖地で揉み合いになつた時の事でなんとなく分かつていた。食事に毒を盛ることも出来しそうだが、毒なんて手に入るはずもなかつた。

（そついえば、知識が剣より強い武器だ、なんて言つてたけど……）。

それでどうやって人を殺すって言つたのよ……）

ハリーファの言葉を思い出し、ジョードは歯がゆさに思わず唇を噛んだ。

ハリーファの怪我が治り切らないうちがチャンスなのだと一人焦っていたが、ジョードは活路を開くことが出来ないでいた。

眩むような炎天の下、庭園の脇にあつた石に腰掛け一人ため息をついた。

暑い土地の習慣でこの王宮に住まう人達は、日が高いうちはほとんど部屋から出てこない。ジョードが昼間に【王の間】から出ても、忙しく働く家奴隸以外に会う事はなかつた。

だが、石に座つて砂の地面を睨んでいたジョードの背に声が掛けられた。

「そんなところに座つていて熱くないのか？」

声の方に振り返ると、一人の少年がジョードに近づいてきた。少年は小麦色の肌に黒い髪を短く整え、豪華な縁取りのついた緋色の服を身に纏っている。歳はジョードやハリーファと変わらないようだ見えた。

「異国人の女奴隸というのはお前のことか？」

「……やつよ」

ジョードは座ったまま少年を見上げて答えた。逆光に思わず目を細めた。

ジョードは今まで何度か遠目にこの少年の姿を見たことがあった。少年が自分の姿を目で追っていたのに気が付いていた。彼にはいつも誰かが同伴していたので、今まで近づいてくることも声をかけてくることは無かつた。

その少年はジョードをじろじろと見定めているようだった。その視線に抗議するようにジョードは眉をしかめた。ジョードは異国人というだけで、髪も男のように短く、白人ではあるが特に目立つて美人というわけでもない。

「何故ハリーファはお前みたいなのを奴隸にしたんだろう。聖地であいつの命でも救つたのか？」

「…………」

少年の口から『聖地』と聞いて、ジョードは視線を斜め下に落とした。忘れてはならない大切な事と、忘れてしまいたい恐怖を思い出した。

「ヴァローナに帰りたいか？」

「当たり前でしょ。奴隸なんて不本意なのよ」

「よく言つたな。あれでも一応皇子だぞ」

ジョーダンには『皇子の奴隸』という価値は全く理解できなかつた。以前リューシャにも言われた事だつたが、どうしても釈然としない。

「私の言うとおりにすれば、お前を私の奴隸にしてから解放してやる」

ジョーダンは少し考えたが、今は國に帰ることよりもハリーファを殺す事を優先しなければならない。ハリーファを殺さずに國に帰つても仕方ないのだ。姉の魂を救済する為に聖地まで来た意味がなくなつてしまつ。

ジョーダンが少年の立派な服装を上から下へ見ていると、腰辺りに携えている少し曲がった形の短剣が目に留まつた。

(……あの剣を入れられれば、ハリを殺せるかも知れないわ！)

ふとそんな事がジョーダンの脳裏を過ぎつた。

「あなた誰なの？」

ジョーダンの質問に少年はハハツと笑つた。

「そこから説明しないといけないのか」

少年に対するジョーダンのぶしつけな態度も、異国人だからといつ理由で許されていたようだ。

「じゃなんどこりで話すことじゃない。着いてこい」

うだるような暑さの中、ジョーダンは黙つて少年の後に着いていつ

た。

少年に連れられ、ジョーダーが辿り着いた部屋は、本宮の三階に位置していた。

本宮の建物は口の字型になつており、リューシャの部屋とは反対側に位置しているようで、窓から遠くに青い海が見える。部屋の装飾もリューシャの部屋以上に立派なものだつた。

部屋の方角の所為もあるのかこの部屋は随分涼しかつた。代理石の床の上に、植物を模した柄が細かく編み込まれた赤い絨毯が敷かれている。

ジョーダーはその美しい絨毯を踏んで良いのか分からず、思わず手前で立ち尽くしていた。少年はそんなことは全く気にせずそのまま歩き、丸いテーブルの横の椅子に一人腰掛けた。

「水を淹れてくれ」

ジョーダーは自分に言われていることにしばらく気付かなかつたが、少年の視線を感じて慌てて部屋を見回した。

金細工の取つ手の付いた棚の上にピッチャーを見つけ、傍にあつたグラスに水を注ぐと少年のところへ運んだ。

「まずお前が飲むんだ」

そう言われ、ジョードはよく分からぬままグラスの水を一口飲んだ。

少年はジョードからグラスを受け取ると、ジョードが口をつけた部分から水を飲んだ。間接的にジョードと唇を重ねる行為にジョードは少し躊躇した。少年の漆黒の髪と瞳を間近に見て、ジョードは不思議と懐かしいものを感じた。

「私はシナーン。ハリーファの兄だ」

黒髪の少年はテーブルの上にグラスを置きながら話し始めた。

「ハリのお兄さん……？」

ということは、この少年もこの国の皇子ということになる。噂には聞いていたが、兄弟で髪も目も、肌の色まで全く違うことにジョードは驚きを隠せなかつた。ジョードの顔には『兄弟なのに似ていない』と現れていた。

「クライス信者のお前には分からぬだらうが、私達は母親が違う

シナーンの言つとおり、母親の違う兄弟などジョードには理解出来なかつた。伝承者クライスの教えは一夫一妻で不貞は禁忌だ。

「奴隸と言つのは『身内』だぞ。あいつはお前に自分の身の上話もしないのか？ それともお前……」

「ジョードよ」

「ジョード、お前はハリーファに信用されてないんだな」

確かにジョード自身もハリーファから信用されているとはとても思えなかつたが、そう言わると何故か癪に障つた。

「……じゃあ、あなたは信用されてるって言つの？ 本当の身内なんでしょう？」

ジョードが言い返すと、シナーンの顔から笑みが消えジョードを睨みつけてきた。

「私もハリーファもお互い信用してなどいない」

「奴隸は信用するのに、兄弟は信用しないなんておかしな話だわ」

「従属階級と一緒にするな。ヴァロニアでも王太子ドーファンとその姉が王位を巡つて争つてゐるだろ？ それと同じだ」

自分の国のことであるのに、ジョードは王族や王都で起こつてゐる事などは全く知らなかつた。

「そんなことはない」

シナーンが話題を変えた。

「お前はハリーファの事を、不気味に思つ事はないのか？」

「……不気味？」

「心を見透かされているような気がしないのか？」

そう言われてみて、ジョーダも、的外れではないのに会話がかみ合わない事は今まで何度もあった事を思い出した。だが、そんな人知を超えた事を疑つたことはなかつた。

「人の心を覗くなんて悪魔の仕業のようね。そんなこと有り得るの？」

「私はハリーファ<sup>ジン</sup>は神魔<sup>ジン</sup>が獲り付かれているんじゃないかと思つている」

「神魔<sup>ジン</sup>……？」

「人間と神の中間的な存在の精靈のことだ。神魔にとりつかれた人間は、その姿も変えてしまうらしい。お前も私達兄弟は似ていないと思つただろ？」「…」

「そうだけど……」

（もし人の心を見透かすのなら、わたしがハリを殺そうとしてることも気付いてるのかしら……）

そんな不安がジョーダの頭に浮かんだ。

「異国の伝承は信じられないか？ ヴァローナの魔女<sup>ウイッチ</sup>と同じだぞ」

魔女<sup>ウイッチ</sup>。

そう聞いてジョーダは眉をしかめ、姉の事を思い出した。

「……魔女と神魔は違うわ……」

本当に姉は魔女だつたのだろうか……、その真実が知りたくて聖地までやって来たのだ。そして【天使】の言つとおり、天命に従えばその答えが得られるはずなのだ。

天命に従い、ハリーファを殺さなければならぬ。

人に取り憑くという、人間と神の中間的な存在、神魔。  
悪魔と交わり特殊な能力を身に着けた、魔女<sup>ウイッチ</sup>。

そんなモノが本当に存在するのだろうか……。

(姉さんは絶対に魔女なんかじゃないわ……)

神魔の存在を否定できれば、魔女の存在も否定できるのではない  
かと、半ば強引にジエードは思い始めた。

「わたしは……魔女が本当に存在するのか知りたいの」

「ならば自分の目で確かめるといい。神魔も魔女も、悪魔の存在あ  
つてのものだろう? 私も弟に取り憑いているものの正体が知りた  
いんだ」

「どうやって確かめればいいの?」

「そんなことは自分で考えろ」

ジョーダンにとって一番簡単な方法は、ハリーファの食事に毒を混ぜることだ。ジョーダンの心の声が聞こえずにハリが服毒して死ねば、ジョーダンは天命を果たせる。神魔と魔女の存在が否定され、姉が魔女ではなかつたことを証明できる。

（ハリを殺すことが出来れば全て上手くいくんだわ…………でも……）

ジョーダンにはシナーンが自分に何をさせたいのかはつきり分からず、シナーンの考えていることがよく掴めなかつた。

「それを確かめる為に、ハリが死んでもいいの…………？」

ジョーダンの問い掛けにシナーンは答えなかつたが否定もしなかつた。

「何か必要なら準備してやるわ」

シナーンは立ち上がるといでジョーダンの横を通り壁際の棚の方へ行つた。そして引き出しから何かを取り出した。

「もしハリが本当に神魔に取り憑かれていたら…………？」

「神魔に憑かれた人間は死ない。その時はお前が死ぬことになるだろうな」

シナーンは冷たく答えるながら、ジョーダンに瑠璃色のガラスの小瓶をそつと手渡した。

シナーーンの部屋を出たジヨーデは、すぐに【王の間】に戻る気分にはなれず、回廊に腰掛け庭園をぼんやり眺めていた。

太陽が真上を通り過ぎ、それまで日陰だった回廊にも少しずつ西から日が差し始めた。暑さでこめかみにうつすらと汗が滲んだが、ジヨーデは不穏な気持ちを包み隠すように膝を抱えた。

姉の死後に突然聞こえるようになつた【天使】の声は、ジヨーデに聖地に来るようになると導いていた。

聖地で天命を知られ、その後は全く【天使】の声が聞こえなくなつていた。

「天使様……」

ジヨーデは助けを求めるかのように、空を見上げて呟いた。

「お前の【天使】は空に居るのか?」

背後で聞き覚えのある声がした。ジヨーデは驚いて声のした方を振り返ると、金色の髪の少年が立つていた。

「ハリ!?」

ジヨーデは慌てて余計なことを心で考えないようにした。

「もうあそこから出ても良いの?」

立ち上がり、衣服に付いた砂をはらつた。二人の目線の高さが  
ほぼ同じになる。

「ああ、さつきやつと許可が出た。部屋の前の見張りが居なくなつ  
てせいせこする」

ハリーファは今までに見たことも無いような清清しい顔をしてジ  
ヨードに近づいてきた。

強い日差しに慣れているのか、太陽の光にさらされても目を細め  
ることすらしない。明るい場所で見るハリーファの瞳の色は透き通  
るような翠で、ジヨードは見たことも無い宝石を見ているようだつ  
た。

澄んだ翠の色に一瞬心を奪われていた。

「お前がいつもの時間に戻つてこないから心配してたんだ」

ハリーファの言葉に、意識が引き戻される。以前遅刻してからと  
いつも、必ず早めに【王の間】に戻るようにしていた。

「逃げてないかどうかの心配でしょ」

答えるながら、ジヨードは心では何も考へないようとした。シナー  
ンの言つていたように、ハリーファの透き通る翠色の瞳で見つめら  
れると、まるで本当に心中まで見透かされたようだつた。

「誰かと話してたのか？」

「話す人なんて居ないわよ……」

「そうだな。お前は俺意外の人間と話す必要はない」

「……わたしのことなんか全く信用して無いくせに」

ハリーファーがどうこうつもりで言つたのか分からなかつたが、いつものようにジエードは言い返した。

咄嗟に後ろに隠した手には、先ほどシナーンから渡された瑠璃色のガラスの小瓶が握られていた。

## すれ違い

「数日、毎朝ジョードは【王の間】に戻る前に人目を忍んでハリーファの食事にシナーンから渡された液体を混ぜ込んでいた。

周りに人が居ないことを確認すると服の中に隠し持つていた瑠璃色の小瓶を取り出し、穀物を煮込んだ乳白色のスープに数滴混ぜる。この瞬間だけは気温の暑さは全く感じず、自分のしている背徳的な行為に背筋に冷たいモノが走りぞつとした。そうかと思うと、次はこめかみに汗が滲んでくる。

それでもジョードは、「これは天命なんだと自分を正当化し、心の中の恐怖を隠して冷静さを保つようしていた。

【王の間】に入る前に深呼吸して緊張をほぐし、心音と呼吸が整うのを待つた。

盆を持つ手の震えが止まると、何食わぬ態度でハリーファの前に食事を配膳した。

それなのに……。

「いらないから下してくれ

ハリーファは毎回、ジョードの顔を見るなりそうを言った。

「……またなの？　いい加減にして」

ジョードは抗議の声を上げたが報われなかつた。シナーンから渡

された液体をハリーファの食事に混入すると、その時に限ってハリーファは食事には手を付けようとせず、全く口にしようとはしない。

『何か変わってる？　どうして判るのかしら？』

味の方はもちろん知る由もないが、その液体は色もついていないし臭いもしなかった。

ジョードは一人眉根を寄せ、皿の上に盛られた食べ物を睨み付けていた。

「ジョード、何してるんだ。もついいからせつと下げる」

ハリーファは膳を下げるようじつこく言つて、明らかに苛立った様子で【王の間】を出て行ってしまった。

（何なのよー シナー<sup>ン</sup>の言つよつて、本当に心を見透かされているのかしら）

おそらくシナー<sup>ン</sup>は『ハリーファは神魔<sup>ジン</sup>に取り憑かれている』という答えを望んでいるのだろう。だが、ハリーファが神魔<sup>ジン</sup>に取り憑かれているのかどうかなど、ジョードにとつてはどうでも良い事だつた。

【天使】に教えられたとおり、ハリーファを殺すことが出来れば自分の天命を果たすことが出来る。姉の魔女の疑いを晴らすことが出来る。　ただ、それだけだ。

それなのに、用意した食事はいつも拒否され、ジョードは途方に暮れた。その上、ハリーファがこう何日も食事を食べないでいるの

を見ると、自分の行動と矛盾しているが心配にもなつてしまつた。

(……どうなつてゐるの？ これじゃ、逆にハリが神魔に取り憑かれてる事を証明してゐるようなものじやない）

【王の間】に一人取り残されたジョードは一人唇を噛んでいた。

正午近くになつて、ジョードが部屋の掃除をしていた所に、ハリーファはまだ少し不機嫌そうな顔をして戻ってきた。

ハリーファはジョードを連れ出すると、宮廷内の保管庫に向かつた。保管庫の前に着くとハリーファは懐から古びた鍵を取り出した。微かに砂の積もつた鍵穴に息を吹きかけて砂を落とすと、ハリーファはそこに鍵を差し込んで扉を開けた。そこは滅多に人の出入りがないようで、何年もの間空気が動いていないかのようだつた。

光の入る窓は無く、二人はそれぞれランプの灯りを頼りに足元や周りを照らし、保管庫の奥へと進んでいった。

壁際には古めかしくもう使えなさそうな武器が束ねて立てかけられていた。革の蓋が張られた長い大きな壺や、小さな壺も所狭しと置かれている。その間を縫うように闇を奥に進むと、紐で綴じられた紙束や本のを積んである書棚がいくつも並んでいた。

「ジョード。お前、数は判るんだる。そつちの下から1218年の

年号が入ってるものが無いか探してくれ

ジョーダーは小さなランプを床に置き、しゃがみこんで綴られた紙の束を端から順に確認していく。

ハリーファは梯子の上に登り、棚の上段に平積みになつた書物を一つずつ確認していく。

二人は言葉を交わすことも無く黙々と作業を続けていた。

『1218……、1218……』

ジョーダーの心の声がハリーファにはずつと聞こえてきた。ジョーダーは他の事を考えることも無く、ただひたすら心で規則的なリズムで読み上げていた。

時折ハリーファがジョーダーを見下ろしても、その視線にさえジョーダーは気が付かない。いつもは何かと食つて掛かってくるのに、『』えられた仕事に関しては文句を言つたことは一度も無かつた。倦むことなく働き続けているジョーダーの姿を見て、ジョーダーがヴァロニアでどうこう生活をしていたのだろうかと、探し物の傍らでハリー・ファは思いを巡らせた。

昔、サラivaがコースフの家で暮らす間、奴隸達と同じように休み無く働く彼女を見て、今と同じよつてエブラの民【エブラの民】がドームの中でどのような生活をしているのか思い描いたことがあった。

ドーム内の【エブラの民】の生活は知つてはいけない事だと教えて詮索しなかつたが、ジョーダーは只の村娘だ。ヴァロニアでどんな暮らしをしていたのかジョーダーに直接聞けばいい話なのだ。

……だがハリーファは聞かなかつた。

心にある枷のようなものが、ハリーファの口を重く閉ざさせる。ハリーファはサライの時と同じように、ジョードの事を問うことにはしなかつた。

保管庫で探し物を始めてから、随分時間が経つていた。

「……見当たらないな」

ハリーファは額の汗を拭い、紐で綴じられた紙の束をいくつか抱えて梯子から下りてきた。自分の持っていたランプをジョードに渡すと、その灯りを頼りに更に紙束を選別した。要らないものは棚の手の届く所に適当に詰め込んだ。

「1218年だなんて。二百年も前のものなんてあるの？」

「普通はあるんだ。その年は初代の宰相が死んだ年だ。無いはずがない」

アーディンの死んだ年の記録だけが抜け落ちていた。ハリーファでも入れるような、こんな保管庫に保存されている書類など、きっと大した事は書かれていないのでだろうが……。ハリーファは考え込んだが、一人首を横に振った。

「……一旦終わらう。これ以上無駄だな」

二人は保管庫を出ると、開けたときと同じようにその扉を閉めた。

日が西に傾き始め、ハリーファとジョードの足元の影も少し長くなっていた。

回廊を渡り部屋に戻る途中、前を歩いていたハリーファが急に立ち止まった。

後ろからハリーファの金色の髪をぼんやり眺めながら物思いに耽っていたジョードは、驚いてハリーファにぶつかる直前で足を止めた。

ハリーファの視線の先に、回廊の正面から歩いてくる厳しそうな表情の男性とリューシャの姿が見えた。

男性は青年と言つには歳を取り、中年と言つにはまだ少し早い。傲然そののに、どこか思慮深い表情をして、眉間に深いしわが刻まれていた。

『あの人は誰……？　何所かで会つたかしら？』

ジョードは何処かでその男性を見たことあるような気がして、記憶を思い返した。

「宰相だ。端に寄れ」

ハリーファに言われて、その男がシナーンと似ている事にジョー

ドは気が付いた。

初めて見るファーリーク皇国の宰相の姿だった。漆黒の髪に、微かに憂いを帯びた瞳。すれ違う瞬間、何故かジョードの胸がざわついた。

宰相とリューシャは一人に気付いたようだが歩みを止めることはなく、すれ違う時も無言のままだった。

リューシャは一人の姿などまるで目に入つて居ないかのように、ハリーファともジョードとも目を合わさなかつた。表情に以前見た穏やかさは無く、その代わりに隙の無い高貴な美しさを纏つているように感じられた。

井戸端での家奴隸達の噂通り、この宮廷の中で最も美しい女奴隸なのだろう。もっと歳若い女奴隸も沢山いるが、まだまだその美しさはリューシャには及ばないのだろう。

女奴隸の中で誰よりも豪華な衣服を纏い、宰相の傍を悠然と歩く姿は、表舞台に立たない妻以上の女王の風格を感じさせていた。

ジョードはそつと振り返つて一人を見たが、一人は振り返ることもなく黙つて宮殿の奥へと姿を消した。

ジョードは再び歩き出したハリーファの後を慌てて追いながら、金色の髪を後から眺め、家奴隸達の噂話を思い出した。

【王の間】に戻ったハリーファは、早速保管庫から持ち出した書物を読みだした。

飾りのような文字を右から左へと指を滑らせて、ジョードの事など氣にも留めず書物を読みふけるハリーファの様子を見て、ジョードは黙つて応接室から出て行つた。

休憩時間も残り少なかつた。今から廄舎まで行つて戻つてくる程の時間は無い。ジョードは【王の間】の奥にある畳室に戻ると、一人狭いベッドにうつ伏せになつて物思いに耽つた。

（ハリは家族とも仲良くないのかしら？　皇子つてそういうものなの？　ここに友達も居ないのかな？　最近よく一人で出て行くけど何処に行つてるのかしら？　寂しくないのかしら？）

心の中に疑問ばかりが浮かび上がる。もう一ヶ月以上もハリーファの傍で一緒に暮らしているといつに、ルカにハリーファの事を問われても何も答えられなかつた。ハリーファの事を何一つ良く知らない事に今更気が付いた。

裕福ではなかつたが、田舎で兄弟に囲まれて育つたジョードは、こんなに広くて沢山の人々が生活している宫廷なのに、ハリーファは随分寂しい生活をしているんだなと思わずにはいられなかつた。

ヴァロニーアの家族のことを思い出した所為か、ハリーファの自身の事を孤独だと思った所為か、ジョードの瞳から一粒だけ涙がこぼれ落ち、ベッドに滲んで消えた。

休憩を終えたジェードは、ハリーファの居る応接室の横を素通りし夕刻からの仕事に戻った。

ジェードがランプのオイルを持つて【王の間】に戻つてきた頃には、日は落ち室内は薄暗くなつていた。

ジェードが応接に行くと薄暗がりの中、ハリーファはまだ書物に見入つっていた。黙つて部屋にある三箇所のランプに火を灯すと、ハリーファはやつとジェードの存在に気づいた。

「ああ、……ありがとう」

顔を上げて、素っ気無くそう言うとハリーファはまた書物に目を戻した。ハリーファから労いの言葉を初めて聞いてジェードに不思議と優しい気持ちが生まれた。

多分今までずっと書物を読むことに集中していて、水分も取っていないに違いない。ジェードは入り口の水瓶からグラスに水を注ぎ、長椅子に座っているハリーファの横のテーブルに置いた。

「どうこいつつもりだ」

途端に不機嫌そうな顔つきでジェードを見上げるハリーファは、ジェードが注いだグラスを口に運ぼうとはしない。

「……毒なんか入つてないわよ」

ハリーファの嫌疑の視線に、ジェードは思わず言い訳をした。

「ずっと何も飲んでないみたいだから心配になつただけじゃない。心配しちゃいけなかつた？ 奴隸は『身内』なんでしょう？」

シナーインから聞いて知つたことを語つてみた。どうもフロリスとモ里斯では『奴隸』という身分に相違がある。モ里斯では『身内』だが、フロリスでは『罪人』だ。

「俺はお前を奴隸だと思つた事はない」

喜ぶべきかどうか齒む言葉だったが、ハリーファの言葉尻から良い意味で言われたわけではなさそうだ。人の心が読めないジエードでもそれくらいは判つた。

「……わたし、信用されてないのね」

ハリーファはジエードの言葉を無視して、また書物に墨を落とした。

ジエードはハリーファに言われた『お前を身内とは思つていない』という意味の言葉がひどく寂しく感じた。ハリーファの隣にぽつんと突つ立つたまま、自分の事など眼中に無いハリーファの横顔を見つめた。この寂しさはお互いに相手のことを知らないから湧き上がつてくるのだろうとジエードは思つた。さつきそこぼれた涙もきっとその所為なのだろう。

ジエードはこの寂しさを振り払おうと、ハリーファの読書の邪魔をして、しゃがみこむとハリーファを見上げて話しかけた。

「ねえ、昼間のあの金色の髪の女人、ハリのママなんでしょう？」

ジエードの問いかけに、ハリーファは視線を書物から床にしゃがんだジエードに向けた。

「リューシャの事か？」

ジョードはリューシャの名前を聞いてじくじくと頷いた。

「リューシャは父の女奴隸だ。俺を生んだ母親じゃない」

「そうなの？」

てっきりハリーファの母親なのだと思っていたが、言われてみれば、同じ金色の髪でも質が違う。ハリーファの明るい金色に比べると、リューシャの髪は光を透かしてしまいそうな纖細な色だ。ハリーファとリューシャは目の色も違い、確かに顔立ちも似てはいなかつた。

「ああ、だが男の方は俺の父だ。この国の宰相ワジル、……最高権力者だ」

「宰相……って？ 王様のこと？」

自分には縁遠い世界の事などジョードにはまるで分からなかつた。

「違つけど似たようなものだな」

ハリーファはそれだけ言つと、また視線を書物に戻した。

ジョードは床に視線を落とすと、すれ違つたジャファルの姿を思い出した。

国の頭とも言える人物にまみ・見える事など、ヴァロニアでのジョードの生活では考えられない事だった。自國ヴァロニアの王族な

どには、さつと一度もまみ・見えることなく生涯を終えるのだらう。

『あの人ガファールーク皇國の宰相……。シナーンには似てたけど、ハリとは全然似てなかつたわ。本当に親子なのかしら?』

ハリーファの視線が一瞬動いたが、ジエードはそのことには気がつかなかつた。

「リューシャさんは宰相の女奴隸だつたのね。宰相の夫人や他の女奴隸があの人の失脚を狙つてるつて噂を聞いたわ」

「奴隸同士でそんな話をしてるのか?」

ハリーファの言葉には明らかに厭味がたっぷり含まれていた。

「……井戸端で聞こえてくるだけよ」

「リューシャは特に父のお気に入りだからな。他の母達の手前、俺の乳母にしたようなものだつたんだろうな」

ジエードが解せない顔でハリーファを見つめていると、それに気づいたハリーファが説明した。

「宰相の妻は皇族の血を引いていなければならぬ。だからリューシャは宰相の妻にはなれない。だが皇子の乳母なら宰相の寵愛を受けても文句はないだろ」

「…………」

それを聞いてジエードは言葉に詰まった。

『あの人……、主人は女奴隸に夜伽はさせないって言つてたのに。  
嘘つき!』

リューシャに少し裏切られた気分になつた。

「天使の教義では女奴隸に夜伽させてはならない。だけこの国の  
宰相だけは例外だ。皇族の血を引く女しか妻に出来ないからな。父  
上はリューシャを妻にしたくても出来ないんだ」  
モリス

ハリー・ファはリューシャを擁護するような言い方をした。それも  
またなぜかジョードの胸には詰まる。多分、理由は井戸端で聞いた  
話の所為だった。

「宰相はリューシャさんを傍に置いておく為に、リューシャさんを  
ハリの乳母にしてハリをここに残したの? 第一皇子は本当は王宮  
に残れないんでしょう?」

「そんな専横で宰相が勤まるわけないだろ!」

ハリー・ファが強い口調で怒鳴つた。ジョードの言葉に気分を害し  
たのか、忌々しげな視線をジョードに向けた。

『やつぱり父親の事は底うのね。足と手の怪我だつて宰相にやられ  
たんじゃないの!? やつぱり皇子なんてわたしには理解出来ない  
わ!』

何かきつかけがあればハリー・ファを理解できるかと思つたが、共  
感できることは何一つ無く、ジョードは自分がどんどん泥沼にはま  
つていく気分だった。知らうとすればするほど、何故かハリー・ファ

とまでも距離を感じてしまつ。

「自我尊重の心を捨て、主情を無視出来なければ宰相なんて勤まらないんだ」

ハリーファは怒ったように言葉を吐いた。

しかし、言つてすぐに苦い表情になつて直した。

「……いや、お前の言つ通りだ……。父は主情を捨てきれないでいる。だけど理由はそれだけじゃない」

《……理由?》

「……父の肩を持つ訳じゃないが、一国の宰相ともなれば相当な苦悩もある。それは宰相の女奴隸だつて同じだ。お前なんかに解かるわけない」

「宰相になつたこと無いくせに、ハリにだつて解からぬでしょー。」

「……解かるさ」

ハリーファの顔が急に暗くなつた。それに気付いたジョードは、きつくなり過ぎた口調を少し緩めて聞いた。

「同じ奴隸でも、宰相の女奴隸だとそんなに偉いの?」

リューシャにだけは同じ奴隸達が尊称をつけていた。それも不思議でならなかつた。

「……それを言つなら、お前は『皇子の女奴隸』だ

「それはいつかわたしを裏切る『地位』よ。ハリが自分でそつとつ言つたでしょ」

ハリーファはジョードの返答に驚いていたようだった。

「……そんなこと覚えていたのか

「あの人だつて同じじゃない。いつか裏切られるわ

「同じだと？ お前とリューシャが同じなわけない！」

ハリーファは怒鳴つたが、先ほどと同じように、また苦々しげに顔を歪め溜め息をついた。

「いや、お前の言う通り、お前もリューシャも同じだ……。だがな、リューシャが偉いと思われているなら、それは宰相の女奴隸だからじゃない。彼女が努力して身に着けた知性とカリスマのおかけだ。それがリューシャとお前の違うところだ」

ハリーファはジョードに対して反論ばかりしていくのかと思ったら、ジョードの意見を肯定して言い直したりもする。言い方は決して優しいわけではないが、ジョードを頭から否定している訳ではない事は理解できた。

皇国の慣習など知らないジョードは、ハリーファは庶子で、リューシャがハリーファの母親だと思っていた。ハリーファにとつて唯一の味方はリューシャなのだろうと思っていた。複雑な人間関係とそれぞの想いに、ジョードはだんだん訳がわからなくなってきた。

ハリーファの事を少しでも知ろうと努力してみたが、余計にわからなくなるばかりだった。

外は日がすっかり落ちて室内はますます暗くなり、三箇所の灯りではお互いの表情は判りにくくなっていた。

ジョーダはそっと立ち上ると、ハリーファにぽつりと呟いた。

「あなたの本当のママは後宮に居るの？」

「いや、もう死んだ」

「そう……」

ハリーファと血の繋がった家族がある宰相以外誰も居ないのかと思ふと、ジョーダは急に寂しくなつて目元が熱くなつた。そして両手で顔を隠して鼻を啜つた。

ハリーファはうんざりした様子でジョーダを見上げた。

「泣いてるのか？」

「だって……。悲しいじゃない……」

ハリーファは書物を閉じてテーブルに置くと、横で突っ立つたまま泣き出しそうなジョーダを見た。

「別に悲しくなんか無い。生まれてすぐの話だ。母親の顔も覚えてないのに」

『何言つてるの？ 家族が死んで悲しくない訳無いじゃない。死は別れなのよ。わたしは姉さんが死んだ時、辛くて悲しくて、あんなに泣いた事はなかったのに……』

ジョードは姉が死んだ時のことを思い出した。

ジョードが十歳になつた頃、姉のルースに魔女の疑惑がかかり、ヴァロニアの王都ランスで火刑に処された事を……。

「わたし、三年前に姉が殺されたの。魔女の疑惑がかかつて……」

「魔女？ それは何だ？」

「……魔女と契約して、能力を身につけた人間のことよ」

「魔魔と？ 契約……？」

ハリーファは座つたままジョードの方に体を向けた。

ジョードは自分の話に初めて興味を持つてもらえたことに心地よさを感じたが、それが悲しい出来事であることに複雑な思いだつた。

「えつと……」

魔女魔女を知らないハリーファに説明するのに、ジョードは少し言いづらそうにして言葉を選んだ。魔女とは、魔魔と肉体的な関係を持ち特殊な能力を身に着けた人間のことだつた。

「悪魔と【契約】を交わして印を貰うと、魔女になつて特殊な能力が身に着くと言われてるわ」

「特殊な能力つて？」

「不老不死とか、読心術とか言われてるけど……」

自分で言つてジョードははつとした。

魔女<sup>ウイッチ</sup>は読心術を使つとう。もしかするとハリーファ<sup>ウイッチ</sup>は魔女<sup>ウイッチ</sup>なのだろうか……。

座つているハリーファを見下ろすと、金色の前髪の下の翠の瞳は、真剣な眼差しをジョードを向けている。その髪と瞳の色を見て、ジョードの心の疑念は即座に晴れてしまった。

「魔女は……、黒髪の女性ばかりなの……」

金色の髪で男のハリーファ<sup>ウイッチ</sup>が魔女<sup>ウイッチ</sup>のはずが無い。ジョードは無意識に呟いていた。

ハリーファはジョードの黒髪や漆黒の瞳を凝視した。

「……じゃあ、お前はウィッチなのか？」

「ち・違つわよつー」

ジョードは顔を真っ赤に染めて怒った。

間接的に黒髪のことを言われたことに対してもだが、クライス信仰では成人を迎えるまで異性との付き合いも「法度だ。敬虔なクラ

イス信者のジョーダーは、自分の清純さを否定されたよつた言い方に腹を立てた。

「ではお前の姉上は？ 悪魔と契約を交わしたのか？」

「そんなわけないでしょ！」

ジョーダーは顔色を変え、大きな声で怒鳴った。

「姉さんが悪魔と【契約】なんかするはずないわ！ 姉さんには恋人だつて居たのよ！ そんなことありえないんだから！」「

怒っているのに、ジョーダーの顔は今にも泣き出しそうだった。

「だからわたしは毎日天使様に祈つていたのよ……。本当のことが知りたいから……」

ジョーダーは辛い記憶を思い出して、田から涙が溢れた。これまでハリーファに涙を見せたことは一度も無かつたが、胸の内に抱えていた聖地まで足を運ばせるほどの思いが溢れ出した。

「姉さんは魔女じゃないわ。その証明が欲しいの！ 姉さんの魂を救つてあげたいのよ！」

ジョーダーは押し寄せてくる自分の感情に、立つていられず床に座り込んで嗚咽を漏らした。

『その為に聖地まで来たのに……こんなことになるなんて』

ずっとハリーファに突っかかっていたジョーダーが、この時初めて

自分の心の内をせりつけ出して泣き続けた。

ハリーファはジョードを黙つて見下ろしていた。

「聖地でお前は救いを得たのか？ 姉上は救われたのか？」

暫くしてハリーファは足元に座り込んだままのジョードに穏やかに問い合わせたが、ジョードは頭を垂れたまま横に振った。

「どうな。神は生と死以外の何も与えてはくれない。救いはお前自身の心が生み出さないといけない」

アルフレッドと同じ事を言うハリーファに、ジョードは驚いて顔を上げた。ハリーファの表情からは怒りも哀れみも読み取れなかつた。

ジョードは濶みない瞳でハリーファに問い掛けた。

「ねえ、ハリ、教えて。魔女や神魔は本当に存在するの？」

田頃ハリーファは返事をせず黙つていることも多かつたが、『まかしたり言葉を濁したりすることは一度も無かつた。だからこそ、いつものようにはつきり否定して欲しい。ハリーファがそれらの存在を否定してくれるなら、きっと信じられるような気がした。

ジョードは祈るような思いでハリーファの答えを待つた。

「天使と悪魔がこの世に存在するなら、魔女や神魔も存在する」

自分の問いを今こそ否定して欲しいと願ったが、ハリーファの知る真実はジョードの望む答えとは違った。

「そんな……」

ジョードは悲哀の表情になつた。ハリーファが嘘をつかないと分っていたはずなのに、どうして望む答えを言ってくれないのかと怒りが悲しみになつて溢れ出した。

ポロポロとこぼれる涙が頬をつたつてジョードの唇や顎を濡らす。止めようと思つても、こぼれてくる涙を自分の意思でじつにも出来なかつた。

「お前は聖地で【天使】に会つたんだろ。矛盾したことと言つな」

「でも！ アルフュラツ様は自分のことを【天使】だとは言つてなかつたわ」

ジョードは感情に任せたアルフュラツの正体と名前を口にしていたことに気付いていなかつた。

「いや、アルフュラツは【天使】の名前だ」

「どうしてそんなことをハリが知つてゐるのよー。」

「俺は【悪魔】の名前も知つてゐる」

「…………悪魔…………？」

ハリーファの言葉を受け止められず、ジョードは頭を横に振った。

「ハリ、……あなたは神魔に憑かれているの?」

『人の心を見透かしているの?』

ジョードは涙で濡れてぐしゃぐしゃになつた顔を掌で拭うと、真っ直ぐにひたむきな視線をハリーファに向けた。

「……俺は、神魔に憑かれてなどいない……」

その視線から逃れるようにハリーファはジョードから目を逸らした。ハリーファはいつものような自信や明瞭さがどこか欠けているようじにジョードには感じられた。

\* \* \* \*

ジョードは一晩中部屋で泣き続けた。おかげで今朝は目が腫れてしまつて頭痛がひどく、ハリーファに文句を言つ氣力もなかつた。ここ数日ハリーファがほとんど食事を取つていなかつたので、ジョードは小瓶の液体を混ぜずにそのまま食事を出した。するとやはり、見抜いたかのようにハリーファは食事に口をつけた。

ジョーダーは違つて、ハリーファは何か落ち着いたようなすつきりした表情を見せていた。

「ジョーダー、二つ程教えておいてやる。奴隸において、主人殺しで主人が死ねば死罪だ。それに逃亡も死罪だからな」

ジョーダーは冷や汗が出るのを感じた。知らなかつたとは言え、もしハリーファが死んで居たら自分は処刑されたのだ。驚いて返す言葉も無かつた。

「今までに俺が死ななくて良かつたな

「…………」

いつもなら言い返すところだが、昨夜の疲れでジョーダーは黙つていた。

『良かつたつてどういう意味よー』

ジョーダーが心の中でハリーファに文句を言つと、ハリーファはどこか楽しそうに笑みを浮かべた。ハリーファのいつもの不敵な笑みだ。ジョーダーが何か言い返しても相手にせずに、ハリーファは余裕で笑みを浮かべるのだ。

目の前でむつとしているジョーダーを気にする様子もなく、ハリーファは久しぶりの朝食を優雅に口に運び続けていた。

お前が食べればいい

ハリーファは食事を食べない時はいつもそう言つていた。だが、

小瓶の液体を入れた時に限って、ハリーファが食べろと言つたことは一度も無かつた。

そんな事に気が付くと怒りは收まり、代わりに疑問が沸きあがつてきた。

『やつぱり心を見透かして居るの？ ねえ、どうなの？ 答えてよ、ハリ』

その時ハリーファはふいとジョーダの方を見た。だが何も答えてはくれず、ハリーファが人の心を見透かしているのかどうかの確信は得られなかつた。

気が付けばシナーンから貰つた瑠璃色の小瓶の中身はほとんど無くなつていて、ジョーダは不思議とほつとした。

その後、ジョーダがシナーンと一緒に会つ機会も無く、日は過ぎていつた。

植物の穂は少しずつゆるやかに頭を垂れ、暑氣の続くモリスにも秋の訪れを知らせる。

皇都の西を流れる川の下流は水が氾濫し、乾いた土地にひと時の潤いを与えていた。

その日の朝は、いつもと少し様子が違つた。

ジョードが一回目の水汲みから帰つてくると、閉めていったはずの【王の間】の扉が開いていた。

いつもハリーファが起きて寝室から出でるのは、大抵ジョードが三度目の水汲みから帰つてくる頃だ。

ハリーファが起きて何処かへ出て行つたのだろうか？

ジョードは汲んできた水を入り口のそばの大きな瓶に注ぐと、気になつて応接を覗いた。すると、奥のハリーファの寝室の扉も開け放たれたままで、そこに部屋の主の姿は見当たらなかつた。

ジョードが井戸へ行つてゐる間に、誰かが【王の間】に衣装を届けに来ていたようだつた。

応接の長椅子の上に、綺麗な衣装が無造作に広げて掛けられていた。上品な濃紺の生地で、縁には金色の糸で飾り模様が刺繡されている。よく見ると布地全体に同じ濃紺色の糸で細かい飾り刺繡がされていた。

服の他に長い布地も何枚か広げられていた。それらはジョードが見てもわかるほど、とても質の良いものだつた。

「きれいね……」

思わず口から言葉がこぼれた。ジョードはうつとつとその美々しい衣装を眺めた。

宰相やシナーングが普段着ている衣装よりもずっと豪奢だ。きっと何か特別なものなのだろう。

明るい金色の髪や深い翠の瞳を持つハリーファは、質素な服を着ていても惹きつけらてしまう程の美少年だ。この美しい衣装を、あの容姿端麗なハリーファが着たらどんなに美しいだろうか。ジョードは想像して思わず胸がときめいた。

だが、ハリーファが袖を通した瞬間、もしかしたらこの衣装の方が色褪せて見えるかもしれない。

ジョードは一人苦笑すると、一度目の水汲みへと再び【王の間】を出た。

三度の水汲みを終えた後、ジョードは厨房からハリーファの食事を持つて戻ってきた。

食事の乗ったトレーを抱え応接に入ると、ハリーファがあの壮麗な衣装に袖を通している所だった。

脱いだ服は長椅子の背に投げ置かれ、ハリーファは人目などはばかる様子もなく素肌をさらす。あまりに真白な肌の少年の半裸姿に、ジョードは思わず入り口で足を止めてしまった。双子の弟のおかげ

で男の裸も見慣れていたはずだったのだが、弟よりもっと白く見える肌にジョードは思わず視線を泳がせた。

ハリーファはジョードのことなど気にもとめず、濃紺の衣装をさつと羽織り袖を通した。そして、手馴れた手つきで、腰に長い布を引いては巻いていく。その姿をジョードは黙つて物珍しそうに眺めた。おそらくジョードが手伝いを頼まれたとしても、異国の衣装の腰布の巻き方などわかるはずもない。そんな事をわかつていたのか、ハリーファは全て自分一人で着付けてしまった。

故郷のアレー村では、鮮やかな色の絹の衣装をまとつた貴族を見ることは全くない。

ハリーファの髪や瞳の色は、ファールーク皇国の皇族としては異様なのだろう。だが、壮麗な衣装に身を包んだハリーファは、金色の髪と翠の瞳が映えて、それだけでヴァロニアで言つ『貴族』のようだ。

そして、ジョードの思つたとおり、衣装ではなくハリーファ自身が華やいで見えた。

その姿は、まるで姉が聞かせてくれたおとぎ話に出てくる王子のようだ。絹の衣装をまとつた金色の髪の王子様。異国の服だが、ジョードの想像していた姿が目の前に現れたかのようだつた。

ジョードはすっかり心を奪われて、ハリーファの姿を眺めていた。

「……すいへステキよ。皇子っぽくなつたわね」

ジョードの声が少しづつわざつた。

「馬鹿なこと言つな」

褒めたつもりだったのだが、ハリーファににらまれた上、あつさりといきめられてしまった。

「そんな事を言つのはお前くらいだ。呆れるな」

『なによー、せっかくほめてるつていつのにー。』

ジョードは不満な気持ちを表情と態度にあらわし、テーブルの上に運んできた食事の盆を手荒に置いた。

「そんなきれいな格好して。今日は何があるの？」

「成人の式典だ」

『……成人ですって？！』

ジョードはハリーファの年齢を知らなかつた。勝手に自分と同じくらいと思い込んでいて、今まで一度もそんな話をしたことはなかつたのだ。

「成人つて、ハリは今何歳なの？」

「12になつた」

ハリーファの年齢を知つて、二つの意味で驚いた。

「つまは、

「この国は12でもう成人なの？！」

「一つ目は、

『ハリはわたしよりも年下だったのね』

「男は12、女は10で成人だ。国じゃなくて宗教的にだけどな

「信じられない！ 10や12で成人だなんて卑すぎるわ」

クリスチヤンでは成人は男女とも16歳だ。ジェードにとつては12歳なんてまだまだ子供だという感覚が拭えない。ハリーファーは、口調、背の高さ、顔立ちから実際の年齢よりも大人びて見える。ジェードと同じか少し上くらいに見えた。

ハリーファーが12歳だと聞いて、途端にまだ随分子供なんだという気がしてきた。今までハリーファーに対して怯えていた事が、少しおかしく感じられた。

「宗教的にじやなかつたら、いくつで成人なの？」

「ファーリークの法では14だ」

ジェードはちょうど三ヶ月後に14歳になる。その時、13の忌年もようやく明ける。三ヶ月後に自分が大人になれているとはとても思えなかつた。

「この国は法よりも信仰の教義の方が守旧されているからな

「14だつて、やっぱつまだ子供よ」

ハリーファは腰布の端を詰め込み、服の裾や胸元を引っ張つて服を整えた。

「ならお前は何歳なら成人として認めるんだ?」

そう問われてジョードはクリスティンの16歳を思い浮かべた。だが、答えるよりも先にハリーファが口を開いた。

「クリスティンは16で成人だったな。クリスティンは禁欲主義者なんだろう?『禁欲』」

ハリーファが珍しくからかうかのように、いつもとは違う韻律でジョードの名を呼んだ。その韻律には聞き覚えがあった。ファールーク王国に連れてこられた頃、リューシャが同じ韻律でジョードの名を呼んだのだ。だが、ジョードにはその呼び方の意味する事はわからなかつた。

ハリーファがなぜ天使<sup>クリス</sup>を禁欲主義者と言うのか、すぐには理解出来なかつた。家奴隸達やシナーンから聞いた話をあれこれ思い出して、ようやくモリス<sup>クリス</sup>信仰が一夫多妻制だということに気付き頬が熱くなつた。ヴァロニアでは他の宗派は『異教徒』と聞かされ、教義はもちろんのこと、名前もろくに知らされないのだ。

モリス  
天使<sup>モリス</sup>信仰の成人の儀式とは一体どんなものなのだろうか? ジョード的好奇心がかきたてられた。

宗教的な儀式ではないが、ジョードの故郷のアレー村では、毎年成人を迎える男女を祝う小さな祭りが行われる。16歳は職に就いて四年目と言つこともあって、その祭をきっかけに結婚する男女も多かつた。

「ねえ。成人の式典ってどんな式典なの？」

「聖典を読み上げて、その後酒を口にするだけのつまらない儀式だ」

ハリーファの言葉の意味に反して、ジニーの目が輝いた。

「聖典って、モ里斯信仰の聖書のことなんだしよ~」

「わ~」

「ハリーが聖典を読むの？ 聞きたいわ！ ねえ、着いていいからいけないかしら？」

ハリーファは年下なのに、ジニーから無意識に兄達に頼み「」とをするような甘えた声が出た。

そんなジニーの態度をハリーファは全く気にも留めていない様子で、

「じつせすぐに終わるわ。まあ、着いてればいい

と言つと、素足に靴を履いた。

「行べー」

ハリーファはジニーが運んできた食事には目もくれず、ジニーを連れて礼拝堂へと向かつた。

\* \* \* \*

本宮への立ち入りを禁じられていたハリーファも、今日は中に入ることを許されていた。

建物を取り囲む回廊を渡り、本宮の入り口を入れると大きな丸天井のホールがあつた。見張りの兵士に先導され、ハリーファとジェードはホールの真ん中を歩いていった。

天を仰ぐと、夜空を見上げているような黒く大きく丸い天井が遙か頭上に広がっている。壁には幾何学模様を組み合わせた装飾が施され、床には色の違う大理石が紋様を描きながら敷き詰められた。その上に、黒と金を基調とした長い絨毯が、入り口からホールの奥へと続く道のように敷かれている。

ジェードは初めて目にするホールを見上げ、思わず感嘆の声を漏らした。

だが、ハリーファも兵士も無言のまま振り向きもせずに進んでいく。ジェードは慌てて二人を追いかけねばならず、天井の壮麗な装飾をゆっくりと眺めることはできなかつた。

ホールの奥まで行き着くと、そこにはレリーフの彫られた両開きの木の扉があり、片方が開いたままになつていた。扉の前で兵士に先を譲られ、ハリーファは黙つて部屋の中へと入つていった。ジェードは小走りでハリーファの後についていった。

礼拝堂とは独立した建物ではなく、本宮の一階のホールの奥にある小さな部屋のことだった。

ジョードが想像していたよりもずっと狭い部屋だ。すぐ外のホールが大きいため、余計に狭く感じられた。

扉を入ると、真正面には質素な造りの木の机が一つ。その下にくすんだ紅色の敷物が敷かれ、その上に古びた大きな本が置かれている。後方の壁際には扉の左右に、低い背もたれと肘掛けの木の椅子が四脚ずつ置かれているだけだった。

床や壁は一面、良く磨かれた灰色の石が張られていた。

礼拝堂の中はひんやりとしていて、普段全く感じることのない湿度をかすかに帯びていた。

礼拝堂には既に大人の男が三人居て、前方の机の脇に立つて話していた。

彼らはハリーファの姿を確認すると、三人共が恭しく頭を下げてきた。ジョードは、ハリーファに対しこういう態度をとる大人達を初めて目にした。急にハリーファの後に居るのが居心地悪く感じた。

二人が男達のそばに行くと、一番年配の白い服を着た中年男がハリーファに話しかけてきた。

「ハリーファ殿下。本日はお慶び申し上げます。ご立派になられましたな」

男の祝辞に、何故かハリーファの表情がいらだつたように見えた。続けて式典の流れを説明しだした男に、ハリーファは右手を上げて話を制止した。

「知っているから説明はいい。早く終わらせたいんだ」

「然様ですか。シナーン殿下の式典の時に同席しておられましたな。では、本日は、宰相殿とシナーン殿下と、ハリーファ殿下の乳母リューシャ殿、ハルダーン殿。それに、この書記官アンバーと、この歴史家イヤスが『証人』として立ち合い人となさせて戴きます」

まるで司祭のような姿の白服の男は、横に控えている壮年の二人の男をハリーファに紹介した。宰相と同じ位の年端の男一人が、それぞれハリーファに深く頭を下げた。

ジエードは郷里では、大人が子供に頭を下げたり、子供が大人に指図する光景など見たことがなかつた。今更ハリーファが高い身分にあることにはつきりと気づかされた。

《……だけど、わたしはこの国の民じゃないんだもの。関係ないわ！ 絶対ハリに服従なんかしないんだから》

ジエードは一人、自分の心を力づけた。

ハリーファはジエードに後ろの椅子に座るように指図した。ジエードは左側の椅子に静かに腰掛けた。ハリーファはその隣の椅子に座ると、少し怒ったような表情で腕と足を組んだ。

ハリーファが何故こんなに面白くなさそうなのか、その理由がさっぱりわからない。普通、お祝い事は嬉しいものじゃないのかしら、と隣のハリーファを見て、ジェードは心の中で首をひねった。

モリス信仰の成人の式典は男子のみ執り行われる。

聖典を詠唱し、それにならう誓詞を読みあげる。立ち会った六人の成人が『証人』となることで新成人として迎え入れられる。

ハリーファは今までにはなかつた第一皇子という立場のためか、六人の『証人』役もハリーファが宮廷に留められている事情を知る者ばかりだった。宰相の後継者であるシナーンとは違い、式典自体も公にされず、つましく執り行われるようだった。

しばらくして、ジャファルとリューシャ、そして老人が連れ立て入ってきた。先に居た男達はまた恭しく頭を下げた。

ジャファルとリューシャは右手の椅子に腰掛けた。最後に入室してきた老人は、一度同じように椅子に座つたが、礼拝堂内を見回すと前方に居る三人の男達の方に歩み寄つた。

老人はしづかれた声で白い服の男に話しかけた。

「イマム宗教家殿よ。もう、全員揃っているのか？」

「ハルダーン殿、シナーン殿イマムが参られれば整います」

イマムと呼ばれた白服の男は、老人に向かつて少し困ったように答えた。

先に礼拝堂に居たアンバーとイヤス、そしてジャファルとリューシャとハルダーン老。それにシナーンを含めると六人になる。だが、シナーンはなかなか礼拝堂に姿を現さなかつた。

書記官は宰相を待たすことを良しとせず、ジョードの方を見て宗教家に告げた。

「イマム殿、ハリーフア殿下の女奴隸ジャーリアをシナーン殿下の代わりに『証人』に出来ないのか？」

「殿下の女奴隸はクリスチヤン教者だと聞いている。彼女はモ里斯信仰での成人とは認められん」

宗教家はハリーフアのそばに行くと、そつと告げた。

「殿下、シナーン殿下が来られるまで今暫くお待ちください。そしてどうか、式典の間は、女奴隸ジャーリアにはご退室を」

宗教家にそう言われ、ハリーフアは隣に座るジョードに告げた。

「ジョード、お前は外で待つていろ。聖典詠唱を聞きたいなら外で

も聞こえる「

ハリーファにそう言われ、ジョードは黙つて立ち上がると、礼拝堂を出ていった。

ジャファールは礼拝堂を出て行くジョードを見て、隣に座っているリューシャに耳打ちするように話し掛けていた。二人はジョードの事を何か話していたが、その声は周囲には聞こえなかつた。

ジョードは礼拝堂を出て、入り口の扉の前で一人佇んでいた。

（シナーンもここに来るのね……。会つたら、何て言えばいいの…

⋮？）

以前、ハリーファが神魔に憑かれているかを確かめるようにシナーンに言われ、瑠璃色の小瓶を渡された。シナーンは本当にハリーファは神魔に憑かれていると疑っていたのか。それとも自分がからかわれただけだったのか、良くわからない。

そのことを考へると嫌な気分になつた。だが、ふとホールの天井を仰いだ瞬間、途端に悩みが心の中から姿を消した。

漆黒と紺の濃淡で美しく彩られた夜空が頭上に広がつていった。そこには星の形に似た複雑な模様が規則的に散りばめられている。そして、屋根と壁との境には薄緑、橙、赤、黄などの色付きガラスの飾り窓が、丸い天井を縁取るように埋め込まれていた。そこから光がホールに優しくあふれ、ホールを心地よい明るさに照らしていた。

(ランスの、聖ソフィア大聖堂も、こんな感じなのかしら……)

ジョードは夢見じこちで天井を眺めた。

噂でしか聞いた事のないヴァローナ王都の大聖堂の姿を思い描く。さつきはゆっくり見ることが出来なかつたホールを、今度はじっくりと心ゆくまで眺めた。

燐爛たる天井を見上げて、ジョードは胸をふるわせた。

絨毯の道を歩く衣擦れの音に、ジョードは我にかえつた。

美しく着飾つた一人の女奴隸がジョードの前を横切つた。一人は透明硝子のグラスを乗せたマホガニーの丸い盆を持ち、もう一人は茶色の細長いビンを抱えている。ジョードの存在などまるで居ないかのように無視し、二人は礼拝堂へと入つていつた。

程なくして、先ほびビンを持ってきた女奴隸だけが、一人礼拝堂を出て去つていつた。

前ぶれなく、謳つよつに演説する声が聞こえてきた。

先ほどの司祭のような白服の男の声だ。ジョードにとつて耳慣れな韻律の詞は、まるで不思議な音楽のようだつた。  
続いてハリーファの声が聞こえてきた。

モリス信仰の聖典を朗読しているのだろう。聖典は感情をこめず  
に延々と読み上げられている。その響きは教会で朗読される聖書と

同じように、耳ではなく胸で聞き、頭で思考するのではなく心で受け止めるもののように感じられた。

ジョードは礼拝堂の入り口近くの段差に腰掛けた。膝を抱えて目を閉じ、礼拝堂の中から聞こえてくるハリーファの声に耳を傾けた。

聞こえてくる内容は、天上の楽園に暮らすリダーとアズルという男と女の話だった。人物の名前が少し違うが、ジョードの知っているクライスの聖書に収められた話にも似た一説があった。

朗々と聖典を読み上げるハリーファの声を聞きながら、ジョードは聖地に忘れてきました聖書のくだりを頭の中で反復した。

文字は読めなかつたので、その内容にあわせて刷られた白黒の版画を頭の中に思い描いた。

- 『 壁の向こうにあるという楽園
- 壁を挟んで別の世界に暮らしていたリダーとアズル
- 蛇の誘惑に負けて扉を抜けるアズル
- 反対側の世界の物を食したことで、元の世界に戻れなくなつてしまつ 』

聖書には、向かい合つて壁に手を添える男女。  
そして、一人を阻む壁の上には黒い肌の悪魔の姿が描かれていた。

礼拝堂の中では、ハリーファの詠唱は延々と続いていた。  
机の手前に宗教家が立ち、ハリーファは宗教家と向かい合い、「  
証人」達の居る後方を向いて立っていた。

初めハリーファは机上の聖典の上を目で追い、読みながら一度だけそのページをめくつた。読み進むにつれて、ハリーファの視線は徐々に聖典から離れ、空ろな瞳で礼拝堂の入り口を見つめていた。

ジャファルは椅子に肘を突いて腰掛け、ハリーファが聖典を詠むのを眺めていた。しばらくして、息子が机上に広げられた聖典を見ずに、暗唱していることに気付いたようだった。

「アレに聖典を覚えさせたのか？」

ジャファルは顎でハリーファを指し、憮然とした面持ちで左隣に座つたリューシャに問いかけた。

「……え、ええ」

（……わたくしは教えていないわ……。ハリーファ様……、一体いつの間に聖典などお覚えになつたの……？）

「ふん」

リューシャは不機嫌そうなジャファルから、逃れるように身体ごと顔を背けた。その時ふと左手を見やると、先ほどグラスを運んできた女奴隸の姿が目についた。なかなか礼拝堂に現れないシナーンの代わりに、式典に参加するよう引き止められた女奴隸だった。色鮮やかな布で髪を巻いていたが見覚えがある顔だった。

(あの女奴隸は……。シヒーラ様の女奴隸? どうしてハリーファ様の式典に?)

式典の途中だったが、ジャファルの隣に座っていたリューシャはそっと席を外した。

遙か昔に、ユースフはモリス信仰のこの儀式を経験していた。

複数の宗派を認めているファーレーク皇国では、婚姻の際に男女の信仰を同じ宗派にする習わしがある。そのため、ユースフはエブラ信仰からモリス信仰に改宗したのだ。

宗教的な儀式というのは一百年経とうともなんら変わらなかつた。それだけではない。執り行われるこの礼拝堂も、一百年前と何も変わつていなかつた。

昔、何度も聞いてそら覚えしてしまつた聖典のぐだりを詠唱しながら、ハリーファは幻覚を見た。

礼拝堂の後ろに座る『証人』達が、ウバイド皇国時代の若き王サーリムやシャーミールの姿にかわり、やがて消えていった。

ハリーファはひとくだけりの詠唱を終えた。

机上に開かれた大きな聖典を閉じる音が、静まり返っていた礼拝堂に響いた。

続いて、宗教家はハリーファに向かつて歓待の辞を述べた。そしてハリーファの目の前で、用意された儀式用の透明のグラスに茜色の葡萄酒を注いだ。

モリス信仰は飲酒が禁じられているため、酒を口にするのは生涯でこの儀式のたつた一度だけである。それも、葡萄酒は火にかけられ酒氣はほとんど飛ばされたものだった。

「聖者モリスは貴方を成人と認めました。貴方の父ジャファル・アル・ファールーク、そして六人の先達が汝を成人として歓迎し導きます。貴方にもモリスの血が流れることでしょう」

葡萄酒の入ったグラスがハリーファに丁重に差し出された。ハリーファは片手でグラスを受け取った。儀式の直前に酒氣を飛ばした葡萄酒は、まだ生ぬるく本当に人の血を思い出させた。

ハリーファがそのグラスを口にしようとした時だった。

「お待ち下さい！ ハリーファ殿下！」

割つて入ってきたのはリューシャだった。その横に外で待っていたはずのジョードが、手首を捕まれて連れられていた。

「……乳母上？ ジョード……？」

ハリーファは驚いて二の方を見やつた。

ジャファルもまた、リューシャの思いがけない行動に背筋を伸ばしその様子を眺めた。

「ハリー・ファ 殿下。わたくし、殿下の女奴隸に一つ教え忘れていたことがあります」

厳しい口調で言い放つと、ジョードを半ば引きずり連れて、正面の机の横までやってきた。

リューシャはジョードの手首を引っ張って、ハリー・ファの傍に立たせた。

『……痛い……』

ジョードは冷徹な表情のリューシャに戸惑いながら、解放された手首を反対の手で押さえた。

「あなたはハリー・ファ 殿下の奴隸なのです。己の主人が口にするものは、全てあなたが先に口になさい」

リューシャはハリー・ファの手から葡萄酒の注がれたグラスを奪うように取り上げると、それをジョードに突きつけた。

『ハリー・ファ様、このワインには毒が入っています』

「…………」

リューシャの心に叫ばれ、ハリー・ファは思わず声を漏らしそうになつた。

「乳母上、お止め下さいー！」

ハリーファは慌てて二人の間に割つて入った。毒入りの葡萄酒を飲んでジェードが死んでしまっては、アルフェラツに会う事が出来なくなってしまうかもしね。

リューシャは心の中でハリーファに語りかけてきた。

『ハリーファ様、どうか邪魔をしないで！ 貴方様を死なせては、わたくしは宰相様の御傍には居られないのです』

リューシャはグラスをジェードの顔の前に突きつけ、促すようにじっとジェードをにらみつけた。

「まあ！」

リューシャの強引さに、ジェードは立ち尽くしていた。目前で波打つ血のような葡萄酒とリューシャの形相に、何か良くない事を感じ取つたようだつた。ジェードは眉尻を下げ怯えたようにリューシャを見上げた。

『ハリのために毒味をしろつてこと？ 一二にド、他にも誰かがハリを殺そうとしているの？』

『ハリーファ様が生きていれば、この女奴隸など死んでも構わないわ！』

ハリーファにしか聞こえない声が一人の心から聞こえてくる。

リューシャがジェードに突きつけていたグラスの中の葡萄酒は、ゆらゆらと螺旋を描くように波立つた。

ハリーファガ間に入つてもお構いなしに、リューシャは更にジードに詰め寄つた。

なみなみと注がれていた葡萄酒は、ジードの顔の前で大きく波打ちグラスを飛び出した。真紅のうねりがジードの口や首、そりに胸元を濡らした。

「きやつ……」

その一瞬、ジードが顔をしかめた。

服の上に着けていた聖十字のペンダントも葡萄酒を浴びてしまった。ジードの着ていた白い服は胸元が赤く染まり、銀色だつた十字架は真っ黒に変色していた。

《やはり…?》

リューシャは皿を吊り上げて、ジードの胸元のペンダントをむしり取り、それをにらみつけた。

何事かと席を立つて近づいていつた歴史家のイヤスは、リューシャの手元を覗きこんだ。

「どうしてじだー 酒に毒が入つているぞー…」

「なんと……。一体誰がこんなことを……」

リューシャヒジードのやり取りをすべて見ていた宗教家も顔色イマツを失つた。

「静肅に！ 式典は中止じや。皿を改めなさい」

老人は椅子から立ち上がり、宗教家達の元へと歩み寄った。ジャファルは眉間に皺を寄せ席を立つた。

「……誰の所業か早急に調べろ」

静かに怒りを含んだ声で近くに居た書記官に告げると、踵を返し一人でさっさと退室してしまった。

「ハリーファ様はお部屋へお戻り下さりませ。ジョード、あなたはわたくしと一緒に来るのよ」

リューシャは困惑するジョードを引き連れると、礼拝堂を出て行ってしまった。

宰相と、その女奴隸が礼拝堂を去ると、つかの間礼拝堂が静まり返った。やがて歴史家や書記官が机の前に集つてざわめきだした。

「……ハリーファ殿下。殿下は相当強い天使の御加護を受けておられるようですな。先の誘拐の時といい、今回といい……。貴方は運の強い御方だ。何度も命を救われておられる」

呆然として立ち尽くすハリーファに宗教家が言った。

(いや、俺じゃない……。天使の加護があるのはジョードだ……)

ハリーファが礼拝堂を出るとシナーンと出くわした。シナーンはハリーファとは対照的な緋色の服を纏っていた。

「ハリーファ。今しお、父上が随分ご立腹のようだったが。何があつた？ 私が遅れた所為なのか？」

「酒に毒が入つていて式典が中止になつた」

「毒だと？ 一体誰が……」

ハリーファの答えにシナーンは驚いた表情を見せた。

『ジョードか？ まさかな……』

シナーンの態度を一見不自然に感じた。だがシナーンの心の声に、ハリーファは自分の勘が外れたことを悟つた。昔に比べると随分勘が鈍くなつてしまつた気がした。

「愚者の毒だ。儀式用の酒に毒を入れられる人物なんてすぐに判る

「……そうか。大禍なくて安心した」

シナーンはハリーファにそう言つと、礼拝堂には入らず踵を返してハリーファの前から去つていつた。

ハリーファもそのままホールを抜け本宮を出ると、【王の間】へと戻つた。

\* \* \* \*

リューシャに連れられ礼拝堂を出たジョードは、ホールの壁の模

様と同調の一見ではわからない扉を抜けた。

扉の裏側はホール横の廊下に通じていた。その奥に本宮への階段がある。

何ヶ月も前に、リューシャに連れられてその階段を重い足取りで逆に下つた事を思い出した。二人は廊下を歩み奥の階段を上つていった。

以前と逆の道をたどり、リューシャはジョードを自分の部屋に黙つて招き入れた。

部屋の奥にもう一つ扉があり、リューシャはそこから一着の服を手にして出てきた。

「これにお着替えなさい」

手渡された服は絹糸で模様が刺繡された孔雀色の豪華な衣装だった。

「わたくし事にあなたを巻き込んだことはお詫びするわ」

以前に比べ、リューシャは穏やかさが無くなり口調は冷たかつた。言葉では詫びているようだったが、ジョードにはその心は感じられなかつた。

「あなた、天使に助けられたわね。わたくしは天使など信じていな  
いけれど」

ジョードは突然の出来事にいまだ困惑していた。

聖十字のペンダントをしていなかつたら。もし葡萄ワインを口にして

いたら……。自分は死んでいただろう。

そう気付いたとたん、にわかに血の気が引いた。リューシャに殺されそうになつたのだ。手足がガクガク震え持つていた衣装が手から滑り落ちた。

(二)の人はわたしを殺そうとしたの?)

命を奪われそうになつた事に足がすくんだ。

リューシャが自分を殺そうとしたのは、ハリーファを助けるためだつたと事實を歪曲せずにいられなかつた。

「……ハリを助けるためだつたんじょ……？」

ハリーファを助けるために、ああするしか無かつたのだとthoughtた。だが、

「そうよ。ハリーファ様が死んでしまつては、宰相様がお怒りになるから」

「でも、あなたはハリの乳母なんじょ?」

ジョードはリューシャの美しい表情が曇つたことに気がついた。

「わたくしは乳母と言つ『役目』はもつ十分に果たしたと思つているのだけど」

そう言われ、ジョードは何も言い返せなかつた。

真つ直ぐな視線を向けるジョードの心の内をくんだのが、リュー

シャは続けて語りだした。

「自分の子ではないのに本気で愛せるとでも思つていいの？」

一夫一妻制のヴァローニアでは、父親のいない子供もたくさんいた。妾の母の元を離れ、父親の元で暮らす子供もいたが、大抵継母とは仲が悪いと聞く。

自分の子じゃないのに愛せるわけなど無い。

その言葉はジエードでも十分理解できるものだつた。

「そうね。ハリーファ様を我が子のように思つた時もあつたわ。でもきっと有り得ない幻想を楽しんでいただけ。結局それは偽りで、わたくしは女奴隸でしかないということ」

衣装を拾いもせず突つ立つてゐるジマーードに、リューシャは諭す  
ように語つた。

「あなたがハリーファ様に抱かれるようになればわかるかもしけないわね」

リューシャはそう言つたが、少し考えて言い直した。

「いいえ、やっぱりあなたにはわたくしの気持ちは一生わからないわね。あなたは宰相付きではないのだから」

以前リューシャから感じた『母』の雰囲気は全く無くなっていた。今ジョードと話しているのは同じ『女奴隸』だ。

「天使様を信じていないなんて。信じられないわ……」

ジーハードは、ポツリと呟くように言った。

リューシャは宰相との関係で、モリス天使の教えに逆らっている。だからそんなことを言つただろうか。

「わたくしは宰相様の為なら死ぬことも厭わないわ

天使信仰では自殺は禁忌の一つとして教えられる。

死ぬことを厭わぬというリューシャの意思是、まさしく天使を信じていないということを表していた。

「……宰相はあなたが死んだらきっと悲しむわ

「あなたみたいな若くて美しい娘には、まだわからないわね

「わたしは美しくなんかないわ……」

そう言いながらジーハードは少し伸びた髪をいじった。

誰が見ても本当に美しいリューシャに、そんな風に言われても納得出来るわけがない。からかわれている訳ではないのだろうが、何が言いたいのかわからなかつた。

「わたくしはね、宰相様になら殺されても構わないのよ

（宰相に殺されても良い……？　それは宰相を……『愛している』つていうことなの……？）

殺される　などと不穏な言葉だったが、不思議とその言葉に隠

された想いをジーハードは感じじむことができた。

ジーハードは黙つて、リューシャの田の前でもたもたと汚れた服を脱いだ。

渡された服を羽織ると、リューシャが櫛を手にしてそばにやつてきた。後ろからジーハードの乱れた髪を櫛で整え、耳にかぶさついて髪をするりと耳にかけた。

「あなた、まだ気付いていないのね。ハリーファ様のこと」

ジーハードを眺めながら、リューシャが独り言のように呟いた。ベッドのそばの瓶にこぼれるように活けられたピンク色の花を手折ると、ジーハードの髪に飾った。

「あなたは、ハリーファ様を利用しようなんて考えないで愛せるかしら?」

「利用つて……。どうこうこと?」

ジーハードは思わず聞き返した。

「着替えたらわざと出で行って」

リューシャの心がわからぬまま、ジーハードは部屋を後にした。

ジーハードは足早に階段を下つた。

扉を抜けると、もうホールを見上げることもなく、まるで逃げるかのように【王の間】までの道のりを急いだ。

(わたしが気が付いてないって、何?)

ハリーファが言つていた通り、リューシャの行動は宰相の為である事を、リューシャ本人の口から聞いてしまった。

リューシャまでもがハリーファの立場を利用しようとしていたのかと思つと、悔しくて唇をきゅっと噛んだ。

(リューシャさんはハリの味方だと思つていたのに……。違うの?)

この宮廷にはハリーファには誰も味方が居ないのだろうか。ジードは自分自身もハリーファの味方ではないことを棚に上げて、目に滲んできた涙をぬぐつた。

\* \* \* \*

ジードが【王の間】に戻ると、ハリーファはその姿を見て驚きの声をあげた。

「皇族付きの女奴隸っぽくなつたじゃないか」

「……馬鹿な」と言わないでよ

ジエードが朝のハリーファと同じ台詞を囁つと、ハリーファは少し笑つた。

ハリーファは珍しく興味を持ったのか、惹きつけられるようにジエードをじつと見つめてきた。不思議と大人びた優しい目をしている。身動きもせず着飾つたジエードから目を離さなかつた。

「随分綺麗だな」

「リューシャさんのだもの……。とても上等なものだわ」

「服の」とじゃない。お前だ

ジエードは思わず胸が高鳴つた。ハリーファの言葉にくすぐつたい気持ちになる。深い翠色の視線がジエードの頭から足先へと動き、顔が熱くなるのを感じた。

ジエードは慌てて両手で胸元を隠し、ハリーファから目をそらした。リューシャの身体に合わせて仕立てられた衣装は、胸の辺りがジエードには大きかつた。

「孔雀の狭衣を纏いし黒曜石の瞳、春宵の髪に聖地の花、か。まるで『アルフライラ千夜物語』の麗しき女のようだな」

ハリーファの言葉は、淡々と聖典を詠んでいた時とはまったく違う。物柔らかな口調だった。いつもと態度の違うハリーファの言葉に、ジエードは身体が熱くなつた。

「その色には黒い髪が映えるな」

黒髪のことを言わると、さっきまで上気していた心が少し冷めてしまった。

「アルフライラのサフワって何？」

「話上手で夜伽上手な女だ」

「なつ……」

ジードの顔が真っ赤に染まった。さっきまでの胸の高揚が不快感に覆われていく。

『あなたがハリーファ様に抱かれるようになれば なんて……』

リューシャの言葉をふと思いつ出して、振り払つよつて頭を横に振つた。

「こんなのは、わたしには似合わないわ！」

ジードはそのまま応接を飛び出と、奥の部屋へと着替えに行つた。

ジードは着替えをすますと応接に戻つてきた。

朝に運んできた食事がそのまま置かれたままだった。器に切り分けられみずみずしかった果物も、表面は乾き潤いをなくしていた。

ハリーファが食事に手を付ける様子はなきれいだった。ジョードはまだ少しふくれたまま片付け始めた。

わざのハリーファとのやりとりで、殺されそうになつたことの恐怖はどこかへ消えてしまつたようだ。

最後に言われた言葉に思わずむづとしてしまつたが、今までお世辞でも男から綺麗だなどと言われたことはない。ハリーファが嘘を言わなことを思い出して、また胸の辺りがこわばゆくなつた。

ちらりとハリーファの方を見た。ハリーファは式典の服を着たまま椅子に座つて、つまらなうにジョードの様子を眺めている。気まずせに耐えられず、ジョードは口を開いた。

「わざわざリューシャさんのおかげで命を助けられたわね」

「ああ、代わりにお前が殺されそつになつたがな」

明るく言つたはずなのに、仏頂面で返されてしまった。

「そんな……。どうしてそんな言い方するの？ ずっと育してくれた乳母なんでしょう？ ママみたいなものじやない」

「俺が死ねば、リューシャは宰相の傍に居られなくなるからだろ」

ハリーファの言葉に動搖が隠せなかつた。自分が黙つていれば良いと思っていた事に、どうして気が付くのだろう。ハリーファの気持ちを考えずに口走つてしまつた事を後悔した。

「乳母になつたことも、リューシャにとっては全て宰相の為だ。リ

コーチャは父上の妻になることも、子を産むことも許されない。ただの母子じこだ。それも俺が12になつた時点でもう終わりだ

リューシャと同じ事を言うハリーファに、ジョードは悲しみと怒りがこみあげてきた。

「そんなことないわよー。ハリを本当の子供のようと思つてたって言つていたわ！ どうしてリューシャさんを信じしないの？」

「お前も自分で言つていただける。『信用しなければ裏切られない』と

自分でも忘れていたようなことを、ハリーファに覚えられていたことが恥ずかしくなつた。あれは苦しまぎれのいいわけだったのに。

「裏切られたくないから他人を信用しないの？ 信用していなければ裏切られても平氣だつて言うの？」

ジョードがかすかに涙声で呟いた。

「そんなのおかしいわ」

眉を寄せハリーファをにらみつけた。

「リューシャはあの葡萄酒に毒が入つていて勘付いていた。それでお前を俺の身代わりにしようとしたんだ。お前が殺されそうになつたんだぞ」

ハリーファの言つとおり、礼拝堂でハリーファがリューシャを止めしてくれなれば、自分は死んでいたのだ。

それでも、何故かリューシャの事を恨むことはできなかつた。リューシャが宰相を愛する気持ちを聞かされたせいだ。それにハリーファのことを話すときの、リューシャの曇つた表情が気になつて頭を離れない。

きっと心が読めれば、リューシャが本当はどんな気持ちでいたのかわかったのではないだろうか。

「……ハリは誰のことも信用していないのね」

「お前は俺を裏切らないのか?」

ジョードは返す言葉に詰まつた。

自分の天命はハリーファを殺すことだ。ハリーファの言葉は、リューシャもジョードも信用できないと聞こえた。殺されそうになつた恐ろしさを理解したはずだったのに、信じてもられないことがとても悔しく思えた。

ハリーファは苦々しい表情で言葉を続けた。

「リューシャだけじゃない。……俺は、唯一信じていた男にも裏切られた。その男の所為でこんな所に閉じ込められて……」

「でも! 本当に裏切られたかどうかなんて、その人の心でも読めないとわからないじゃない!」

ジョードの言葉にハリーファは何か言おうとしたが口をつぐんだ。だが、ジョードは言葉を続けた。

「何か言えない訳があるのかも知れないわ！」

「黙れ！ それがお前の答えか」

「ち、違うわ……」

『わたしは……、天命じゃなければ、ハリを殺したくなんかな  
いのよ。それに、』

『奴隸はこの国では【身内】なんじょ？ わたし、最初は奴隸な  
んて嫌だつて思つたけど……』

『私の國の奴隸とは意味が違つ。家奴隸の友達に教えてもらつ  
たわ。他人同士が家族になるんだつて……』

ジョードは悔しくなつて、途中で言葉を飲み込んだ。

ハリーファとは【身内】になれない。  
自分の思いと天命とが矛盾して、どうしたら良いのかわからなか  
つた。

『でも、リューシャさんは違うわ。愛は疑わないこと……。家族を  
信用しないなんて、家族を疑うなんてそれこそ『罪』よー』

心中でハリーファに対して怒りと悲しみをぶつけた。するとハ  
リーファが突然激しく反発した。

「『疑うこと』が『罪』だとー？」

ハリーファが初めて声を荒げた。怒りの形相でジョードの胸座を

掴んだ。

「だからお前を信用しろとも言つのか！？ 僕を殺さうとしている奴を一体どうやって信用しろって言つんだー。」

「…………知つてたの？」

『ハリを殺さないといけないことを…………』

ジエードは急に田元が熱くなるのを感じた。苦しそうに喉を詰まらせた。

「…………やつぱり…………人の心の中を見透かしているのね」「ね」

「血の繋がった家族だって信用ならない！ 父上も、シナーンもだ！ 奴隸達の考えてこい」とだつて俺はわかっている！

リューシャには巧く利用されて、あげくにお前を殺されそうになつた！ お前がどんなにリューシャを信じよつと、俺には『お前は死んでも良い』といつリューシャの心の声が、あの時はほつきりと聞こえていたんだ！」

ハリーファに胸座を掴まれ、ジエードは引き寄せられたまま涙をこぼした。

「今まで全部聞こえていたのね

たつた一人の【身内】であるジエードは、ハリーファの命を狙つている。ジエードは今まで何度もハリーファに不穏な思いを向けた。本当の身内である宰相やシナーーンは、ハリーファに対してどんな

思いを向けているのだろう?

そんなことを想像すると涙がぽろぽろとこぼれて止まらなくなつた。

ハリーファに突き放され、ジョーダは床に座り込んだ。

「それでもお前はリューシャを信じられるのか?」

はき捨てるように言つハリーファに、ジョーダは黙つて少しずつなずいた。

「お前は、リューシャに殺されそうになつたのに……。何故そこまでリューシャを信じられるんだ?」

「だつて……わたしはハリみたいに人の心がわからないからよ。」

ジョーダは涙で声を詰まらせた。

『……父の肩を持つ訳じゃないが、一国の宰相ともなれば相当な苦惱もある。それは宰相の女奴隸だつて同じだ。お前なんかに解かるわけない』

以前、そう言つたハリーファの言葉の意味が、今は少しわかるよう気がした。

『リューシャさんはきっと宰相への愛で苦しんでいるのよ……。『宰相の女奴隸』じゃないわたしがわかるわけないじゃない……』

「裏切られる事になつても信じられるのか?」

「信じるしかねじれない……」

「こながりジョーハはまたひたすました。」

## 公正化されたもの（証書版）

閲覧ありがとうございます。m(ーー\*)m  
6/22に若干改稿しました。

## 公正といつも

強い日の光が大理石の床に朝から濃い影を作っていた。

宰相の部屋では女奴隸達が食事の片付けをしている。昨日の式典での出来事は彼女達の耳には入っていないようで、いつもと同じゆつたりとした空気が流れていた。

シナーンは父親に呼び出され、ジャファルの私室へと向かっていた。階段を上がり長い廊下を一人颯爽と歩きながら、シナーンは父親の用件について考えた。

ハリーファの式典での事であるのは間違いない。葡萄酒に盛られた毒の一件だろうが、自分が式典に遅れたことにも腹を立てているのではと思うと気が重くなつた。

父親の部屋に着くと、奴隸達は全員部屋から追い払われた。整然と片付いている室内にはジャファルとシナーンの二人だけになつた。ジャファルは籐で編まれた大きな椅子に腰を掛けっていた。嫡子であつても、宰相の私室に呼ばれることはほとんどない。シナーンは目だけを動かして、宰相の私室を見回した。

ジャファルはいつもと変わらぬ厳しい口調のまま、少し離れてたたずむシナーンに語りかけた。

「昨日の件はお前の母の所業だったようだ」

ジャファルは唐突に簡潔な言葉で、昨日の犯人の名を告げた。

父親の声音から、シナーンはジャファルが腹の中に抑えている怒

りを感じ取った。慌てて腰を落とし両膝を床に着くと、ジャファルに対して深く頭を下げた。

「母の愚かな行為をお許しください」

「ハリーファが死んでいたら只事では済まさなかつた」

頭を下げたまま動かないシナーンを見て、鈍い怒りの声も静まつていったようだつた。

「もう良い、顔を上げよ。リューシャもハリーファも、金の髪は人の心を惑わす魔性の色だ。ショーラも惑わされたのである」

父の言葉に従いシナーンは顔を上げ、床にひざまずいたままジャファルを見あげた。

「シナーンよ。そなたはハリーファの事をどう思つ?」

「……どう、とおっしゃられますと?」

「お前は、何故アレを宮廷に留めているのか考えたことはあるか?」

シナーンは何も答えなかつたが、ハリーファが養子に出されない理由を考えない日はなかつた。

自分とハリーファに対する父親の明確な態度から、宰相の後継争いになるとは思えなかつた。そのため、父は気に入りの女奴隸をそばにおくためにハリーファを利用しているのだろうとシナーンは常常思つていた。

ジャファルがゆっくりと口を開いた。

「歴史家からファーリーク皇家の【王】のことを聞いたか？」

「【王】と言つて、聖地を我が国のものにした始祖ユースフの事ですか？」

ファーリーク皇國では王位は一代しか続かなかつた。ユースフと、そしてその実弟のアーディン。それ以降はアーディンの息子が世襲宰相となり國を治めてきたのだ。

「そうだ。ハリーファはその【王】なのだ」

「……は？」

シナーンは一瞬言葉につまつた。

「ハ、ハリーファが【王】とは一体どういう意味ですか」

「狂人の話は知つているのか？」

「……はい。二十年ほど前に亡くなつたと聞きましたが……」

シナーンやハリーファが生まれるより前に【王の間】に捕えられ、そこで死んだ老人のことだつた。

「【王】は悪魔と契約し、止むことなくこの地に甦る魂を持つているのだ。狂人も【王】だった」

「悪魔と、契約……？」

シナーンは父の言葉の初めが気に掛かり、つぶやくようごくりかえした。

「今、【王】の魂を持っているのがハリーファだ」

信じがたい言葉の数々に、思わずジャファルをにらむけつに見えた。

「しかし、何故ハリーファが【王】だと分かるのです？ 何かの間違いでは？」

「ハリーファの右頬の傷痕。あれは初代の宰相アーディンが【王】につけた聖痕だ」

「聖痕……」

確かに、物心つく前から毛色の違う異母弟<sup>ハリーファ</sup>の顔には、薄い傷痕があつた。ファールークの血筋とは思えないほど真白な頬には一筋の古傷の痕がある。

しかし、それだけではハリーファが【王】だとは納得出来なかつた。シナーンの顔にはっきりと疑念が浮かぶ。そんな息子の様子に、ジャファルはさらに語りかけた。

「シナーンよ。そなたはハリーファしか見ていないからそう思うのだ。私は三人の【王】をこの目で見た。<sup>マジュメン</sup>狂人、ルクン、そしてハリーファだ。三人共に聖痕があつた。ルクンは狂人が死んだ時に生まれ、ハリーファはルクンが死んだ時に生まれたのだよ」

「それがハリーファを宮廷に留めている理由なのですか……？」

ジャファルは椅子からゆっくり立ち上がり、部屋の中を悠然と歩き出した。ジャファルが横を通り過ぎると、シナー<sup>ン</sup>は静かに立ち上がり父親を田で追つた。

「……悪魔と契約したのは【王】だけではないのだ。ワジル宰相も悪魔と契約を交わしたのだ」

「宰相も……？」

シナー<sup>ン</sup>は背後に回った父親を追つて、その場で身体の向きを変えた。

ジャファルはシナー<sup>ン</sup>に背を向けたまま言葉を続けた。

「宰相は聖地を我が國のものにと願つたのだ。そして悪魔によフアールークつて、【王】をこの宮廷に留めておくことを条件に出された。【王】をここに留める限り、聖地オス・ローはファールークのものであります」

続ける

背を向けていたジャファルが振り返つて息子を見つめた。

「私の言つことは滑稽か？」

「い、いえ」

にわかには信じがたかったが、何故ハリーファが王宮に留められたのか、父が愛情を掛けなかつたのか、それなのに、頑なに命だけは守りうとするのか。そういう疑問がすべて符合した気がした。

「私は子が【王】であることを不幸だと思つたが、【王】と兄弟に生まれたそなたは不憫だな。……これも神殺しの兄弟の呪いなのか」

ジャファルの言葉がシナーンの耳をすり抜けていった。

「シナーン、あの賦國<sup>ガラフ国</sup>の娘は都合良い。奴隸として働かせ、少しでも長くハリーファを生かしておければそれで良い。私はもうファー ルークの者を【王】に関わらせたくないのだよ」

シナーンは美姫と讀えられた伯母レイリの話を思い出した。レイリはかつて【王の間】に捕らえられていた狂人<sup>マジュヌーン</sup>の子を産んで命を落としたと聞かされた。そしてその子供がハリーファの母親フアティマなのだと。ジャファルが【王】に誰も関わらせたくないと言つのは、おそらくそういう経緯を見てきた所為なのだろう。

「シナーンよ、そなたも今までどおりハリーファには深入りをするな」

「……しかし」

「お前たちは兄弟なのだ。情が沸いては不都合だ」

「そのような心配には及びません」

「そうか？ ならばこれはもうお前に渡しておこう」

力チンと音を立てて、銀色の鍵が大理石のテーブルに置かれた。本宮にある部屋や倉庫の鍵とは形が違う。一体何処の鍵なのかと不振に思いながら鍵を眺めた。

「【王の間】の鍵だ」

ジャファルの言葉にシナーンはハツとし鍵を手に取った。手から  
はみ出すほどの大きさで重みのある鍵を握り締める。シナーンは作  
り事のよつた宰相の慣習を引き継いだ事を自覚した。

だが、シナーンはまだ父の言葉に納得できないものがあった。異  
例だという第一皇子の存在に対し、ずっと疑問を持ち続けていたこ  
とだ。

「……父上、失礼なことをお聞きして宜しいでしょうか？」

「なんだ」

「ハリーファは……私の本当の弟なのですか？」

ハリーファだけが、あまりにもファールークの血を引くものと似  
なさ過ぎる。ハリーファを産んだ母ファティマも他界しており、真  
実を知る者は少ない。

「どういう意味だ」

ジャファルの声は怒氣を含んでいた。

「……私達兄弟はあまりにも似ていないので……」

シナーンは言い辛そうに言葉を濁した。ハリーファを宮廷に留め  
ておくために、他人の子を第二皇子だと偽っているのならばまだ納  
得がいく。シナーンはずつとハリーファの父は別人ではないかと疑  
つていた。

ジャファルは、眉間の皺をさらに深くすると、シナーンをにらみつけた。

「迂闊なことを口にするな。ハリーファは私の子だ」

ジャファルは微塵も迷うことなく、はつきりとそう答えた。  
そして、押し黙つたままのシナーンを置いて、自分の部屋から立ち去つた。

ジャファルが自室を出ると、部屋の前で待機していた白人の奴隸はジャファルの後を追つていった。女奴隸達が宰相の部屋の中へと戻り、入れ替わるようにシナーンが廊下へと出てきた。

シナーンは立ち去つていく父親が見えなくなるまで、その背中を目で追い続けた。

『ハリーファは……私の本当の弟ですか？』

廊下を歩くジャファルの脳裏に、シナーンの言葉がよみがえる。

(……私以外の他に、一体誰がアレの父親だと言つのだ　　)

ハリーファの母ファティマと、そのファティマの父親狂人は亞麻マジュメーン

色の髪に翠色の眼をしていた。ハリーファは祖父と母の金色の髪と翠色の瞳を受け継いだのだ。だが、

あまりにも似ていな<sup>。</sup>

シナー<sup>ン</sup>の疑問はジャファル自身の疑問でもあった。

\* \* \* \*

秋も深まる頃、南方の国アルザグエから再び行商隊がやってきた。

富廷の門前広場では春にも嗅いだ甘い香りが辺りにただよい、動物たちの鳴き声が聞こえてくる。広場を取り囲うように店のテントが張られ、鮮やかな色の絨毯の上には様々な品物が並べられた。

行商隊が王宮の広場で市場を開く三日間、いつも静かな昼の時間は人や動物たちの声で活氣づいていた。

ジョードをいじめてくる人付きの奴隸達の姿も広場に見えた。今なら、嫌な奴隸達に顔を合わすことなくリューシャに会いにいけるかもしねり。

ジョードは賑わう門前広場を横目に、誰にも気づかぬようそつと本宮に入つていった。

ホールに足を踏み入れると、途端に外の喧騒が遠くなつた。静寂で満ちたホールを素早く走り抜け、壁の扉を開けて階段をかけあがつた。

リューシャの部屋に来るのは三度目だが、自ら足を運んだのは初めてだ。緊張しながら扉を小さくノックしてみたが返事はなかつた。

（もしかしたら、宰相のところに居るのかしら……）

リューシャが昼間に何処にいるのか、何をしているのかも知らない。ただ、どうしても以前ハリー・ファの成人の式典の時に取られた聖十字のペンダントを返して欲しかつた。

リューシャの不在に気落ちしながらジョードが元来た道を戻ろうとすると、人の話し声が階段の方から聞こえてきた。階段をのぼつてくる声は徐々に大きくなつてくる。慌ててリューシャの部屋の扉を押すと、鍵がかかっておらず扉は簡単に開いた。

ジョードは部屋の中に滑り込むと、音を立てないように静かに扉を閉めた。

人が通り過ぎるまでだけ……。罪悪感を抱きながらリューシャの部屋に静かに身をひそめた。

腰を屈めて廊下の様子をうかがつていると、ジョードの足を何か柔かいものがかすめた。

「きやつ……」

不思議な感触に驚いてジョードは小さく悲鳴をあげ立ち上がつた。

見ると、芥子色の毛皮の小さな獸がジヒードの足にまとわりついていた。ジヒードは再び叫びそうになるのをじりえながら飛びのくと横にあつた棚にぶつかった。ガシャンと硝子びりしのぶつかる音がリューシャの室内に響いた。

「誰？」

リューシャの声が部屋の奥から聞こえた。窓の方に白い布の張られたついたてがあり、美しい声の主はその向こう側に居るようだつた。

窓からの陽光に白い布地に人影が映っていた。

「『』、『』めんなさい。ノックしたんだけど……。返事が無くて……」

「ジヒード？」

自分の名前と同時に水のはねる音が聞こえた。ついたてに映った影がゆっくりと動き、リューシャが姿を見せた。湯浴みをしていたのか、すけるような薄い布地の衣装を着て素足には水が滴っている。肩には布を羽織るようにかけ白く細い指で押さえていた。

しつとりと濡れた清艶な金色の長い髪に、ジヒードは思わず息をのんでリューシャの姿に見惚れた。

リューシャに気を取られていると、小さな獸はしなやかな動きでジヒードの足元に身体をこすり付けた。

「ああ……」

ジードが足元の小さな獸に怯えるのを見て、リューシャはくすつと笑つた。

「<sup>キツ</sup>ト 猫が嫌いなの？」

「キット？ 獅子の子じゃないの？ 王家では獅子を飼つたりするつて聞いたから……、獅子の子かと……」

ジードの答えを聞いて、リューシャは口元を隠すよつこして上品に笑つた。

猫は飼い主の方へ向かうと、先ほどジードにしたのと同じよつにリューシャの足元に絡みついた。リューシャは足元から猫を抱きあげた。

「獅子の子は大人になつてしまつたら手放さないといけないでしょ」

ジードはリューシャの腕に抱かれた猫を興味深げに見つめた。窓際で見る猫の瞳は緑色だつた。

「何か用があつて来たのでしょ？」

リューシャに問われてやつとこに来た目的を思い出した。

「わたしのペンドントを、返して欲しいの」

「あのペンドントは、今わたくしの手元にはないわ」

「そんな……」

ジョードの表情がみるみる哀しみに沈んでいった。

聖十字のペンドントはジョードが持っている唯一ヴァロニアのものだ。忌年の誕生日に幼馴染から贈られた物で、今は自分と祖国を繋ぐたつた一つのものであり、天使信仰の証でもあった。

リューシャは猫を抱いたまま窓辺へ行くと、振り返ってジョードを手招いた。

暗い顔のままジョードはリューシャの隣に並び窓から広場を見下ろした。

ジョードの気持ちとは反対に、外は光があふれていた。広場を囲う小さな市場<sup>バザール</sup>に富廷の人々が集まり賑わっている。

「あそこの、あの銀細工職人。あの男性は貴女と同じクライス信仰者のはずよ」

そう言つて、リューシャは上から市場の一点を指差したが、そのまま黙り込んだ。

ふとジョードがリューシャを見ると、リューシャの瞳は何処かを見つめていた。

「の方、誰なのかしら……」

小さく呟くリューシャの視線を追うとその先に、頭に布を巻いた初老の男がいた。その老人は少年と話をしている。ジョードが目を凝らすと、少年はハリーフアだった。

ハリーフアも布を頭に巻いて金色の髪を隠していた。リューシャが見つけなければ、きっとジョードは遠田にはその姿に気づかなかつただろう。

「貴女が来てからハリーファ様は変わったわ。まるで別人になられたみたい」

「……わたしが知つてるのは今のハリだから。わからないわ……」

ジョードの言葉を聞いて、リューシャは微笑んだ。穏やかな笑顔なのに、何故かジョードには以前に感じたのと同じ悲しそうな顔に見えた。

「わたくしが宮廷に上がつたのも、あなたと同じ年頃の時よ」

その時、突然乱暴な音を立てて扉が開かれ、リューシャの会話が断ち切られた。

「リューシャ！」

部屋の中に黒い髪の女が入ってきた。リューシャより少ししばかり年上に見える女性は、奴隸達とは違い小麦色の肌でシナーンとよく似ている。女性の身形や容姿から、ジョードにもすぐファールーク皇族なのだとわかった。

「ショーラ様……。こんな処まで来られなくても、御用でしたら女奴隸に頼んでいただければ」

リューシャは猫をジョードに渡し、布を羽織りなおすと、ショーラと呼んだの方へと歩みよつた。窓際に取り残されたジョードは、ついたての陰から一人の様子をつかがつた。

「何故私がフェスへなど… もうこいつ」となの?」

「それはシナーン殿下がお決めになられたことです」

「ハリーファを元服までさせて。ハリーファに宰相を継がせて、母<sup>ウム</sup>にでもなろうといふの?」

「（）心配なぞいらなくとも、ハリーファ様は宰相にはなれません。宰相にはシナーン殿下がお就きになられます」

冷静なリューシャの態度に、女は悔しそうに歯を噛みしめた。

「お前がジャファル様に気に入られているのは、ファティマに似ているからよ」

「お亡くなりになられたのがファティマ様でなくショーラ様でしたら、わたくしはきっとシナーン様の乳母になっておりましたわ」

「女奴隸の分際で！」

突然、女がリューシャに向かつて突つこんだ。  
女の手元で光がきらりと反射した。

「あぶないっ！」

ジョードはついたての陰から飛び出し、リューシャを床に突き飛ばした。

黒髪の女は前につんのめつて床に倒れこみ、手についていた細い短剣が床を転がった。ジョードは咄嗟に床の上の短剣に駆け寄ると拾

いあげた。

三人の間に緊迫した空気が流れた。

一番最初に口を開いたのは女だつた。ゆっくりと立ち上がるとい  
ューシャをにらみ恐ろしい声で言つた。

「お前たち！ 天使の教えに逆らつて、地獄モリスに落ちるとよいわ！」

女はそう言い残すと、乱暴に扉を閉めて出でていった。  
突然の出来事に睡然としていたリューシャも、よつやく立ち上が  
ると乱れた服を直した。

短剣を握るジョーデの手は震えて、顔も青ざめていた。『地獄』  
と言つ言葉や『忌数』などは口にしてはいけないと幼い頃からそつ  
教えられてきた。ジョーデには女の呪詛の言葉が背筋が寒くなるほ  
ど恐ろしく感じられた。

そばにリューシャが来ると、緊張が解けて目に涙が浮かんだ。

「あの人、なんてこと言つの……」

リューシャはジョーデの手から静かに短剣を取つた。

「わたくしにとつては富廷ヒルが地獄よ」

リューシャの言葉は、本心なのか皮肉なのかジョーデにはわから  
なかつた。

どにに身を隠していたのか、再び現れた猫は何事もなかつたかの

よつこい一人の足に顔をこすりつけた。

\* \* \* \*

ある朝、シナーンが一人で【王の間】にひやつて来た。

【王の間】に初めて足を運ぶ者は、皆驚いたように朱鷺色の建物を見まわす。シナーンも同じよつに部屋の中を歩きながら見渡した。

「監獄だと聞いたから見に来てみたが。別に普通じゃないか」

部屋の主に許可を得る「ともな」まま、ぶしつけにシナーンは応接室まで入り込んできた。

「何の用件だ」

突然の兄の来訪を、部屋の主は不機嫌な態度で迎えた。

「これを届けに来てやったんだ」

シナーンは懐から何かを取り出すと、じゅらりと音を立ててテープルの上に置いた。ジェードの聖十字のペンダントが、黒ずんだまま鈍く光っていた。

「それだけの為に、わざわざここまで来たのか」

「腹違いの弟に会いに来ではいけなかつたか？」

ハリーファは両腕を組み、腹違いの兄の物言いに不満のため息をついた。そして思い出したように寝室に行くと、何かを持って出てきた。

「お前だろ」

ハリーファは取つてきた瑠璃色の小瓶をシナーンに向かつて投げた。小さな青い塊が、二人の間を弧を描いて飛んだ。

シナーンは空中で小瓶をつかむと、さつと帯の中にしまった。

「お前の女奴隸が神魔<sup>ジン</sup>が存在するか知りたいと言つからやつたんだ」

「俺は神魔<sup>ジン</sup>に取り憑かれてなどいない」

「そのようだな」

シナーンの悪びれない答えはハリーファを呆れさせた。

そこに水汲みから戻ってきたジェードが一人の皇子の居る応接を覗きこんだ。

『シナーン！？』

ジェードの心の叫びはハリーファにだけ聞こえた。

驚いたジェードの手から水瓶が落ちて砕け散つた。水瓶はガシャンと鈍い音を立てて割れ、陶器の破片が散らばる。ジェードの足元が水浸しになり服の裾が濡れた。

その音にシナーンは振り返ると、扉の近くに立つジョードに言い放つた。

「良いところに戻ってきたな、ジョード。約束どおり、お前を私の奴隸としてやる!」

ジョードは青褪めた様子で一人を見ていた。シナーンを見て、『ハリーファを殺さなければならぬ』事を思い出したようだった。自分の持つ天命に怯えている心の内が、ハリーファに伝わってきた。

「駄目だ！ ジョードは渡さない」

ジョードは硬直してその場を一步も動けなくなっていた。  
シナーンは呆然とするジョードを相手にせず、ハリーファの方に向き直った。

「父上は私情に駆られて、お前の世話をヴァロニア人にさせたがっているようだ。だが、私は違うぞ。お前にはこの女よりもっと優秀な奴隸を与えてやる！」

シナーンはハリーファに近寄ると続けて話しかけた。

「私は今まで、お前は父の血を引いていないか、神魔に取り憑かれているんじゃないかと疑っていた。だが、お前に憑いているのはどうやら神魔ではなかつたようだな。お前に取り憑いているのは呪われた【王】だ」

ハリーファは何も言えず、シナーンの言葉に息をのんだ。

「ハリーファ、お前の中には一百年前の【王】の魂が宿っている。聖地オス・ローと天使の末裔【エブラの民】を滅ぼした呪われた【王】だ」

シナーンはファールークの血統を正しく受け継いでいる。コースフやアーディンと同じ漆黒の髪と瞳に小麦色の肌のシナーンを間近に見やり、ハリーファはよつやく口を開いた。

「……【エブラの民】は本当に滅んだのか？」

「どうだろ？ 一百年前の戦争で姿を消したと聞くが、【エブラの民】などおどせ話で、本当は存在しなかったのかもしれないぞ」

【エブラの民】がおどせ話であるはずがない」とは、ハリーファ自身が一番良く知っている。

「【エブラの民】はおどせ話なんかじゃない！ シナーン、お前は自分の目でオス・ローを見たことがあるのか？ 【エブラの民】が居なくなつて、城砦<sup>ドーム</sup>が崩壊したままだつた！ オス・ローの街も、何故一百年もあつて復興しない？ 何のために聖地をファールークのものにしたんだ」

ハリーファが苛立つて声を荒げた。シナーンに話しても埒が明かないのはわかっている。迂闊な話をして【王の間】に施錠されるような真似は避けなければならず、それ以上は言葉をぐつといらえた。

「知つてゐるか？ その神の地は、お前がここにいる限りファールークのものだ」

「俺がここに居る限り？ ビリコう意味だ……」

「【王】とはファールークの人柱だ」

シナーーンの表情が一瞬曇つたように見えた。

「【王】をこの宮廷に留めておけば、聖地オス・ローはファールーク皇國のものだというんだ」

「何なんだ、それは……」

「初代宰相と【悪魔】との契約だ……」

シナーーンの心に、言葉にはならない迷いが見えた。

『初代宰相の死後、ファールークが他国からの侵攻されることがないのは偶然なのか？ それとも』

初代宰相、コースフの弟アーディンも【悪魔】ラースとの契約したのだろうか。

聖地をファールークのものにすることを望み、【悪魔】に出された条件が転生を繰り返すコースフの魂をこの宮廷に捕えておくことだつたのだろうか。

「私はお前の言う通り、聖地に行つた事はない」

「シナーーン……」

「……だが、私は宰相の後継者だ。国の永続的な慣習には従い、掟も守らねばならぬ」

宰相とほんの数人にしか知らされない皇族にまつわる秘密を知り、ハリーファに同情している様子だった。

「ハリーファ。お前の命を脅かすものは私が許さない」

ハリーファは思わずちらりとジョードを見た。一番身近で自分の命を狙っている。ジョードはさつきのまま微動だにせず、顔色を失つたまま一人の様子を見つめていた。

「先日の件で、私の母はフェスに追放になった」

「……氣の毒な」

ハリーファが言つと、シナーンはきっぱりと答えた。

「私の所存だ。母とはいって、【王】を殺そつとするなどひつてのほかだ」

どこか悄然とするハリーファに背を向けると、シナーンはジョードに話しかけた。

「ジョード、私の奴隸となるなら、お前が欲しいものを何でも『えでやうう。何なら、お前を解放してヴァローニアに帰してやっていいぞ』

ジョードはためらいを見せたが、小さな声でシナーンに答えた。

「……わたしが欲しいのは、ハリの命よ」

「ふん。思ったよりは頭が回るようだな

ジヒードの言葉を断りの皮肉と聞いたシナーンは、両手を腰に当て不愉快そうに息を吐きハリーファを見やつた。

『ハリーファ、逃げようなど考えず、ここで不自由なく暮らすとい。おそらくそれがお前にとつての幸福だ』

「たとえお前に父上の血が流れてなかつたとしても、お前にはフーラークの血が流れている。それは間違いない」

もう黙つと、シナーンは踵を返して【王の間】から出でこつた。

シナーンにとつて兄弟として育つた弟が【王】である事を受け入れがたかつたに違ひない。だからじつじつに足を運んだのだろう。

フーラークの一族は皆ビヒトなくアーディンの面影がある。アーディンも、シナーンも、そしてジャファルも、ゴースフの罪に巻き込まれた犠牲者だ。

去つていくシナーンの姿を見て、ハリーファはユースフの罪の重さを歎みしめた。

シナーンの靴音が消え、入り口の扉の閉まる音が応接にも聞こえた。

ハリーファとジヒードが取り残された部屋は静寂に包まれていた。じぱりくじて、ジヒードはよつやく割れた水瓶の欠片を拾おうと

床にしゃがみこんだ。欠片は大きく鋭い刃物型に砕けているものもある。ジョードはその切先をじっと見つめた。

## 『これで』

ハリを殺せれば使命が果たせる。そう浮かんだ時、考えるのを止めた。心で考えるとハリーファに聞こえてしまつ。

ジョードが慌てて欠片をつかむと、右手の人差し指に破片の切先が突き刺さり、赤い血がにじんだ。

「……痛つ」

血はまたたく間に盛り上がりぽたぽたと滴り落ちた。石の床の上に小さなアザミのような赤褐色の花が咲いていく。次々に床に落ちる赤黒い血の色と鉄のような匂いが、ジョードに聖地での光景を甦らせた。ジョードは眩暈を覚え床に手をついた。

目の前で三人の兵士がハリーファに殺された時のことを思い出し、ジョードは呆然として動けなくなつた。

「大丈夫か？ 悪かつたな、シナーンの事」

そばにしゃがみこんだハリーファは、ジョードの手から握られたままだつた大きな欠片を奪つた。

「……『めんなさい、すぐ片付けるわ……』

「先に止血しろ」

そう言つと、ハリーファは割れた欠片を拾い始めた。

落ちていた他の欠片をハリーファが拾う間も、ジョードの指先から血がしたたり続け床を赤く染めた。

ハリーファは拾つた欠片をまとめて端に除けると、まだぼんやりしたままのジョードの右掌を掴み顔の高さまで引き上げた。流れる血は指先から腕をつたい白い腕に赤い線を描き、肘までいくと零となつて落ちた。

ハリーファに掌の一点を強く抑えられ、右手の指先がかすかに痺れしてきた。同時に指先と心臓が同じ速さで強く脈打つのを感じる。ジョードの肘から落ちた血は衣服に赤く滲んでいった。

腕をつたつて流れ続ける自分の血が、聖地でのことをますます鮮明に思い出させた。

あの時、ハリーファから殺意を感じた。次に殺されるのはジョードだったはずだ。

ハリーファにとつては、本当は自分など簡単に殺せるはずだ。オス・ローで兵士達を殺したように。

「お前には俺は殺せない」

右手をつかんだまま、目の前に居るハリーファが呟くように言った。翠色の瞳が、真っ直ぐにジョードを見つめている。

「俺を殺して罪を犯しても、神はお前を救つてはくれないぞ」

辛辣な視線がジョードに向けられた。だが、その視線はジョードを見ていなかつた。

ジョードには、その言葉がジョードの瞳に映るハリーファ自身に向けられていくように思えた。ハリーファの透き通るような翠色の瞳の所為で、視線が合わなかつただけかも知れないが。

「……せ、聖地で、兵士たちを殺したことを、悔いしているの……？」

「俺は悪魔じゃないんだ。過去も、今も、人を殺めて悔いない日は一日だつてない」

「じゃあ、殺さなければ良かつたじやない」

口ではハリーファを攻めるが、心中では自分自身に対しても訳を考えていた。

『わたしはハリを殺さなきや……。天命なんだもの……』

それでも、心中では嘘をつけず、ハリーファに言つた言葉が自分にも压し掛かつてくる。

『もし、わたしが天命のとおりハリを殺せたら、やつぱり毎日悔い続けるのかしら……。ずっと罪を背負つていけるの?』

足に力が入らない。ハリーファにつかまれている手を離されてしまつたら、その場に倒れてしまいそうだつた。

「俺はなすべき事がある。捕まるわけにはいかなかつた」

ハリーファはあるでジョードに対する言い訳するかのように呟いて

た。

「……でも、結局捕まつたじやない。彼らの死が無駄になつたわ」

「いや、無駄じやない」

あまりに真摯なハリーファの視線に、ジョードは言葉が詰まつた。

「無駄じやなかつた。俺は、お前を手に入れた」

ジョードの右手をつかんでいるハリーファの手に力がこもつた。大人びた眼差しでハリーファはジョードを見つめ続けていた。

二人の間に沈黙が流れた。

『もしハリを殺してアレー村に帰れたら……？ それで、昔みたいに戻れるの……？』

ジョードには天命を果たした後のことことが想像出来なかつた。もし果たせたとして、ヴァロニアに帰つて今までと同じよつて、父と母、弟や幼馴染と、毎日羊を追い幸福な夜を迎えるような日々に戻ることは思えなかつた。

「お前に俺は殺せない」

繰り返されるハリーファの言葉が『お前は祖国に帰れない』と言つてゐるよつて聞こえた。

「ハリを殺さないと、わたしは帰れないのよ」

ジニアードに「一番の目的はヴァローナに帰る事ではない。

「ハリを殺さないと、答へが分からぬのよ」

止血のためにつかまれた右手は血の氣を失い、ジニアードには右腕全体の感覚が鈍くなつたように感じた。

ハリーファはジニアードを椅子に座らせた。寝室から白い布を持つてくると、その布の端を噛み切り、引き裂いて包帯を作った。

ハリーファはふと思ひ出したように、横のテーブルに置かれていた小さな聖十字のペンダントを手に取るとジニアードに差し出した。

「シナーングがこれを持ってきた」

毒の入つた葡萄酒を浴びて、銀色だった聖十字のペンダントは真黒に染まつていた。

「【黒】の聖十字なんて……」

「お前の身を守つてくれたんだ。さつと一度田もあるだろ。持つておけ」

左手で右手を押さえついでジニアードが受け取ることが出来ずになると、ハリーファはペンダントの金具を外し、正面からジニアードの首の後ろに手を回して金具をとめた。

ハリーファの顔がジニアードの顔に近づいた。ジニアードさんのペンダントを貰つた時の事を思い出した。

ジョードの瞳に映るのは幼馴染のウィルダーだった。二人の間に白い息がこぼれる。まだ銀色だったペンダントを同じようにしてジョードの首に掛けてくれた。

ハリーファに心を読まれていると気づき、ジョードは思い出すのをやめた。

ハリーファはジョードの向かいの椅子に座った。

「あの時、愚者の毒を飲んでいたら俺も死んでいた」

黙つたままのジョードの手を取り、ハリーファは器用に包帯を巻いていった。

#### 『壁の向こうにあるという楽園

壁を挟んで別の世界に暮らしていたセヴランとエステル  
悪魔の誘惑に負けて扉を抜けるエステル  
アルゴル

反対側の世界の食べ物を食したことで、元の世界に戻れなくなつてしまつ』

成人の式典でハリーファが詠み上げた内容が、ジョードの心から聞こえてきた。

男と女の名前はリダーとアズルではなく、セヴランとエステルで、蛇の事をアルゴルと詠んでいた。

ハリー・ファは顔を上げ、ジョーダーを見つめた。

「お前は、聖書を暗記しているのか？」

「全部じゃないわ。聞いた事のあるといふだけよ」

「俺も聖典を覚えてはいるが、覚えるのに26年かかったぞ」

「お前が違つただけなのかしらね……」

ハリー・ファは感服したよつて言つた。

『クリスチヤンの聖書と、モリスの聖典の内容は同じなのかしら……？』

「名前が違つただけなのかしらね……」

ジョーダーは独り言のよひもつりと呟いた。

「前から思つていたんだが、お前の名前は変わつてはるな

「村でもよく言われたわ。私の兄弟はみんな意味のある名前なの

「ジョーダーは……フロリスの言葉で『翡翠』か？ 男の名前じゃないのか？」

皿の前の、まだ男のように髪の短いジョーダーを見た。

「わたしは双子なの。パパとママが男の名前しか考えてなかつたのよ

そう聞いてハリーファは思わず笑いを漏らした。

「それは災難だつたな」

「双子の弟の名は『希望<sup>ホープ</sup>』のハーパー。わたしの名前の意味は『精神<sup>ジニアズ</sup>』じゃなくて『公正<sup>ジュスト</sup>』よ」

そう聞いて、ハリーファはアーディンのことを思い出した。たつた一人、ユースフが厚く信頼していた弟だった。

「俺の弟もお前と同じ、『公正<sup>アーティル</sup>』といつ意味の名だった」

ハリーファの意識は一瞬過去の記憶の中に引きずり込まれそうになり、

「ハリにも弟がいるの？」

ジヨードの言葉に引き戻された。止まってしまった手を再び動かして、右手首に包帯を巻き固定する。

「いや……、昔の話だ。シナーンが言つてただろ。俺の事を」

「意味があまりよくわからなかつたの……」

「……そつか」

「ハリの名前はなんて意味なの？」

「誰がつけたか知らないが、皮肉な名前だ。まるで呪いのようだ」

「ハリは呪われてるの？」

「……いや、違う。本当に呪われたのは俺じゃないんだ……」

「誰なの……？」

「【エブラの民】だ」

「エブラ信仰の？」

「俺は【エブラの民】にかけられた呪いを解いてやらないといけない。なのに何も為し得ていない」

ハリーファは何故ジョーダンこんな事を言っているのか自分でもわからなかつた。

「その呪いを解くことがハリの天命なの？」

「天命なんかじゃない！　ただの約束だ！」

やりきれない思いをジョーダンにぶつけてしまい、自分自身が情けなくなつた。

「あいつの通りたとおり、本当にこの世は地獄だな……」

自分に言い聞かせるように、ハリーファは苦しそうにしぶやいた。

「地獄は死んだ後の世界でしょ？」

『なのに、どうしてリューシャさんもハリも今が地獄なんて言つの』

……？』

「【Hブリ】は、地獄はこの世だと言つていた」

「……この世が、地獄……？」

『地獄』という詞が小さく聞こえた。

「天国は地にあるんうだ」

ジョードは不思議そうな顔でハリーファの言葉を聞いていた。

治療を終えハリーファはジョードの手を離すと、疲れたように頭を垂れた。

「俺が地獄に落ちたら、助けてくれるんじゃなかつたのか？」

『

床に視線を落としたまま、ハリーファは独り言のように呟いた。

「……ハリは天国にいきたいの？」

「……俺は、本当の意味での死をいつも求めてる……」

『死にたいだなんて……。ハリも天使を信じていないので？』

ハリーファが顔を上げると、ジョードはひたむきなまでに真っ直ぐにハリーファを見つめていた。

『……ハリは、何故救いを求めてるの?』

まるで祈るようなジョードの心の声に、突然ハリーファの頭の中で金属が砕けるような音が響いた。

粉々に砕け散った鉄の鎖がじゅらじゅらと音を立てて崩れ落ちていいく。

思い出せていない記憶が、既視感の波となつてハリーファを飲み込んだ。

「じゃあ、わたしが助けてあげるわ」

『わたしのが殺してあげるわ』

『わたしのが絶対助けるよ』

ジョードの声と、ジョードの心の声と、記憶の中のサライの声が、重なつてハリーファには聞こえていた。

## 海を眺める男

ジョードがファーリーク皇国にきて、天使に教えられた天命は果たせないまま、一年が過ぎようとしていた。

この一年間で、ジョードは思いがけずハリーファの秘密を知った。

一つ目は、【王】であること。

ハリーファが【王】であることを富廷の一部の人間は知っているようだつたが、奴隸達は誰一人として知る者はいない。

二つ目は、人の心の声を聞く異能を持つこと。

人の心を読む異能は、ジョード以外には乳母だつたリューシャしか気付いていないようだつた。

ジョードには、他の人には聞こえない【天使】の声が聞こえた。そのため、ハリーファの不可解な能力を知つても、不気味だとは感じなかつた。むしろ、何処か親しみを覚えた。

ジョードが、いつからどのようにそんな能力が身に付いたのか聞くと、

「さあ？ 物心付いた時からじつだつた」

と、そつけない返事がハリーファから返ってきた。秘密を知られてからも、ジョードに対する態度は以前と変わらない。

だが、ハリーファの秘密を知ったあの日以降、ハリーファが何か少し変わったようにジョードは感じていた。

\* \* \* \*

新年を迎えて最初の七日間、王宮では毎夜祝宴が執り行われる。

新しい年を迎えて六日目。

その日、ジョーダは14回目の誕生日を異国之地で迎えることになった。

祝いの雰囲気は最高潮を過ぎたが、宮廷内に暮らす人々はまだまだ浮き足立っている。昼夜にかけて、いつもより忙しく働いている家奴隸達もどこか楽しそうだった。

今朝は水瓶に水を注ぐ音に混じってジョーダの鼻歌が聞こえてきた。ジョーダが嬉しそうにそわそわしているのは、傍から見ても明らかだった。

『天使様。今日はわたしとホープが祝福を受けた日です。14度目のこの日を迎えたことに感謝します』

水汲みを終えた後、天使に感謝を述べるジョーダの心の声が聞こ

えた。陶器製の瓶を床に置く音が「トトン」と響く。次に扉を開閉する音がバタンと耳に届いた。

いつもより軽い足取りで朝食を運んできたジョードを、ハリーファは不思議そうに眺めた。給仕の時も始終ご機嫌で、こんなジョードを見るのはハリーファも初めてだつた。

食事の手を止めて、テーブルの向こう側に立つているジョードを見やつた。ジョードが「機嫌な理由は心から聞こえる声で見当がついたが、敢えて言葉にしてみる。

「今日は随分楽しそうだな。何か良い事でもあるのか？」

声を掛けると、ジョードは澄んだ漆黒の瞳を大きく見開くと、真っ直ぐにハリーファに向かた。

「何つて！ 忌年が開けたのよ！」

アーディンと同じ意味の名前と、同じ色の瞳を持つジョードが、『これを喜ばずに居れるものか』と言わんばかりに微笑んだ。

残念ながら、それがどれほど喜ばしいことなのかハリーファには全く理解できなかつた。だが、ジョードのこんな笑顔を見たのは初めてだ。見ているつられて口元が緩む。不思議と気持ちが落ちつき、この笑顔がずっと続くことを願つた。

「今日はお前の出生日なのか？」

「ええ、わうむ」

『パパやママやホーパと一緒にお祝いが出来たらよかったですの』……』

笑顔の下に隠したジードの本心が漏れ聞こえてくる。

「わたしの村ではね、誕生日に金属製の身に付ける物を贈りられると一年間病気をしないって言い伝えがあるの」

「ファーリークでも金属は魔避けだぞ。男が帯に挿している短剣は魔避けだ。実用品じゃない」

『じゃあ、シナーンが持っていたのは、ただの飾りだったの……?』

「いや、シナーンや宰相<sup>マテイエン</sup>が付帯しているのは本物だ」

ジードは複雑な気持ちを押し隠すみつこ、話題を元に戻した。

「わたしね、毎年ママからボタンを貰つてたの」

『ウイルから貰つたペンダントは真っ黒になっちゃったけど……』

胸元のペンダントを気にするジードの心から、見知らぬ少年への想いがハリーファに伝わってきた。

「それは『男』から貰つたものだつたのか

ハリーファが言つと、ジードの顔が真っ赤になつた。耳まで赤くなつたかと思つと、口をどがらせた。

「心を読んだのねー。」

顔を紅潮させたままむつとじてこむ。

「聞きたくなくても聞こえてくるんだ。嫌なら何も考へるな」

「そんなこと出来る訳ないでしょー。」

ジョーダは手に飲み水の瓶を握つたまま、ハリーファに背を向けてしまつた。

「訓練すれば出来るようになる。#1の国にもそういう暗殺者が居たんだ」

「暗殺者？ もじわたしがそんな暗殺者だったり、ハリは殺されてたわね」

ジョーダは振り返りながら少しうざけて皮肉っぽく言つた。

「心の声が聞こえない奴なんて居ない。不自然だから逆にすぐに気が付くや」

ハリーファは久しぶりに子供っぽく言つて返した。

「それより、出生日なんだるつー、俺からお前に何か贈りつ」

「本当ー?」

まだ頬をピンクに染めたまま、ジョーダはテーブルに身を乗り出してきた。

「ボタンでいいのか？ それとも何か他に欲しいものもあるのか？」

「何でもいいの？」

「ああ」

そう言つてしばらく思案していたジョードの顔から笑顔が消えた。

「短剣を。パパの短剣を返して欲しいの……」

「短剣？ 父親の？」

「聖地で……、あの時、ハリがわたしから奪つた短剣よ」

フーリークの兵士を刺した短剣だ。あの兵士の遺体に、短剣は刺さつていなかつたのを覚えてい。たとえ王宮にその短剣が持ち込まれていたとしても、武器はハリーファ自身も入手することが出来ない。

ジョードがいわく付きの短剣を欲しがる理由は、アルフェラツにあの短剣でハリーファを殺すように言われたからだろうか？

「お願いよ。あの短剣はパパがママから貰つた大切なものだったの。それをわたしに預けてくれたのよ。本当に大切なものの」

ジョードの顔は曇り、今にも泣き出しそうになつた。さつきまでの笑顔は何処かへ消えてしまった。

「……無理だ。俺には武器を手に入れる」ことは出来ない。他のものにしる」

喜ぶ顔が見たいと思つたが、ジョードを喜ばすことは出来そうになかった。

皇族やその奴隸達は部屋から出でこない毎の時間、ハリーファは一人で厩舎へ向かつた。

遠くに厩舎が見えた。その隣にある厩務所の前に見覚えのある人影があつた。

ジョードと壮年の厩舎守が向かい合つて話していた。近づくにつれ、段々と二人の表情も見えてくる。ジョードが悲しそうに落ち込むと、厩舎守の男はジョードの肩を叩く。するとたつたそれだけでジョードの顔には笑顔が戻り、一人は楽しそうに話し続けていた。

その様子を少し歯がゆく思いながら、ハリーファは一人に近づいていった。

「ハリ……？」

ジョードがハリーファに気づいた。

男は慌ててまだ離れているハリーファに一礼すると、厩務所の中に消えた。ジョードは突然話し相手を失つてしまい、ハリーファの

方に歩み寄ってきた。

ジマーの心の声を聞くまでもなく、顔を見れば『こんな所に来るなんて珍しい』と言いたそつた。

「どいかに行くの？」

「いや。何処にも行かない」

厩舎守に用があつたが、こんな場所でジマーと顔を合わせとは思つていなかつた。厩舎守は奥に引っ込んでしまつたので、今は諦めることにした。

「お前は、俺よつ色んな所をほつつき歩いてるようだな」

「わたし、馬が一番好きなの。だから、ここにさよくなれてるのよ」

ジマーの心から偽りの言葉は聞こえてこなかつた。

「ねえ。今度ハリが外に行くときに、わたしも着いて行きたいわ。この國の外の生活を見てみたいの！ わたし、この國の普通の人達がどんな暮らしをしているか全く知らないんだもの」

ジマーの瞳から好奇心が溢れ出た。

「わたし、この壁の向い側の事を何も知らないの」

「俺はここから出られないんだ」

ファーリーク皇国は宰相と【悪魔】との契約でフロリストから守ら

れている。その条件が【王】を王宮内に留めて置くという事だとうのをシナーンから聞かされた。

ジョードが超えないはずの国境を越えてオス・ローに入つて来ることが出来たのは、あの日ハリーファが富廷を抜け出したからなのだろう。富廷を出て自分の国を危険に晒すわけにはいかない。

「俺は、お前を外には連れて行つてやれない」

ぎらぎらと照り輝く太陽が佇んで話す一人の頭部を焼きはじめた。どちらともなく、城壁沿いにある細い日陰の方へと歩みだした。

「もし外出を許してくれるなら、わたし一人でもいいのよ

『家奴隸もお遣いに出たりしているじゃない。逃げたりなんかしないし、ちゃんと戻つてくるわ!』

ジョードの心の言い訳を聞かなくとも、砂の地に不慣れなフロリスの人間が、徒歩で砂漠を超えられるわけがない。

「市井は富廷の女奴隸が一人で行くような場所じゃない。お前みたいに、この国のルールが分かつてない者はなおさらだ。外出は許可できない。誰か連れて行つてくれる者が居るなら別だが」

すぐ傍の城壁までたどりつくと、ハリーファは日陰に身を収めるように壁にもたれた。

「富廷の女奴隸は随分不自由なのね」

ジョードがすねたように悪態をついた。そして、ハリーファの傍

らで、田の前に迫つた壁を見あげた。

『壁の外には一体何があるの？ どんな人達が生活してゐるのかしら？ この壁の中だけの自由なんて……』

「お前は奴隸だ。自由人じゃない」

ジヨードはハリーファに向き直ると、真直ぐな瞳でハリーファを見た。

「その言い方は気に入らないわ！ わたしの国では『奴隸』っていうのは『罪人』のことなのよ」

『わたしは罪人なんかじゃないわ！』

「なら教える。ヴァロニアでは『奴隸』のことを何と呼ぶんだ？」

「『使用者』よ。女は『メイド』って呼ぶわ。わたしの姉さんは賢かつたから、領主様の所でメイドをしていたの」

「『<sup>メイド</sup>支える人』か」

ハリーファがモリスの言葉の韻律でつぶやいた。

ジヨードはハリーファの言つた言葉の意味がわからなかつたようで、同じ高さにあるハリーファの顔を見つめて軽く首をかしげた。そして、また壁を見上げた。

「それに、奴隸には自由はないなんて言つても、心の自由は誰にも奪えないわ」

『奴隸だけじゃない。人の心は皆自由なのよ』

炎天の下のはずだつたが、ジョードの言葉が心地よい風のよう、「アーヴィング」ハリーファの心の中を吹き抜けていった。

ハリーファはジョードを連れ城壁沿いを東へ向かつた。太陽は二人の真上にあって、城壁の陰も途中で姿を消した。

宮廷内には、いくつか手入れの行き届いた小さな植物園のような場所があった。ジョードは所々に生えている花を見つければハリーファに問い合わせた。

「ねえ、この花は何ていうの?」

白い小花を沢山つけた茎をハリーファは一本手折るとジョードに渡した。

「これはエルファというんだ。それと向こうの大きい白い花はハルダル、薬草だ……」

「薬になるの?」

「ああ。薬草園の植物は迂闊に採るなよ」

「わかつたわ」

「薬草に興味があるならもつと詳しく述べてやるうつか？」

「本当？ 嬉しいわ！ それなら村に帰つても役に立つと思つの」

ハリーファの言葉にジョードが明るく笑つた。ただ、『帰つて役に立つ』為にはハリーファを殺さないといけない。その事に気が付いたのか、言つた後少しジョードの口数が減つてしまつた。

石畳の小道が途中で途切れ、一人は黙つたまま、聞こえるのは砂地を蹴る乾いた靴音だけだつた。

やがて城壁がゆるく曲線を描く場所にたどり着いた。そこには壁と平行に幅の狭い石の階段が作りつけられていた。

城壁の頂上へと向かう階段は、城門近くにある階段と比べると随分粗雑な造りだつた。

ハリーファは迷わず、その狭くて危なからしい階段を登つていつた。ジョードは下からハリーファを見あげた。

「こんな所で何するの？」

「いいからついてこい」

階段の幅はとても狭かった。足を滑らせたら下まで転落してしまったので、ジョード城壁に手を添わせながらのぼつた。足を踏み出

す」とに鼓動が早くなつていいくのがわかつた。

頂上に辿り着くと、城壁の上には大人が一人で並んで歩けるくらいの通路が続いていた。通路の両端には腰の高さほどの大きな石が並べられている。そして外側の壁には等間隔に壁の無い部分が作られていた。

壁が邪魔をして聞こえてこなかつた波の音が耳に届いた。ジョーデは熱をもつた低い壁にしつかり手を添えながら、恐る恐る外を見渡した。

城壁の上から外を眺めると、崖壁の向こうに荒波が寄せる大海が見えた。

果てしなく続く海と空が目の前に広がっていた。空の青とそれよりも濃い海の青、少しの白が混じり、溶けてゆく。

今まで忘れていたなつかしい潮の香りがジョーデを包みこんだ。

「わたしの村にも似たような岸壁があるの。夏はよく羊を連れて行つたわ。でもこの海とは違う……。もつと穏やかな海よ」

ジョーデはハリーファを振り返った。

「お前が言つてるのは北側のエトルリア海だな」

エトルリア海は亡國シュケムの北にある、左右の大陸に挟まれた湾だ。そして蝶を模つた世界は、シュケムを頭にして、右にフロリス、左にモリスと言う名の羽を広げている。

「……ヴァロニアに帰りたいか?」

「もうひん歸りたいわよ。……でも、」

《ハリを殺さないと帰れないんだもの……》

ハリーファの血のよいこ、ジョンーはハリーファを殺す」とは曰  
かない気がしてきた。

「俺にはお前が必要だ」

「わたしのやつたる事なんて、他の誰でも出来るじゃない……」

ルカのように皇族の奴隸に憧れている者は沢山居ただひつ。

「お前みたいな気安い奴隸は他に居ない」

ハリーファの答えに一瞬ドキッとした。

《それは私のことを身内だと思つてくれてること?》

心の中で呟くと、ハリーファが微笑んでくれたように見えた。

「お前の名にある『公正』を信じひとつ黙つ

《でも、わたしはハリを殺さなきゃいけないのに……》

うつむいて何も言わないジョンーに向かってハリーファは真剣な  
面持で言った。

「ジョンー、俺はいづれはお前に殺されてやつてもいい

ハリーファの言葉にジョードは耳を疑い、目を見開いてハリーフアを見た。

「今すぐじゃない。それに条件がある」

「条……件？」

「天使に会わせてくれ」

ハリーファは真剣な表情だったがどこか寂しそうに見えた。透き通るような明るい翡翠の瞳が憂愁を帯びた。

「……え？」

「もう一度アルフエラッに会わせて欲しい。やつすればこの命、お前にくれてやる」

ハリーファがあまりに真剣な顔で言つのでジョードは何も言えなかつた。

ジョードは姉が死んでから、天使の声が聞こえるようになった。姉の魂の救済と真実を求めるジョードに、天使の声はいつも、聖地に来るようとに言つていた。

『でも……。あれから天使様の声が聞こえない。聖地に行けば、また会えるかしら……』

ジョードはハリーファに背を向けると城壁の壁の無い部分に膝を抱えて座り込んだ。

後ろにいるハリーファが動く気配は無く、声もかけてこなかつた。

『もしハリを殺せなかつたら、奴隸として死ぬまでここで暮らすのかしら……』

海を眺め物思いにふけりながら、手ではエルファの花を弄んだ。熱さでこめかみに汗が流れだが、そんなことは全く気にならなかつた。

『皆元氣かしら。もうこのまま一度と会えないの？ パパ、ママ、兄さんたちにホープ。それにウイル……』

胸元から聖十字のペンダントを取り出す。銀色だった聖十字は自分や村の皆の髪のように黒くなつっていた。

『会いたい……。帰りたい……』

乾いた空氣の中、荒い波音だけが聞こえてくる。

ジョードは家族や羊飼い仲間のことを想い、ハリーファの田にも横顔が寂しそうに映つた。そして田元を手でこすつたり、時々鼻をすする音も聞こえてきた。

ハリーファはそんなジョードを見て、しづらく声をかけずにそつとしておいた。

本当は、何と声をかけてよいのかわからなかつた。反対側の低い壁にもたれると、つづくまつてあるジヒードの背中を眺めた。

サラライもジヒードのように自分を想い、ドームの城壁から海を眺めていたのだろうか？

ドームの城壁もこんな感じだったのだろうか？

サラライのことだから、ジヒードと同じように鼻をすすつていたに違いない。

コースフに会いたい……と。

何度も生まれ変わつても自分はあるの頃と何も変わらず、今ジヒードにかける言葉さえ見つけられない。あの時サラライにも酷いことを言つたときも苦く思つ出した。

「INの高さから落ちたら死んじゃうわね」

突然、ジヒードの声が感傷に浸りかけたハリーファを現実に引き戻した。

さつきの寂しそうな顔はなんだつたのかと思うくらい明るい声だが、擦られた鼻が少し赤くなつていて。ジヒードは立ち上がって城壁の下を恐る恐る覗き込んでいた。

「お前には天使の加護がある。落ちてもきっと助かるだろ。そのままヴァローナに帰るといい」

「わたしは血の命を捨てるような真似はしないわ！」

《それに逃亡は死罪だつて言つてたじやない！　冗談が酷すぎるわ

怒りながらハリーファを睨みつけて文句を言った。

「」の時ハリーファにふと悪戯心がわいた。

突然、ハリーファはジョードの腕をぐつとつかんだ。ふぞけて壁下に突き落とすようにジョードの身体を押す。

「やめ……」

ジョードは消え入りそうな小さな悲鳴を上げた。

ハリーファはつかんでいたジョードの腕を、今度は自分の方へ引つぱった。反動で戻ってきたジョードを力強く引き寄せ抱きとめる。

思っていたよりも軽く、華奢な身体だった。ゆるゆると波打つた髪の甘い匂いが、ハリーファの鼻腔をくすぐった。

「やだっ！ やめてよー！」

ジョードが涙を滲ませ本気で怒りだした。ハリーファの束縛から逃れようとするが、ハリーファはジョードを抱き寄せた腕を緩めない。

ジョードの慌てる様子がおかしくて、ハリーファは声を上げて笑つた。

『し、死ぬかと思つたじやない！』

「俺はお前を離さなかつただろ」

ジョーダーはじたばたとあがくのをあきらめたようだつた。ハリーファを見つめる頬がかすかに紅く染まつたように見えた。

力の抜けたジョーダーの手からエルファの花がはらりと落ちた。

「あつ……」

ジョーダーはエルファの花が落ちていく様子を目で追つた。

花は城壁の下へとゆらゆらと揺れながら落ちていく。  
城壁をこすり転がりながら、ぽたりと地上に落ちた。

花が落ちたところに男が立つていた。

見覚えのあるシュケムの軍服を着た男だつた。

まだ太陽は真上にあるはずなのに、薄い影が男を覆う。

黒髪の男は足元のエルファの花を拾い上げると、城壁をふり仰ぎ  
ハリーファの方を見上げた。憂愁を帯びた漆黒の目はじつとハリー  
ファを見つめている。三十路近い男が、まるで親に怒られている子  
供のような顔をしていた。

『どうした？　何故泣いてるんだ？』

男はハリーファに向かつて声をかけてきた。ハリーファは慌てて

服の袖で顔を拭つたが、涙など出ていなかつた。

(何言つてゐるー　お前!いや、自分の氣持ひを吐き出すために海に来て了一んだろー)

ハリーファが心の中でそいつをいつと、男は空氣に溶けるよひにいつと姿を消した。

「ハリーファ」

氣がつくと、引きついた表情のハリーファの顔を、ジードはいぶかしげに覗き込んでいた。

ジードにはあの男の幻は見えていなかつたのだろう。

「なんでもない……」

(じさんことをしてこる場合じゃない……、わかつてゐる……)

王宮とこう城壁に囲まれた閉鎖的な空間での生活。それは【エフ】の『呪い』と同じだと、ハリーファは今更ながらに思つた。

そして、ここから外に出られるのは、きっと彼女と回りつめつめ、自分の『弔い』の時なのだつとも考へていた。



## ヴァロニア王国 ホーブ

ヴァロニア王国、ヘーンブルグ領アレー村。

アレー村では、これから来る冬に備えて本格的に冬支度が始まっていた。

村を取り囲んでいる森の広葉樹の葉は散り始め、色が少しづつ赤錆や黄色に変化してきている。

切り立った海沿いの一一番高い丘には、村の所有する風車小屋があった。

朝から絶壁を下から上に冷たい風が吹き上げ、高台にある風車を力強く回していた。昼になつても風の勢いは止まらず、海側の高台では寒さが一層増すようだった。

村の集落から風車小屋までは一本道で、そこを通るのはほとんど荷馬車ばかりだった。

そのため、風車小屋へ向かう道には草が生えず、土がむき出しこなつた一本のみごとな轍わだちが出来ていた。

秋に吹く強い風が雲をかき乱し、薄く引き裂かれたような雲が空一面をおおつている。

真上にある太陽の日差しは雲にさえぎられ、村を吹き抜ける風は冷たい。秋とは思えぬ冷え込みに荷馬車を御していた少年は身をふるわせた。

少年と荷馬車は丘の上にある風車小屋へと向かっていた。

一本の車輪が轍をなぞり、空の荷台はガタガタと揺れた。荷台の前方で長い手綱を握る少年のゆるく波打った短い黒髪も同じように揺れていた。

丸い胴体に円すい屋根の建物が近づいてきた。十字に組まれた四枚の羽根が風を受けて力強く回転している。「じんじうん」と重い石が回る音が外にまで聞こえていた。

黒髪の少年は風車小屋の前に荷馬車を乗り着けた。羽根車の裏手にまわり木の扉を開けると、中からはますます轟音が響いてくる。少年は大声で風車小屋の番人の名を呼んだ。

「じんにちは！ オーバンさん」

小屋の中心には太い木の支柱がぐるぐると回転しており、その周りに付けられた大きな石の車輪が平らな石のテーブルの上をじろじろと重たい音を立てて滑走していた。石臼の引いた粉が小屋の中を舞っている。床も白く粉をかぶり、足を踏み入れることに靴が白くなつていった。

小屋の中を見渡しても風車守は見当たらず、小麦の粉っぽい香りにむせむせになりながら少年は奥へと入り込んだ。

そして一階へのはしごを見あげて大声で叫んだ。

「じんにちは！ オーバンさん？」

「おひー、おはよー、ホープか」

時間はそろそろ昼が近いというのに朝の挨拶が返ってきた。グレーの髪をたくわえた中年男が四角く切り取られた二階への入り口から顔を出し、ホープの顔を見るとすぐにはじこを降りてきた。オーバンのグレーの髪も白い粉をかぶつてすっかり白髪になっていた。

「今日もいい風だね。教会の分は出来てる?」

「ああ、二十袋だ。ここから持つていけ」

オーバンは壁沿いに積み上げられた袋を一つ軽々と持ち上げるとホープに渡した。袋の重さにホープが少しよろけるのを見て大口を開けて笑った。

ホープは重たい袋を肩に担ぎなおすと、荷馬車に積みに小屋を出た。

風がない日、風車小屋の主は崖の上から海に向かつて釣り糸を垂らしているのを、ホープは知っている。秋の初めから風の強い日が続き、収穫後ということもあって最近オーバンはずっと働き詰めだ。去年は小麦が不作で仕事の少なかつたオーバンも、今年はどこか楽しそうだった。

ホープは小麦粉の入った袋を一袋づつ肩に担ぎ、前に停めた馬車の荷台に積んでいった。何度も扉を出入りし、ようやくその作業にも終わりにさしかかった。

「これで最後だよ。ありがとうー」

ホープが小屋の入り口の敷居をまたぐと、粉の挽き加減を見ていたオーバンが顔を上げホープに手をふった。が、オーバンは慌てた様子でホープを呼び止めた。

「おいつ！ ホープ！ お前さん怪我してるのか？」

「え？」

呼び止められ、ホープが肩に小麦粉の袋を担いだまま振り返ると、オーバンは大きな石臼の横をすり抜けてきた。髪や顔、体中に白粉をはたいた様になりながら、オーバンはホープの右腕をそつとつかんだ。

ホープはつかまれた自分の右腕を見て、黒い目を大きく見開いた。

「わっ！ なんだこれ！？」

驚いて担いでいた袋を下ろすと、床から白い粉じんが舞い上がった。

服の袖に血がにじみ、茶色の布地が黒く染まっていた。指先から腕へと血が流れた跡があり、白い手に赤黒く乾いた血がこびりついていた。

「おい、えらい血じゃないか。大丈夫かい？」

オーバンが心配そうにホープを眺めたが、血はすでに止まっているようだった。

「おかしいな。痛くもないのに」

ホープは足元の袋が血で汚れていないことを確認すると、外に飛び出て積み終えた袋も汚れていないか調べた。

不思議なことに小麦粉を入れた袋の方には全く血は滲んでいなかつた。大切な糧食が駄目にならず、ホープはほっとした。

「いつこんな怪我したんだる……」

ホープの右手の親指と人差し指が、なぜか強く脈打つように微かに震えていた。

(……ジョード?)

ホープは一瞬不思議な感覚に捕われた。昔から、双子の姉のジョードに何かあつた場合にこんな感覚にとらわることがあった。

徐々に右腕が痺れるのを感じ、ホープはしばらく右腕を押さえ続けた。

## 変わり者のヘーンブルグ卿

ヘーンブルグにまた冬がやってきた。

海沿いのアレー村から街道を東へ進むと、クランという領主の住む街がある。ヘーンブルグの中では最も都会ではあったが、それでも小さな街だった。

その小さな街の外れにヘーンブルグ領主の大きな屋敷はあった。

アレー村での魔女騒動から一年が過ぎた頃、ホープは一人でヘーンブルグの領主の館を訪ねた。

都會と言つてもヘーンブルグは森に囲まれた田舎領だ。領主の屋敷も手入れの行き届いていない鬱蒼とした森に面する場所に建てられていた。

雪雲が空を覆い日の光は遮られて、昼間だというのに辺りは夕方のように薄暗い。半分を森に面した屋敷は天気の良い日でもどこかしら日陰になり、天気の悪い日などはさらに不気味さを増していた。

ホープは使用人に領主に拝謁したいことを伝えると、白髪の女中メイドがホープを案内してくれた。広い館の中はひつそりとしていて人気があまりなかつた。ヘーンブルグの領主は、今は最小限の使用人しか雇つていないうやうであった。

無口な老女中に連れられて辿りついた部屋の扉を、ホープは恐る恐るノックした。

「入れ」

若い男の声で入室を促されホープは扉を押した。ぎいっときしん  
だ音が取つ手を握る手に伝わってきた。

領主の居る部屋は日の当たる方角にあるようで、窓からの弱い光  
が部屋の中を照らしていた。

正面の大きな窓と暖炉以外の壁は全て天井まで届く本棚になつて  
いて梯子が立て掛けられていた。暖炉に火は入れられていなかつた  
が、部屋の中は微かに湿っぽく廊下よりは暖かく感じられた。

部屋のあちこちにイーゼルが立てられていて、そこに大小様々な  
大きさのカンバスが置かれていた。描きかけや完成した絵が並んで  
いる。ホープは部屋の奥へと進みながら、横目でそれらの絵を見た。  
黒い髪の天使像や、黒く塗られた人間や、太陽だか月だか炎だか、  
何か良く分からぬものが描かれていた。

室内は雑多に散らかり、居るはずの領主の姿をホープは簡単に見  
つけられなかつた。

窓の前には大きなデスクがあり、その上は本が山積みになつてい  
て壁を作っていた。その壁の向こうに、革の長靴ブーツを履いた長い足が  
乗っているのが見えた。

デスクの上に足を投げ出し本を読んでいた人物が、けだるそうに  
ホープに話しかけてきた。

「叔父なら旅行に出かけているぞ。すぐには帰つてこない」

ホープは意味が分からず呆然とした。随分若い男の声だった。  
ホープが返事をしないでいると、

「なんだ？ 地税の直談判にきたのではないのか？」

声の主は、軽やかにデスクから足を下ろすと、読んでいた本を閉じ本の隙間からホープの方を見た。

驚くほど青い瞳が、積まれた本の隙間からホープをじっと見ていた。

ヴィンセント・フォン・ヘーンブルグは、今年で22歳になる若き領主だ。16歳の時、後継者の居ない叔父である前領主の養子としてこのヘーンブルグにやってきた。

ヘーンブルグで一番都会なクランの街でも金髪の人間は一人も居ないので、『新しい領主は金髪碧眼の美男子だ』と領中に噂は響き渡つていて、その名を知らない者は居ない。しかし実質的な仕事は今でも前領主が執り行つており、当の本人は館に引き籠もつて領民の前に姿を現したことはほとんどなかつた。

本の山の向こう側にいるのは、まさにその噂の人物だ。

「少年。何の用があつてここへ来た？」

ヴィンセントはデスクに山積みになっている本の上に、閉じた本を更に積み上げた。

本の壁越しに言われたが、ホープはデスクを横から回りこみ領主の前に立つた。

青い瞳の青年は革張りの椅子に深く腰を掛けっていた。その瞳の色は空よりも遙かに濃く、深い海のような青色だった。そして、ヘーンブルグでは見たことのない鮮やかな金色の髪に、ホープは思わず

田を奪われた。

ヴィンセントの青く冷たい視線がホープに突き刺さった。ヴァロニアでも一、一を争う田舎だからなのか、若き新領主ヴィンセントは到底貴族とは思えないような簡素な衣服をまとい、それをさらになだらしく崩していた。折角の金の髪も手入れしていないようで、読書の邪魔にならないよう適当に結わえられていた。

実は彼については『金髪碧眼の美男子』と言つことだけでなく、『変わり者』だと言うことも領内に知れ渡っていた。噂の人物に会えたのは良い話のネタだが、引き籠もりの領主しか居なかつたことに、ホープは今日ここに来たことを少し後悔した。

「領主様、あの、これを……」

ジョーダーの魔女疑惑を書かれた王都からの召喚状と、村の神父から紹介状をヴィンセントに差し出して見せた。

「なんだ、これは？ 魔女の召喚だと？」

ヴィンセントは紹介状の方には田もくれず、魔女狩りの書状を広げざつと田を通すと、封の紋章を確認し、眉間にしわを寄せた。

「王都ランスから出されているが、これは王太子からではないな。おそらく王太子の母君か、その取り巻きか」

椅子に腰掛けたまま、ヴィンセントは独り言のように呟いた。

ヴィンセントはちらりとホープの黒髪を見た。

「……に書かれてるのは、君の兄君なのか？」

「……いえ、姉です。ジョードが戻つて来れるよう、どうかこの魔女疑惑を取り消して欲しいんです。お願いします……」

「そうか。姉君に魔女の疑惑がかけられたのか。魔女裁判を勝たせたい気持ちはわかるが、残念だが、さすがに王太子の母君が相手では、私では力不足だ。もちろん叔父としても無理だ。姉君が捕まつて辛いだろうが」

「ジョードは捕まつたんじやないんです。聖地に逃げたんです」

ヴィンセントは勢い良く立ち上がると、声を高めた。

「逃げただと？ なんて馬鹿なことを……」

怒鳴りながら書状をデスクに叩きつけた。

デスクに積まれた本の山が揺れて、ホープは身をすくめた。

「大人しく連行されていれば、少しあは希望があつたものを逃げたなど。国に帰ってきたとしても、裁判も無しにすぐ処刑だ」

「そんな……」

「本物の悪魔や魔女でも捕らえて、姉君が魔女ではないことを証明でもしない限り、魔女疑惑が取り消されることはないだろうな」

それを聞いて、ホープは呆然とした。

「悪魔なんて本当に存在するんですか……？」

ホープの声が震えていた。ワインセントはホープの反応にため息をついた。

「今のはものの例えだ。『不可能』だと言っている

ワインセントはホープに言い切った。

「でも、それじゃおかしくないですか？ 悪魔が存在しないなら、その僕しゃくである魔女なんて存在しないはずなのに」

ワインセントは何か言おうとしたが、深くため息をつくと口をつぐんだ。

「……やつぱりジョーダは」のままヴァローナには戻つて来られないんですか？」

背の高いワインセントを見上げて訴えるホープに、ワインセントはデスクの上に叩きつけた書状を再び手に取り話し始めた。

「この書状、日付はほぼ一年前だな。君の姉君は聖地に逃れたと言つたが、そもそも生きているのか？」

そう言われ、ホープは押し黙つた。

「聖地オス・ローは一百年前のファールーク皇国とシーランド王国との戦争で崩壊し、今はファールークの領土となつている。その後オス・ローが復興したという話は聞かない。そして、当時の王ヴォード・フォン・ヴァロアの死後から、現在もフロリスからの越境は

禁じられていく

ホープは歴史の「」とは良くわからなかつたが、真直ぐヴィンセントを見た。

「どう言つたら信じてもらえるのかわからないけど、ぼくとジロー  
ドは双子で、姉が生きてる」とはわかるんです！」

「双生児の超感覚的知覚といつやつか。根拠はあるのか？」

「これを見てください」

ホープは右手をヴィンセントに見せた。人差し指に刃物で切れた  
ような傷痕があつた。

「一ヶ月位前に突然痛みもなく血が出たんです。でも血を拭くとも  
うこんな風になつてた。きっとジエードが怪我をしたんです」

「私がそんなことを信じるとでも思つてるのか？」

「それにジエードは……」

ホープは言いかけて辞めた。

「それに? なんだ?」

「いえ……」

「言いたまえ」

「……この事はぼくしか知らない事なんです。他言しないと誓つて  
ください」

そう言われ、ヴィンセントは大きく開いた胸元から、聖十字のペ  
ンダンツを取り出し、それを左手で持つと右手で十字を切った。

「ならば、クライス【天使】に誓おう」

それを聞いてホープはうなずいた。

「……ジヒードには【天使】の声が聞こえるんです」

「は？」

ホープの言葉を聞いて、ヴィンセントの眉根が寄つた。

「何年か前からジヒードは【天使】から聖地に来るようと言われて  
いたみたいなんです。【天使】の御加護があるのに、死んでるはず  
がない」

ホープの話に、ヴィンセントは呆れたように首を横にふつた。

「ここヘーンブルグで四年前にも同じことがあったのを君は知つて  
いるか？ その時はその少女の魔女の疑惑を取り下げるようによ  
足搔いてみたのだが、結局助けることは出来なかつた。魔女狩りに  
宗教的な意味などない。あるのは腐つた政治だけだ」

ヴィンセントの言葉に、ホープはまづくとぼそそと小さな声  
を出した。

「知っています……。実は……そのルースも、ぼくの姉なんですよ……」

…

「なんだって……？」

ヴィンセントは驚きを隠さなかつた。突然ホープの顔をまじまじと見つめて、青い瞳を大きく見開いた。四年前まで、この館で女中として働いてた少女の顔を思い出したのだろう。

「ルースは逃げなかつたのに処刑されてしましました……。ルースだつて魔女なんかじやなかつたのに……」

ホープの目から涙がポロポロとこぼれ落ちた。姉が魔女として処刑され、さりに下の姉にまで魔女の疑惑がかかつたのだ。末っ子のホープでも両親がジエードを逃がした気持ちは痛いほど理解できた。

「そりが、君はルースの弟か。なんという偶然、いや、これは必然と言つべきだな」

しばらく黙つていたヴィンセントだつたが、迷いを断ち切るよつにホープに言つた。

「少年よ、君自身は【天使】の存在をどう考へている？ 【天使】が存在するならば、相対する【悪魔】も必ず存在することになる」

「【天使】は存在します」

迷わず答えるホープに、ヴィンセントはうなずいた。

「よからうー 明後日、王都へ出発する。【悪魔】を捕えて叩き出

してやれり。君も私と共に来るがいい

王都への陳情にホープも同行することになった。

\* \* \* \*

出発の朝。

ホープは領主の館の一室で目を覚ました。いつもの癖で、随分早くに目が覚めてしまった。森から鳥の声が聞こえるが、窓の外はまだ暗く随分冷え込んでいた。

一昨日、ホープは遅くまで領主と話しつづけ、昨日も村へ戻れなかつた。父や母は心配しているだろうかと気にかかつた。

ホープは昨晩渡されていた服に着替えた。薄くすべらかな衣に袖を通し、胸元の小さな飾りボタンを一つ一つとめる。その上から上衣をかぶつて着た。普段ホープが着ている服よりも薄手であるのに暖かく、そして軽く感じられた。

豪華な衣装を身に着けた事がなかつたホープは、一緒に渡された棒状のリボンをどのように巻いたら良いのかわからず、手に握つたまま部屋を出た。

二十人は座れる長いテーブルのある広間へ行くと既に、ヴィンセン

トが居て、使用人達に不在の間の指示を色々出している所だった。

「おはよひびきます、領主様」

「ホープ、起きたか。じつに来てくれ

ヴィンセントは一昨日の簡素な服装とは打って変わって、壮麗な絹の衣装を纏い、外見全てにおいて完全に体裁を整えていた。服装だけではなく、貴族のオーラが滲み出でている。肌は透き通るようになびく、金の髪は綺麗にまとめられ、青い瞳が一層際立っていた。

ホープの手に握られた棒タイに気がつくと、

「かしてみる」

ホープの目の前に立ち、長身のヴィンセントがホープの胸元のタイを器用に結んでくれた。その指先の動作の一一つが美しく優雅に見えた。

先日とはまるで別人のように美しい青年に変わったヴィンセントに、ホープは気が引けて、その姿をまともに見ることすら出来なかつた。

胸元に結ばれたタイと絹の衣装をじっと見つめて、これから向かう先のことを考えるとホープの表情が更に硬くなつた。

「今からそんなに緊張していくどうする、王都はもつと悪の巣窟だぞ」

「緊張というか、不安なんですね……。ヘンブルグから出たことないし……」

「私も初めてヘーンブルグに来た時は不安だった」

「領主なのに?」

ホープが少し苦笑して、ようやく顔を上げた。ヴィンセントはホープに応えるように笑みを見せた。

「今後、私のことはヴィンセントと名で呼べ。いいな」

「はい」

ホープは返事をしたものの、すぐに『領主』を名で呼ぶなどとんでもないことだと気がついた。ヴィンセントの笑顔に魅せられてうつかり返事をしてしまい、ホープは自分の軽率さを後悔した。

\* \* \*

昼を過ぎた頃、王都ランスへと向かう準備を整えたホープと、ヴィンセントの二人は、それぞれ馬に跨ると領主の館を出発した。他に同行する者もない、一人だけの旅だ。

街道を少しアレー村の方に戻り、そこから北東へ伸びる道を一気に進む予定だった。

空はどこよりも曇り、真冬の寒さに馬上の身がしづれた。

街道と農地の境には低く石垣が詰まれているが、道路は舗装されておらず土がむき出しのままで、馬車の轍の部分が土を削つてへこんでいる。そんな牧歌的でのどかな風景に馴染むように、その街道を羊の群れが横切った。

その羊の群れの中に居た、羊飼いの少年にホープの用が留まつた。

「ちょっと待ってください」

ホープはヴィンセントに向かつてそう言つと、その羊飼いの少年の方に乗つっていた馬を向けた。

「ウィルダー！」

ホープが手を振ると、それに気付いた少年は上手い具合に羊の中からすべり出て、ホープの方に走つてやつてきた。

「ホープ！ 驚いた！ 誰かと思ったよ。なんだい、その格好？ どうしたんだ？」

羊飼いの少年はフードを取り馬上のホープを見上げた。フードの下からジョードやホープと同じ黒色の髪が現れた。幼馴染のウィルダーはホープよりも少し大人びて見えた。ウィルダーとはジョードが居た頃にはよく顔を合わせていたが、ジョードが居なくなつてからはほとんど会つ事もなくなつていた。

「あれは……領主様？」

遠田に見える金色の髪の人物に気が付くと、ウィルダーは身体を曲げて頭を下げる。

「ホープ、どこかへ行くのかい？」

「王都ランスへ行つてくる。ジョーダの魔女疑惑を取り消してもううんだ」

ホープの言葉にウィルダーは目を見開いた。

「……ジョーダは生きてるのかー？」

ウィルダーもまた、戻つてこないジョーダは死んでしまったものだと思い込んでいたようだ。

「うん。魔女疑惑が取り消されれば戻つて来れるはずだよ」

「本当に？」

ホープはうなずいた。

ウィルダーの表情がぱつと明るくなつた。ウィルダーは首から聖十字のペンダントを外すと、「君に天使のクライス加護を」と馬上のホープに手渡した。

ホープはペンダントを自分の首に掛けると、ウィルダーに向かつて強くうなづき、ヴィンセントの方へ馬を返した。

\* \* \* \*

ヴィンセントが先に出した伝令が王太子の元に到着していた。

城の中には王太子に忠誠を誓つた騎士や聖職者、王妃イザベラに對して反感を持つ貴族達、王太子の側近など、いわゆる『王太子派』と言われる者達が集まっていた。そこで23歳になるヴァロニアの王太子、ギリアン・フォン・ヴァロアは暮らしていた。

「王太子殿下、ヘーンブルグから書状が届いております」

「ヘーンブルグから？」

王太子は不審に思いながらもその書状を確認すると、椅子から立ち上がり喜びの声をあげた。

「皆の者！ 聞いてくれ！！ ヴィンセントが来てくれる！ あのヴィンセント・フォン・ラヴァール！ いや、今はヴィンセント・フォン・ヘーンブルグ卿だ！」

その時その場に居た者達も歓喜した。

「ヴィンセント・フォン・ラヴァールと言えば、ランスのラヴァール家の長男か。彼が味方に付いてくれるなら風向きが変わるかもしないな」

「しかも今まで蚊帳の外だったヘーンブルグの名を背負つてくるとなると……」

王太子の秘密を知る者達は、お互い目配せしてうなずきあつた。

## 臆病者の王太子

森に挟まれた街道を一頭の馬がゆっくりと進んでいた。ヘーンブルグ領を出たホープとヴィンセントの二人は王都方面へと向かつた。

ヘーンブルグから北東に向かつ街道は、人の往来は全くなかった。

日が傾くに連れ、辺りはもやに包まれた。白いもやは一人の視界をさえぎり、外套をしつとりと濡らす。馬もそれに乗る人間も白い息を吐いていた。寒さに顔が冷やされ鼻や頬の感覚が鈍くなつっていた。

ホープは少しでも寒さを防ごうと、新しい厚手の外套に付いているフードを田深にかぶつた。

「ジョーダが村を出て一ヶ月位経つた頃から特に、ジョーダの声が聞こえたり、指の傷みたいな不思議な事があるんです」「

道すがら、ホープは双子の姉ジョーダと共有する不思議な感覚についてヴィンセントに説明をした。

「姉君が聞いたという【天使】の声は、君には聞こえないのか？」

「……ぼくには聞こえません。聞こえてくるのはジョーダの声だけです……」

不思議な感覚はジョーダと共有するのに、どうして自分には【天使】の声は聞こえないのか……。考えると、ホープの気持ちは落ち込んでいった。

「姉君には【天使】の声、君には【姉君】の声が聞こえるとこう」とか。君にとっては姉君が【天使】なんだな」

「えつーー?」

少し憂いを帯びた穏やかな微笑をたたえながら言ひ、ヴィンセントの台詞に、ホープは思わず顔が熱くなった。

ほんの一昨日から一緒に居るだけなのだが、この領主は時々ホープが聞いた事もないような、歯の浮くような氣障な台詞を平氣で言つてきたりする。その度にホープは赤面し動搖するのだが、どうやらヴィンセント本人は至つて眞面目で、決してホープをからかつているつもりはないようだった。

森を抜けるとそこにはヘーンブルグの『外』だつた。もやは霧雨に変わつた。

やがて街道は大きな四辻に差しかかり、そこでヴィンセントは行き先を東から北に変えた。

「ヴィンセント、王都ランスはこっちでは?」

初めてヘーンブルグ領を出たホープだつたが、一応の地図は頭に入つてゐる。道の間違いをヴィンセントに告げた。

「いや、王都ランスへは行かない。我々はローゼン領へ向かう。王太子に会いに行くんだ」

ホープは突然知らされた事実に驚いた。

「あの魔女狩りの書状は王太子様から出されたものではないんですね？ それに王太子様は王都に居るんじゃないんですか？ どうしてローゼン領に？」

「王太子は王都<sup>ランス</sup>から追放されているんだ。今回は王太子の力を借りる」

「追放……？」

ヘーンブルグには王都<sup>ランス</sup>や王族のゴシップなどほとんど情報が入ってこない。ホープが何も知らないのも、ヘーンブルグの人間としては普通のことだった。

霧雨に布製の手袋はすっかり濡れていた。ホープはかじかむ指先で手綱を引くと、ヴィンセントに続き馬首を北へと変えた。

\* \* \* \*

ホープとヴィンセントの二人はツングエン領を通過した。アレー村を出てから四日目の夜半にようやくローゼン領に着いた。

ローゼン領は白いレンガの壁にぐるりと領地を取り囲まれていた。入り口の壁は一段と高く、アーチ上の門が口を開いていた。門番の様な者は居なかつたが、入領できる場所が街道からだけに限られて

いるようだつた。

ヘーンブルグのように森に囲まれた領内に村が点在しているのではなく、領全体で一つの大きな町を形成し、各区画ごとに名称が付けられていた。中央に位置する地区はシユノンと呼ばれ、中央の高台小高い丘の上に領主ローゼン候の邸 と言つより、城が立っている。道は全て石で舗装され、あぜ道だけのヘーンブルグと比べると、ローゼンは王都に並ぶほどの都会だつた。

夜、通りには人影は全くなく、一頭の馬の規則的な蹄の音が家々の間に響いていた。

ホープとヴィンセントは領の中央にあるローゼン領主の城を目指して馬を進めた。

月明かりが石畳を照らした。

周りの家々の木窓は閉じられ、屋根の煙突から細くなつた薄煙が昇るのが見えた。

石畳の上を馬蹄が響く中、ヴィンセントはホープに淡々と伝えた。

「初めに言つておぐが、ここはヘーンブルグとは違う。ツンゲンで既に気付いたかもしけないが、ローゼンにも王都にも、ヘーンブルグ以外には黒髪の人間はほとんど居ない。君はおそらく好奇の目で見られるだろ?」

「.....」

他領には黒髪の人間は居ないという噂はホープも聞いたことがあった。だが生涯ヘーンブルグから出る事はないと思っていた自分には、関係のない話だと思っていた。

闇夜のせいか、ワインセントの言葉はなぜかホープの恐怖心をあおった。ホープは寒さに身を縮めながら、ずっと黙つたままだった。

城の前に辿り着いたが、正面の大きな扉は既に閉じられていた。二人は馬から下りると、そのまま城の裏へと馬を引いていった。しばらく進んだところに背の高さくらいの裏口の扉を見つけた。

ワインセントが城の裏口の扉を叩くと、顔の高さに付いている四角い小窓が中から開けられた。ワインセントがそこに顔を近づけると、番人らしい男は蠟燭の灯りを小窓に近づけてワインセントの顔を確認した。すぐにガチャンと門を外す音が聞こえ、扉が大きく開いた。

「ヘーンブルグ卿！ お待ちしておりました」

「彼はホープ。私の友人だ」

番人はワインセントの後ろに居るホープに気がついた。一瞬身体をびくつかせたが、ワインセントを見て平静を保っているようだった。

番人は扉の中に向かつて別の男の名を呼んだ。呼ばれて出てきた下男らしき男に、ワインセントとホープは二頭の馬を預けると、そ

の扉をくぐつて城の中へと案内された。

真夜中ではあつたが、あちこちに蠟燭が灯され、裏口近くの部屋ではまだ多くの人が眠らず働いていた。

狭い通路を通りぬけ、その先の扉を開けると広い廊下に出た。廊下は真っ暗闇で静まり返っていた。上部の小さな窓から差し込む月明かり以外に、三人の足元を照らすものは、番人が手に持っている蜀台の蠟燭の明かりだけだった。

三人の足音がコツコツと絡まって、長く暗い廊下に響いていた。

\* \* \* \*

ホープとヴィンセントの二人はそれぞれ別の部屋に案内され、一晩身体を休めた。

翌朝。窓から朝日が差し込み目を覚ましたホープは部屋の中を見回した。

ヘーンブルグより北東にあるローゼン領はヘーンブルグよりも寒さが厳しい。昨夜月明かりで見た城の外観は石造りだったが、防寒の為、部屋の床には全面、壁にも枠組むように木が張られていた。

それでも明け方の冷え込みにホープは身を震わせた。急いで昨日

着ていた衣服に袖を通した。

「ホープ、起きているか？」

扉を叩く音とともに、ヴィンセントの声が聞こえたので、ホープは急いで扉を開けた。

ヴィンセントは昨日とは違う衣服を着て、金色の髪も綺麗に整えられていた。

「おはようございます、ヴィンセント」

「来給え。食事だ」

ホープがヴィンセントに連れてこられた部屋は、50人は座れるほど長いテーブルがある部屋だった。さながら食堂の」とく、既に席について朝食をむさぼる人たちでごった返している。人の話す声と金属の食器のぶつかる音で、部屋中騒然としていた。

奥の厨房へと繋がる背の低いくぐり戸を、使用人達が出入りしていた。せわしなく料理を運んだり空いた皿を片したりしていた。

食事をする人々はヴィンセントに気がつくと、一瞬その喧騒を止めた。長いテーブルの端に座っていた数人が場所を開けるようにそくさと去っていく。朝支度途中の騎士らしき人物の中には席から立ち上がり横を通り、ヴィンセントに「これはー、ヘーンブルグ卿！」と声をかけてくる者もいた。

座つたまま食事を続ける人々も、何か珍しいものを見るように、ヴィンセントとホープを無遠慮に眺めた。ホープはヴィンセントの影に隠れるよつにして、その後ろを小姓の様についていった。

二人がテーブルの角に座ると、使用人達は慌てて卓上に残された皿を片付け、肉の煮物や卵料理が雑然と盛られた皿を一人の前に置き、パンを盛った籠と水を容れた銀のピッチャーを一人の間を割つて置くと去つていった。

「今日の午前中に王太子と会えるように話をつけてある」

「ほ、本当ですか！？ 王太子様がぼくなんかと会つてくれるなんて……」

貴族のワインセントを名で呼ぶことであえホープにとつては身のほど知らずだというのに、この後ヴァロニアの王太子にまみえるというのだ。

ほんの数日前に領主ワインセントを尋ねてから大変なことになってしまった。ホープは今更ながら痛感した。ホープは期待と不安で胸が一杯で、目の前に置かれた料理もあまり喉を通らなかつた。

周囲の者達は興味深げに一人の様子を眺めていた。

それにしても、先ほどからいやに周囲からの視線が一人に向けられていた。ホープは自分達が見られていることに気がつくと、恐る恐るワインセントを見た。ワインセントもその視線におそらく気付いているのだろう。だが、敢えて知らぬ顔をして食事をしているようだつた。

人いきれで湿度の高い食堂の空気は、なおさらその妙な視線がホープにねつとりと絡みつくように感じさせた。

朝食を終えた二人は王太子の側近に連れられ迎賓用の部屋へと案内された。

その部屋の壁は一面真紅の布が掛けられ、三つあるテーブルの周りに不揃いの椅子が置かれていた。その椅子の一つ一つが豪奢で、背もたれに叙事詩の一場面のような刺繡がされているようなものまであった。

「いらっしゃりでしづらくお待ちを。謁見の準備が整い次第お呼び致します」

そう言い残し、案内の側近が一人を残し部屋を出て行った。  
ホープは緊張を隠すことが出来ず、立つたままそわそわしていた。

「私も少し外す。君はここで待っていてくれ」

傍から見ても落ち着きのないホープを置いて、ヴィンセントも部屋を出て行つた。

ヴィンセントは石造りの螺旋階段に足音を響かせ、上階の『ある部屋』へと向かった。

目的の部屋の前に辿りつき扉をノックすると、中から扉を開けら

れヴィンセントは入室を促された。

部屋に入ってきたヴィンセントを見て、奥のデスクに向かっていた人物は手にしていた書類やペンを投げ置くと、立ち上がってヴィンセントの所へ駆け寄ってきた。座っていた椅子が無作法にガタンと音を立てた。

「ヴィンセント！ 良く来てくれたね！」

ヴァローニアの王太子ギリアン・フォン・ヴァロアだった。

こういう行動が王太子の地位を危ぶむ原因の一つなのかもしれないが、ヴィンセントはそんな級友のことを好意的に思っていた。

神学校時代から貴族内で、王太子は『臆病者』、自分が『変わり者』だと言われているのもヴィンセントは知っていた。

今はローゼン候の城に身を寄せる王太子ギリアンは、身分を偽るために聖職者の長服を身に着けていた。以前とは全く違う王太子の服装や頭髪を見て、ヴィンセントは開口一番に言った。

「ギリアン、随分と僧侶の格を上げたな」

ヴィンセント本人が到つて真面目なのをわかつていいようで、王太子は苦笑した。

「ああ、この格好は随分寒いから最初は風邪で寝込んだけどね。ローゼンはランスより暖かいけれど、いつもこんな格好でいる聖職者達には本当に感心するばかりだよ。それ……」

王太子がそう言って側近の方にちらりと目をやると、側近を残し

他に居た数名の者たちは部屋を出て行った。

部屋の中が限られた者たちになつたのを確認し、ヴィンセントは話を切り出した。

「ギリアン、実は今回は頼みたいことがあってここまで来たんだ」  
黙つて軽く数回頷いてみせた。先に連絡を受けていたギリアンは既に準備を整えていたようだつた。

「僕は今まで何度も君に助けられてきたんだ。君のためなら出来るだけのことは何でもやりますよ」

「私の個人的な事で申し訳ないんだが、この少女を助けてやって欲しい」

そう言つて、ヴィンセントは魔女狩りの書状をギリアンに見せた。

「これはランスの、王族の烙印……。誰が勝手にこんなことを……」

王族の烙印を使えるのは、今はギリアンとその母の王妃イザベラだけだ。ギリアンは勝手に使われた王家の印を悲しそうに眺めた。

そしてギリアンもその書状に目を通すと、そこに書かれていた日付に目を留めた。

「一年前じゃないか。この処刑はまだ執行されていないのかい？」

ヴィンセントはホープから聞いた話をギリアンに説明して聞かせた。

「「Jのジエード」という少女が今生きていようと死んでいようと構わない。この魔女疑惑を撤回さえしてくれればそれでいいんだ。私個人の話はそこまでだ」

「ヴィンセント、「Jの子も【黒】なんだろう? ヘーンブルグの娘だ。【黒】にかけられた魔女疑惑は今まで撤回されたためしが無い。正直、僕には自信が無いよ」

「ならば確実に撤回できる方法を教えてやる」

「つむいでいたギリアンは顔を上げると真剣な顔付きのヴィンセントを見つめた。

「君が王に即位するんだ」

「……そんなこと、……僕には出来っこない」

ギリアンは目を伏せて頭を横にふった。言葉と一緒にため息がもれた。

「「Jのジエード」という少女の話なんだが」

「ああ、続きがあるんだね」

「その弟の話では、その少女は今【天使】の導きで聖地に居るらしい」

「【天使】の導きで……、聖地に……? 一体どうやって?」

現在フロリスから聖地オス・ローには入れないことを知っているギリアンは表情に疑問の色を呈した。

「「」の魔女疑惑が有効である限り、ヴァロニアには戻つてこれない。しかし、戻ってきたとしたらどうだ?」

悪魔と交わえば魔女<sup>ウェイツチ</sup>、天使に導かれれば聖女<sup>セイント</sup>。クライス信仰者がささやく口承は貴族でも農奴でも知つている。

「聖女……? でもそんな神秘的現象は、君が一番信じてなさそうなんだけど?」

ヴィンセントの性格を良く知るギリアンは苦笑した。

「信じてはいけないが利用は出来る。反王太子派が魔女を仕立て上げて利用しようというなら、こちらもそうすればいい。魔女と聖女、ランスの人間が好きそうな話じゃないか」

「……」

ギリアンは考え込むように黙つたが、独り言のように呟いた。

「黒髪の……【聖女】か……」

そんな王太子をヴィンセントはじつと見すえた。

「連れてきたのはその双子の弟だ」

「いや、疑つてゐる訳じやないんだよ。僕は君が腰を上げただけで十分信じるに値すると思つてゐる。だけ……ヴィンセント、君自

身は信じているのかい？

「今度ばかりは、私も信じてみたいと思つてるんだ」

ギリアンは肩をすくめて少し笑つた。はなから、ギリアンがどうするかを知つていたかのようない、ヴィンセントに少々呆れながらも、今までのヴィンセントの功績から彼の行動には間違いがない事を認めているようだつた。

「君を助けるつもりが、また君に助けられることになりそうだね」

ギリアンは納得したようにうなずくと、「では、謁見の間へ行こう」と、連れ立つて謁見の間へ向かつた。

\* \* \* \*

その頃ホープは一人、部屋で待ちぼうけを食らつていた。

椅子ばかりの部屋に取り残され、ホープは最初はその背もたれの刺繡の絵柄などを眺めた。緊張の方が勝つてしまい、集中して鑑賞することは出来なかつた。

同じ領主の住まいと言えど、ここはヘーンブルグ領主の『館』とは違ひ、その造りは完全に『城』だった。自分はあまりにも不釣合

いで、なんとも居心地が悪い。ホープはただ一人、綿の詰まつたビロード地の椅子に身体を硬くして座っていた。

ヴィンセントが出て行つてしばらくすると、扉がノックされ先ほどの側近の男が入つてきた。

「ホープ殿、王太子殿下がお待ちです。」案内しますのでこちらへ  
ヴィンセントの居ぬ間にホープは一人連れられ、王太子の待つと  
いう謁見の間に行くことになった。

ホープは石造りの廊下を側近の男の後について歩いた。昨夜とは  
違い、通路に響く足音は窓の外から聞こえる音に紛れてゆく。

「いらっしゃるです」

そう言って案内された扉の向こうから、さざめきが聞こえた。

背の高い扉が側近の手によつて開かれた。中には貴族や騎士達が  
集まつていた。華やかな装いの男女は、中央の絨毯をはさんで左右  
にわかれて立ち、謁見の時を待つていた。ざつと見て四五十人位だ  
ろうか。彼らの視線は扉から入つてきたホープへ注がれた。

【黒】 ?

あれは死病じゃないのか？

触れると感染るぞ……

途端にそんな密めやかな言葉がホープの耳に届いた。  
人々はホープを避けるように広がり、女たちは口元を手でおおつて隠した。

やがてさざめきが止み、皆がホープの真っ黒な髪を稀有なものを見るように眺めていた。

肌寒く乾燥する謁見の間では、人々の視線はまるで刃物のようにホープに突き刺さった。

(ヴィンセントの言つていた通りだな……)

ちくちく痛む頬に居心地の悪さを感じながらも、ホープは黙つてその場に立ち尽くしていた。

ホープの背後の半開きになつた扉から、一人の青年が謁見の間に入ってきた。立派な刺繡の施された衣装をまとつた青年は、ホープの横をすり抜けて絨毯の道を堂々と歩み、正面に置かれた椅子に腰かけた。入ってきた。貴族達は皆静かに脱帽し、かすかに頭を下げた。静まつた広間に、ひしめきあう人々の衣擦れの音が聞こえた。

(この人が王太子様……)

正面の椅子にこう然と座つた青年は、肘掛にしつかりと手を着きホープを見た。そして右の手を差し出し、指先を少し曲げて近くに来るようにホープに指図した。

ホープは絨毯の道を王太子の方へと歩んで行つた。

ヴィンセントとギリアンが謁見の間へ向かうと、入り口の扉が半開きになっていた。少し離れた場所からでも、謁見の間には既に多くの人間が集まっている空気を感じとれた。

「【黒】の少年か……。ヴィンセント、君が居てくれると心強いよ」

ギリアンの声が廊下にかすかに響いた。王太子派でも半分以上の者がギリアン本人を知らない。そういうた者達の前に初めて姿を見せるギリアンも、多少緊張している面持ちであつた。

謁見の間には五十人程呼び集められているはずなのだが、部屋に近づいても談笑も雑談の声も向こうから聞こえない。広間が既に静まっていることに一人は違和感を覚えた。

「ギリアン」

ヴィンセントの声にギリアンは不安を覚え、にわかに顔を青くした。

「僕は何も指示していない！」

僧の長衣を着たギリアンは小走りに、扉の隙間から謁見の間に滑り込んでいった。

身分に合わない氣弱な性格の所為で周囲に翻弄されるギリアンを、ヴィンセントは今まで何度も見てきた。ギリアンの後姿を見て息を

吐くと、自分は謁見の間には入らず、扉の隙間から中の様子をつかがつた。

王太子はヴィンセントと同じ歳の青年だつた。金色の髪は肩の上で綺麗に切りそろえられ、淡いブルーの瞳は歩み寄るホープを姿を映していた。

ホープが王太子の前に辿り着くと、周りの貴族達と同じようにホープの黒い髪を見て眉をしかめた。

「よく参られた。ヘーネブルグのホープ」

王太子の明朗な声が広間に響いた。

皆がホープに注目していた。ホープは緊張のあまりぎくしゃくしながらも、王太子の前に腰を落とすと右足を後に引いた。

『嘘よ！ 王太子様が黒髪だなんて……』

ひざまづいとした瞬間、ホープにジエードの声が届いた。驚いたホープは体勢を崩してよろめいた。

(ジエード…？ 王太子様が……黒髪…？)

ホープはつんのめつた身体を元にもどし立ち上がった。  
今ホープの目の前に居る王太子は金色の髪だ。

(このは王太子様じゃない……。偽者?)

ジョードは【天使】と話すことが出来るのだ。ジョードの声を完全に信用しているホープは、思わず後ずさりすると周りを見渡した。

貴族達は一斉にさざめきあつた。ホープに対する揶揄も聞こえてくる。だがホープの耳には観衆の声は入つてこなかつた。

(本物の王太子様は……どこに居るんだろう~)

偽の王太子の前で全員が脱帽している中、黒髪の人物は誰も居なかつた。

(ぼくは、だまされているのかな……)

貴族達にからかわれているのだ。王太子は自分のような者とは会つてはくれないと認識すると、途端にホープは羞恥と悲哀で心がいっぱいになつた。どんなに立派な服を与えられて着っていても、ここは自分の来るところではなかつたのだと。

王太子様ならジョードの魔女疑惑を撤回してくれると思つていたのに、やはり王族にまみえるなど、自分にはあり得ないことなのだと想い知らされた。

悲しみと羞恥に襲われる中、謁見の間から去ろうと思つてホープが扉の方に歩んで行くと、人々はまたホープを避けるように道を開いていく。

扉の近くに、完全に剃髪した若い僧侶が一人だけその場を動かずホープを見つめていた。

その僧侶の視線は、嫌惡の田でホープの黒髪を見ている観衆達とは違う。観衆の前で黒髪を晒すホープと似たような悲哀を浮かべていた。そしてよく見るとこの僧侶には眉毛も睫毛もなかつた。

(王太子様は黒髪……、まさか……)

ホープは小さな声で恐る恐る、僧侶に向かつて問いかけた。

「ギリアン・フォン・ヴァロア陛下？」

ホープの呟くよつた声が聞こえた貴族達はざわついた。

「よくここまで参られた、ヘーンブルグのホープ・ダーク。真に僕がギリアン・フォン・ヴァロアだ」

僧侶の傍に居た貴族達は驚いて腰を落とし、ホープも慌ててその場にひざまずいた。

広間は静まり返った。

「僕のこと……『陛下』と呼ぶのかい？」

「だ、だつて貴方は、この國の王になられる御方なのでしょう?」

ホープの言葉に、王太子派の觀衆達は歓喜に湧き上がった。

ヴィンセントは扉の影から満足そうにホープを眺めていた。

\* \* \* \*

「王太子様が黒髪だつたなんて……」

別の応接室に案内されたホープは、王太子の秘密を知つて驚きを隠せずワインセントを問い合わせた。

部屋の中央にある四角いテーブルを囲うように、L字に長椅子が置かれ、他に二つ、一人掛けの椅子が置かれている。その長椅子にホープとワインセントは一人ずつ腰掛け、ホープは身体を斜めに向けて、ワインセントに食い入つた。

「ワインセントは知つていたんでしょう？　どうして最初に教えてくれなかつたんですか？」

「言わないと誓いを立てたからだ」

この領主はジョードの秘密も言わないと誓いを立てたのだ。確かに教えられていれば、その信用を失う事になつていただろう。

「Jの城で暮らす王太子派にも、本物の王太子を知らない者も居れば、王太子を知る者の中でも、王太子の髪のことを知らない者がほとんどだ」

そう言つて感心した表情でホープを見た。

「何故彼が王太子だと判つた？」

そう聞かれホープは正直に答えた。

「……ジエードの声が聞こえたんです。王太子様は黒髪だつて」

するとヴィンセントは胸の前で両腕を組んで驚きの表情を見せた。

「では姉君は今も生きているんだな」

「はい」

ホープの答えを聞いて、ヴィンセントは何か考えている様子だった。長い指を顎に当て、視線を流しながら思いに耽る姿は優美で、どこか人間離れして見えた。

やがてふうっと息を吐くと、

「ギリアンが王位に就けば姉君の魔女疑惑を撤回できる。だが」

ヴィンセントはそこで言葉を止めた。

「王太子様が即位できないのは、黒髪のせいなんですか？」

「概ねそういうことだ」

黒髪の人ばかりが暮らすヘーンブルグでは全く分からぬ理屈だ

つた。

ローゼンに着いて、朝からホープは人々に痛いほど視線を向けられた。謁見後、その痛みはマシになつたように感じられたのだが。

「黒髪の人人が差別されているつていうのは噂で聞いた事があります。でもぼくは、今までヘーンブルグで特に不自由を感じることなく暮らしていました。どうしてここでは黒髪だけでこんなに蔑視されるんだろう……」

「ヘーンブルグの人間は、私と叔父以外は全員黒髪だらう。叔父も今じやすっかり白髪だ。金の髪だつた事を知つているのは老人ばかりだらうしな」

ヴィンセントの言つとおりだつた。だからヘーンブルグでは何も感じなかつただけなのだろう。余所者が訪れる事もなく、他領から情報さえも入つてこない。辺境の田舎領なのだ。

だが、それは黒髪が侮蔑される理由ではない。ホープは納得できなかつた。

「聖書だよ」

ヴィンセントは唐突に口にした。

「えつ？」

予期しないヴィンセントの言葉にホープは耳を疑つた。

「聖書つて、……どうして聖書が？」

「聖書に天使や悪魔の絵が載っているだろ？あの版画が黒髪蔑視の根源だ。クライスの教えではなく、あの絵が間違っている」

字が読めない人のために、聖書には沢山の宗教画が添えられた。白黒で刷られた絵は全て、天使は金髪で白人に、悪魔は黒い服を纏い黒髪や黒い肌で描かれていた。

「神はこの世の全てのものに平等だ。なのにあの絵はまるで白人は天使、黒人は悪魔であるように描かれている。本当に平等だと違うなら、黒髪や黒人の天使もいるはずだろ？」

「黒人？」

初めて聞く言葉にホープは反応した。

「フローリスには黒人は居ないが、聖地やモリスに行けば沢山居る。黒い肌の人間だ」

「黒い肌？」

黒い肌の人間などホープには全く想像が出来なかつたが、ふとヴィンセントの部屋で見た絵画を思い出した。沢山のキャンバスには黒髪の天使や、肌を黒く塗られた人間の絵が描かれていた。思えばあの絵画は、聖書の挿絵の概念を覆すものだつた。

「じゃあ、悪魔は黒い肌や大きな耳で描かれているけど、それは間違いなんですか？」

「おそらくそうだろうな」

「悪魔の本当の姿はどんななんだい?……」

「男も女も魅了するんだ。よほど美しい姿をしているんだろう」

男も女も魅了し誘惑する美貌の持ち主。

ホープはヴィンセントを見つめた。

悪魔はヴィンセントのような姿をしているのかも。

そう言おうと思ったがやめた。それは「冗談でも言つ言葉ではなかった。

「大体、フローリスを『光明大陸』、モリスを『暗黒大陸』と呼ぶのも悪趣味すぎる。そうは思わないか?」

ヴィンセントに言われても、ホープは今までそんなことを考えたこともなかった。学校や教会で教えられることはホープにとつては『絶対』であった。疑問を持つたことさえなかつたのだった。

一人が話していると、部屋の扉が開いてギリアンが入ってきた。

「すまない。待たせたね」

そう優しそうに言うギリアンに、ホープは椅子から立ち上がると緊張しながらも深々と頭を下げた。

ヴィンセントは座つたまま、組んでいた右手を外し、一人掛けの椅子をすつと差すとギリアンに座るように促した。

ヴィンセントは王太子に対しても決して毅然とした態度を崩さな

かつた。気弱そうな無髪の王太子と堂々とした金髪のヴィンセントの二人を見ていて、ホープはどちらが王太子か一瞬迷うほどだった。

「驚いただろ？　僕がこんなで」

ギリアンは自虐的な笑みを浮かべてホープに話しかけた。

ホープはまだ王太子に対する緊張が解けず、どうにか顔を上げると、ぎこちないまま長椅子に腰掛けた。

「いえ、王太子様ではなくて……。ここは、ローザン領での黒髪への蔑みに驚きました……」

「そうだろ？　ラヌスもテュールも、ヘーンブルグ以外はどうも同じだよ」

悲しそうに話すギリアンにホープは何も言えなかつた。

そんな雰囲気を打ち破るかのように、ヴィンセントはギリアンに言った。

「ギリアン、私とホープは後10日間だけローザンに留まろう。その間に覚悟を決めてくれ」

ギリアンは小さく一つうなづいた。

ホープの知らない間に、二人の間では色々と話が進んでいるのだろう。王太子が王位に就くには色々障害がある。おそらくその話をしているのだろうとホープにも想像できた。

「王太子様、どうかジェードを助けて下せ……」

ギリアンはホープにも黙つて小さく一つうなづいただけだった。

三人の間に居心地の悪い沈黙が続いた。

「僕が返事をするまで、良かつたらこの城に逗留してくれないかな」とする

ギリアンはヴィンセントに声をかけた。

「これ以上ここに居候を増やしても仕方ないだろ。私達はクート家に世話をなるうかと思っているんだが、話が通るまでは宿をとることにする」

「そうか。君は昔から変わらないな」

ヴィンセントに向かって王太子は苦笑した。

\* \* \*

ヴィンセントの言ったとおり、一人は城から少し離れた街道沿いの宿に移動した。

安宿の狭い部屋は薄汚れていたが、ヴィンセントは気にしていないようだった。床に荷物を置くと、外套を脱いでベッドの上に置いた。

ホープは王太子と会えて話せたことで、まだ興奮が冷めていなかつた。

「それにしても、驚きました。ヴィンセントが王太子様と友人だったなんて」

「同じ年に生まれて同じ学校に通えば、皆『御学友』だろう。それに神学校なんて馬鹿な貴族の息子達の集りだ。私も含めてな」

ヴィンセントは面白く無む邪じやくに付け足した。

「でも、王太子様はヴィンセントの事をすぐ信頼しているのが、ぼくが見ていてもわかりました」

「まだ冷めない興奮のあまり、ホープはヴィンセントの王太子に対する無礼とも言える言葉遣いを指摘するのも忘れていた。

「私もギリアンもお互いはぐれ者なんだ」

「でも、王族ですよ？」

「君は王族を何だと思ってるんだ？」

「何つて、王様の家系でしょう？　このヴァロニアを支える王様ですよ？」

手放しで賞賛するような言い方をした所為か、ヴィンセントは呆れたような視線をホープに向けた。

「まるで神のような言い方だな。王なんて所詮只の管理職だ。しかも管理なんてしちゃいない。結局国を支えるのは一人一人の国民だ。管理者はそれを統括して利益をむさぼり取るだけだ。そのくだらない名ばかりの管理職の座を姉弟で争つて、迷惑被るのも国民だ」

ホープは王族に対する憧憬に近い気持ちを、ワインセントによつてばつさりと切り捨てられ途方に暮れた。

「……ワインセントは王族や貴族が嫌いなんですか？」

「今頃気付いたのか？」

ワインセントの答えに、ホープは啞然とするばかりだった。

そして今頃、ワインセントが『変わり者』だという噂を思い出して一人自分を納得させた。

およそ一百五十年前。

光明大陸のヴァロニア王国とシーランド王国は、聖地オス・ローをめぐり暗黒大陸のファーリーク皇国と争つた。

三十年に渡つた聖地をめぐる争いは、ヴァロニア対岸の島国、シーランド王国軍の敗退で幕を下ろした。

この時、ファーリーク皇国、ヴァロニア王国、シーランド王国の三国間で、フロリス人のオス・ローへの越境を禁じる調停が交わされた。

時が過ぎ、ヴァロニア王国とシーランド王国の血盟は解かれた。シーランドの祖先は大陸のヴァロニアに向いた。冬は港が凍るほど厳しい寒さの一国が争うのは夏の季節だけだった。長引く戦争は百年経つた現在も続いている。

百年の間に、戦地近くの領地は荒れて疲弊し、ヴァロニアとシーランドの王族・貴族間の因縁はさらにこじれた。

ヴァロニアではシーランド側に寝返る領も現れた。シーランドに最も近いガイアール領は一番早くにヴァロニアに反旗をひるがえし、シーランド王国側についた。

ヴァロニア王カルロスは永続する戦いに終止符を打とうと、シーランド国王と条約を結んだ。それは、カルロスの死後は娘リナリーの夫にヴァロニアの王位を移譲するというものだった。ヴァロニアのガイアール領と王都の境の街、ヴァンデで調印された条約は『ヴァンデ条約』と呼ばれた。

翌年、シーランド国王ローランはヴァロニア王女リナリーと婚姻を結んだ。

その事が原因で、ヴァロニア内ではさらに各領が王威派と王太子派に分かれ、国内でも内戦が起っていた。

。 。 \* : . 。 . . \* . 。 \* : . 。 . . \* .

四年前

1422年、ヴァロニア王国ガイアール領

ガイアール領はヴァロニアの北東に位置する。まだ秋だというのに小雪がちらつきはじめた。

ガイアール領主が所有する海沿いの城の最上階の一室に、ギリアンの姉であるリナリー・フォン・ヴァロアと、その秘書官オーエンは居た。

細長い窓から雪雲の広がった灰水色の空が垣間見える。上空の空気は更に冷たく、壁と床は石が剥き出しのままの部屋は氷のように冷えていた。

壁際にたたずむリナリーとオーエンの他に、部屋の中央には若い娘がうつ伏せに倒れていた。

娘の背には小さなナイフが突き刺さり、血の池がじわじわと広がっていた。激しく呼吸をしているのか、突き刺さったナイフが上下に揺れていた。

やがて娘の動きは鈍くなつた。

突然、部屋の中は窓を閉ざしたかのよし、昼間と思えぬ闇に包まれた。

娘の傍に金色の髪と翡翠色の瞳を持つ美しい男が立つていた。

男が現れたのを見て、リナリーはゆつたりと編んだ長い金色の髪を背中の方にはりつと、満足そつにほくそ笑んだ。

「見よ、オーハン。私の言つた通りであらう」

「あれが、【魔】……」

オーハンは男の姿に目を奪われ、息をのんでつぶやいた。  
リナリーは横目でオーハンを見やつた。

「私はローランが死んだ時に、一度あの【魔】を見たのだ。誰も信じようとはしなかったがな。そして【魔】はローランの望みを叶えて、父上を殺したのだ」

そう言つと、リナリーは娘と【魔】の方へヒドレスの裾を引きずりながら近づいていった。

「……」

血だるまの娘の声は声とならず、最後の力で【魔】の足首をつ

かんだ。

『僕がここに来たと言つた事は、貴女はもう助からないよ。早く望みをお言ご』

足元の娘にそり立つと、【悪魔】は近づいてくる女に視線を向けた。

『これは黒魔術とでも呼べばいいのかな?』

【悪魔】がリナリーに向かつて口を開いた。娘の死は【悪魔】を召還するために意図的に作られたものだと察したのだひつ。

「死に逝く者の望みなど叶えてどうするというだ。そなたがローランの望みを叶えて父上が死んだ時、私は可笑しくて仕方なかつたぞ」

『あなたはアルフーランに会つたはずなのに』

「そうだ。だからこそ、私はお前の存在を確信したのだ。そして誰にも私を救うことは出来ないといつことも理解した」

【悪魔】は一瞬リナリーから目をそらすと、力を失つて床に倒れた娘の手首をそつと足で押しやつた。

リナリーは【悪魔】よりも冷たい目つきでその様子を眺めた。

「私はその娘と契約を交わしたのだ。その娘の望みは私の望みを叶えること」

『この娘が心からそれを望んでいたなら、そういうのもありだけどね』

「父上が先に死ねば、夫がヴァロニアの王になるはずだつた。だがあのローランは父上より先に死んでしまつた。馬鹿な男め、死ぬのが早すぎだ！ 全てが私に不利になつた！ アンリはまだ一歳にもならんのだぞ！」

シーランド国王ローランの予想外の病死を思い出し、苛立つてリナリーは大きな声を出した。

「ヴァロニアだらうか、シーランドの王位すら義弟のオスカーに奪われたのだ」

『僕が何もしなくても、貴女の子はいずれヴァロニアの王になれるんじやないの？』

「アンリはオスカーに奪われた。あの男、私を追いやつてアンリを利用し、ヴァロニアの摄政になろうなどふざけたことを。オスカーを殺せ！」

『この娘はオスカーの死なんか望んじやいない』

「ではギリアンでも構わぬ！」

リナリーの怒りの形相に【悪魔】は微笑した。

『僕は死に行く魂の願いしか聞けない』

「私はもとよりシーランドなどに興味はないのだ。私が欲しいのはヴァロニアだ」

『貴女の望みを叶えられるのは、貴女が死ぬ時だ』

「悪魔よ。死に逝く者の望みなど叶えても無意味ではないか？」

『望みはこの世への想い。捨ててもらわないといけないからね』

リナリーは金の髪の【悪魔】をじっと睨みつけた。

『僕が人に与えられるのは「死」だけさ。人の世に捕らえられる僕の子なら、貴女の願いを叶えられるかもしだれないな』

そう言い残すと、周りの闇を引き連れて姿を消した。

冷たい床に倒れた娘は、もうピクリとも動かなかつた。

しばらく経つて、オーランはようやく口を開いた。眼前には若い娘が息絶えているというのに、それ以上に凄惨なものを見たようだつた。今頃足がガクガクと震え、冷たい壁に手をつかずには立つていられなかつた。

「……僕の子とは……【悪魔】の子供の事なのか？ それは魔女の産んだ子と言つことなのだらうか？」

あの【悪魔】と渡りあつた氣の強いリナリーを見て、オーランはこめかみに浮かんだ汗をぬぐつた。

「ふふつ。母上は悪魔などいないと言つていたが、やはり悪魔はいたな。ギリアンもやはり悪魔の子なのだらう。そして母上こそ魔女ウイッチ

なのだ」

叫びながらリナリーは勝ち誇ったように笑った。

「まさかギリアン殿下が本当に悪魔の子だと？」

王妃イザベラを魔女呼ばわりすることは、さすがにオーランにはためらわれた。

「ギリアンのあの不気味な黒髪。そなたは知つていただろう？ 悪魔じみていると思わぬか？ なんなら母上を問い合わせてみても良いぞ」

リナリーは残虐な笑みを浮かべた。

「いや、しかし……、本当にあの美しい【悪魔】の子どものだとしたら、黒髪なのは逆におかしいのではないかと……」

秘書官に描寫された事実にリナリーは唇をかんだ。

「オーラン。仮にギリアンが悪魔の子でなかつたとしても、私にはもう一人心当たりがあるので。あの【悪魔】によく似た男を一人知つていて。本当に良く似ていてる。最初に見た時は驚いたほどな」

「それは……、どなたですか？」

リナリーはかつて騎士の見習い時代という頃に顔を合わせていた少年を思い出した。金色の髪の恐ろしく美しい男。

「ヴィンセント・フォン・ラヴァール。ギリアンの親友の無礼な男

だ

「ヴィンセント・フォン・ラヴァール……？ と言つと、あの『ヴァンデの悪魔』ですか？」

リナリーの左の眉がピクリと動いた。

「あの男、そんな異名もあるのか？ 奴には確か弟も居たはずだが、弟の方はあまり似ておらぬな……」

リナリーは目を細め笑いをかみ殺した。壁際にたたずむオーエンを置いて部屋を去つていった。

．．．＊：．．．＊．．．＊．．．＊．．．＊．

ホープが王太子と謁見した翌日から、ホープとヴィンセントの二人はローゼン領のクート家に身を寄せていた。

王太子からの返事はまだなく、逗留期間の半分、五日が過ぎた。

ヴィンセントは毎日ローゼン候の城に通い、騎士達と何か計画を企てているようだった。

ホープはと言つと、ローゼン領では黒髪は注目の的だった。それも興味だけでなく悪意の入り混じつた視線を向けられる。居候先に

一人でとどまることもいたたまれず、毎日ヴィンセントに同行してローゼン候の城に通つて過ごしていた。

そして、ホープは毎日王太子ギリアンと顔を合わせていた。王太子の話に耳を傾けたり、ヘーンブルグ領の話を要求されたり、何かしら彼の傍に居ることが多かつた。ホープは何故王太子が自分に対してこんなに積極的に接してくれるのかが不思議で仕方なかつた。

五日目も、ホープとギリアンは談話室で話していた。

部屋の中央辺りにテーブルを挟んで並べられたソファーに、二人は向かい合つて座つていた。二人の他に誰も居らず、暖炉の薪がはげる音が時々部屋に響いた。

「魔女狩りは、僕らが生まれるよりずっと以前から続いている。だけど、昔【魔女の報復】<sup>ランス</sup>にあつて以来、魔女狩りの数は随分減つて、魔女狩りの目的も変わってきたんだ」

「【魔女の報復】？」

「【魔女の報復】というのは、一百年位前のことかな。魔女狩りで魔女を怒らせて、王都<sup>ランス</sup>の領民の半分以上が呪い殺されたと伝えられているんだ。でも魔女の呪いなんかじゃない。本当は流行り病さ。死病が蔓延したんだ。……皮膚が黒くなり死に至る病が

皮膚が黒くなつて死ぬ。

ホープの頭に五日前に初めて聞いた『黒人』の姿が思い浮かんだ。

「その後、魔女狩りの数は減っていたんだ。なのに、ここ四、五年前から魔女狩りが急激に増えている。四年前、僕はまだランスに居たから、何度もその火炙りを目にしたよ」

ギリアンの口から『火炙り』と聞いて、向かいに座るホープは想像してぞっとした。

「魔女<sup>魔女</sup>は火炙りにあつても死がないというからね。魔女の疑惑は命を落として初めて晴らされる。酷い話だろ?」

王太子の言葉に、ホープは姉ルースの事を思い出しうつむいた。

「ああ……」

王太子はホープの拳動に気付き、何か言おうとしたが結局口をつぐんだ。

すまない。そんな言葉の続きを聞こえた気がしてホープは顔を上げた。

「……火炙りになつた人の中に、本物の魔女<sup>魔女</sup>は居たんですか?」

ギリアンは頭を横にふった。

「そんな訳はない。【魔女の報復】以降に魔女として処刑された者は、政治犯や、政治にとつて危険な思想を持っていた人物だ。本物の魔女<sup>魔女</sup>なんて居るわけないんだよ」

ギリアンの考え方には、ヴィンセントと同じだということにホープ

は気がついた。

だが今回、ヴィンセントはホープが話した、姉ジョードに聞こえる【天使】の声を信じて腰を上げてくれたのだ。

ホープはギリアンに魔女の存在を否定され、まるでジョードに聞こえる【天使】の声まで否定されたかのように感じた。

「だから、今まで国政にほとんど関わっていない君の故郷ヘーンブルグからは、魔女疑惑の対象とされる様な人物はいなかつたんだ」

「でも……」

「君の二人のお姉さんの事だらう？」

ホープは黙つてうなずいた。ルースやジョードが政治犯や危険思想の持ち主のわけがない。

「君のお姉さん達とヴィンセントはどういう関係だつたんだい？」

「上の姉のルースは領主様の……、ヴィンセントの館で使用人として働いていました。それくらいしか……」

ルースは、ヴィンセントの館で働くようになつて、政治的な何かに関わつてしまつたのだろうか。そしてジョードはその事をルースから聞かされたりしたのだろうか。

ホープの頭にはその程度しか思い浮かばなかつた。

「気になるようなら、ヴィンセントに直接聞いてじらん。彼は何も隠したりしないと思うよ」

「はい」

「あの不動心のヴィンセントが酷く取り乱したのは、後にも先にも  
四年前のヘーンブルグの魔女狩りの時だけだよ」

ギリアンの言葉は、ホープにはとても温和に聞こえた。

「ヴィンセントがヘーンブルグに行くことになつたのにはちょっと  
した事情があつてね。本当はヘーンブルグを出ることは許されてい  
ないはずなんだ。だけど今回、君の為にそれを破つてここまで来た  
んだ。それに、四年前も。【黒】の少女、つまり君のお姉さんを魔  
女裁判から救うために一度ランスまで戻つてきたことがある。だけ  
ど結局助けられなかつたんだ」

「そうだったんですねか……」

ホープはヘーンブルグでは館に引き籠もつていたヴィンセントこ  
とを思い出した。

「その後、彼は元帥の称号も返還してきた。きっとその時、もう二  
度と王都<sup>ラス</sup>や王侯貴族と関わらないと決めたんだうつと僕は思つてい  
たんだ」

「ヴィンセントは元帥だったんですねか？」

「そうだよ。ヴィンセントは在学中にヴァンデでのシーランドとの  
鬭争での功績から、元帥の称号を与えられたんだ。15歳の時だっ  
たかな」

来年15歳になる自分には到底真似出来そうにもない。ホープは  
思わず感嘆のため息をもらした。

ホープのヴィンセントに対する憧憬の眼差しを見て、ギリアンは少しすまなそうな表情になつた。

「僕は騎士ではないので戦場での事実は知らない。でも、元帥の称号を得た戦いで、ヴィンセントは戦場での残忍さを悪魔に譬えて『ヴァンデの悪魔』と呼ばれていたんだよ。……」

「残忍……？ ヴィンセントが『悪魔』……？」

「一人で一万人のシーランド人を殺したとか……。噂だけどね……」

ヘーンブルグの館でだらしなく服を着崩し、デスクに足を乗せて読書に耽っていたヴィンセントからは想像できなかつた。

王太子は悲しそうに頭を伏せた。

「だからヴィンセントが16歳でヘーンブルグに行つてしまつて、正直僕は安心したんだよ。ヘーンブルグなら、彼がもう争いに借り出されることもない。親友が『悪魔』と呼ばれるのを聞きたくなかつたから」

ヴィンセントに『悪魔』と呼ばれるような所業はして欲しくないと思う王太子の気持ちが、ホープにも伝わってきた。

「だけど、まだヴィンセントを引っ張り出してしまつた

優しそうな王太子の言葉に、ホープはヴィンセントをヘーンブルグの外に連れ出したことの責任は自分にあるのだと感じずにはいられなかつた。

「……それはぼくの所為です」

「いや、君の所為じゃないよ。君の所為じゃないんだ……」

ギリアンは自分にもホープにも言い聞かすように繰り返した。そして視線を自分の膝に落とし、思慮深く何かを考えているようだつた。

「王太子様はどうして、なんかにこんなにも良くしてくれるのでですか？」

そう聞かれて、ギリアンは視線を膝の上の自分の手からホープに戻した。

「……こんな風に言つと君は怒るかな」

ギリアンはためらいがちに口を開いた。

「君と話していると僕は『王太子としての<sup>アイデンティティ</sup>自我同一性』を維持できるように感じるんだ」

「それはぼくが同じ黒髪だからですか？」

ホープの質問に、ギリアンの顔が曇った。

「……半分は正解だね。でも、『同じ黒髪だから』じゃないんだ……。僕の中にも【黒】を蔑む心が存在している……」

そう言って、ギリアンはホープから目を逸らし、苦渋の表情を浮

かべた。

「僕は君が【黒】だから仲間だと思っているんじゃない。僕は【黒】のことを哀れんでいるんだ。君の言つとおり僕も同じなのにな……。心の底では【黒】を蔑んでいるんだ……」

かすれ声で話すギリアンに、ホープは何も言えずただ黙っていた。

「こんな僕が本当に王になつてもいいのか、わからないんだよ

と、ギリアンは言葉を振り絞るように言った。

\* \* \* \*

その日の夕刻。

街中を歩くヴィンセントとホープの姿があった。石畳の上に長く伸びた自分達の影を追つゝ、坂道を並んで歩いていた。

クート家までの帰途、ヴィンセントはホープに尋ねてきた。

「ギリアンは返事をしてきたか？」

あれからギリアンとヴィンセントの二人は顔を合わせていないようだった。ギリアンからの返事はホープにすら聞えられていった。

「今日はそんな話はしていません」

「君たちは毎日何時間も、一体何について話しているんだ?」

自分も黒髪でありながら、自分の中の【黒】を蔑む心に苦悩するギリアンの姿をホープは思い出した。

きっと王太子の苦悩は、いくらヴィンセントとはいえ、金色の髪を持つ人間には理解できないだろう。だからこそギリアンは黒髪である自分には打ち明けたのかも知れない。そう思つと、その話題をヴィンセントに話すわけにはいかなかつた。

「ヴィンセントについてです」

「私の事か」

ホープは少し嫌味っぽく言つてみたが、ヴィンセントは全く気にした風ではなかつた。もう少し驚いてくれても良いのに、相変わらずヴィンセントは平常を保つてゐる。それどころか、話題に上がつても当然といつような余裕すら感じられた。

「嘘です。本当は魔女狩りについて色々聞いていました」

「なるほど」

ギリアンに言われ、あの後ホープは一人で姉ルースとヴィンセントの関係について色々考えた。

一人が出会つた頃、ヴィンセントは16歳、ルースは15歳だつた。男と女の事なのでどうしても野暮なことしか思い浮かばない。

初めてヴィンセントを訪れた日のことと、ギリアンの話しぶりを思い出すと、ますます二人の関係が疑わしく思えた。

しかし、ルースは貴族の目に止まるほどの美人でもなかつたし、冷静に考えれば、二人の身分が違ひすぎる。

ヴィンセントは領主なのだ。領民は領主の所有物とされ、男女の婚姻の際は領主に許可を得なければならないという古い慣わしが、まだヘーンブルグにはあつた。

そんなはずないだろ？　と、ホープは自分の考えを否定する気持ちの方が強かつた。

「ヴィンセントがジョードの為にここまでしてくれるのは、ルースの事で、ぼくの家族に対する罪滅ぼなんですか？」

ホープはわざとルースの名前を出すと、そつとヴィンセントの顔を見た。ヴィンセントの顔は逆光で影がかかり、表情はよく分からなかつた。

「私はそこまで善人ではない。これは私自身の罪滅ぼしだよ」

ヴィンセントの声色からは動搖も悲哀も感じられなかつた。

ホープはギリアンに言われたことを思い出した。

ヴィンセントに直接聞いてじらん。彼は何も隠したりしないと思つよ

末っ子のホープは、兄たちに色恋沙汰について訊ねたことがあつた。そんな時、きまつて怒られたりはぐらかされたりしたものだ。

ホープは一人で悶々と考えていることに耐え切れず、ヴィンセン

トに問いかけた。

「あの……、ぼくは何も知らないんですが。姉さん……、ルースとヴィンセントはどういう関係だったんですか?」

ヴィンセントは立ち止まると、青い瞳でホープを見つめた。

「私達は恋人同士だった」

ヴィンセントは夕日を浴びながらためらいなく答えた。

まさか一人が恋人であるはずがない。そう思っていたホープの裏返しの期待をヴィンセントは予想通りに裏切ってくれた。

ヴィンセントの真っ直ぐな言葉に、ホープの心の中のもやが一気に消え去った。ホープの方がはずかしくなり、頬が赤く染まった。姉ではなく、まるで自分がヴィンセントの恋人として選ばれたかのように、不思議と胸の奥が熱くなつた。

「そう思つていたのは私だけかも知れないがな

ホープの胸のときめきなど知らず、ヴィンセントは少し空しそうに言った。

ルースの死んだ今となつては、ルースのヴィンセントに対する気持ちには知りようがない。

だがホープには、ヴィンセントは『貴族の火遊び』ではなく、言葉通り本気でルースを愛していたのだろうと思えた。

「そうだったんですね。その事はぼくの家族は皆きつと知りません

……

「ルースを助ける」ことが出来なくて申し訳なかつたな」

ルースの処刑執行から四年が過ぎてゐる所為なのか、ヴィンセントは感傷的になることもなくホープに話した。

「ヴィンセントの所為じゃありません」

ホープはそう言つたが、ヴィンセントの方はそうは思つていなかつたらしく、厳しい口調で切り替えてきた。

「本当にそう思つてゐるのか？ 今話で君も氣付いただろ？ 何故ヘーンブルグのダーク家の姉妹が魔女に仕立て上げられたのか。原因はこの私だ。私を王都に呼び戻すための政治的意図だ。おそらくは反王太子派のな」

そう言つと、ヴィンセントはホープは置いて先に歩き出した。

ホープは敢えて追いつかないように、ヴィンセントの後ろをじょとぼと歩いていた。

しばらくして前方のヴィンセントが立ち止まり、後ろに居たホープを振り返つた。ホープは自分も歩みを止めると一人の間に距離を置いた。

「ホープ！ 今回私がローゼンまで来たのは、君の姉君、ジョーダーの話を信じたからだ」

黄昏の街中で、ヴァインセントは離れたホープに聞こえた。「この大きな声で叫んだ。

\* \* \* \*

そして、約束の期日の十日目。

王太子は私室に、ヴァインセントとホープ、そして側近、数名の騎士達を呼び出して宣言した。

決して広くはない部屋の中に、合計十人ほどが肩を並べていた。

「僕はヴァローナの王として戴冠を受けようと思つ」

騎士達は声をそろえて歓声をあげ、ホープの顔には笑顔が浮かんだ。

そんなホープを見て王太子はそつと付け足した。

「君の為にね、ホープ君」

「……あ、ありがとうございます!」

君の為に……と言つ王太子の言葉の身に余る光栄さに萎縮してしまつた。王太子の言葉には、ホープ個人の事情だけでなく、きっと

【黒】に対する想いも込められているに違いないのだ。それが分かっていても、ヴィンセントに言われた通り、まるで神の言葉を授かつたかのように感じた。

「誰かの為に何か出来るところのは、僕にとっては有り難い事だよ……」

昨日まであんなに話をしていた相手なのに、改めてギリアンは王太子だったのだと、いずれ王になるべき人物なのだと、ホープは頭と身体が緊張に支配されてしまった。

宣言とは裏腹に、ギリアンの表情は暗かつた。ギリアンが大手を振つて王位戴冠にのぞむわけではない事は、彼を知る者誰もが感じていた。

そんな様子のギリアンに敢えて問いただす事をするのはヴィンセントだけだった。

「ギリアン？ 君は何を躊躇つているんだ」

他の者達が居る席で敢えて聞くヴィンセントに対し、じりじりと口をつぐんでいけないと察したのか、ギリアンは苦しそうに口を開いた。

「実は……母が、悪魔を信仰しているようなんだ」

「悪魔……信仰？」

初めて耳にする言葉に、ホープは思わず口にして繰り返した。

## 悪魔信仰

ホーパ以外は悪魔信仰を知っていたが、『王妃が』『』という所に驚きを隠せなかつた。

聞いていた騎士達が噂話を口にした。

「ランスでは悪魔信仰が広まりつつあると聞いたことがある」

「悪魔を信仰するのに魔女を処刑するといつのか。なんと辻褄が合わないことを……」

ギリアンは口々に話す騎士たちの話の間に割り込んだ。

「いや、悪魔信仰の噂がもし本当だとしたら、魔女狩りなんて有り得ない。そもそもあの魔女狩りの文書は誰が出しているのだろう？ ランスの……、ヴァロア家の烙印は僕か母しか使えないはずなのに」

他にランスの烙印を使えたのはギリアンの父と姉だった。しかし、前、ヴァロニア国王のカルロスは四年前に急逝、一つ上の姉リナリーは、前シーランド国王ローランと結婚してシーランド王国に居る。

ギリアンの父 前王のカルロスは、シーランドとヴァロニアの抗争を終わらせようと尽力した王だった。

ヴァンデ条約により、ヴァロニア王カルロスの死後は、王女リナリーの夫となつたシーランド国王ローランがヴァロニア国王に就き、二重王国制となるはずだった。

しかし、多くの貴族や幕僚達がシーランド国王に、ヴァロニア王位

を譲ることに反対をした。

正統なヴァロニア王家の血族、ギリアン王太子によるヴァロニア王位継承を提唱した。

これがギリアンの王位正当性を推す『王太子派』だった。

「四年前に父が亡くなるまでは、魔女ウィッチとして処刑されたのは所謂政治犯だった。主に下級貴族の男だった。だが、父が死んでからというもの、特に政治と関係のない【黒】の女性ばかりが魔女として処刑されている。これらの魔女狩りは一体何を扇動しているんだろうか……」（）

静かに語る王太子の言葉に、その時部屋に居た者は黙つて耳を傾けていた。

## 悪魔のトドモ（後書き）

( ) 魔女<sup>魔女</sup>には男性もいますが、男のウイッチでも日本語では『魔女』と訳されています。

もうすぐ暦は春になるといつのに、王都ラヌスの空には雪雲が広がり、静かに雪が降つてた。

ラヌスでは、つい先週からよつやく初春の暖かさを取り戻してきたところだつた。それが昨晩から突然ぶり返した寒さに見舞われた。薄暗い空の下、人々は久しぶりの大寒を逃れ家にこもり、暖炉に薪をくべていた。

時折通る馬の蹄の音も、柔かく降り積もつた雪に吸い込まれていつた。

王都<sup>ラヌス</sup>のラヴァール家では、既に養子として出て行つた兄が突然の来訪した。

そのことに妹のラシェルはひどく怒つてた。連絡なしに帰郷したばかりか、家主に許可も取らず勝手にある人物を実家に呼び出した事に対し怒り心頭だつた。

ヴィンセントの妹はホープと同じ歳位に見えた。応接室は既に暖まっているのに、ストールを肩から羽織つたまま、暖炉の前を苛立ちをこらえるようにうろうろしていた。兄に良く似た美人だつたが、この時は眉を吊り上げ目を尖らせていた。

「四年振りに現れたかと思つたら！　お兄様はどうしていつもいつも恐ろしいことを考えておられるの…」

長椅子に腰掛けるヴィンセントとホープの前で、信じられないといった様子で、怒りと共に大袈裟なため息をもらした。

ラヴァールのそんな様子を見て、ホープは帽子も取れないままいた。

小一時間前、この屋敷にはヴィンセントに呼び出された、ヴァロニア王妃イザベラが来訪していたのだった。

ヴィンセントとホープがラヴァール家に到着した時。

積もった雪の上には、屋敷の入り口へ向かう車輪の跡が描かれていた。ラヴァール家の正面の入り口の前には既に黒い箱馬車が停まっていた。

応接室では、目立たぬ様黒い衣装に身を包んだ女性がヴィンセントの到着を待っていた。

ギリアンの母親、ヴァロニアの王妃イザベラだった。

イザベラは金色の髪を隠すように被つた毛皮の帽子もそのままで、首元にファーの付いた黒い重苦しいコートや、ビロードの手袋を外すことすらしていなかった。

暖炉の中でパキパキと音を立てて燃える炎を、イザベラは立つたままじっと見つめていた。

「お待たせしました、王妃陛下」

時間に少し遅れて入室してきたヴィンセントの外套の肩には雪が積もっていた。

ヴィンセントは外套を外し椅子の背に掛けた。暖められた応接では、間もなく雪が解けて絨毯を濡らした。

「よくラランスまで戻つてきましたね、ヴィンセント・フォン・ラヴァール。わたし私にはあまり自由な時間はないのよ。手間を取らせないで頂戴」

「では私の嫌いな御託を並べるのは止めておきましょう。手短い。陛下の御愛息の話です。ここなら誰にも聞かれることはないでしょう」

イザベラは『何を知っているのか』とこいつのような視線をヴィンセントに向けた。

「陛下の噂がギリアンの耳にも届いています。悪魔を信仰していると」

「悪魔信仰など!」

イザベラは短く怒鳴りつけ、ヴィンセントをにらんだ。

「何が目的? あなたも私を脅迫するつもりなの?」

「脅迫などとんでもあつません」

「私は魔女ヴィッヂャではないし、ギリアンも断じて悪魔の子ではありません。もちろん不貞の子でもない。あの子は間違いなくカルロス陛下の御子よ。今更こんな話をしても仕方がありません。言いたい事がそれだけなら帰らせて頂ぐわ」

イザベラが扉の方に向かい歩みだした。

「ギリアンが戴冠する決意を固めました」

ヴィンセントの言葉に、イザベラは驚いて振り返った。白い肌がより青白くなつたように見えた。

「無理よ！ 聖ソフィアの大司教は、ガイアールに人質に取られている！ それに大聖堂のあるランス東方はシーランドに侵略されている！」

「その程度の障害なら取り除くのは容易いことです」

イザベラは険しい表情になつた。

「やめて… ギリアンを王にしてはいけない！」

「【黒】だから、ですか？」

ヴィンセントの言葉に挑発されるかのように、イザベラの表情がますます険しくなつた。

暖炉の中の薪が燃えて、パキンと割れる音が部屋の中に響いた。

王妃は苦い顔をして、かすれた声を絞りだした。

「…… そうよ。魔女狩りの蔓延を知っているのでしょうか？ ここ数年で何人殺されたと思っているの？ それも【黒】の女ばかり。今ギリアンが【黒】を公表すれば、あの子はきっと悪魔の子とされてしまう。そして私は悪魔の子を産んだ魔女ウイッチとして処刑の身だわ。シ

—「ハンドの思つ壺よ」

「先程、ギリアンはカルロス王陛下の子だとおっしゃったではないですか」「

「ヴァロア家に黒髪はない。どうして、ギリアンがあんな髪に生まれてしまったのか、私にもわからないのです……」

王妃は悔しそうに黒いコートの裾を両手で摑み握りしめた。

「リナリーが【黒】を魔女ウイッチであるように仕立て上げて、ギリアンと私を追い詰めている。そして悪魔の子をシーランドに差し出すようにと要求しているのよ」

「それはシーランドのローラン王がカルロス王陛下より先に死んだ所為で、ヴァンデ条約が無効になってしまったからでは？ リナリー殿下は息子のアンリをヴァロニアの王にしたいのでしょうか？」

ヴァンデ条約の通り、ヴァロニア国王カルロスの死後、シーランド国王ローランがヴァロニアの国王になれば、ヴァロニアとシーランドで二重王国が成立した。二国間の争いも終わるはずだった。

だが、シーランド国王ローランは病で、ヴァロニア国王カルロスより先にこの世を去ったため、ヴァンデ条約は無効になつた。相次いでヴァロニア国王カルロスが崩御した所為で、ヴァロニアでは王位後継で混乱した。

「……私の子ども達は姉弟で争つのね。不憫だと思つわ」

イザベラは視線を少し落として、寂しそうにつぶやいた。

「もうこれ以上は長居出来ません。ヴィンセント、あなたが私に言いたかったのは、ギリアンの戴冠の意思表明だけ？」

王妃は顔を上げ厳しい表情に戻ると、ヴィンセントを見た。

ヴィンセントはゆっくりとつなぎいた。

「おひしゃる通りです」

「私がわざわざここまで出てきたのは、私からもあなたに直接伝えたいことがあったからです。シーランドが身柄を要求しているのはギリアンだけない。貴方もよ。それもギリアンと同じ、四年も前から」

「なるほど。ヘーンブルグの娘が一人、魔女として疑惑を受けました」

田の前に身柄の引き渡しを要求をされている、ヴィンセントが居るところに、イザベラはヴィンセントを捕らえようとはしなかった。そして王太子の所在も詮索しようとはしなかった。イザベラはシーランドからの要求に応じるつもりはない様子だった。

「ヴィンセント。どうかギルの傍に置いてやつてみようだい」

その一言だけ母親の顔で言つて、イザベラは屋敷を後にした。

王妃の去った応接室で長椅子にヴィンセントとホープは並んで腰掛けっていた。その前を、ラシェルは何か聞いた氣にうるうるするばかりだった。

そんなラシェルを無視して、先程まで出された茶を啜っていたヴィンセントが立ち上がった。

「外套が乾いたな。戻るぞ。ホープ」

ヴィンセントは暖炉の傍に置いた椅子の背に掛けていた外套を手に取ると、ラシェルに声を掛けることもなく颯爽と部屋を出ていった。

ホープは慌てて席を立つと後を追つた。その時、ヴィンセントの妹をちらりと見ると、訝しげな視線をホープに向けていた。彼女は何も言わず立ち去る一人を見送った。

ずっと被つたままだった、ホープの帽子の下を気にしている様子にも見えた。

## 鎮守府シュケム

余寒の王都<sup>ランス</sup>から戻つたホープには、ローゼンは随分と暖かく感じられた。

早朝にシユノンの街の屋根を白く変えていた霜はすっかり溶けて朝露となり、今は朝日を浴びて屋根をキラキラと輝かせていた。

ローゼン候の城のギリアンの私室にて、ランスから帰還したヴィンセントとホープ、そしてギリアンの三人が集まっていた。

石造りの城内はまだ肌寒く、ギリアンは分厚い長衣を羽織つていた。

ホープが長椅子に腰を掛けると、布張りの椅子からもひんやりと湿つた冷たさが身体にしみこんできた。隣に座つたヴィンセントをちらりと見やると、寒さなどまるで感じていなじようだった。いつもと同じように平常を保つたままゆつたりと腰掛けで長い足を組んでいる。ホープはしばれる手に息を吹きかけると、そつとこすり合せた。

ランスで、さすがにホープはヴァロニア王妃とは顔を合わせる事はなかつた。

あの時、ヴィンセントと王妃の間でどんな話がされたのか、ホープもまだ聞かされていなかつた。どうしてここに自分で呼ばれ同席させられているのかも分からぬ様子で、向かいに腰掛けたギリアンと、隣に座るヴィンセントの会話に黙つて耳を傾けていた。

ヴィンセントは王妃イザベラと話した内容をギリアンに話した。

シーランド王国がギリアンと自分の身柄を要求している事についてだけは言及しなかった。

「魔女狩りはリナリーの働きだ」

ヴィンセントの言葉を予測していたのか、ギリアンはさして驚かず小さい声でつぶやいた。

「そうか……。しかし、何故姉上が魔女狩りなど……」

「リナリーが指示している魔女狩りは、政治犯の駆逐ではなく【黒】の迫害だ」

【黒】と聞いて、ギリアンは視線を床に落とした。

ギリアンは黒髪の所為で父親に疎まれて育ってきた。そんな彼をじっと見据えながら、ヴィンセントは言葉を続けた。

「カルロス王陛下が亡くなられてから、王威派（反王太子派）は実際以前ほどの勢いを失っている。ヴァンデの条約も無効になつて、何事もなれば君が王位を戴冠することになつていただろう。だが、リナリーは先手を打つて出た。【黒】の風評を立たせておけば、君は王位に就き難くなることをリナリーは知っている」

一つ年上の実姉リナリーのことを思い出したのか、ギリアンは目を伏せて頭を小さく横に振った。

「ヴァンデ条約は無効になつたが、リナリーは息子のアンリを王にしたいのだろうな」

「……そうだね。甥のアンリがヴァロニアの王位に就いて二重王国

制が確立すればシーランドとの争いが終わるだらうかい。それが父の願いだつたら僕は……」

王位などござりない と嘆おつとしたのだろう。言い終わる前に、ヴィンセントが口を挟んだ。

「君は王位継承権を放棄するのか？ リナリーの思惑通りだな。1年後、アンリが成人して王位に就いたならば、一重王国制という名田で、ヴァロニアはシーランドの支配下に統一される。そうなれば当然シーランドとの戦いは終わるだらうな。だが、【黒】の迫害はなくならないだろ？」「

ギリアンの顔が曇った。

「……ヴィンセント、僕が王になれば本当に【黒】の迫害がなくなるのかい？ シーランドとの争いも終わるのかい？」

ギリアンの問いに、ヴィンセントは答えなかつた。

歴史を遡れば、【黒】の迫害もシーランド王國との争いも百年程前からだ。

「印刷技術が出来て聖書が普及したのも、黒皮病が流行したのも一百年前。【黒】が虐げられている原因はわかっているじゃないか？」

…

「ギリアン、大司教を救出する」とやシーランドとの戦いに勝つことよりも、人の心の中出來た【壁】を壊すのは容易なことじやない

い

ヴィンセントの言葉に、ギリアンは頭を抱え込んだ。

「良く聞け。もし、ヴァロニアとシーランドが統一すれば、いずれ伝承者クライスの聖地を手に入れるために、ファールーク皇国と争うだろう。今までフロリスの一国間での争いが、次は一大陸間に変わるだけだ。聖地やモ里斯には沢山の黒人がいる。きっと彼らをも巻き込んで、【黒】はますます迫害を受けることになるだろう。これが本当に神の望むことなのか？ 私はそれは決して善い事とは思えない」

「そんなことは僕でもわかつて、でも」

二人の話はヴァロニア王位の事から、いつの間にか一つの大陸の話にまで飛躍していた。

自分にかかる重責に思い悩んで口数の減るギリアンに対し、ヴィンセントは逆に饒舌になっていた。

「何故この世から差別がなくならない？ 私達の信仰心が間違っているのか？ かつて聖地は全ての信仰を受け入れていた。全ての信仰、全ての人種、全ての身分を」

「聖地は全てを受け入れる……か」

「そうだ。だからこそ聖地はモ里斯のものでもフロリスのものでも、いや、人によつて所有されるものではならない。聖地は聖地として存在することに意味がある。聖地とは只の『象徴』なのだ。救済を求める人々の心の拠所だ」

ギリアンとヴィンセントの二人が話すうちに、滅多に表に出さないヴィンセントの思想が語られた。

「聖地が争いの原因となるならば、それはもう聖地ではない」

「ヴィンセント！ 頼むからそれを聖教者達の前では絶対に言わないでくれ！」

ギリアンはそう言って手で顔をおおった。

「異端として、君が殺されてしまつ……」

「身分も信仰も、神ではなく人が定めたものだ。なのに何故それを乗り越えられない？ 切り崩せない？ 私はそういう人と人を遮るものはない世界が見たいんだ。私にそういう世界を見させてくれ、ギリアン」

親友の懇願も、ヴィンセントの口を開かず」とは出来なかつた。

ギリアンは顔を上げ伏し目がちにつぶやいた。

「……その世界は君の魂を救うのかい？ ヴィンセント」

「私は地獄に落ちようと構わない。だが、ルースの魂は救われるだろ？」

ヴィンセントの口から突然ルースの名前が出て、ホープは驚いてヴィンセントを凝視した。

「……シュケム論か」

つぶやくように漏れた王太子の言葉にヴィンセントはうなずいた。

「ああ、そうだ。聖地は『全てを受け入れ、そして捨てさせる』のだ。身分も地位も、金も欲も。人種さえもだ」

義務教育しか受けていないホープは、二人の話していることは理解できていた。ギリアンの口から出た言葉の意味がわからなかつたが、王太子と領主の間に割つて入ることは出来なかつた。

そんなホープの様子に気が付いても、ヴィンセントは気にせず、ギリアンに訴えた。

「昔、まだ聖地が『聖地』として機能していた頃、中央の地にはシユケムという小国があつた。そのシユケムが聖地を管理していたんだ。その時の左右の一大陸の均衡は聖地によつて保たれていた。それを取り戻さないといけない」

「矛盾してると、ヴィンセント。それなりにすればファールーク王国と戦わなくてはならない」

「必要なのはオス・ローの復興と、第一のシユケムとなる國の存在だ」

ギリアンとヴィンセントの会話は、ホープには手の届かない雲の上の話だった。

「僕のような人間がそんな大それた事が出来るとは思えない」

「君がヴァロニアの王になれ。君が王になつてこの百年の戦争と【黒】の迫害を終わらせるんだ」

ヴィンセントが激励しても、ギリアンは黙つて思いつめるだけだった。

ギリアンは黒髪の所為で父親に虐げられて育つてきた。父親とほとんど接した事がなかつた。

「カルロス王陛下が婚姻で戦争を終わらせようとしていたのは理解しよう。だが計画は狂つたのだ」

ヴィンセントは語り続けたが、ギリアンは口を固く結んだままだつた。

「ギリアン、君の父は死んだ。死んだ人間の心など何もわからないぞ。いい加減、父親と言う鎖から自分を解放してやれ」

ギリアンの表情は苦惱に満ちていた。ヴィンセントには何も言い返さず、心中で自分自身と戦つているようだつた。

「君は父親とは違つ人間だ！ ジユスト君がヴァローニアの正義となれ！」

ヴィンセントの鼓吹に、ギリアンは顔を上げて親友を見つめた。ヴィンセントは親友の視線をまっすぐに受け止めると、穏やかな口調で語りかけた。

「今度は君が父（王）となり、君が成し遂げられずとも、子供（子孫）達に足掛りを残してやればいい。君にはこの城に集つてくれる腹心の部下や騎士がいる。私もその一人だ」

「ヴィンセント……」

王位に就く決意をしてもまだ煮え切らない態度だったギリアンが、

ヴィンセントの叱咤にどつどつ心を動かされたようだつた。

「ギリアン、君は不貞の子でも、ましてや悪魔の子でもない。間違  
いなくカルロス王陛下の息子だと母君は言つた。その黒髪は紛れも  
無い王家の血筋のものだ。君が救われると誓つのなら、私がそれを  
証明してやる」

ホープにはヴィンセントの言葉は、まるで不思議な魔力を持つて  
いるかのように感じられた。全く根拠のない事なのに、この男が言  
うとまるでそれが真実のように人の心をつかんで離さなかつた。

「ヴィンセント、……どうして君の心中はそんなに強暴なんだい  
？」

ギリアンは困つたように少し呆れた声を出したが、ヴィンセント  
の言葉に励まされて、心中では思いを定めたようだつた。

この時、不思議な魅力で人の心を動かすヴィンセントに、ホープ  
はすっかり魅せられてしまつた。

\* \* \*

長いテーブルのある会議室に、王太子派の幕僚と騎士団の団長が  
王太子を中心に囲むように集まつていた。

歴代の王たちと同じく、ランス東部にある聖ソフィア大聖堂で、王太子が戴冠を受けるための作戦が練られているところだった。

ヴィンセントとホープはその輪には入らず、窓際の壁にもたれてその様子を見守っていた。

会議の話が一段落した時、ヴィンセントは壁を離れテーブルの方に近づいた。

「ギリアン、君の為に私も正式に王太子派に名を連ねよ!」

その言葉を聞いた騎士達が、元元帥の参加に改めて歓声をあげた。

「もちろん、ホープ、君もだ」

ヴィンセントは壁際に居るホープを振り返って言った。

「ええっ! ?」

ヴィンセントに突然言われたことが信じられず、ホープは自分の耳を疑つた。

「あ、あの、ぼくは騎士でも何でもないんですけど……」

いつの間にか大事に巻き込まれてしまつていてる事に気づいた。

「自分は関係ないとでも思つていいのか? 私の名を語つてみる」

「……ヴィンセント・フォン・……ヘーンブルグ……?」

「そうだ。私はヘーンブルグの名で王太子派に参加する。ヘーンブルグの名をもつて戦場に出るのだ。ヘーンブルグ領が王太子派として名乗りを上げたのだぞ。もう今までの様に知らぬ存ぜぬでは居られなくなる。必ずこの戦いに勝利しないことには、ヘーンブルグまで【黒】蔑視の波にのまれてしまう事になるぞ」

「そ、そんな……」

「ヘーンブルグ領自体が侮蔑的対象となるだろ? な」

「ぼくはジョーダの魔女疑惑を撤回したいだけなのに……」

偶然なのか、もとより、ヴィンセントの考えていた策略なのかわからなかつたが、ホープは後に引けなくなつてしまつた。

## 父と子

。 。 。 \* : . 。 . . 。 . . . \* . 。 . \* : . 。 . . \* . 。 . . \* . 。 . . \* .

鉄鎖のすれる音が響く

朱鷺色の部屋の中で、オトコは夢を見た  
欲望が生み出した幻覚か 自分への懲罰か  
【自分】と同じ顔をした女を犯す夢を

漆黒の髪と愁いた瞳のオンナは、【自分】の姿によく似ている  
引き裂いた衣服の隙間に見える乳房の色も、【自分】の肌と同じ  
小麦色だった

オンナをねじ伏せ、女の【自分】を凌辱する  
歪む【自分】の表情は、天使の末裔を辱めた罰だ

耳に届くのは鉄鎖のすれる音だけ

\* \* \* \*

オトコの頭の中はいつも朦朧としていた。

身体はやせ細って骨が浮き、鉄の枷がつけられた右足は、皮膚がめくれ骨が露出している。歩くときは鉄鎖の音と右足を引きずった。時々、呂律の回らぬ舌でブツブツ咳く以外に、言葉を発することもない。

食欲を感じることも少なくなり、生きているのかわからなくなつた。日に一度だけ運ばれてくる食事を口にするのも二日一度ほどだ。

オトコは空腹のときだけ、身体の感覚が自意識の支配下に戻つた。激しい喉の渴きに喉をかきむしる。右足に付けられた太い金属の足枷が嫌なほど重い。苦痛がまだ生きていることを実感せてくれた。

重い右足をじゅりじゅりと音を立てて引きずり、血染め土の色の部屋から連れよう試みる。

だが、やがて足枷に付けられた鎖の長さの限界で引き止められるのだった。

朱鷺色の部屋に閉じ込められ、気が狂うほどに時が過ぎた。

ある時、面格子のついた窓の外の、さらに外の鉄柵の向こうに少女がいた。柔かい亜麻色の髪に翠色の瞳をした、白人の少女だ。歳は七、八歳位だろうか？ 朱鷺色の建物の中の様子をうかがつてい

る。

よく見ると不思議な顔立ちの少女だ。混血児なのだろうか、西大陸人の顔立ちなのに、髪や瞳の色は東大陸人のものだ。まだ幼い少女の瞳は憂いて、どこか【自分】に似ている。茜色の夕日をうけて、幼い少女の髪は一段と明るく輝いた。

また、幻覚か……。  
シャバハ

そう思った矢先、少女と目が合った。驚きが全身を駆け巡り、右足の足枷と鎖がじやらりと鳴る。鉄鎖の重みに痩せた身体がよろめいた。

空腹で腹が刺すように痛むが、代わりに意識はハツキリとしている。少女が幻覚でないことにオトコは気がついた。

オトコは木製の格子窓を内側に開いた。目の前には更に鋳物の面格子が外界との接触を遮る。しかし、鈴を転がすような少女の声は何にも遮られずオトコの耳に届いた。

「富庭にあたくしと同じ色の肌と髪と目をした者はあなたしかいな  
いわ。あなたがあたくしの父なの？」  
アフ

そう言いながら、少女は肩よりも少し長い自分の髪をつかんでその色を確認した。

突然話しかけてきた少女の言葉に、オトコはこの建物が富庭内にあるのだと悟った。

「……お前など……知らな……。俺は……お前の父親では……ない

……」

久しぶりに発した声は随分と老けていた。久しくこの部屋に閉じ込められて何年経ったのだろうか。

もう少し話したい。オトコにそんな欲求が生まれた。  
オトコは少女に問いかけた。

「お前の母親は……何と言つ……名前だ?」

オトコのかすれた声が聞き取りづらかったのか、少女は少し遅れて答えた。

「母上様はレイリといいます」

聞いた事のない名前だつた。

「お前の母親は……美しい人なのだろうな」

話す「JET」は生きていることを実感した。

面格子と鉄柵の向こうに見える少女は、大人びた雰囲気を持ち、瞳にはどこか寂しげな色が浮かんでいる。

「母はあたくしを生んでもぐにお亡くなりになられたの。だから、美しいかどうかなんてわからないわ」

「お前を……見ればわかるよ」

「あたくしの田の色はどんな色?」

「姿見……か？」

「ええ」

鏡のないファーリーク皇国では他人の瞳に自分を映すことを姿見と言つた。女はいつでも姿見を好むものだ。美しい詞で花を持たせてやると女達は喜ぶのだ。

（姿見は不得手なんだが……）

オト「は目を細めて数メートル離れた場所に居る少女の瞳を見つめた。幸いにも、目は悪くなつていなかつた。少女の瞳は薄い翠色で、まるで影がおちるように少し灰色がかつていた。

花の色や自然の情景に譬えてやりたいが、オト「は何十年もこの朱鷺色の壁しか見ていない。悲しげな色を浮かべる美しい少女の瞳に、気の利いた姿見をしてやりたかつたが、鈍つた思考ではふさわしい言様が思い浮かばなかつた。

「……『ホールの丸天井の色硝子のよつな翠色』だ」

無粋だと思いつつ答えた姿見だつたが、少女の頬が少し紅く染まつた。それまで姿勢良く立つていた少女は、食いつくように鉄柵をつかんだ。

「やつぱり！ あなたの瞳とあたくしの瞳は同じ色だわ！」

少女は子ビモラしへにかんだ。

「……お前の名は？」

オトコが問うと、少女が答えるより先に遠くから人を探す声が聞こえてきた。

「ファティマ様あー」

少女は名を呼ぶ方を振り返った。

少女は声の主がまた遠くに居るとわかれと名前を答える代わりにオトコに訊ねた。

「ジャファル様はあなたのことを狂人と呼んでいるのだけど、あなたの本当のお名前はなんというの？ 教えて？」

## 本当の名?

「ここに来て名前を呼ばれた事など一度もなかつた。」

「俺は……、ユースフ……、いや、違う……。俺は……メンフィスの貿易商で……、名は……ハザールだ」

「オトコは記憶をなんとか手繰り寄せて答えた。

少女はそれを聞くと、そのまま黙つて名を呼ぶ方に走り去つた。  
それきりだつた。

それきり、その少女とも会つていまい。

皇都サンドラの西に流れる大河の氾濫もすっかり落ち着き、ファーレーク皇国にも名ばかりの冬が来ていた。<sup>ハイブライル</sup>一月はヴァロニアでは最も寒さ厳しい真冬にあたるが、ファーレーク皇国では井戸の水位が上がるくらいで、毎日真夏のような暑さが続いていた。

ジードがファーレーク皇国に連れてこられてから一年が過ぎた。今日もジードはいつものようにルカとおしゃべりしながら、水を汲み上げるのを手伝っていた。

季節の変化は井戸水を汲み上げる綱の長さでしか感じじることができない。ジードにとって、どこか非現実な生活は、時が経つのを忘れさせている。しかし、男のように短かったジードの不ぞろいな曲毛はヴァロニアにいた頃と同じくらいに伸びていた。

首筋に張り付いた髪を後ろにはりつと、手に触れる髪の長さがジードに時の経過を思い出させた。

「髪、伸びたね」

ジードが髪をかき上げる仕草を見て言つるカは、今日は頭に紅い布をくるりと巻いて髪を隠していた。ジードが物珍しそうに頭布を眺めていると、ルカは少し愚痴るよつてつぶやいた。

「十三にもなつて髪を下ろしてこるのは良くないって、母に言われ

たの

「やうなの？」

クリス信者にとつて十三歳は老年だ。ヴァロニアではいつの  
も聞くのも嫌らわれる忌数であるが、ルカはそんなことを知るはず  
もない。それはクリス信者の問題であつて、モ里斯信者には全  
く関係ない。

そんな感覚の違いがジョーダはふと不思議になる。ヴァロニアで  
クリスの教えしか知らずに育つたジョーダは、今までそんなこと  
を考えたこともなかつた。

「ルカのママもこゝに歸るの？」

言いながら足元に置かれた桶に井戸水を注いだ。石畳の上に飛び  
散つた飛沫は、程なくして地面に吸い込まれるかのように消えてゆ  
く。

「やうよ。ワタシの父も母も<sup>アフ</sup><sup>ウム</sup>富廷の家奴隸よ」

ルカの言葉に、ジョーダは自分の両親のことを思い出した。

父と母とホープは元氣でいるだらうか？ 戻つてこない自分を心  
配して探しているのではないか？ それとも、もう死んでしまつた  
と思われているのだらうか……。

井戸の石枠に腰掛けたジョーダは、ルカが水の注がれた桶を少し  
離れた洗濯桶に運ぶ姿を眺めた。少しルカの姿がぼやけて見える。  
心の中の寂しさをこじまかすように、ゆるゆると波打つ自分の髪先を  
揺んでくるくると指先に絡めた。

「ジヒードは御主人様がいるんだから、しつかり見せつけなきゃね！」

いつの間にか戻ってきたルカの声に驚いて、ジヒードの指の動きが止まつた。思いに沈みそうな姿をルカに気づかれぬよう、ジヒードは慌てて瞬きをした。

「え？ 何？ 何を見せつけるの？」

「長い髪は女の象徴なのよ。髪を濡らして奴隸皇子様を誘惑するの」

そう言つて、ルカは空になつた木桶を再びジヒードの足元に桶を置いた。洗濯桶を囲んで洗濯する大人たちに聞こえなによつて声を落とし、

「男は女の濡れ髪を見て欲情するのよ」

長い睫毛をぱちぱちと可愛らしく瞬かせ、悪戯っぽく笑つた。

「わたしの国じゃ、そんなことしていたら風邪ひっちゃうわ。すべに火にあてて乾かさなきやー！」

ルカの大膽な言葉に、ジヒードは動搖する心を「まかすように少しどけて返した。

「もう、ジヒードったら！ 乾かしちゃダメよ！ 乾いたら髪が縮んじゃうじゃない！ 男は真つ直ぐで長い髪が好きなのよー。ほら、リューシャ様だって、あの綺麗な真直ぐな髪のおかげで宰相様付きになれたんだから。奴隸皇子様だつてきつと真つ直ぐな髪が好きよ」

ルカの言葉に、ジョーダーは湯浴み上がりのリューシャの濡れた髪を思い出した。しつとりと濡れた清艶な金色の髪に、ジョーダーも見惚れてしまつたほどだつた。男でなくともあの美しい真っ直ぐな髪には憧れてしまつ。

「あの怖い宰相様だつて、リューシャ様にだけはすぐ優しいでしょ」

「……そうかしら？」

付け足されたルカの言葉には、ジョーダーはあまり同意できず眉根を寄せた。

富廷内を自由に散策するジョーダーは、時々宰相とリューシャの姿を見かけることがあつた。美しいリューシャを傍に連れていても宰相の表情はいつも慄然として厳しそうだつた。二人が仲睦まじく言葉を交わしている姿など見たこともない。

洗濯女たちの催促の視線を感じた。ジョーダーは急いで井戸の綱を引き上げながら、ファールークの宰相の微かに憂愁を帯びた漆黒の瞳を思い浮かべた。

「……リューシャさんがそばにいても、宰相は悲しそうな目をしているところしか見たことないわ」

「悲しそう？」

「どうが？ とでも言いた氣に、ルカは怪訝そうに首をかしげた。

「それに、宰相には奥さんが何人も居るなんて。わたしには信じら

れないわ。ここでは普通のこと? ルカのパパもそうなの?」

「まさか! 奥様が何人も居るのは皇族や名士で裕福な御主人くら  
いよ。だって沢山の奥様をちゃんと平等に愛さなきゃならないんだ  
から」

引き上げた水桶の綱が、思わずジョードの手から離れそうになっ  
た。複数の女を平等に愛する男など、女としてとてもじやないが許  
し難い。ジョードは受け入れ難い文化の違いに思わず啞然とした。

「眞平等に愛するですって! ? ううん、宰相は平等に愛していな  
いの間違いよね?」

ジョードの真剣な発言を皮肉に取つたのが、ルカはふと吹き出  
した。

ジョードは落としかけた水桶の取つ手をつかむと、また足元の桶  
にひっくり返した。

「だつて、ハリもシナーンも、宰相の本当の家族のはずなのにまる  
で他人みたいだもの。宰相は奥さんを本当は愛していないんじやな  
い? 宰相が本当に愛してるのはリューシャさんなの? そんな風  
にも見えないんだけど」

ルカはそんな事を考えたこともないようで、困ったような表情で  
「うーん……」と悩みだした。

おしゃべりに夢中で手の止まっている少女たちに、年配の女奴隸  
が話に入ってきた。

「ルカ。ジョードの言つよつて、リューシャ様だつて宰相様から本

本当に愛されてるかなんてわからないよ。宰相様はリューシャ様にファティマ様の面影を見ているだけかもしれない。ファティマ様とリューシャ様は年も近いからね

声を掛けられてルカは慌てて、桶の水を洗濯桶に注ぎに行つた。

「ファティマ様？」

ジエードは初めて聞く名前について、物知りの女性に問い合わせた。

「ファティマ様ってのはね、奴隸皇子様の母ウム上様だよ

空になつた木桶を持つてルカが話に戻つてきた。

「そういうえば、宰相様は『くなられたファティマ様のことをとても愛してたんだって聞いたことがあるわ』

「宰相はハリの本当のママのことを愛していくなら、どうしてハリの事を愛せないのかしら……」

「ファティマ様が『くなつたのは、奴隸皇子様を産んだせいだからじゃない?』

「そんな……」

母親の産褥死はハリーファの所為ではないのに……と、ジエードはハリーファが氣の毒になつた。少し前までハリーファを殺さなければ必死になつていた心は、どこかに置き忘れていた。

年配の女奴隸は時折若者たちに口を挟んで、ルカの知らないよう

なこともジョードに色々と教えてくれる。

「宰相様が愛してらしたのは、本当はね、姉のレイリ様なんだよ。異母姉のレイリ様のことを宰相様は母親のように慕っていたからね」

姉　　。そう聞いて、ジョードはふとルースのことを思い出した。ジョードも姉のルースが大好きだった。忙しく働く母親より一緒に過ごした時間は長かつたかもしない。ジャファルの姉に対する想いを、ジョードは少し理解出来そうな気がした。

「奴隸皇子様の母<sup>ウム</sup>のファティマ様はね、そのレイリ様の娘なんだ。レイリ様もファティマ様を産んでお亡くなりになられたんだけどね」

「じゃあ、宰相様は本当はファティマ様のことを憎んでいたのかしら?」

ルカは女奴隸に屈託なく問い合わせた。

「いいや。ファティマ様はレイリ様に生き<sup>アラビア語</sup>の様にそつくりだつたから、宰相様はファティマ様が随分小さい頃から可愛がつてらしたよ。まあ、レイリ様とは違つてファティマ様は金色の髪に白い肌だつたけどね」

「奴隸皇子様が皇女様なら良かつたのかしらね。奴隸皇子様もレイリ様に似ていたら良かつたのに」

「アーラン様のこともあるし、どうだかね。男と女はそもそも魂の性別が違うんだよ。男の考へることなんて、女には到底理解も納得もできないもんだよ。特にファルーク皇家の男たちはね」

ジョーダンとルカは年功者の話に何と答えていいのかわからず、お互い顔を見合わせ肩を竦めた。

ジョーダンは井戸端を離れ一度【王の間】に戻ると、昼の休憩時間は厩舎に向かつた。昼間はあまり人気がない。乾いた空氣の中を厩舎の方から馬の嘶きが響いてきた。

田の最も高い時間、砂色の建物や壁にも光が反射して、田に見える景色はとても眩しい。

厩舎の中から、厩舎守と別の奴隸が手綱を引いて出てくるのが遠目に見えた。出てきた三頭の馬は既に馬装されている。その中の一頭はひときわ黒い艶のある毛並みの馬だった。遠目でも美しい毛並みや立派な体格は人目を引くほどだ。それが宰相の馬であることをジョーダンは厩舎守から聞いて知っていた。

(今日は宰相が何処かへ出掛けるのかしら? )

田<sup>ひ</sup>る、ジョーダンは厩舎守に宰相の馬にだけは触れることを禁じられていた。今ならいつもより近くで黒馬を見れるのではないかと駆け寄つた。

その時、横手の建物の方からジャファルが一人の供を連れてこちらに向かつて來た。ジャファルは暑氣の中でもいつもと同じように黒い服に身を包んでいる。憮然とした表情で振り向きもせず従者に何かを話していたが、その声はジョーダンにまでは届かなかつた。

ジャファルの姿を見つけて、ジョードは足を止めた。

ジャファルもジョードに気がついた。話すのをやめ、少し離れた場所に一人たたずむジョードにはつきりと視線を向けた。悲しみを湛えたように憂いた漆黒の瞳がジョードの姿を見えた。

その瞬間、ジョードの胸の拍動が強くなつた。まるで何かに触られたかのように。

ジャファルは悠然と歩みながら、視線だけはジョードの方に向けていた。何かを強く訴えてくるような漆黒の瞳がジョードを捕らえる。

ジャファルの憂愁を帯びた瞳に惹きつけられて、ジョードはジャファルから目を逸らせなかつた。ヘーンブルグでは見慣れた瞳の色であるのに、ジャファルの漆黒の瞳に浮かぶ憂いの色を見て、胸の奥から何かこみ上げてくるような不思議な感覚にとらわれた。

ジャファルがジョードの正面を通り過ぎると、一人の視線は自然と外れた。

ジャファルは厩舎守から手綱を受け取ると、そのまま馬に跨つた。城門の方へと馬を駆つて去つていくジャファルの姿を、ジョードは見えなくなるまで見つめていた。

\* \* \* \*

ジョーダがファーリーク皇国に来てから、雨が降つたことは一度もない。空に雲が出ていることもまれだ。そのおかげで、毎朝洗濯女に洗われた衣や布は、乾燥した空気に晒されて、真昼のうちにすっかり乾いてしまう。

日が傾き始める前に再び井戸に行こうと、ジョーダは【王の間】を出た。扉を開けると、そこに大人の男性が来訪してきたのに出くわした。

ハリーファの『成人の式典』の時に見た若い歴史家だった。若いといっても青年とも中年ともつかない。おそらく宰相と近い年齢だ。宰相と同じように黒い長衣を纏っているが、宰相とは対照的にビビンカ物腰の柔らかい男だった。

歴史家は出てきたジョーダにゆるやかに会釈した。つられてジョードも軽く頭を下げた。

「ハリーファ皇子は？」在室か？

「……ええ。中に居るわ」

それだけ聞くと、歴史家の男はジョーダの横をすり抜けた。男はものもしく扉を引き開け【王の間】へと入つていった。

歴史家が応接の入り口に立つと、金の髪の部屋の主は既に男を見据えていた。

『【王の間】とは……。皮肉だな……』

男は軽く息をつき室内を見回した後、応接の椅子に座る部屋の主に目を向けた。

「歴史家か。ちよつといい。聞きたいことがある」

ハリーファは男に入室を促した。

「イヤスと申します」

イヤスは腰を曲げて深々と頭を下げた。

「ああ。何度か会つたな」

イヤスは宰相の秘書官として仕官している。ハリーファとシナーの式典の時や、それ以前にも時々イヤスの姿を見たことがあった。

「直接お話しするのは初めてですね。殿下が私に聞きたいことからお伺い致しましょう」

ハリーファは椅子から立ち上ると、部屋に少し入ったところで立ち止まつたままのイヤスに近づいた。

「【ハブラの臣】についてだ。【ハ布拉の臣】は本当に滅んだのか？」

ハリーファの質問は、イヤスの意表を突いたようだった。

『一体何をお聞きになりたいのかと思えば……』

「殿トは【エブラの民】にじに興味がおありですか？」

「聞いているのは俺だ。シナーンが【エブラの民】は一百年前に滅んだと言っていた」

「そうです。神の末裔は滅んだと言われてあります。近年【エブラの民】は元より存在しなかつた、架空の存在とも云えられております」

【エブラの民】は架空の存在などではない。シナーンと同じことを言われてハリーファの眉間に皺が寄つた。

イヤスは続けた。

「しかし、【エブラの民】は実在の存在です。それはシュケムの歴史書が証明してこます。一百五年前のシーランドとの戦争でオスローは崩壊しましたが、【エブラの民】の住む城砦だけは崩壊を免れました。ですが、その時既にドームには【エブラの民】は居なかつたと言われております。彼らの姿はもつと以前から見られなくなつたと、そう伝えられております」

まるで教本のような答えにハリーファは肩を落とした。イヤスの答えはハリーファの知る事実とほぼ一致していた。

ハリーファは少しきさつながら、イヤスに背を向けると椅子に床り腰掛けた。今度は腕を胸の前で組み、床を睨んで声を落とした。

「……俺は、本当に皇家の血を引いているのか？」

ハリーファはモリス信仰の慣習により、今まで一度も鏡を見たことがなかつた。それでも白い肌と視界の端に揺れる金色の髪で、自分がファールークの皇族とは異なる容姿であることは幼い頃から自覚している。シナーンがハリーファの出生を疑つているのも無理もないのだ。

「ハリーファ殿下……。殿下のそのご容姿では、御身の血筋を不安に思われるのでしょうか。ですが殿下はファールークの血を引く紛れも無い第一皇子です。殿下の母上、ファティマ様も殿下と同じように金色の髪に白い肌でした」

歴史家の言うように、過去の記憶の中の幼いファティマは、顔立ちこそファールークの血筋であったが、白い肌で髪は亜麻色だった。そして、瞳は『ホールの丸天井の色硝子のような翠色』だった。

「私はファティマ様が四歳の頃から宮廷に身を寄せているのです。殿下がお生まれになつた日の事もはつきり覚えております」

「俺が生まれた時？」

立つたまま話を続けるイヤスに、ハリーファは組んでいた腕をほどいて顔を向けた。イヤスは懐かしむようにうなずいた。

「十一年前の十月に、<sup>ウクトゥーパル</sup>殿下は後宮でお生まれになりました」

『ハリーファ殿下の生まれた日。あの日、ルクンが命を落としたのだ。忘れられるわけがない。あのような神秘的な現象を……』

( ルクン? )

初めて聞く名を思わず聞き返しそうになり、ハリーファはきゅつと口を閉ざした。

「……殿下は、もしや御自身の身の上を御存知なのですか？」

「……俺が【王】だということか？ それならシナーンから聞いた」

ハリーファの答えを聞いて、イヤスが氣の毒そうにハリーファを見た。今までこの建物に閉じ込められた【王】の処遇と末路を知っているのだろう。

「殿下。私はここに来て三人の【王】を見ました。その内の一人がハリーファ殿下、貴方です。宰相殿も懊惱されたのです。我が子が【王】の証を持つて生まれてくるとは夢にも思っていなかつたでしょつから」

「【王】の証？」

「聖痕、殿下の右頬にある、古い傷痕です」

ハリーファはそつと自分の右頬に触れた。触れた指先に微かに違和感を感じる。頬の皮膚が引きつっていた。だが、これは聖地でジエードから短剣を奪おうとして揉み合いになった時の刀傷だ。頬の古い傷痕というと、アーティンに斬られたあの時のことが思い浮かんだ。

「私は自分の目で、殿下と同じ聖痕を持つ男を他に一人見ました。一人は狂人マジコと呼ばれていた老人。もう一人はルクンという名の幼い子供でした。その二人ともに、右頬に殿下と同じ聖痕があつたのです」

ハリーファは狂人の名を聞いて、思わず手をぐっと握り締めた。  
【王の間】に永く閉じ込められ死んだ過去の自分だ。右足首に違和感を覚えた。

「……【王】がここに留められているのは何故だ?」

【王】はファーリークの人柱……。【王の間】に監禁されるようになったのはアーディンが死んでからだ。きっとアーディンがある【悪魔】ラースと何か契約したに違いない。

「それは存じ上げません。私もまだ師から全てを受け継いだわけではないのです。ですが、おそらくその理由は宰相ワジルだけが引継ぐものなのでしょう」

「そうか……」

「殿下。歴史家は一步引いて皇家を見守ることしかしません。しかし、【王】がファーリークの皇族の中に生まれたことは、私は奇跡だと思っております。正直に申し上げると、私の方が殿下に色々お聞きしたいくらいだ」

勿論、私の個人的な興味からですが、トイヤスは付け加えた。  
しかし、ハリーファは黙ってしまい、二人の間をしばし沈黙の時間が流れた。

ハリーファ自身が皇家の血筋であると分かるけど、でも良かつたが、ハリーファはファティマのことがふと気になつた。

幼いファティマはハザールが父親だと言つた。それは眞実なのだろうか？過去の自分は、本当にファティマの父親なのだろうか？過去の自分は、今の自分の祖父なのだろうか？

「……ファティマの母はレイリと言ひ名なのか？　ファティマを生んで死んだというのは事実か？」

「はい。ファティマ様の母は宰相殿の異母姉のレイリ様というお方です。皮肉なことに、レイリ様もファティマ様も、御二人とも御子を生んすぐにお亡くなりになられました」

「では、……ファティマの父は誰だ？　俺の祖父にあたる男は？」

ハリーファは少しためらいながら聞いた。

イヤスは渋い顔をしてため息をついた。

『これは言つて然るべきなのか……』

答えるべきか考えている様子のイヤスの心から声が聞こえてきた。

『レイリ様は御懷妊を隠し通して、たつた一人でファティマ様を産んでお亡くなりになられたはず。あの事件では、宰相殿も酷く心を痛められたと聞くが……』

イヤスはしばし閉口したまま思い悩んでいたが、やがて口を開いた。

「……ファティマ様の父親は、狂人マジコスーンだと、言われております」

「マジュヌーン  
狂人……」

ハリーファの脳裏に幼いファティマの口から出た言葉が甦った。

ジャファル様はあなたのことを狂人<sup>マジュヌーン</sup>と呼んでいるのだけど。

今まで夢だと思っていた曖昧な記憶が、ハリーファの脳裏で鮮明さを取り戻した。

少女の言つていたことは真実で、過去の自分がオンナを犯したのは夢ではなく現だった。そして生まれた子が、ハリーファの母親だ。<sup>ハザール</sup>

「ハリーファ殿下？ 大丈夫ですか？」

ハリーファの顔色に気付き、イヤスがそばに来てハリーファの肩を支えた。

「（）気分が優れないのでは？」

「……大丈夫だ……」

イヤスは腰を落とし、片膝を床に着いてハリーファに語りかけた。

「狂人も殿下と同じ【王】でした。ですが、本当にファティマ様の父なのかどうか、眞実は誰も知りません。眞実を知っているのはレイリ様のみです」

イヤスの言葉も、ハリーファの耳を虚しく通り過ぎた。知つていいのはレイリだけではない。狂人と呼ばれたハザールも知つている。

その時、バタンと【王の間】の扉の開く音が応接に聞こえた。イ

ヤスは入り口の方を振り返り、ハリーファも廊下の方に青褪めた顔を向けた。

ぱたぱたとサンダルが床をはじく軽い音をたてる。白い布の山を抱えたジェードが廊下を横切つた。一瞬、ジェードはハリーファの方を見たが、足を止めることなく通り過ぎた。

ジェードの足音が聞こえなくなると、ヤスはハリーファの方に向き直つた。

「ハリーファ殿下。私からお訊ねしても宜しいでしょうか」

答える代わりに、ハリーファはイヤスに視線を向けた。

「一年前、殿下が宮廷から失踪されたのは、誰の手引きがあつたのですか？ 第一夫人様ですか？ それともヴァロニアアが関与していたのですか？」

「……あれは、俺が自分で抜け出しただけだ」

「殿下が御自分で？ あの粉砂漠を、お一人で？」

イヤスの表情には嫌惡の色が浮かんでいた。何も教えられていなハリーファが一人でオス・ローに行けたとは信じられないようだつた。

「フローリスとの国境が封鎖されてから一二百年以上経ちますが、メンフィスの交易家だけは秘密裏にフローリスと繋がっていると噂があります。メンフィスは元々交易で栄えた街。フローリスとの繋がりがあるてもおかしくない。殿下の誘拐にヴァロニアアか、メンフィスの名<sup>サ</sup>」

士が関わっているのではないかと思つてゐるのですが、……」

「メンフィスの名士？」

メンフィスで貿易商だったハザールの記憶が甦る。

各都市には名士ナドルと呼ばれる家系が在り、皇家と繋がりのある家が多かつた。ハリーファのようない第一皇子を養子として受け入れたり、皇女を妻として迎える。そしてファールークの血を引く子どもが女なら宰相の妻として、また宮廷に呼ばれることがあった。

「殿下は姉皇女のアーラン様ウフームとは」親密ナドルだったはず。そのアーラン様はメンフィスの名士ナドル、ラシード殿のもとに嫁がれました」

「アーランは何も関係ない」

ハリーファは寄り添うイヤスを振り払つた。

「そうですか。近頃、ラシード殿のところの奴隸が頻繁に第四夫人アイシャ様を訪ねてきているようなので……。余計な憶測をしそぎたようです。どうかお忘れに」

ハリーファは黙つたまま何も答へなかつた。

「……殿下。御気分が優れないようなので、私はもう下がらせて戴きます。女奴隸を呼んできましょ」

イヤスがジョードを呼びに行こうとするが、ハリーファは顔を上げて再びイヤスを見あげた。

「イヤス、……お前はシユケムについては詳しいのか?」「

「聖地の鎮守府ですか? 勿論です。シユケムの何がお知りになりたいのです?」

「……最後の王の、……ファールークのことを……」

ハリー・ファは実に歯切れ悪く、なんとか言葉にした。

國の名ではない、個人の名前としてファールークの名を言うのがためらわれた。ハリー・ファの言葉尻が小さく消え入るようだった。

「ファールークとは、アル・マリク・コースフの父ファールーク?  
『シユケムの英雄』ですか? それならば、歴史家よりも語り部に語らせるほうが良いでしょう」

ファールークが英雄と呼ばれるに至った経緯は、今も物語として語られているのだろう。

「……いや、物語じゃない。実証が知りたいんだ

「承知しました。ですが、殿下。それはまた次の機会に。私も再度皇國の起源を深く遡つて勉強して参ります」

イヤスの心の中からはハリー・ファの体調を案する想いが聞こえた。イヤスは頭を下げる【王の間】から去ろうとしたし、応接の入り口まで歩んでようやく自分が【王の間】に来た目的を思い出した。

「やつでした。今回お云々にきた用件を忘れるところでした」

イヤスは柔かい表情に戻りハリーファに向き直った。

「ハリーファ殿下、成人の儀式はどうなさいますか？ 延期にされてそのままになつておりますが……。宗教家殿が随分気になさつてゐるのです」

「もつあんな茶番は」めんだ。……俺は酒は大嫌いなんだ」

「承知致しました。イマム殿には上手く伝えておきましょ」

本来の目的を果たし、イヤスは【王の間】を去つていった。

夕方、ジエードはランプの灯を点して応接にやつてきた。

傾いた西日が、朱鷺色の壁をますます茜色に染めていた。そんな中、ハリーファは応接のテーブルに突つ伏していた。

「……ハリ？」

寝ているわけではないのに、名を呼んでも顔も上げず返事もない。ハリーファの姿を見て、ジエードは弟のことを思い出した。末っ子のホープは、何かあるといつやつて拗ねてジエードの氣を引いてしたものだった。

だが双子の弟とは違い、ハリーファの考えてこることはさっぱり

わからない。自分の考えはハリーファに筒抜けだといつのこと……。  
ジョードは少し困って眉を寄せた。

「お腹すこひやつた？ わたし、先に食事を取りに行つてくるわ」

答えないハリーファをおいて、ジョードが厨房へ行つとするとい

「…………」「…………」

伏せたまま発するハリーファの声はぐぐもつていた。ハリーファのそんな声を聞くのは初めてで、ジョードは困惑した。

ジョードはハリーファの傍まで行つたが、結局どうしていいのか迷い、ハリーファが座っている長椅子の前で立ちつくした。

「……俺は……罪を犯した……」

聖地オス・ローで兵士を殺したことを懲悔しているのだらうか？

「……誰だつて罪を犯すわ。だから、罪は償わないと……」

「……ファティマに……」

「え……？」

『ハリのママに？』

「……死んだ者にじりつやつて償えばいいんだ……」

井戸端で聞いたことがジョードの頭をよぎる。

ハリーファは自分が母親を死なせたと思っているのだろうか。そのせいで父親を不幸にしたと思っているのだろうか？ 父から愛されないのも自分のせいだと思っているのだろうか。

「ハリのせいじゃないわ」

「…………」

「ハリのママが亡くなつたのは、ハリのせいじゃないわ」

ハリーファはよつやく顔を上げると、ジョードの方に顔を向けた。ハリーファは泣いていなかつたが、涙を流していたのはジョードの方だった。

ジョードの瞳からこぼれる涙を見て、ハリーファはうつたえた。

「…………お前は、勘違いしている…………」

「何が勘違いなの？ わたしがハリなら寂しいわ」

「お前が泣くな…………」

そう言われて、ジョードの瞳からはまずまづ涙がこぼれた。

「泣く自由も奪つてしまつの？ もうハリの言つことなんか聞かないわ！ わたしは自分の良心に従つんだから」

まるでハリーファの身代わりのよう、ジョードは涙を流し続けた。気の済むまで泣くと、ジョードは自分で涙をぬぐつた。

椅子に座つたままのハリーファに近づき、

「ママはハリをゆるしてくれてるわ。絶対に」

そう言つてハリーファの髪に軽くキスをした。 母親が自分にしてくれたように、自分が弟にするように、心をこめてハリーファの金の髪に口づけた。

そして思い出したように、ジョードは持つてきた火種からランプに火を点けた。いつの間にか薄暗くなつていた部屋がぼんやりと明るくなる。橙の炎の色がハリーファの金色の髪に映つてきらきらと輝いた。

\* \* \* \*

【王の間】の周りには、いつからか剣のように細長く背の高い葉の植物が生えている。その葉は長く伸びて窓を隠し、外から中の様子を隠すほど成長していた。

ハリーファの懺悔から五日経つ朝。

ジョードが水汲みから【王の間】に戻ると、意外な人物が【王の間】に来訪していた。ジョードは驚きのあまり、水瓶を手から離してしまいそうになり、慌てて水瓶を持つ手をぐつと握りしめた。

ジャファル  
宰相だった。

ジャファルは黒い長衣を纏い、慄然とした表情でジョードを見下ろした。ハリーファが不在だったため、待っていたのか出て行こうとしていたのか。ジャファルは入り口の廊下で一人たたずんでいた。

「ヴァロニアの女奴隸よ。ハリーファは何処へ行つた？」

ジャファルは少しぐもつた低い声だつた。初めてジャファルに声を掛けられ、ジョードの鼓動が強くなつた。

「……ハリが何処へ行つたかなんて、知らないわ。わたしはハリのことを見守している訳じゃないもの」

ジョードはファールーク皇国の最高権力者と対峙し、微かに震える声を隠し気丈に答えた。それでも手に持つた水瓶の中の水面は微かに波打つてゐる。心臓の音も聞こえそうなほどだ。

「大人しくしてゐるのかと思えば、度々歴史家を呼び出しているそ  
うだな」

「度々って……、二回だけよ」

ハリーファのあの懺悔の後、歴史家が【王の間】を訪れたのは一度きりだった。ジョードはハリーファが歴史家から何かを教わつてゐるのだと思つていた。

「それに、ハリは勉強しているだけじゃない」

ジードの答えに、ジャファルの眉間の皺が深くなつた。

「余計な事は何もするな。ハリーファには何も教えてはならん。こ<sup>レ</sup>で大人しく暮らして居ればよいのだ」

ジードにはジャファルの言葉がひどく冷たく感じた。ジード自身は勉学を怠つてきただが、それは自分の父と大いに話し合つた上での事だ。

そして先日のハリーファのことを思い出して、悔しい思いが沸きあがつってきた。

「どうして学ぶことがいけないの？ どうして何も教えないの？ ハリにはシナー<sup>ン</sup>と同じようにしてあげられないの？」

感情的になるジードに対し、ジャファルは変わらず冷静なままでつた。抑揚のない低い声で答えた。

「私はハリーファに武器を持たせるつもりはないのだがよ」

「ハリは武器なんて何も持つていないわ！」

望んでも武器など手に入らないのは、ジード自身<sup>レ</sup>の一年間で強く実感している。そんな自分の悔しい想いもその言葉に混ざつた。

「ヴァロニアの娘よ。そなたは文字も読めないのでさう。そのような者にわかるのか？ 知識がこの世で最も強い武器だと云つ事が」

ジャファルの言葉にジードは息が止まつた。

ジャファルとハリーファは同じ事を言つている。それはハリ

－ファがジャファルから教えられた言葉なのだろうか。

「……あなたはハリの父親なんでしょう？　どうしてこんな処に一人で住まわせるの？　ハリを……愛してないの？」

「一人？　ハリーファにはそなたが居るではないか。奴隸は身内だ」

背の高いジャファルを見あげ、ジエードは押し黙った。

ジャファルはジエードの横を悠然と通り過ぎ、入り口の扉の手前で足を止めた。

「これでも私は随分寛大なつもりだ。ファーリークの一族は『神殺し』の血脈。だがハリーファは【王】に生まれた故、『神殺し』の血を引く男子でありながら宮廷に留めておいてやっているのだ。枷も付けず、鍵もかけずな。そなたはそれ以上の何をハリーファの為に望むのだ」

そう背中越しに言われたが、ジエードには意味がよく分からなかつた。だが、それが以前ハリーファが言つていた、ハリーファを宮廷に留める専横でない『理由』なのだろう。

ジエードは振り返つてジャファルの背中を睨んだ。

「それがハリを宮廷に留めてる『理由』なの？　リューシャさんを愛しているからじゃなくて、ハリが【王】だから？」

「そうだ」

振り向かずに答える黒衣の宰相は、自分の父よりは随分若い男だ。漆黒の髪のジャファルの後姿を見て、ジエードの胸には急に寂しさ

がこみ上げてきた。

「あなたはお姉さんのことを感じていたんでしょう？　ハリをここに残してくるのは、本当はハリがそのお姉さんの孫だからじゃないの？　ビーハー、」

ジードが言つ終わらぬひびき、ジャファルはジードに向き直つた。

「ヴァローナの女奴隸よ、そなたは少し頭を冷やすといい

宰相は表情を変えずジードの手から水瓶を奪ひつと、ジードに頭から水を浴びせた。

ハリーファが【王の間】に戻ると、床に這いつぶばるジードの姿が目に入った。ジードは濡れた床を拭いている。ハリーファが戻ってきたことに気付いたが、床を拭きながら振り向くもしないでつぶやいた。

「まだ、食事の用意出来てないの」

ジードの髪はびしょびしょに濡れていた。水に濡らされたジードの髪は波が緩やかになり、その先からしづくがポタポタと落ちている。衣服も身体にぴったりと張り付き、背中の骨が服越しに透けて見えた。

西の大陸モリスでは、どんなに暑くても貴重な水を無駄遣いするものは居ない。湯浴みにしても必ず湯桶に水を溜める。ハリーファは水浸しの床とジョードの姿を見るなり、怪訝そうに声を掛けた。

「お前……、何をしているんだ?」

「……濡らしたのよ。髪がまとまらないから」

ジョードが嘘をついているのは、その態度を見ているだけでもわかつた。ハリーファはジョードの心から宰相の来訪を知ると、呆れてため息をもらした。

「床より先に自分の顔を拭け」

ハリーファは応接に入り奥の白室から大きめの布を一枚持つて戻ってきた。

「これで拭け。みつともない」

布を広げて肩からかけてやると、ジョードが床を拭く手を止めて立ち上がった。ジョードは伸びてきた髪を束ねて絞ると、濡れた黒い髪の先から水が滴り落ちた。

「男みたいだつたのに、随分伸びてたんだな」

ハリーファは水に濡れ緩やかに伸びたジョードの黒髪に手を伸ばした。

その瞬間、ジョードはハリーファを振り落つた。

ハリーファがジョードの髪に触れた一瞬に、ジョードの心に様々  
な想いが垣間見えた。

濡れ髪

誘惑 欲情、

男

金色の髪

恋人

魔女、見殺し

姉

『いやつ！……』

髪に触られ、ハリーファの手をはたき弾いた。そのジョードの嫌  
悪の形相に、ハリーファは驚いて手を引いた。

「…………めんなさい…………。髪を触られたくないの…………」

ジョードは怯えた表情でハリーファに謝った。ジョードの顔は血  
の氣を失い、肩で呼吸をしながら壁に寄り掛かった。

ハリーファは蒼白のジョードをそっと支えると、その場に座らせ  
た。

以前からジョードは事あるごとに髪を弄っているのをハリーファ  
は目にしている。皇國の慣習的趣向までもが絡み合って、ジョード  
が抱える傷に触れてしまったようだ。

「お前の抱えている問題は何なんだ。姉上の死に関係しているのか  
？」

「……言いたくないわ

座り込んだジョーダンは壁にもたれると田を開じた。

「なら心で考える

「……考えたくもないの

そう言つてジョーダンは田を開じたまま、また無意識に手で濡れた髪を弄つていた。ハリーファーは片膝を立てて座り、ジョーダンのその様子を見守つた。

ジョーダンが田を開けると、ジョーダンの様子を覗き込んでいるハリーファーと田が合つた。

ハリーファーはすっと真直ベジョーダンを見つめている。

吸い込まれそうな翠の瞳。  
グリーン

その上には輝く金糸の髪。

《優しい……》

《金の髪の王子様……》

《姉さんを見殺しにした……》

ハリーファーを田の前にして、ジョーダンは姉の話を思い出しかけた。知られたくなかったことを隠し切れず、ハリーファーには伝わつただ

れづ。ジョードは気持ちを落ち着かせようと小さく深呼吸をした。

「ヴァローナには……」

「うん？」

言い訳しようと、なんとか言葉を振り絞ったジョードに、ハリー  
ファは相槌を打ってくれる。ジョードは涙を堪えたが、声は上ずつ  
た。

「……こんな真っ黒な髪の人間はあまり居ないらしいの……」

「らしい？」

「わたしの住んでいたヘーンブルグは皆黒髪だったの。でも王都や  
他の領には黒髪の人間は一人も居ないんですって……」

姉ルースから教えてもらつた話だ。黒髪の人間しか居ないヘーン  
ブルグではこんな話をした事はなかつた。

「そんなはずはないだろ？ 僕の知つてゐるヴァローナの王太子は  
漆黒の髪と瞳だつたぞ」

「嘘よ！ 王太子様が黒髪だなんて！！」

ジョードの声がまるで悲鳴のように部屋に響いた。

ジョードは王族や貴族にも黒髪は一人も居ないと聞いていた。ヴァ  
ローナではそれが周知の事実だ。ヴァローナで黒髪の人間がいる  
のはヘーンブルグだけという事も含めて。

「嘘を言わないで！」

座つたままジョードはハリーファに食つて掛けた。

「俺は嘘なんか言わない。お前は会つて確かめた事があるのか？俺は実際に王太子と会つたことがあるんだ」

同じよつに腰を屈めたまま、ハリーファはジョードに答えた。

「<sup>あなた</sup>皇子とは違うのよ。……わたしなんかが会えるわけないじゃない

言葉尻が小さくなる。だが、ハリーファが嘘を言わないことをジエードは知つてゐる。自分達が教えられて信じていたことが間違いなのだろうか？ そう考えた時。

「……いや、すまん。俺も現在の王太子の事は知らない。だが、ヴォード・フォン・ヴァロアはお前と同じ、白人で漆黒の髪に漆黒の瞳だったんだ」

「ヴォード・フォン・ヴァロア……？」

ジョードが知つてゐる国王の名ではない。だが、聞き覚えがあり、ジョードは学校で習つたことを必死で思い出した。

「……ヴォードって……」

「オス・ローを巡つてファールークと戦つたヴァロニアの王だ。昔、俺が会つた時にはまだ若い王太子だった」

「昔って、いつの話……？」

「一百五十年前だ」

「……一百五十年……」

年代など言われたところでジョーダンにはわからない。ハリーファガ言つことの真偽はわからなかつた。

「今も政はヴァロア家が担つてゐるはずだろ？ ヴォードは國に戻つてから没落したのか？」

「そんなことないわ。彼は英雄のはずよ……」

「歴史は都合善く変えられる。実際は何かあつたんだひづ」

「でも……学校でそつと習つたわ」

「それが正しいとは限らないだろ。さつきの王太子の黒髪の事も併せて、歴史に伝えられることが全て真実じゃない。大体、お前がまともに勉強してたとは思えないしな」

言い当てられて頬が熱くなつた。ジョーダンは膨れると、重ねていった足を少しずらして組み替えた。

話しているうちにジョーダンの顔色は回復していた。

「歴史は眞実は伝えない。都合良く歪められて伝わるものだとつくづく実感したところだ……。それに、歴史は人の心も伝えない」

言しながらハリーファは立ち上がつた。珍しく言葉に不満が混じ

つていた。

「皆、ハリみたいに人の心がわかれればいいのに」

そう言われてハリーファは、しゃがんままのジョードを見おろした。

「人の心なんてわかりたくもない」

人には無い能力のことを言われ、ハリーファはそっぽを向いた。

「……わかり合いたい、と思つたことはあるけどな。もう遅い」

ハリーファはジャファルと同じように背中越しに語つた。

「遅い?」

ジョードが立ち上がると、ハリーファは振り返った。

「死んだ人間のことはわからない。歴史家の記録も、何も伝えてはくれなかつた」

『死んだ人間……?』

ハリーファの母親のことだらうか? ジョードがそう考へていると、ハリーファが小さな声で答えた。

「……父だ」

『……父? 爽相はまだ生きてるのに?』

ジョードは不思議そうにハリーファを見つめた。  
ハリーファの視線は、まだ乾ききらないジョードの黒髪を見つめていた。

## 黒人奴隸

ファーリーク皇国に連れてこられてからも、ジョードは祈りを欠かしたことはない。ひざまづき、小さなベッドに両肘を置く。小さくくりぬかれた窓から差し込む光に向かつて手を組んだ。

【天使】様、どうかおこたえください。  
どうか、もう一度姿をお見せください……

しかし、【天使】の声は聞こえなくなっていた。

\* \* \* \*

暗黒大陸と呼ばれる西大陸では春を呼ぶ風が吹き始めた。<sup>モリス</sup>風は上空にまで粉砂を舞い上げ、青い空を砂色にくすませる。  
そして一月ほどして風が吹き止むと、皇国は春らしからぬ陽春を迎える。

空は雲一つなく青い空が高く広がり、真夏のような強い日差しが、  
宫廷の石畳を焼いていた。

春先には宫廷へ出入りする者の数が増え、城門広場や脇の水飲み場に外来の馬や駱駝（ジャカル）が繋がれ、主が戻つてくるのを待つている。

その中に宰相の馬によく似た黒い馬が繋がれていることがあった。ジョードは一目見てその黒馬が宰相の馬とは違つことに気がついた。駱駝たちの中にまぎれ主人を待つ黒馬に近づき、そつと首をなでる。黒い馬は、先が白くなつた睫毛を瞬かせ、黒い大きな瞳でジエードを見つめ返した。

「あなた、外から来たのね。どこから来たの？」

馬から答えが帰つてくるはずもない。しかし、馬は答えるようにブルブルと鼻を鳴らした。ジョードは苦笑した。

「あなたの言葉がわかつたらよかつたんだけど」

動物たちは人間の言葉を理解しているのに、何故人間は動物たちの言葉が解らないのだろう。

ジョードは心から残念そうに呟いた。そしてふと、他人の心が読める少年のことを思い出した。

（……ひょっとして、ハリは動物の心もわかるのかしら？）

もし動物たちの心がわかるのならなんて楽しいことだろう。明日の昼にでも連れ出して確かめてみたい。ふとしたひらめきに、心が踊りだし明日が待ち遠しくなつた。

翌日の昼下がり。ジョードが昼休みに【王の間】に戻つてきた頃には、ハリーファは既に何処かへ行つてしまつていた。少々肩を落としながら、結局ジョードはいつものように一人で厩舎へ向かつた。

太陽は夏に向けて少しずつ高くなり、天から痛いほど日差しがふりそそぐ。人気のない庭園の砂地の上にはやらやらと陽炎がたゆたっていた。

今日は駱駝を連れた商人たちは来ていないので、昨日の黒馬一頭だけが広場の横手に繋がれていた。

門前の石畳の広場の手前で、ジエードは必ず一度足を止める。陽炎の中、石畳の上に水面のように光が揺らめいている。

ジエードは手で目の上にひさしを作り、目の前の光景を肅然と眺めた。水は、青空を映してゆらゆらと微かに波打つ。ヴァロニアでは見たことのない美しい情景だ。あの幻水を『サラーブ』というのだとハリーファに教わった。幻想的な景色に熱さを忘れ、時間が止まる。

綺麗。まるで泉みたい……。

ジエードはサラーブに心を奪われた。近づけば逃げてゆく、触れることが出来ない神秘の泉だ。

しかし、幻想の世界からジエードは突然我に返らされた。黒衣を纏つた人物が幻の泉の上を横切った。

黒い布を頭に巻き、その上から頭布の付いた真黒い上衣を纏っていた。聖なるものを蹴散らすかのように、泉の上をかまわざずけずけと踏み歩く。ジエードの視界を横切ると、広場の脇に繋がっていた黒馬に寄り添うように立つた。

あの黒馬の主人なのだろうか。黒尽くめの格好だが、背丈からしてやはり宰相ではない。なぜか足がすくんでその場から動けなかつた。

(……誰かしらへ。)

思った瞬間、ジョーダは思わず息が止まつた。

頭巾の下の顔がはつきりと見て取れた。年頃はジョーダと同じくらいだらう。とても美しい造作で、瞳は優しく慈愛に満ちていた。そしてどことなく憂愁を帯びている。口はきつちり結ばれて表情は凜としていた。

頭には布を巻いていたが肌は黒い。遠目でもジョーダにははっきりとわかつた。

(ア・アルフェラツ様!)

黒い馬の主はアルフェラツに似ていた。会いたいという願いが届いたのかと、ジョーダは激しく打つ胸に手を当てた。ただ自分と同じ年頃のようで、聖地で見た姿よりも歳若くは感じる。

アルフェラツに似た少女は、すらりとした黒い手を馬に伸ばした。愛しむ様に首をなでる。馬の耳に向かって何か語りかけ、首を抱くと唇を寄せた。

悪魔のような真っ黒な衣装を纏つた【天使】に魅了されたかのように、ジョーダは少女の美しさいたずまいから目をそらせないでいた。

主は馬をなでる手を止めた。ジョーダの視線に気づいたのか、ゆっくりと振り返った。

その瞬間、ジョーダは背を向け逃げるようにその場を走り去つた。サンダルの底に砂が入つてもかまわず走り続けた。

心臓は激しく鳴り続けている。あんなに【天使】に似ているのに、

ジエードの心は不安で覆いつくされていた。

休憩もそこそこに、ジエードはいつもより早く【王の間】に戻ることになった。

朱鷺色の部屋にまだハリーファの姿はない。テーブルの上に、何か書かれた紙と本が散らかっていた。

(……ハリ、どこへ行つたのかしら?)

もう休憩も終わりに近い。ジエードはいつものように部屋の掃除を始めた。

ハリーファが散らかしていった書物を束ねて整え、部屋の隅の棚の上に運んだ。一人黙つてぬらした布でテーブルや椅子の背を拭くしかし、さつきのアルフェラツに似た黒人の少女のことがジエードの頭を離れなかつた。

不安な気持ちが、ジエードの身体の動きを鈍らせてしまう。不安を拭い去るようにテーブルを拭ぐが、気が付けば手の動きが鈍くなりやがて止まつた。

神は時々人の姿をして地上に降り立つという。もしかすると、先ほどの人物は【天使】アルフェラツが人の姿を借りて現れたのではないだろうか? もしあの少女が本当に人の姿をしたアルフェラツなのだとしたら。もしあの人物とハリーファを会わす事が出来れば。

(もし……、もしあの人がアルフェラツ様だったら……)

ハリーファと会わせることが出来ればハリーファとの約束が果た

される。やうなれば、ハリーファーは約束を守つては自分に命を差し出すだらう。ジョードは天命を果たし、ヴァロニアにも帰れるはずだ。

しかし、ジョードの心はざわついた。

聖書に描かれていた悪魔の絵がジョードの脳裏に浮かんだ。悪魔は人の心を惑わして甘美な罠へと誘惑するといつ。聖書の中で悪魔の姿は頭から足まで真っ黒に描かれていた。

聖地で会つた【天使】は白い服を身に纏つていた。先ほどの真っ黒な服に身を包んだ黒人は、本当に【天使】なのだろうか？ もしかして、悪魔では？

ジョードは考えを振り払つように頭を横に振つた。

『黒い服……。でも顔は【天使】様と同じだったわ……』

混乱する頭を冷やそうと、ジョードは両頬に当てた。水に濡つた掌の温度が心地良くな頬に沁みてゆく。強く打つ胸の拍動を落ち着かせようと、そつと息を吐いた。

その時。

「ジョード」

突然背後から声をかけられて、ジョードは息が止まりそうになつた。口から飛び出しそうになつた悲鳴をなんとか飲み込んだ。

入り口の方を振り返ると、黒尽くめの人物とはまるで対照的な、金色の髪の白人少年がジョードを見つめていた。

「ハ、ハリ！ お、おかえりなさい……」

まるで言い訳するように、いつもは言わない言葉をひきつった笑顔で言った。あからさまな態度にハリーファの眉根が寄った。

「……天使が？　どうしたんだ？」

ジョードは近づいてくるハリーファの顔をちらりと見やつた。このまま黙っていても、きっと自分は不安を隠しきれない。それに、ハリーファが戻ってきたことで、少しだけ不安が和らいだ。

「……さつき、黒い肌の人を見たの」

ジョードの言葉にハリーファは再び眉をしかめた。

「黒い肌？　宫廷に黒人の奴隸は一人も居ないはずだぞ」

ハリーファの言つとおり、皇族や宫廷に仕える奴隸が皆白人なので家奴隸も全員白人だ。それは家奴隸と過ぎすことの多いジョードだつてよく知つている。

「外から來た人だと思うの。馬を連れていたから。その人……、アルフェラツ様にとても似ていて……」

思わず声が小さくなつた。

驚くと思っていたハリーファは、動搖する素振りの欠片もない。

「そいつの髪の色は？」

「髪……？　ええと、髪は、布をかぶつっていて見えなかつたわ……」

「なら田の色は？」

「……田は、黒かつたわ。……多分」

ハリーファは呆れたようにため息をもらした。

「お前はヴァローナを出てからアルフェラツ以外に黒人を見た事がないだろ。田が慣れてないと、異人種は皆同じ顔に見えるものなんだ」

ハリーファが否定するならば、あの少女は【天使】様ではないのかもしれない。だが、ジョードの不安はまだ消えていなかつた。

「で、でも！ アルフェラツ様に間違いないわ！ あんな綺麗な人を見間違えたりしない。本当に【天使】様に良く似ていたのよ！」

「そういえばお前は、聖地で俺を初めて見たときも『天使』のようだと考えてただろう。本物の【天使】の前でよくそんな事考えれたものだな」

「氣恥ずかしさに、ジェードの頬が微かに染まつた。心を読まれるなど羞恥以外のなんでもない。

「わ、わたしは昔からずつと天使様は金色の髪の白人だつて思つていたのよ。ハリはアルフェラツ様のあの御姿を見て、すぐに【天使】様だつて信じられたの？」

「アルフェラツは俺の知つている天使の姿そのものだ」

あつさりと切り捨てられ、ジョードは返す言葉に困つた。共感し

てくれると期待していたが、ハリーファの持つ感覚はヴァロニア人の概念と違すぎる。ジョードはがっくりと肩を落とした。

「それに……まさか【天使】様が……」

『人殺しを命じるなんて、思わないじゃない……』

ジョードは心の迷いを口にすることが出来なかつた。

さつき見た少女が悪魔ではないかという不安だけではない。もし【天使】なのだとしたら、彼女をハリーファと会わせることが出来れば、ハリーファは。

「前に言つただろ。【天使】に会わせてくれれば、俺の命はお前にくれてやる」

その言葉にハリーファの顔を見ていられなくなり、ジョードは視線を床に落とした。

天命は果たさなければ。

姉のために。

だけど。

この一年、【天使】の声は一度も聞こえなかつた。ハリーファのそばで過ごすうちに、ジョードの心は揺らいでいた。

どうしてハリーファを殺さないといけないのか。聖地で会つたあの黒い肌の女性こそ、本当に【天使】なのか疑いもした。しかし、ハリーファがアルフェラツは天使だと言うのだから間違はないのだろう。

「……わたしの国では黒い髪や目は魔女だと、悪魔の僕だと疑われるのよ。黒は魔の象徴とされているの。それに、……黒人なんて知らなかつたわ。肌が黒いなんて、そんなこと……」

ジョーダはうつむいたままつぶやいた。

「黒が魔の象徴か。何故そんなんことになつたんだ

「黒い髪なんて大嫌いよ」

ジョーダの言葉尻が小さくなつた。

「お前が嫌いなのは黒い髪なのか？ 金色の髪じやないのか？」

ジョーダはまた無意識に自分の髪を弄つていたことに気づいて、指に絡めていた髪をほどいた。

「それともその逆か？ お前は金の髪に何か強い憧憬を抱いてるのか？」

ハリーファの言葉にジョーダの心臓がはねた。身体が一瞬強張る。ハリーファに悟られないように、心で何も考えないよう努めた。

ジョーダの反応を見て、ハリーファは息をはいた。

「黒が魔の象徴とか言つが、お前は【悪魔】の姿見たことがあるのか？」

ジョーダは顔を上げてハリーファを見つめた。

「……ないわ」

首を横に振ると、やわらかく波打った黒い髪が揺れる。聖書に描かれた悪魔の姿しかジョードは知らない。

「教えてやるうか？」

「え……」

「ファーラークでは金の髪が魔性の色と言われている」

ハリーファはそう言つて軽く鼻で笑つた。

ジョードが黒い瞳を瞬かせた。やはりハリーファはジョードの心を読んで、ジョードが何に怯えているか気がついているのだ。自虐的にも思えるハリーファの言葉を申し訳なく思つたが、まだ笑い返せそうにはない。ジョードの心の中にはまだ何か重いものがあった。

「……わたし、悪魔信仰の噂を聞いたことがあるの。悪魔信仰者は悪魔を召還するんですって」

「悪魔信仰？」

「恐ろしい事だと思わない？ 悪魔を召還するだなんて

西大陸では複数の信仰が認められていたが、その全てが天使信仰モリスであった。

「モリスには悪魔を信仰する人間なんか居ない」

ハリーファの表情は神妙になり、口調も重くなつていった。

『……さつき見たアルフェラツ様に似た人は、目も肌も、服も全て黒かった……。の人、天使なの？ それとも悪魔なの？』

ジョードは心中でつぶやいた。

【天使】様、どうかおこたえください。  
もし、あの方が【天使】様なら、どうか ハリと会わぬいで。

それから数日が過ぎたが、ジョードが昼間に広場に行つても、もうあの宰相の馬に良く似た黒馬の姿を見ることはなかつた。

\* \* \* \*

真昼の炎天下。強い日差しを浴びながら、宫廷内の石畳の遊歩道を歩く少女と少年の姿があつた。

ハリーファはジョードに誘われて厩舎に向かつていった。ジョードは手をひいてハリーファを急かす。昼の休憩時間がさほど長くないからなのだろう。ハリーファを連れ出すことに成功して、女奴隸の心から嬉々とした想いが伝わつてくる。

一人のサンダルがパタパタと音をたてた。

まるで子供のように急かすジョーダーに不思議な既視感を覚えた。  
昔、こうして自分の手をひいたのはサライだったか。ジョーダーよりも小さな手の感覚が甦る。

「ねえ、ハリは馬に乗れないって聞いたんだけど。ほんとなの？」

ジョーダーの声がハリーファの思考を遮る。

確かにハリーファ自身は乗馬の指導は受けたことはない。馬に乗ることが出来たのも、オス・ローへの道を知っていたのも、コースの記憶があるからだ。

「お前と会った時まで、俺は宫廷から出たことすら無かったからな」

余計な事を言う必要はない。話をほぐらかしたつもりが、その必要はなかつたようだ。ジョーダーはハリーファの胸中に気づかずに微笑んだ。

「乗馬なら、わたしが教えてあげられるわよ~」

「お前が？ 僕は駱駝ジャマルなら何度か乗ったことがあるぞ」

「駱駝に…? 本当?」

「ああ。秋に行商隊が着たら乗せてもらえ。駱駝の歩みは慣れたら揺れが心地良くて眠ってしまつぞ」

「そうなの？」

「慣れればな」

ハリーファの言葉にジョードはますます楽しそうに笑った。

動物好きなジョードにとって、馬は特別な存在のようだ。馬に乗りたくて仕方がない気持ちがジョードの心から伝わってくる。

「馬に乗らうなんて考える女奴隸はお前くらいだろうな」

楽しそうに言葉を返すと、ジョードはハリーファに心を読まれている事に気がついた。

「ねえ？ ハリの正体は本当は動物なんじゃない？ 動物は人の心が読めるのよ」

「ああ、そりゃ、ちがいない」

ジョードの突拍子もない言い分に、ハリーファは笑いがこみ上げてきた。

「お前は呆れるほど動物好きなんだな」

「ええ、大好きよ。動物たちは嘘をつかないし」

ジョードは歩きながら答えた。

『そついえば、ハリも嘘をつかないものね。やつぱり動物なんだわ！』

隣で一人でくすくす笑うジョードを見て、ハリーファは軽く肩をすくめてみせた。

他の奴隸達からすれば、異国人のジョードはする事も言つこともとんでもないことばかりだらう。最近特に、ジョードはハリーファ

の身分などお構いなしだ。

ジョードの胸裏にハリーファに対するあざとさもくつらいも見た  
」とはない。今もジョードの胸のうちにあるのは、幼く無邪氣な好  
奇心だけだ。ハリーファには少女の心の中がきらきらと輝いてみえ  
た。

人気のない広場に差し掛かると、熱さが増して石畳の上に陽炎が  
ゆらゆらと揺れていた。地面から照り返す光に思わず目を細める。

厩舎を田前にしてジョードは立ち止まり、ハリーファを振り返っ  
た。どうしたことか、さつきまで上機嫌だった笑顔はすっかり消え  
ている。何かを必死で隠そうとしているが、ジョードの顔には不安  
の色が浮かんでいた。

「『Jめんなさ』……。やつぱり今日はダメだわ……」

ジョードの心からは、あの馬の主に会いたくないと聞こえてきた。

馬？

ハリーファが前方に田を向けると、ジョードの肩越しに黒い馬が  
城門近くに繋がれているのが見えた。

「宰相か……？」

ジョードは視線を地面に落としたまま何も答えなかつた。

広場の向<sup>J</sup>にまほ<sup>サラーブ</sup>陽炎が立ち上り、蜃氣樓の泉が静寂の中を揺ら  
めいていた。

ハリーファは城壁沿いを一人歩いていた。悟られたくないことがあって、逃げるようになつて行ったジョードを引き止める気にはならなかつた。

そういうところが自分の駄目などこりだと自覚している。無理にでも引き止めて、何があつたか聞き出すべきではなかつたのか。昔から、他人の心に触れるのが怖いのだ。それ以上に自分自身の心をさらけ出すことにも怯えている。軽く頭痛がするのは、暑さのせいだけではない。

一人炎天の下を歩いていると、いつの間にか海側にまで辿り着いていた。岸壁に打ち付ける荒波の音が、城壁の向こう側から聞こえる。珍しく、海鳥の声も聞こえてきた。

歩きながら、以前ジョードを連れて来た時のこと思い出す。あの時、城壁の上で故郷や家族や友人を想い涙するジョードを見て、同じように涙を見せたサラのことが胸をかすめた。

同じようにユースフのことを想つていたのだろうか？ 壁の中から外に出たいと思っていたのだろうか？

城壁の上に登る階段に近づいた。

ハリーファは日差しから目をそむけて歩く。階段の真横に差し掛かると、頭上から砂がパラパラと落ちてきた。肩に降ってきた砂を

手ではらい、階段を仰いだ。

階段の途中に人影があった。

逆光で、はつきり見えるまで少し時間がかかった。黒衣を纏つた黒人だ。

その容姿を見て、ハリーファは驚きで口が震え、咄嗟に言葉が出なかつた。以前、ジエードが言つていた少女に違ひない。

アルフェラツ！？

造作はアルフェラツに似ている。しかしオス・ローで見た姿より年若い。黒人は頭に白い布を覆つように巻き、それがまるで白く長い髪のように見えた。頭布の下に見える瞳はジエードの言つた通り黒かつたが、サライと見間違うには十分だつた。

【天使】似の黒人少女は、狭い階段の途中に立ち尽くした。ハリーファの強い視線を感じて、面食らつたように目を見開いた。

「 サライ……

思わず言葉がハリーファの口をついた。黒人は驚き、狭い階段から足を踏み外した。

「 わつ……」

黒衣の人物は小さい悲鳴とともにザザーッと壁を滑り落ち、すぐには地面に転がつた。ハリーファの眼前に砂埃が巻き上がつた。

安否を問いかける言葉が、ハリーファの喉で詰まつて出てこない。

『おい！ 大丈夫か？』

サラにかけたコースフの声が頭の中で響く。

「うう……。いつてえ……」

小さくうめく声が聞こえた。黒人はうめきながら四つ這いになり地べたに座りこんだ。着ていた黒い衣服は砂だらけだ。ずれたターバンが覆いかぶさって顔は見えない。黒い手が白いターバンをつかみ、忌々しげに取りはらわれる。地面に投げ捨てられた布の下から現れたのは、短く切りそろえられた黒い髪だった。

男？

ファールーク皇国では長い髪は女の象徴であり、成人を迎えた男子は皆髪を短くするのだ。男にとつて切り整えられた髪は富の象徴でもあった。

黒人は痛みに顔を歪めながら、右手で左肩を押さえた。

目の前の黒人が男だとしても、ハリーファを見あげる表情はあまりにもサラに似ていた。年齢のせいで、その姿はアルフェラツよりもむしろサラに重なる。

ハリーファは呆気にとられて立ち尽くした。ジェードに聞いた話から、噂の人物は女なのだと思い込んでいたのだ。地べたに座り込む黒人の少年を見下ろした。

「……なんなんだよ。見世物じやねえや。こ<sup>ザンジュ</sup>じやそんなに黒人が珍しいのかよ！」

ハリーファの視線を浴びて、少年は忌々しげに舌打ちした。

黒人の少年はハリーファの視線に不平をもらした。膝と壁に手をつきよろりと立ち上がった。いててと時々うめきながら、砂にまみれた服を両手でばしばしとはたいた。

立ち上がった少年はハリーファよりも少し背が高かつた。小柄だったサライとは異なる。少女のような美しい顔立ちだが、服装も体格も声もまぎれもなく男だ。

「……ここには黒人ザンジューは一人も居ない。お前、何者だ？」

ハリーファがようやく口を開くと黒人の少年は向き直り、眉を寄せながら黒い瞳をハリーファの方を向けた。

「見りやわかるだろ？ ただの使いつ走りだよ。ここんとこ宫廷に入るのにも随分ものものしいじゃないか。行商隊が来たときに、何かあつたのか？ 黒人ザンジューだからって俺ばかりやたらと調べられて、いい加減頭にきてるんだ」

ハリーファが皇子マールクだとは気づいてないようだつた。金色の髪の白人の少年は宫廷の白人奴隸と思われているのだろう。余計な文句をつけ足して答え、不機嫌そうに衣服の砂をはらい続ける。

「お前は行商人じゃないな。お前の主人は何処の誰だ？」

黒い肌の少年は砂をはらう手を止めた。

「メンフィスのラシードだ」

メンフィスはサンドラから北へ十キロほど<sup>サント</sup>の交易の盛んな街だ。以前、歴史家イヤスから聞いた、まさに名士の家系だ。最近出入りしているラシードの奴隸と言うのもこの少年のことだったのだろう。

「ラシード？ ではお前は、ラシード・アル・ハリードの奴隸か」

ハリーファの質問に、黒人奴隸は顔も上げず「そうだ」と答えると、また服をはたきはじめた。

ラシードという人物はジャファルの従兄弟にあたる男だ。ラシードの父ハリードはかつての皇国<sup>ウカイ</sup>の第二皇子だ。最近調べていた系譜で見た名前を見たところだつた。そして、ハリーファより一ヶ月先に生まれた腹違ウカイいの姉アーランが嫁いだ相手だ。

「アーランは……、息災なのか？」

ハリーファの言葉に、黒人の少年の眉がぴくりと上がった。砂をはらう手を止め身体を起こすと、ハリーファを凝視してきた。

「あんた、誰だ？」

「アーランの、腹違ウカイいの弟だ」

「じゃ、あんたがハリーファ皇子？」

そう聞いて、黒人奴隸の少年は大きく目を見開いた。少年の驚く顔もサライを思い起こさせる。

「……これは……」無礼を

黒人の少年は口では詫びたが、ハリーファを疑うように眺めた。

ハリーファの事情をアーランから聞かされ知っているのが、漆黒の瞳にどことなく憐れみの色が浮かぶ。そんな気がしたが、心からは何も聞こえてこなかつた。ハリーファに向けられた視線は、ハリーファを哀れんでいるのか、蔑んでいるのか、それとも疑つているのか。黒人少年の心のうちは何も伝わつてこない。

ハリーファは急に違和感を覚えた。少年の心がわからない、何も伝わつてこない。自分の異能が突然消え去つたのだろうか。ハリーファは焦る気持ちを表情の下に隠して少年に問いかけた。

「今日が初めてじゃないな。ラシードが一体何の用件だ？ それともアーランからの遣いか？」

「ハリーファ皇子？ あんたさあ、弟なのになんにも聞かされてないのか？」

黒人少年は随分なれなれしい言葉で語りかけてきた。少女のような表情が歪み、哀れんだ視線がハリーファに向けられる。

「皇女さんの御母堂の体調が優れないんだよ。知つてるだろ？ ロコの病氣だ」

少年は右手の親指を自分の胸元にあてた。

「主人に遣いを頼んできたのはアイシャ殿下本人だぜ。オレは市井で流行つている薬を遣いで届けに来てるんだ」

メンフィスはオス・ローの医者や職人が多く移住した街だ。<sup>ラン</sup>異母姉の母親がもう何年も前から体調を崩していることも事実だつた。だが、少年の言つことが本当に正しいのかどうか、心の声を聞く

ことに慣れすぎていたハリーファは判断できなかつた。

「なぜこんなところにいる？」「」何をしていた？」

「殿下がさ、最近昼間、海鳥の声がうるさくて休めねえって言ひん  
だぜ。城壁の上に巣でも作られてないか見てこいつてさー。」

使い走りの少年に怪しいところはなさそうだが、相手の心が  
聞こえないことにハリーファは内心穏やかでなかつた。なぜこの少  
年は心の声が聞こえてこないのだろう……。何も考えないように訓  
練されているのだろうか？

ハリーファは一瞬、人知を超えた能力を疑つた。自分と同じよう  
に何か不思議な力を持つているのだろうかと、猜疑心がハリーファ  
の心を覆い始めた。しかし、普通じゃないのは自分のほうだ。

『ハリーファのように人の心が分からぬから、たとえ裏切られ  
る事になつても人を信じるのだ』と、以前そう言つたジエードの言  
葉がふと思いつかれた。

「……ここには毎日来ているのか？」

「前に十日ほど毎日つめて来てたけど、先週から週に一回だ」

「お前、名は何というんだ」

「ソル」

さらりと答えた少年の名は、ファールーク皇国の市井ではよく聞  
く愛称の一つだつた。おそらく本当の名ではない。市井では忠実な

人付の奴隸は主人以外に本当の名前を明かさないと聞く。そんな奴隸の少年に言つても無駄かと思ひながらハリーファは尋ねた。

「ソル。俺はこの通り不自由な身だ。お前のよう<sup>ヒ</sup>、自由に外と出入りできる奴隸が欲しい」

あまりに唐突な言葉に、ソルと名乗った少年は目を白黒させた。

「……オレの<sup>サイード</sup>主人はラシードだけだ」

「別にお前をラシードから買い取る<sup>ヒ</sup>とは言わない。遣いを頼まれて欲しい。報酬ならその都度<sup>ヒ</sup>与える」

「ふーん……」

ソルは不振な目付きでハリーファを見定めた。

「オレは、金持ちや高い身分のやつらは自由なんだと思つてたんだけどな。そうじやないのか?」

ソルは胸の前で腕を組みながら首をかしげた。

「……俺は軟禁同然でここからは出られない」

軟禁と言つ言葉をハリーファの口から聞いて、ソルは笑いをかみ殺した。

「別にオレじゃなくても、皇子様なら奴隸なんか沢山いるだろ?」

「いや……」

ハリー・ファは思わず口をもつた。その様子を見てソルは眉をしかめる。

「もしかして奴隸もないのか？ やっぱり異例の第一皇子様は冷遇されてるってことか？」

納得したような表情で、ハリー・ファの服装を再び眺めた。

「そんなんで、本当にちゃんと報酬が払えるのかよ。いくら皇子様が相手でも、オレはタダ働きはしないぜ？」

「先に払えばいいだろ？」

そう聞いてソルは頭を縦に振った。そしてわざとらしいほど大きに右拳で左手をぽんと打ちならした。

「あー、そうだ！ 金は要らない。代わりに阿片アフィウムが欲しい。なれば麻ハシシュでもいい」

ハリー・ファは眉をひそめた。おそらく国交のないファーリークにとって、今は金子よりずっと価値があるのだろう。

「ここにあるのは医療用のものだ」

「ああ、粗悪品はいらねーんだよ。純度の高いものが欲しい。最近メンフィスでも手に入りにくいんだ」

ソルは口の端を少しあげた。元々阿片や麻の精製技術はシュケムから持ち込まれたものだ。争いの起こらなかつた二百年の間に、亡

国から引き継いだ技術さえ衰えてしまったのだらう。

相変わらず奴隸少年の心からは何も聞こえない。しかし、報酬として望むものを見せないなら取引に応じるつもりはないようだ。

「……わかつた。ここから北西位置に赤土色の離れがある。義母上を見舞つた後に来てくれ」

「御意のままに」

ソルが皮肉っぽく返事をすると、早速ハリーファはソルにある用事を頼んだ。

細かに指示する間、ハリーファは黒人少年の心に耳を傾けた。しかし、その間もソルの心からは何も聞こえてはこなかつた。

日が落ちて、【王の間】のランプに灯が点された。  
薄暗かつた室内が明るくなり、少し不機嫌そうなハリーファの顔がジョードの瞳に映つた。

ハリーファは応接の長椅子に深く腰を掛けている。珍しく乱暴に足を投げ出し、腕組みをしながらジョードをじっと見つめた。

『……ハリ、昼間のことを怒っているのかしら』

ジョードの心は、ハリーファに対する罪悪感でいっぱいだつた。ハリーファにわびる言葉を探したが、あきらめてため息をこぼす。

ハリーファはジョードの心の声を聞きながら、ソルの心の声が全く聞こえてこない事について考えていた。今までそんな人物に出会

つたことはない。本当に何も考えないようになっていた訓練されているのだろうか。

「ジエード。心でものを考えない人間がいると思つか？」

ハリーファはまるで独り言のような口調でジエードに問いかけた。目も合わせずに話しかけられ、ジエードは困ったように首をかしげた。

\* \* \* \*

皇都サンドラから北へ十数キロ程ゆくとメンフィスの街がある。メンフィスはかつてはフローリスとの交易で栄えていた街だ。

近くに流れる川の水を利用して、荷運びの小船が行き交う水路が街を網羅するように作られている。皇都サン德拉よりも緑が多く、街の至る所にナツメヤシが生え、その根元や大きな建物の周りには緑の芝が生いしげつていた。

およそ二百年前に国境越えが禁じられてからは交易も廃れたが、モリスの中では今も異国風情の感じられる街だ。

ソルがメンフィスに着いた頃には、東の空の裾が勝色に染まりつづあつた。斜めに差していく日差しに日を細めながら、首元ににじ

む汗をターバンの裾で拭いとる。往来に入ると馬から下り、その手綱を引いて人の行き交う中を歩いた。時々見知った顔ぶれがソルを見つけると声をかけてきた。

「アキル、お前も疲れただろう？　帰つたらゆっくり休めよ

独り言のように黒い馬に話しかける。

街の中心地に黒人奴隸ソルの主人であるラシードの屋敷はあった。ソルは格子柄の門を開け中に滑り込むと、馬を厩舎へと連れて行つた。餌箱と水を確認すると、玄関まで戻り館の中に入った。

「ソロモン殿、おかえりなさい」

ソルの帰還に家奴隸が声をかけてきたが、ソルの耳には届かなかつた。ソルはものすごい勢いで玄関のすぐ横の階段を駆け上り、主人であるラシードの部屋へ向かつた。

主人が在室なのは分かつてゐるので、軽く戸を叩くと返事を待たずに戸を開ける。ベッドの上で身体を起こしていた人物は、帰つてきた奴隸少年の姿を見て微笑みかけた。

「ソル、戻つたか」

「うん」

ベッドに身体を起こして座つてゐるのが、ソルの主人のラシード・アル・ハリード、かつての第二皇子ハリードの息子で、ファールーク皇國の宰相ジャファルとは従兄弟にあたる。ジャファルと歳も近い。ラシードの黒髪と小麦色の肌は父親譲りだ。

だが、今年に入つてからラシードは急な病に倒れた。そのせいで実際の年齢よりも老けて見える。病氣のせいで頬はこけ、漆黒の髪は切ることが出来ず少し伸びて肩に掛かっている。今は気分が良いのか、言葉も明朗でソルを見つめる黒い瞳には光が宿っていた。

ソルは黒い上衣を脱いでわきの椅子の背に投げ掛けると、主人のもとに駆け寄つた。そばに置いてある椅子には座らず、ベッドの上に座り込むと主人の足元であぐらをかいだ。

「義母上はどうだった？」

ソルの行動をとがめる」となく、ラシードはソルに笑顔を向けた。

「かなり良くなってきたみたいだ。薬があつてるんだと思つ」

「そうか。それはアーランも喜ぶだろ?」

元皇女の名前を聞いて、ソルは口を尖らせた。

「さあね。あいつが喜ぶところなんて、オレには想像もつかねーよ」

ラシードが妻の母を氣遣う言葉に、ソルは少し渋い顔をした。数年前からラシード自身も病を発症しているのに、それを公にしないまま日に日に弱つている。そして自分の命が長くないことを悟つたラシードは、つい先月、奴隸達に金品を与え解放してしまつた。この家に残つているのは家奴隸一人だけとソルとそしてアーランだけだつた。

（あんたの方がよっぽど悪いのに……ラシード）

富廷にいる皇族達と同じ、漆黒の髪と瞳、小麦色の肌をしたラシードを見て、ソルは今日出会った人物を思い出した。

「そうだ、ラシード、聞いてくれ！ 今日面白いやつに会ったんだ」

「面白い？ 一体誰だい？」

「第一皇子のハリーファ殿下」

「ハリーファ皇子？ あの異例の第一皇子か」

「うん。確かに、箱入りでほとんど人前に姿を見せないって言つてたろ？」

「皇族の血が薄いと聞いたがな」

「ああ、それそれ！ 噂以上に毛色の違う奴だつたぜ。白人奴隸と勘違いしちまた」

「白人奴隸か！ 富廷の奴隸は宰相の趣味で皆白人だからな」

そう言いながらラシードがははつと笑つた。主人が声を出して笑うのは久しぶりだ。

「白人で、しかも金髪<sup>ショウブル</sup>だぜ？ あれで皇家の血を引いてるなんてありえねーよ」

「ハリーファ皇子か。ジャファルは金の髪が好きなようだからな。ファーレークの撃破つてまで富廷に残すなんて、よほど気に入り

なんだな

主人の問いにソルは肩をすくめた。

「いや、それが何やら、ハリーファ皇子の方は色々不自由してゐたいだぜ。宫廷からは一歩も出してもらえないみたいだな。その上奴隸も居ない。どうやら離れに隔離されてて、哀れな第一皇子様だ」

一人が話していると扉がノックされた。ソルと同じように返事を待たずに入ってきたのは黒髪の少女だった。

銀のタンブラーを盆をのせ、黒く長い髪を揺らしながら、真直ぐにラシードの傍らに歩み寄った。

「貴女にこんなことをさせてすまないね

「構わないわ

少女はベッドの横の台に盆を置くと、持ってきたタンブラーをラシードに手渡した。

ソルは昔から、この少女に対する主人の態度が気に食わない。ソルの顔からは笑みが消えた。自分のことなどまるで気にもとめない少女をにらみつける。

「ありがとう、アーラン」

ラシードの感謝の言葉と笑顔にも、アーランと呼ばれた少女は表情を変えず椅子に腰掛けた。その様子を見て、ソルは黙つてベッドの上から降りるとそつと部屋を後にした。

アーランの態度に軽いいらだちを覚えた。いや、本当はラシード

をアーランに盗られたことに腹を立てているのだ。階段を下りる足につい力が入り、バタバタとみつともない音をたてながら、ソルは玄関への階段を下った。

「ソル！　お待ちなさい！」

先に階下に下りたソルを追って、アーランが手すりに身を乗り出して声をかけてきた。アーランには聞こえないように軽く舌打ちすると、ソルは振り返って上方を仰いだ。

アーランの肩にかかる黒く長い髪、小麦色の肌はラシードと同じ皇族の血筋のものだ。漆黒の大きな瞳が階上からソルを見下ろした。

「ラシードから聞いたわ。あなた、今日ハリーファに会つたの？」

「ああ。あんたとは随分似てない弟だな！」

階段の上のアーランに向かつて、強い口調で答えた。

宰相の娘のアーランを見ていると、なおさら今日出会つたハリーファだけが、同じ宰相の血を引いていながら、異様なほどにその外見が違うことに改めて気づかされる。

「ハリーファに近づいては駄目！」

唐突に言われた言葉にソルは目を丸くした。

「あのなあ。いくらあんたでも、オレはラシードの命令しか聞かな  
いつて言つただろ」

「ハリーファは人の心を読むのよー！」

そう言いながら、アーランはソルを追いかけて階段を下りてきた。

「はあ？ 人の心を読む？」

ソルは近づいてきた主人の妻に向かって眉をしかめた。

「ハリーファは人の心の声が聞こえるのよ」

「からかってんのか？ そんなの戯れ言だろ？」

「戯れ言ではないわ。 真実よ」

「姉弟で心が通い合つほど仲が良かつた、ってか？」

「お黙りなさい！」

アーランの顔は怒りで赤くなつた。ソルは肩を竦めて見せると、茶化すのはやめて真剣な表情で答えた。

「皇女さん。人の心が読めるなんてのはな、シャイターン ジン悪魔か神魔だけだ」

ソルの真つ直ぐな視線を受けて、アーランはそれ以上何も言わなかつた。

「まあ、確かに、あの髪と肌の色は皇族にしちゃかなり異様だな。それとも、あんたの弟は神魔ジンに取り憑かれてるつてのか？」

「……」

アーランは押し黙つたまま、やや不満そうな顔でソルを見上げた。ソルはふんつと鼻を鳴らした。話は終わつたと思い、身をひるがえし玄関に向かつ。

「お待ちなさいー。」

「うるせーな。何なんだよー！」

「あなた、今から何処へ行くの？」

「夜市バザールに行つてくる」

そう言いながら、袖口から出した一枚の金貨を上方に指で弾くとぱじっと受け止めた。

「……いいわ。お行きなさい」

ソルはアーランに背を向けると、きつちりと着ていた衣服の首元を緩め胸元を大きく開けた。そして袖を捲り上げると、玄関の大きい扉を押し開け外へと出でていった。

\* \* \* \*

翌週の午前中、ソルはハリーファに言われたとおり、宰相妃殿下を見舞つた後に【王の間】にやつてきた。

本宮に比べ明らかに年季の浅い異質な朱鷺色の館に入つていくと、応接室にハリーファの姿を見つけた。

「なんなんだ、ここは？」

そう言いながら朱鷺色の室内を見渡した。ソルが来るか来ないか半信半疑でいたハリーファは、ソルの来訪にまんざらでもない様子だった。

ソルは腹の帯に挟んでいたモノを取り出してハリーファに差し出した。

「頼まれてたモノだ。これでどうだ」

ハリーファは受け取ると、掌の上で包み布を一辺一辺広げていく。その中に包まっていたものを見てハリーファは満足そうにうなづいた。

「思つていたより良い出来だ」

「腕のいい職人を知つてるからな」

ソルは自慢げに言つと、近くの椅子にハリーファの指示を待たず勝手に腰掛けた。

「メンフィスでは今もフロリストとの交易が行われてるのか？」

「いや。港も閉じられてるし、陸は国境が通れないからな。それに

今はフロリスなんかに頼る必要ない。モ里斯だけで勝手にまわってるだろ?」

ファーリーク皇国が繁栄も衰退もしない不気味な状況が続いているのは、皇都だけでなく皇国内全土のようだ。聖地オス・ローが復興しないのも、あそこがファーリークの領土だからなのだろう。まるで国境に大きな壁があるように、外から干渉されることもなく、偽りの平和の中、ただ時間だけが過ぎてゆく。

(これがアーディンと【悪魔】との契約なのか……?)

ハリーファはソルには気づかれないよう小さなため息をこぼした。そして、思い出したように小さい麻袋をソルに差し出した。

「これは次の分だ。本当に金じゃなくていいのか?」

ソルは微かに笑いながら立ち上がると、ハリーファの手から麻袋をむしり取った。

「ありがたいね。また来るよ」

そう言つて、ソルはそのまま【王の間】を出て行つた。

ソルの心の声は今日も何も聞こえてこなかつた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0205k/>

---

天国の扉

2011年12月7日22時50分発行